第2回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

―蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化

■ フォーラムの趣旨

東アジアにおいては「歴史和解」の問題は依然大きな課題として残されている。講和条約や共同声明によって国家間の和解が法的に成立しても、国民レベルの和解が進まないため、真の国家間の和解は覚束ない。歴史家は歴史和解にどのような貢献ができるのだろうか。

渥美国際交流財団は 2015 年7月に第49回 SGRA (関口グロー バル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東 アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず 東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」 を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給するこ との意義を確認した。このプラットフォームに「国史たちの対話」 のコーナーを設置したのは2016年9月のアジア未来会議の機会 に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ 国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴 史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められてい ない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能に する条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授 / 跡見学園女子大学教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先 生(高麗大学名誉教授/韓国国史編纂委員長)の講演により、3 カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱 われているかを検討した。

第2回対話は自国史と他国史との関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。13世紀前半の「蒙古襲来」を各国の「国史」の中で議論する場合、日本では日本文化の独立の視点が強調され、中国では蒙古(元朝)を「自国史」と見なしながら、蒙古襲来は、蒙古と日本と高麗という中国の外部で起こった出来事として扱われる。しかし、東アジア全体の視野で見れば、蒙元の高麗・日本の侵略は、文化的には各国の自我意識を喚起し、政治的には中国中心の華夷秩序の変調を象徴する出来事であった。「国史」と東アジア国際関係史の接点に今まで意識されてこなかった新たな歴史像があるのではないかと期待される。

もちろん、本会議は立場によってさまざまな歴史があることを確認することが目的であり、「対話」によって何等かの合意を得ることが目的ではない。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇔中国語、日本語⇔韓 国語、中国語⇔韓国語の同時通訳をつけた。

SGRAとは

SGRA は、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRA は、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRA の基本的な目標です。詳細はホームページ(http://www.aisf.or.jp/sgra/)をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。 SGRA かわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。 http://www.aisf.or.jp/sgra/ 2017年8月7日(月)~9日(水)

北九州国際会議場国際会議室

会 場

開会セッ

第1セッ

【発表論文3】

37

3

第2回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

-蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化

主 催 協 賛	渥美国際交流財団 関口グローバル研究会(SGRA) 北九州市/北九州観光コンベンション協会	
協力	鹿島学術振興財団	
開会挨拶		
趣旨説明	三谷 博(跡見学園女子大学)	※日中韓同時通訳付き
セッション	[司会:李 恩民(桜美林大学)]	
【基調講演】	「ポストモンゴル時代」?―14~15世紀の東アジア史を見直す	5
	葛 兆光 (復旦大学)	
セッション	[座長:村和明(三井文庫)、彭浩(大阪市立大学)]	
【発表論文1】	モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」	12
	四日市康博 (昭和女子大学)	
		-de hors
【発表論文2】	アミール・アルグンと彼がホラーサーンなどの地域におい	いて行った2回の
	人口調査について	27
	チョグト (内蒙古大学)	

© 2018 SGRA

蒙古襲来絵詞を読みとく―二つの奥書の検討を中心に

橋本 雄 (北海道大学)

第2セッション	[座長:徐静波(復旦大学)、ナヒヤ(内蒙古大学)]	
【発表論文4】	モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関する一考察	54
	エルデニバートル (内蒙古大学)	
【発表論文5】	モンゴル帝国と火薬兵器―明治と現代の「元寇」 イメージ	70
	向 正樹 (同志社大学)	
【発表論文6】	朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述	84
	孫 衛国 (南開大学)	
Parks on the second	4th 7 fbl	
第3セッション	[座長:韓承勲(高麗大学)、金キョンテ(高麗大学)]	
【発表論文7】	日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的意図	106
	金 甫桄 (嘉泉大学)	
【発表論文8】	対蒙戦争・講和の過程と高麗の政権を取り巻く環境の変化	117
	李 命美 (ソウル大学)	
【発表論文9】	北元と高麗との関係に関する考察―禑王時代の関係を中心に	132
	ツェレンドルジ (モンゴル国科学院歴史研究所)	
第4セッション	[座長:金 範洙(東京学芸大学)、李 恩民(桜美林大学)]	
【発表論文10】	モンゴル帝国の飲食文化の高麗流入と変化	148
	趙 阮(漢陽大学)	
【発表論文11】	「深簷胡帽」考―蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史	161
	張佳(復旦大学)	
'		

全体討議セッション

司会/まとめ:劉傑(早稲田大学)、論点整理/趙珖(韓国国史編纂委員会)、 総括/三谷 博(跡見学園女子大学)

あとがきにかえて

金キョンテ 214 三谷博 217 孫 軍悦 219 ナヒヤ 222 彭 浩 224

著者略歷 227

参加者リスト 228

基調講演



「ポストモンゴル時代」? -14~15世紀の東アジア史を見直す

葛 兆光

復旦大学

[原文は中国語、翻訳:宋剛(北京外国語大学)]

要旨

14世紀中頃から15世紀前半にかけて(1368~1420)、それまでユーラシア大陸の各地を支配していたモンゴルの勢力がしだいに弱体化していった。この時期は、東アジア諸国間の関係が再調整される軸となった時代である。私はこの時期を「ポストモンゴル時代」と呼んでよいのではないかと考えている。この半世紀のあいだに、東アジアは妥協、衝突、レバランスの時期を順を追って経験し、「応永の外寇」/「己亥東征」事件の後、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、新たな協調的な東アジアの秩序が築かれた。「モンゴル時代」は多くの歴史学者によって世界史/グローバルヒストリーの始まりと見なされているが、世界史の一部としてのモンゴル時代以後の東アジア史は、どの様な基本的特徴があるのだろうか。これは、検討に値する重要な歴史上の問題だと思われる。

1. 鍵となる時期

歴史上の幾つかの「鍵となる時期 (关键时期)」については、議論を繰り返し おこなっていく必要がある。

中国の歴史には、幾つかのそのような「鍵となる時期」があった。それらの「鍵となる時期」の前と後の時代では異なる歴史的風貌がみられる。ここで、二つの例を挙げよう。一つ目は、唐から宋へと移り変わる時代である。内藤湖南の「唐宋変革」の仮説によって、755年(安史の乱)から1004年(澶淵の盟)に至るまでの時期が注目されるようになった。755年~1004年および1368年~1420年という二つの半世紀がいかに中古の中国と近世の中国に大きな変化をもたらし

たかについて、歴史学者たちは次々と考査を試みている」。そして、張瀚の言う中 国近代思想史における「転型期」という仮説にもとづけば、1895年から1925年 までの時期が「鍵となる時期」として浮かび上がり、清国末期、中華民国初期に おける日清戦争、戊戌変法と五四運動を一貫して考察することで、知識階級、新 聞出版、教育選挙、政治制度、宗教文化などの面において、伝統中国と現代中国 の間に本質的な転換がみられると考えられている²。

歴史の「鍵となる時期 | という概念は、簡単に言えば「承上启下 | (本意:上 文を受けて下文を書き起こす)という意味合いを帯びている。学者たちはこれら の「鍵となる時期」に、王朝/国家の内部において、本質的な変化が起きたと指 摘している。しかし、王朝/国家を越えた広域史においてもまた、検討すべき重 要な時期があるのではないだろうか。

これらの「鍵となる時期」に、各国と地域の地位、力と利益などが再編成さ れたのである。過去のバランスが壊されて、新たなバランスが築かれる。こうし て、安定期が続き、広大な地域における国際関係が構築されることになっていく。

そのような時期のひとつとして、モンゴルの世界帝国が崩壊した後、1369年 から1420年までに東アジアで起きた歴史的変化3について検討してみたい。私見 では、この時期も東アジア史上における「鍵となる時期」である。この50年間 の東アジアにおいては、モンゴルの勢力が徐々に弱体化する一方で、明王朝、李 王朝と足利幕府時代の日本が、複雑な外交往来、衝突及び妥協を経て、「応永の 外寂 | / 「己亥東征 | 事件を機に、その後の東アジアの基本的な構造が構築され た。即ち、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、明王朝、朝鮮と日本の間の基 本的なパワーバランスが保たれたのである。それからの数世紀においても、倭冦 事件、「壬申の戦い」、「明清易代」などの変化が続いたが、東アジアにおける基 本的にバランスの取れた構造は数百年も続き、19世紀の中頃になって、遂に西 側諸国の「堅船利砲」によって徹底的に覆された。

2.「モンゴル時代」の後

では、一番シンプルな方法で、14世紀中頃と15世紀前半(1368-1420)の間の 50年にわたる東アジアの歴史を見渡してみよう。

それ以前にユーラシア大陸の各地を征服していたモンゴル帝国は、14世紀中 頃以後、東アジアにおける勢力をしだいに弱めていった。1368年、朱元璋が元 王朝を倒し、漢民族によって統治される明王朝が創設された。1392年、李氏は 高麗王朝に取って代わり朝鮮王朝を確立した。同じ年に、日本の室町幕府の将軍

¹ 内藤湖南『概括的唐宋時代觀』、日本語テキスト、『歴史と地理』第九巻第5号 (1922.5) pp.1-11。 英語テキスト、宮川尚志 An Outline of the Naito Hypothesis and its Effects on Japanese Studies of China, Far Eastern Quarter, Vol.14, No.4 (1955), pp.533-552。中国語テキスト《概括的唐宋时代观》、 黄約瑟訳。劉俊文編《日本学者研究中国史论著选译》(北京、中華書局、1992年)に記載されている。

² 張瀚『中国近代思想史的転型時代』、張瀚『時代的探索』(台北:中央研究院、聯經、2004) p.51。

³ 世界の近代史はモンゴルが弱体化し、元王朝が崩壊し、明王朝が確立された1368年から始まると見るべき だと指摘された。趙現海の《世界近代史的起点与明代中国的历史分流》《中国史研究动态》(北京) 2016年第 5期、pp.42-43。

足利義満は南朝の後亀山天皇を退位させ、南北朝を統一した。安南においては、1400年、陳氏から黎氏への交代があった。その5年後(1405年)、進攻方向を東に転じて明王朝の脅威であったティムール(Tamerlane)が亡くなった。この死をきっかけにティムール帝国は皇位争奪の混乱に陥り、東アジアを狙う余裕がなくなった⁴。

私は、まさにこの時期を「モンゴル時代」の後の「鍵となる時期」と見なして よいと思う。この「鍵となる時期」においては、東アジア諸国の間でさまざまな 調整が行われた。(1)明王朝初期の中国は支配の面でいまだ安定しておらず、 大きな内部問題も抱えていた。従って、自己を中心とする朝貢体制の再建を試み ると同時に妥協策を取り、「十五不征之国」を宣言したう。また、政策の重点を東 北と西南地域におき、国境地域におけるトラブルを防ごうとした。さらに、韃靼 やウリャンハイに至る周辺諸国に対して宣撫政策(人心を落ち着かせる政策)を 取った6。(2) 朝鮮王朝は、一方で明王朝の承認を得るために「事大」という姿 勢を取り、他方では日本との関係を緩和させて「交隣」の関係を確立しなければ ならなかった。(3)日本の足利義満は、明王朝と朝鮮が手を組んで日本を脅か す危険性に留意しながら、「元冦」以来日本が孤立してきた状況を変えなければ ならなかった。そこで、1374年と1380年の二度にわたって使者を派遣して国交 の樹立を希望したが、ともに明王朝に断られた「。その後日本は、明王朝の虚栄心 を満足させるために、1401年に「日本国准三后源道義」の名義で国書を送り、 明王朝の冊封を受けた。また、「日本国王」の名義を以て、対等な姿勢で「朝鮮 国王」と交渉を行い、李氏朝鮮と国交を樹立した。(4)また琉球は、洪武五年 十二月に楊載が使者として明太祖の勅書を持って中山王国を訪問した後、二年後 中山国王承察度の弟が中国に渡って朝貢し、『大統暦』を受け入れ、正式に明朝 の朝貢圏に編入されることになる。(5)この段階の安南は内部紛争やチャンパ の外部侵入のため、だんだん衰弱していった。洪武五年(1372)、安南の陳叔明 が陳日熞を殺して自ら王となり、明に使者を派遣して朝貢を上げた。これでモン ゴル帝国時代にも掌握できなかった安南も明朝の朝貢圏へ納められることとな る。(6)最後に、北西方向のティムール帝国を見てみる。14世紀末から15世紀 初頭にかけて、ティムールは西アジアや中央アジアを征服し、またインドの北部 や中東地域までその勢力を伸ばした。この時期、もう一歩方向を転じて中国まで 進攻しようとしたが、1405年にティムールが亡くなった後は、その後継者とも 調整を行い、明王朝と比較的友好な関係を保つようになった。

こうして、東北アジアにおいて妥協し合う新秩序が築かれた。

⁴ イギリスの学者ダーウィン (John Darwin) は《全球帝国史: 帖木儿时代之后帝国的兴与衰 (1400-2000)》 (陸偉芳、高英芳訳。大象出版社、2011年) の初頭で、ティムールの死は「世界史の一つの転換点」であり、「これは世界歴史の一長い段階の終結」であると指摘している。(序文、p.1・第一章、p.3)。

^{5 『}明史』巻322《外国三・日本》が「列不征之国十五、日本与焉。自是、朝貢不至、而且海上之警亦渐熄」と記載した。P.8344。

^{6 《}明太祖实录》卷一二四(洪武三十五年十一月壬寅条)参照。

⁷ 田中健夫 『中世対外関係史』 (東京:東京大学出版社、1975年)、特に第一章である。

3. それぞれの後継者たちの試み

しかし、14世紀末や15世紀初期に、明太祖(1398年卒)、李氏太祖(1398年 退位・1408年卒)、足利義満(1394年譲渡・1408年卒)は相次いで亡くなり、そ れぞれの後継者たちがバランスの取れた東アジア秩序を変えようと試みた。永 楽帝は、5回にわたってモンゴルの残存勢力に対して遠征をおこなっただけでな く、ベトナム(安南)を征服して明王朝に直属する交趾郡を設立し、「交趾都指 揮司、承宣布政使司、提刑按察使司」などを設置した⁸。足利義持は高慢な態度を 取り、明王朝を宗主国として認めず⁹、また「日本将軍」として「朝鮮国王」に接 し、国際関係において朝鮮を凌駕しようとした。これに対して強硬な態度を取っ た朝鮮の国王太宗は、1419年に日本の対馬を急襲し、日本に大きなショックを 与えるとともに、明朝と朝鮮が連合して日本を進攻するのではないかという日 本側の疑惑を膨らませた¹⁰。この疑惑は確かな根拠はないとはいえるが、それな りの現実的な理由はあった。なぜかというと明王朝では洪武朝から取ってきた保 守的な政策を放棄したからである。永楽帝は度々朝鮮からの報告(日本は「大い に戦艦を造り、中国を侵略しようとする」)を読み、日本に相当な不満を抱いて いて、更には日本が朱元璋の肖像画を的にした事件を口実にして、「万隻の戦艦 にて討つ」と脅迫したこともある 10。朝鮮が主導的に出兵して対馬征伐を敢行し たのも、これと無関係ではないことは明らかである。これは同じ年(1419)6月 に、明の總兵の劉江が遼東望海場で上陸した倭寇を全滅させた事件とも一定の呼

⁸ 陳荊和編校『大越史記全書』(東京大学東洋文化研究所、「東洋文献センター叢刊」第42輯、1984年) 「本紀」巻九、p.494を参照。大体の過程として:永楽二年(1404)、明朝は安南に諒山と禄州の割譲を要求 し、安南は「古楼等の凡そ五十五村を還さ」ずをえなくなる。永楽四年(1406) 四月、明朝は征南将軍の韓 観や参将の黄中に兵士十万を与えて、陳添平を護送するという名義を借りて安南を進攻し、諒州、武寧、北 江、嘉林などの地域を占領した。九月には、更に太子太傅の朱能を征夷大将軍と命じ、征夷副将軍の張輔と 参将の陳旭及び征夷副将軍の沐晟とその参将李彬を率いて、それぞれ四十万の軍隊をもって坡塁関と富令関 を進攻し、その後ほぼ安南全土を占領した。翌年(1407)、陳氏の中では王位を継承するものがいないとし て、安南を明の郡県に改編してしまう。記録によると、明朝は安南を征服して「四十八の府州、百六十八の県、 三百十二万九千九百戸の人口、百十二頭の象、四百二十匹の馬、三万五千七百五十頭の牛、八千八百六十五 隻の戦艦を獲った」といわれる(以上の内容は『大越史記全書』 「本紀」 巻八、pp.487-490と巻九、pp.493-495を参照)。その他、永楽帝の対外政策の保守から進取へ変化する態度を表すこととしては、安南の征服と モンゴル遠征以外、以下の通り。①7回にわたって鄭和に南海諸国への朝貢貿易促進の航海を委ね、東南アジ アとインド洋を開拓させた。②宦官をアムダリヤ川地域まで派遣。③奴儿干都司を設置。④侯顕、李達を内陸シ ルクロードとチベットに派遣。

⁹ 永楽9年(1411)、足利義持は三宝宦官王進の会見を断った。王進は「夷婦密引」を通じて、兵庫から帰 国することができた。永楽16年(1418)3月に、また明王朝の行人吕淵の謁見を断って、京都に入ることを禁じ た。汪向荣の『明史日本传笺』(成都、巴蜀書社、1987)参照、pp.44-46。

¹⁰ 中国に対する日本の警戒心は、まだモンゴル襲来の歴史記憶に留まっているかもしれない。李朝朝鮮の 『世宗実録』巻十 (世宗二年十月癸卯、1420) には今回の使節団通事の尹仁甫の書いた『復命書』の記載があ る。その中に、「臣等は初めて其の国へ行き、甚だ冷遇され、国の都へ入ることも許さず、深修庵で宿り……継 いで僧恵珙曰く、大明はすぐ日本を伐しようと聞いておるが、信ずることか?答えて、知りません。珙曰く、朝鮮 と大明は同心なり、何故知りませんか。先日、大明の使者は勅を伝って、若し臣服しない場合、朝鮮と合わせ て討つと言い、後は害を受けること畏れて逃げたので、疑問になって伺いました」と記録されている。このこと は宋希璟の『老松堂日本行録』でも書いてあるが、日本の僧侶恵珙は宋希璟に、去年(1419)夏の対馬の役 は朝鮮と大明が連合して日本を攻撃したことだといった対話を記している。『朝鮮通信使文献選編』(上海:復 旦大学出版社、2015)第一冊、p.62を参照。

¹¹ 同上、第一冊、永楽十一年 (1413) p.255; 永楽十四年 (1416)、p.265。

応関係を持っている¹²。日本に対する明朝の態度変化は、恐らく日本に対する朝鮮の強硬策をもある程度励ましたとみえる。

この事件は、日本では「応永の外冦」と、朝鮮では「己亥東征」とそれぞれ呼ばれている。このような「鍵となる時期」において、日本は博多妙楽寺の僧侶無涯亮倪を「大蔵経を求める」という名目で朝鮮に派遣した。ちょうど同じ年に、強硬な態度を取ってきた朝鮮太宗が亡くなった。かわって即位した世宗は最初から倭冦問題を徹底的に解決することに賛成しなかった。そのため、世宗が即位してから、日本と朝鮮の両国間での緊張関係がようやく緩和された。この緩和された国際情勢のもとで、翌年(1420年)朝鮮は宋希璟を「回礼使」として日本に派遣し、大蔵経を贈った。これを機に、数百年にわたる日朝外交交流史が始まり、朝鮮の「事大交隣」政策を中心とする東アジアにおける国際秩序が構築された13。その後、「壬辰の戦い」などの大きな事件が起きたものの、結局近代における「西潮東漸」で東アジアの情勢が一変するまでの長い期間、東アジアにおける中国、朝鮮、日本、モンゴル、沖縄、安南諸国の間では、「ポストモンゴル時代」という基本的な構造が継続した。

4.解放された東アジア諸国の動き

数多くの歴史学者はモンゴル帝国時代を世界史の発端と見なしている。例えば、本田実信、岡田英弘、杉山正明など¹⁴である。しかし、注意すべきは、ユーラシア大陸を含む世界史は、1ページ目を開いたところから、激動の時代が書き記されていることである。世界は統一されたものの、その内部は幾つか独立した空間に分離されていた。「モンゴル時代」の後、モンゴル帝国の統治と脅威から解放された東アジア諸国には、興味深い変化が起き、特別な歴史的世界が形成された。

この時期、東アジア諸国はそれぞれ本国の政治と文化の再建を手がけたのだ。 まずは中国を見てみよう。明王朝はモンゴルの元王朝に取って代わって建国された。明王朝の合法性を確立するために、朝廷においては「脱モンゴル化」が幅

¹² この年(永楽十七年、1419)の六月、明朝と日本の間にも衝突が起こった。『明史』巻三二二「外国二・日本」の中で詳細に記録している。「倭船は王家島に進入し、都督劉英は精鋭部隊を率いて望海堝へ疾走していった。数千人の倭賊は二十隻に分けて、直ぐ馬雄島に到着し、望海堝まで進んで囲んだ。栄発伏は出戦して、奇兵で退路を断った。賊は桜桃園に逃げ、栄は兵士を合わせて進攻し、首級七百四十二級と獲り、八百五十七人を生捕りした。」p.8346。『明実録』の中には、「都督劉英」は「都督劉江」になっていて、「遼東總兵官中軍都督の劉江は倭賊を捕まえて捷報を上げ」、望海堝で「殺傷と捕獲を尽くし、百三十人を生獲り、首級は千級余り斬った」と記している。『明太祖実録』巻二百十三、pp.2141-2143.また、明の厳従簡『殊域周諮録』の中の「日本」部分も参照できる。

¹³ 当然、日本国内情勢は一つ重要な原因であるが、「応仁の乱」(1467-1477)の後、日本は1世紀にわたる内乱に陥って、海西に気を配る余裕がなかった。ただ、山口の大内氏が「日本国王」の名義で、白銀の採掘と海外貿易を握った。従って、東アジア海域における国と国の関係は大体平穏で冷めていた。騒動を起こしたのは倭冦が沿海地域における略奪行為だけである。豊臣秀吉が日本を統一してから、東アジア海域における国際関係が変わり始めた。

¹⁴ 本田実信『モンゴル時代史研究』(東京大学出版会、1991年) 岡田英弘『世界史の誕生: モンゴルの発展と伝統』(陳心慧訳、台北: 広場出版社、2013年); 杉山正明『フビライの挑戦: モンゴルによる世界史の大転回』(周俊宇訳、社会科学文献出版社、2013); 杉山正明『モンゴル帝国の興亡: 軍事拡張の時代・世界経営の時代』(孫越訳、社会科学文献出版社、2015)

広くかつ厳正に行われた。張佳は『新天下之化』において次のように指摘してい る。明王朝初期に、漢族の文化と伝統が再建された。政府は単に「胡服、胡語、 胡姓を禁じる」だけでなく、各階層の人々を対象に服装制度を制定し、胡人の風 俗が入り混じった冠婚葬祭の形を規制し、礼儀風俗の規範などを徹底的に整え た。政府は一連の措置を講じて、漢族の伝統生活の規範を取り戻し、士農工商の 四民社会を再建し、人々の上下関係を規定する儒教の政治秩序を再構築しようと した。言い換えれば、「文化、風俗、文献そして血統などの面から、モンゴルの 影響の名残を消滅した」のである。特に、明王朝初期には、科挙試験制度と儒学 の提唱を通じて、政治と文化を中国の伝統に復帰させることになった¹⁵。

次に日本の状況を見てみよう。内藤湖南は『日本文化の独立』において、「蒙 古襲来」という事件が非常に重要であると指摘した。内藤は、「丁度九州に大風 が起って蒙古の船が散々になった時だったといふような事がありましたが、此等 の事が外部に対する文化上の獨立の考が出来るのに大変関係があつたものと思は れます。……今迄日本は支那を以て日本文化の師匠であると仰いで居った所が、 其師匠と仰いで居った支那が、犬の子孫である所の蒙古のために亡ぼされてし まって……そんなわけで今迄貴いと思って居った支那も、犬の子孫に統一される やうではさう大したこともないといふので、遂に支那といふものが日本人に取っ てあまり有難くなくなった」と述べている。だから、「日本は神國なり」という 考えを起させるに至った。明太宗に対して懐良親王が強硬な姿勢に出たから、日 本は中国に対して、「氣焔を吐く」ことになった。内藤は、これらの時代背景の もとで、「これは詰り日本の根本の文化の獨立が出來上つたからだと言つてもよ いと思う」16と断じた。

最後に朝鮮の状況を見てみよう。14世紀末に、李氏は北元と明王朝に寄り添っ た高麗王朝に取って代わった。確立された朝鮮王朝は、中国との外交姿勢を調整 し始めた。政治面では、明王朝を宗主国として認め、明王朝からの冊封を受けな がらも、朝鮮は「且卑辞慎事之」(謙虚な姿勢で接する)という態度で接すれば よいと考えていた。他方、文化の面では、明王朝より厳しい対策を取り、程朱学 の政治理念と道徳倫理をはじめ、儒学を普及させた。表面上、朝鮮王朝は、中国 の明王朝と似た政治や文化を持つように見えた。しかし、朝鮮の国際的な地位や 政治制度・社会構造上の特質により、朝鮮における儒教観念、倫理制度及び道徳 要求は中国のそれよりも厳しく、長く維持されていた。従って、どの国が「中 華」の伝統をより正統的に受け継いでいるかという認識が生まれたのである¹⁷。

¹⁵ 張佳『新天下之化:明初礼俗改革研究』(上海:復旦大学出版社、2014)

¹⁶ 内藤湖南『日本文化の独立』(1922年のスピーチ)、内藤湖南の『日本歴史と日本文化』所載。(劉克申 中国語訳本、北京: 商務印書館、2012) p.117、p.122。

¹⁷ 朝鮮儒学学者李退渓は、儒学的倫理道徳を厳しく守ることこそ、「中華」が「中華」である根拠を為すとし た。だから、文明は聖賢と経典が生まれた地域で確立されるとは限らないし、朝鮮も文明の正宗をなすこともで 在海表,然而箕子 之所受封,孔圣之所欲居,礼义文献之称,其来尚矣」と指摘している。『朝鮮文集丛刊』第三 冊、巻五十九、p.291。

5. 東アジア関係史の基本的な特徴

1420年、永楽帝は南京から北京へと遷都をおこなった。当時、モンゴル勢力はすでに完全に弱体化し、東アジアの情勢に揺さぶりをかけることは出来なかった¹⁸。同じ年に、朝鮮使者の宋希璟が日本へ赴いた。日朝間の情勢もまた安定的であった。

「モンゴル時代」の終焉から西欧の「堅船利砲」が東アジアに入ってその地域に「ショック」を与えるまでの時期における東アジア史、或は東アジア関係史の基本的な特徴とは、どのようなものだろうか。私見では、それはすなわち以下の3点にまとめられるだろう。

- ①環東海諸国は朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、安定的な東アジアの秩序を構築した。当該秩序は、14世紀中頃に形成され、1420年代に安定し、19世紀中頃まで、400年にもわたって継続した。
- ②蒙古の襲来と弱体化によって諸国が刺激され、文化面において「自己中心主義」が勃興した。すなわち、諸国において、政治と文化における独立意識が芽生え、形成された。曖昧とした「認同感」から、政治承認、文化承認と経済利用などの側面が生まれた。特に、中国では、明王朝と清王朝の王朝交替が発生し、日本と朝鮮から見れば、17世紀の中頃から中国は「華夷変態」(中華から夷人文化へ変化)した。それ以来、文化の一体感の解体がますます進んだ。
- ③東アジアの海域を舞台に、貿易圏が形成された。公式の朝貢貿易はごく一部 分しか占めていない。より重要なのは、おもに商人たちが貨物の流通を押し 進めたという点である。

400年あまりの間、環東アジア海域という国際環境において、各国は経済面において繋がり、文化の面において競い合い、政治の面において争った。時には、はげしい衝突もあったが、それはやがてお互いに妥協しあったのである。このような構造は、西欧の「堅船利砲」が東アジアに衝撃を与えた19世紀中頃まで続いた。

2017年4月上海に於いて

¹⁸ 永楽時代に、明王朝は北方にあるモンゴルに対して、積極的に攻め込む姿勢をとった。永楽帝は5回も北方を討伐した。モンゴル内部にも問題が起きたが、韃靼(だったん)とオイラート(瓦剌)の2部族はしばらく安定した。オイラート三王とアルクタイが封じられた。ウリャンハイは明朝に伏し三衛という遊牧集団を設置したが、他民族によって破られた。これにより、北方の国境はしばらく安定したのである。

発表論文



モンゴル・インパクトの 一環としての「モンゴル襲来

四日市康博

昭和女子大学

13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権はユーラシア 各地を席巻し、その支配や影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユー ラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越したモンゴル的 な共通様式が見られる。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴ ルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolica があったと言われる。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、 それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではない。ましてや、 モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意 味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には 衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこ なわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」 Mongol Impactがあり、そして、それに対する各地域や各社会ごとのレスポ ンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解する ことはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事 的なインパクトだけでなく、長期の経済的・文化的なインパクトも含まれる。 つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体 的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するため には、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対するレスポンス を知る必要がある。モンゴルから二度の侵攻を受けた日本は、世界でも最も古 くから「モンゴル襲来」に対する研究が進められてきた。ただし、従来の研究 は日本と元という2国間関係、或いは、それに高麗を加えた3カ国関係による 外交・軍事関係という視点に基づいたものであった。モンゴル帝国=元朝の対 外計略は日本のみならず、ベトナム、チャンパー、ミャンマー、ビルマ、ジャ ワ、琉球、サハリンなど、海域アジア全域に及び、それらは必ずしも互いに無

関係ではなかった。また、海域アジア各地における「モンゴルの衝撃」の影響 はその後も長期的に持続してゆくのである。

はじめに

13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権の支配は東西 ユーラシアの各地に拡大し、その影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、 ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越してモンゴル 的な共通様式が見られる 1 。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴ ルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolicaが あったと言われている²。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、 それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではない。ましてや、モ ンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味す るわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突 し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれ た。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impactがあり、そして、それに対する各地域・各社会のレスポンスが存在した ことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。 この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけで なく、長期の経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平 和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシ ア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地におけ る「モンゴルの衝撃」とそれに対する各地域・社会におけるレスポンスを知る必 要があるだろう³。

¹ モンゴル帝国期は、ユーラシアの東西において、モンゴル語、トルコ語、ペルシア語、チベット語、漢語など発令された文書の言語の如何にかかわらず、類似した文章構造や共通の特定語彙が使用された文書が見られる。このようなモンゴル帝国期に共通する様式を持つ文書は「モンゴル帝国様式文書」或いは「モンゴル命令文書」などと呼ばれる。詳細は、四日市2015 および Yokkaichi 2015 を参照。

^{2 「}モンゴルの平和」Pax Monglolicaは「タタールの平和」Pax Tataricaとも呼ばれ、早くは Michael Prawdin などがその概念を提唱している (Prawdin 1937; 佐口透 1970; 四日市 2001などを参照)。ただし、Prawdin や佐口など初期の「タタールの平和」論に見られるような政治的・軍事的な安定が全ユーラシア規模で実現していたとは考えられない。「モンゴルの平和」とは、あくまでも経済面・文化面に寄与した東西交通の安定化のみを指す限定的な分析概念である。したがって、ユーラシアにおけるモンゴル帝国の覇権を「モンゴルの平和」という概念だけで表すのは極めて一面的であり、各地の社会・文化に動揺を与えた「モンゴルの衝撃」Mongol Impact も同時に論じなければ、片手落ちである。

³ この問題に関して、2016年12月に国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト: 考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」」 (International Symposium "Mongol Impact on Eurasia: Archeological and Historical Perspectives of the Mongol Invasion") が昭和女子大学において開催され、日本、中国、韓国、ベトナム、モンゴル、オーストラリア、イスラエルから考古学者・歴史学者・地域研究学者が報告をおこない、活発な議論がおこなわれた(オーガナイザー:菊池誠一・四日市康博ほか)。このシンポジウムの成果は単行本として2017年度に刊行される予定である。

1. モンゴル帝国=元朝の海域アジア経略と 日本侵攻

日本への「モンゴル襲来」に際するモンゴル・インパクトを理解するには、モ ンゴル帝国=元朝の海域アジア全体に対する経略方針についても見ておかなけれ ばならない。モンゴル帝国の侵攻は金朝、高麗、南宋、日本、ビルマ、チャン パー、ベトナム、ジャワなど多角的におこなわれたが、決してそれぞれが別個に おこなわれたわけではなく、全てが連動していた。日本に焦点を当ててみると、 日本への「モンゴル襲来」は元朝と日本の二国間外交だけによる結果ではなく、 高麗を介した三カ国間の国際関係が反映された結果であり、さらには高麗におけ る独立勢力であった三別抄もモンゴル、日本双方に対して外交的な動きを見せて いたことが知られている⁴。

周知のように、日本侵攻の切っ掛けとなった世祖フビライに対する建言は高 麗人の廷臣である趙彝によるものであったが⁵、趙彝が建言をおこなった至元二 年(1265CE)というタイミングは、モンゴルの度重なる侵攻に対して中統元年 (1260) に高麗がモンゴルの冊封を受け容れ⁶、また南方では中統三年(1262) に 陳朝ベトナムが三年一貢の約(朝貢)を受け容れて安南国王に封じられ⁷、本格的 な南宋侵攻を前にして、いかにその隣国の日本を処遇するのか様子を伺っている という局面であった。モンゴルでは伝統的に戦争の最前線で帰順した敵兵は次の 戦闘の前線に送られることになっている⁸。この習慣に従えば、新たに服属した高 麗の兵も次なる戦場へ送られるはずであった。ところが、この直後、至元五年 (1268) の襄陽攻略戦を皮切りに本格的な南宋攻撃が開始されたものの、高麗軍 が対南宋攻略戦に動員されたという記録はほぼ見られない。彼らが動員されたの は、珍島・耽羅(済州島)に立てこもった三別抄軍の平定、さらにはその海の向 こうに位置する日本攻略であった⁹。日本に侵攻してきた軍の主体は、第一次侵攻 (文永の役)時も第二次侵攻(弘安の役)時の東路軍(高麗発艦隊)もモンゴル帝 国による一連の高麗経略の末期に送り込まれ、三別抄を平定したヒンドゥの軍お よび高麗から帰属した洪福源・洪茶丘の軍であった。つまり、モンゴルによる日 本侵攻は明らかに高麗経略の延長線上のものとして捉えることができるのである。

一方、モンゴルの日本侵攻は高麗以外の国々に対するモンゴルの経略とも互い に並行・連動していた。このとき、東南アジア方面では、陳朝ベトナムとの関係

⁴ 三別抄と日本の交渉に関しては、村井章介 1988(a) および石井正敏 2010を参照。また、モンゴル侵攻 以前の南宋、高麗、ベトナム、日本の外交については榎本渉 2015 を参照。

^{5 『}元史』巻二〇八, 外夷伝一, 日本

^{6 『}元史』巻二〇八, 外夷伝一, 高麗

^{7 『}元史』巻二〇九, 外夷伝二, 安南

⁸ これと同じ習慣はチンギス=ハンやオゴデイ=ハーンが中央アジアからイランにかけて遠征をおこない、領土 を拡大した際にも見られる。その記録が残される『世界征服者の歴史』にはモンゴル語でこの習慣を表した語は 見られないが、ペルシア語では「ハジャル」hajarと呼ばれている。

⁹ 至元五年(1268) には高麗国王が元宮廷に対して兵一万と船千隻を準備したと上奏してきたため、世祖フビ ライは都統領ドルヂを派遣してこれを閲見させると共に黒山から日本に至るルートを視察させており、高麗の船 兵が日本経略への転用を前提とされていたことがわかる。(『元史』巻六,世祖紀三,至元五年七月丙子)

が表面上は安定化していたものの10、ビルマに派遣した使節に対するパガン朝の 対応は反発的なものであり、摩擦が増大しつつあった。実際、第一次日本侵攻 (文永の役) の三年後、至元十四年 (1276) に元朝は第一次ビルマ侵攻を開始す る11。この時、元朝は東方における日本攻略、南宋攻略、さらに南方ではビルマ 攻略という三つの経略を同時進行していた。第一次日本侵攻、第一次ビルマ侵攻 が失敗に終わると、引き続き、元朝は第二次侵攻の準備にとりかかるが、南宋の 都、臨安を無血開城させ、さらに至元十五年(1279)の崖山の戦いを以て完全 に南宋が平定されるのを待って、至元十七年(1281)に第二次日本遠征がおこ なわれた。時を同じくして、東南アジア方面でもビルマ侵攻の動きが再び活発な ものとなり 12、至元十九年(1283)から南海交易の拠点であるチャンパーへの侵 攻を開始 13 、至元二十年(1284)にはビルマへの侵攻が本格化した 14 。いずれも、 南宋攻略軍が日本、チャンパー、ビルマへと振り分けられた結果であろう¹⁵。こ のように見てみると、日本侵攻が高麗経略の延長線上にあるばかりでなく、一 方では、南宋攻略とも連動しており、その南宋攻略は東南アジア方面のチャン パー、ベトナム、ビルマの攻略とも直接連動していた。つまり、日本侵攻は海域 アジア全体におけるモンゴル帝国 = 元朝の経略の一環として捉えられなければな らないのである。

2. 海域アジア諸国への「モンゴルの衝撃」

前節で見たように、モンゴルの軍事的侵攻は東部海域アジア諸国のほぼ全域に及んだのであるが、もちろん、「モンゴルの衝撃」はそのような軍事的インパクトだけに限られたわけではない。中長期にわたって経済的・文化的なインパクトをも各地域に与えたと考えられるのである。モンゴル側から各地域への「インパクト」には当然ながらある程度の共通性が見られるが、その「インパクト」に対する地域ごとの「レスポンス」、すなわち、政権や社会の反応やインパクトの影響による社会変容はそれぞれの地域によって異なっていた。

高麗の場合はモンゴルと断続的に交戦と和解を繰り返し、最終的にモンゴル= 元朝側が態度を軟化させたことから、全面的に降伏して冊封を受け容れた。高麗 は形式的にはモンゴル帝国の所領(=属国)という扱いではあったが、実質的に は高麗王家による独立支配を維持していた。これとよく似た国際関係としてウイ グル王国、オングト王国など中央ユーラシアにあってモンゴル帝国に帰順した諸 王政権が挙げられる。当然ながら、これらの国々はモンゴル帝国=元朝の統治政

¹⁰ 実際には、ベトナムにおいてもモンゴルによる監督官ダルガチの派遣と厳格な要求に対する反発が増大しつつあり、モンゴルに対する反感は陳朝の太宗の死後、モンゴルとの戦争へと発展することになる。

^{11 『}元史』巻二一〇. 外夷傳三. 緬。

^{12 『}元史』巻一一,世祖紀八,至元十七年二月丁丑

^{13 『}元史』巻二一〇, 外夷傳三, 占城

^{14 『}元史』巻二一〇, 外夷傳三, 緬。

¹⁵ さらには、重罪人およびモンゴル兵、さらには、南宋から新たに帰順した「新附軍」がそれぞれ日本、チャンパー、ビルマへの遠征軍に振り分けられて用いられた。(『元史』巻一二,世祖紀九,至元十九年十一月甲戌;巻一二,世祖紀九,至元二十年五月戊午)

策・財政政策などの影響・干渉を直接受けることになり、それだけモンゴルから のインパクトも強く、政治・経済・文化など多方面にわたっていたと言える。こ れに対して、高麗王家は融和という方法で対処した。すなわち、歴代の高麗王は 公主(元朝皇帝の娘)を娶って駙馬(娘婿)となり、その王子は禿魯花(質子) として元朝皇帝のケシク(輸番近衛兼エリート育成機関)に出仕することで、モ ンゴル帝国の皇族に準ずる存在として優遇を受けることになった。高麗王家はそ れら諸王家の中でもとりわけ高い地位を保証されている16。また、高麗の官制は 元朝的な官制に準じるように改められ、高麗宮廷の王族・貴族の間ではモンゴル 文化の受容も進んだ。その一方で、元朝の都、大都では高麗風文化が流行したこ ともあった。従来はこのようなモンゴル帝国との融和を否定的に捉える傾向が強 かったが、近年はむしろ肯定的に認識する研究者も現れている17。高麗王家は積 極的にモンゴル帝国の上層部の一部となることによって「モンゴルの平和」Pax Mongolicaによる政治的安定や異文化受容を享受できたとも見ることができるの である。例えば、森平雅彦によれば、高麗期の王権の崇仏的要素が、続く朝鮮期 には排されて、代わりに朱子学が体制教学としての役割を強めたが、この朱子学 が本格的に伝播したのが元朝期であった。また一方で、元朝との関係を通じて、 高麗仏教は中国仏教・チベット仏教・インド仏教との交流を深め、国家的宗教・ 民衆的宗教の両面において変容をきたしたとされる18。

一方、高麗と対照的なのがベトナムである。陳朝ベトナムの場合は、やはりモ ンゴルの攻撃を受けて冊封を受け入れたが、モンゴル側の全ての要求を受け容れ たわけではなく、内政干渉が強まると反発が強まり、戦争に発展した。これによ り、都のタンロンを陥落させられたが、結果としてモンゴル軍を撃退することに 成功した。その後、陳朝は即座に朝貢をおこなって捕虜を返還し、冊封を再び受 け入れている¹⁹。これによって陳朝は実質的な独立性を勝ち得たと考えられてい る。朝貢に伴う経済的な紐帯は維持したものの、モンゴルからの政治的干渉の排 除に成功したのである。戦争に勝った上で敢えて形式的に服属することで二国間 の関係を政治的な関係から経済的な関係に変換し、以後、「モンゴルの衝撃」は 主に経済面・文化面に限定された²⁰。このことに関しては、ベトナムの政治的独 立を守ったとか、ナショナリズム発揚の発端となったという評価が存在する一方 で、「モンゴルの平和」および「モンゴルの衝撃」に伴うユーラシア=インド洋 海域世界規模の経済的・文化的交流の享受も限定的なものにとどまったという見 方も存在する。

三つめのパターンとしてジャワのシンガサリ朝/マジャパイト朝が挙げられ る。ジャワは日本と同じく招撫を受けた当初は元朝の冊封体制へ入ることを拒ん

¹⁶ モンゴル帝国=元朝内における高麗王家の位置付けおよび高麗王政における反映に関しては、森平雅彦 2013 (特に「駙馬高麗国王の誕生」(22-59頁): 「高麗王位下とその権益」(60-104頁): 「高麗王家とモンゴル 皇族の痛恨関係に関する覚書」(105-146頁);「元朝ケシク制度と高麗王家」(147-203頁) を参照。

¹⁷ 森平雅彦 2013 (特に「高麗・元関係史研究の意義と課題」(1-21頁)); 李康漢 2016 などを参照。

¹⁸ 森平雅彦 2013, 5頁, 291-309頁.

¹⁹ 元朝のベトナム経略の経緯に関しては、山本達郎 1950; 同 1975; 四日市康博 2015 (b) を参照。

²⁰ 陳朝ベトナムおよびチャンパーと元朝の通商・経済関係に関しては、桃木至朗 2011 および四日市康博 2015 (b) を参照。

だが、元朝の侵攻を受けて撃退した後に元朝に朝貢使節を派遣した。この時、マジャパイト王が元朝から王公に封じられたという記録は残っていないので、冊封を受けてはいないと考えられるが、以後、盛んに朝貢をおこない、元朝とジャワは戦役以前よりも緊密な通商関係を持つようになった²¹。「元朝・ジャワ戦役」が契機となって、以後の長期的な「モンゴルの衝撃」=朝貢に伴う通商関係の樹立が生じたのである。なお、この通商関係の樹立はジャワ側の行動によって生じたわけではなく、元朝側もジャワ戦役に際して招撫使と商人の一団をジャワの周辺諸国に派遣していたことが知られている。

最後に、スマトラ島のサムドラ王国や南インドのマァバル(=パーンディヤ王 国) との関係を挙げておきたい。いずれの国も直接にはモンゴル帝国=元朝の侵 攻を受けてはいないし、冊封も受けていない。とはいえ、これらの国々にも遠征 軍を派遣しようという動きが無かったわけではない。元朝宮廷ではタイ、スマ トラ島から南インドにかけての国々に派兵をおこなう案も討議されたが、結局 は使節を派遣して招諭することに落ち着いた。実際、至元十七年には、クーラ ム、マァバル、ジャワ、ベトナムが朝貢してきており、また、至元二十三年に は、マァバル、ラムリー、サムドラを含む十ヶ国が朝貢をおこなっている。中で も、インド東南岸に位置するマァバル (=パーンディヤ王国) は至元十六年から 延祐元年までの間に、記録に見えるだけでも十数回にわたって朝貢をおこなって おり、また、元朝側も度々使節をマァバルに派遣している。同様に、13世紀後 半にスマトラ島北部に興った新興イスラーム政権のサムドラ王国もマァバルほど 頻度が多くはないものの、至元十九年以後、何度か朝貢をおこなっている。これ ら、マラッカ海峡以西の諸国の朝貢の特徴として挙げられるのは、(1)政治的 目的よりも経済的目的が主目的となって朝貢をおこなっていたこと、(2)単独 で朝貢をおこなうのではなく周辺諸国や経由地の使節と同船して往来すること、 の二点である。前者に関しては、マラッカ海峡以西の諸国に対して冊封がおこな われた事例はほとんど見られず、また、世祖フビライ朝末期に朝貢に訪れた使節 たちが商人に対する海禁によって帰還できない状況にあったことから、朝貢使節 団に多くの海上商人が含まれていたことが知られる²²。後者に関しては、彼ら南 海諸国の朝貢使節が元朝側の招撫によって朝貢に応じたものであったことが反映 されている。ただし、これらのケースにおいて元朝側も帝国としての覇権を広く 知らしめる目的もあり、また、サムドラをはじめとする海上諸国側もモンゴル帝 国=元朝の覇権を自ら統治権力の後ろ盾として利用しようという意図があったと 見られる꼳。その意味では、やはりこのケースでも中長期的な「モンゴルの衝撃」 が存在し、それが経済的にも政治的にも利用されていたと言うことができる。

^{21 『}元史』巻一八, 成宗紀一, 元貞元年九月丁亥; 巻一九, 成宗紀二, 大徳元年十月乙卯

^{22 『}元史』巻一八, 成宗紀一, 至元三十一年十月乙巳

²³ マルコ=ポーロは小ジャワ (スマトラ島) Java la menor/Giava minore の八王国のうちバスマン王国 roiame de Basma/regno di Basma (パサイ王国)、サムドラ王国 roiame de Samatra/regno di Samara、ダグロイアン王国 roiame de Daroian/regno di Dragoian、ラムリー王国 roiame de Lanbri/regno di Lambri、ファンスール王国 (バルス王国) roiam de Fansur/regno di Fanfur が元朝の皇帝を「大ハン」le grant kaan/il gran Canと呼んで臣従しているが、実際には直接の朝貢はおこなっていないことを伝えている。(Marco/F, pp.171-174; Marco/R, pp.260-264.)

3. 改めて日本における「モンゴルの衝撃」 を考える

さて、以上のような事例が存在することを踏まえて、改めて日本に対する「モ ンゴルの衝撃」について考えてみたい。日本はモンゴル帝国=元朝からの冊封を 拒んで、その摩擦は戦争にまで発展してしまった。同様の事例は、ジャワやパガ ンなどいくつかの地域でも見られるが、先にも述べたように、日本の場合、戦後 も元朝とは正式な国交を持たず、それにもかかわらず民間の交易は活況を呈して いた点が特徴的である。

有名な「新安沈没船」は至治三年六月に慶元(現在の寧波)から博多に向かっ て航行中に風や潮流の関係で韓国沖の新安近海まで流されて、そこで沈没した交 易船である。この沈船遺跡の船艙からは積み荷がほぼそのまま出土しており、搭 載されていた陶磁器、銅銭、紫檀材などは膨大な数量にのぼった 24 。この新安船 が慶元を出航した時点で 至元十八年/弘安四年 (1281) の第二次日本侵攻 (弘 安の役)からおよそ四十年経っているわけであるが、この前後四十年ほど、成宗 テムルの大徳年間後半から文宗トク=テムルの至正年間初期にかけて——十四世 紀前半期には頻繁に日本と元朝の間をジャンク船が往来していたことが知られて いる25。さすがに元朝-日本戦役の直後には交易船が両国間を往来した記録は残っ ていないが、戦後およそ十年後の至元二十九年(1292)には日本側が三艘の交 易船を仕立て、そのうち一艘だけが慶元に到達できた記録が残っている²⁶。 また、 日本側にも正応三年(1290)に唐船から貿易の利益を差し押さえた記録が残っ ており、既に通交が再開されていたと見られる²⁷。つまり、少なくとも戦後十年 で博多・慶元間の交易船の往来が再開され、さらにその十年後には日本と元朝の 交易がかなりの活況を呈するようになっているのである。この第二次日本-元朝 戦役後の十年間、すなわち、世祖フビライの至元年間後半期は、財政拡大策をは かった権臣アフマドが失脚したものの、続いてウイグル人宰相サンガの推挙を受 けた盧世栄が財政改革に着手し、続いてサンガ自身が大量のムスリム・ウイグル を財務官僚に任命して、アフマドと同じく財政拡大策がはかられた時期である。 この時期、特にマラッカ海峡以西の南海諸国が大挙して元朝に朝貢をおこない、 また、ムスリム商人たちの貿易活動も活発化し、南海貿易は大いに繁栄した28。 しかし、榎本渉が指摘するように、日本と元朝間の貿易はその時流とは逆の傾向

²⁴ 新安沈没船に関しては、문화 공보부 문화재 관리국 1981-85; 문화 공보부 문화재 관리국 1988; 문화재청, 국립해 양유물전시관 2006; 川添昭二 1993; 村井章介 2013 (a) などを参照。

²⁵ ただし、この後、元朝の沿海では日本人による暴動に起因する短期的な貿易の途絶が散発する。榎本渉 はこれらをそれぞれ「至大倭寇」「泰定倭寇」「元統倭寇」と呼ぶが、榎本自身が指摘しているように、これら の倭寇は暴動的な要素が強い単発的な事件であり、明代以降の倭寇とは性格を異にすることは注意が必要であ る(榎本渉 2014, 97-98頁)。

^{26 『}元史』巻一七,世祖紀一四,至元二十九年六月己巳

²⁷ 正応三年四月二五日付関東御教書(福岡市教育委員会『大悲王院文書 一〇』); 榎本渉 2006, 243-244頁。榎本は1280年代の後半には入元僧が存在しており、両国の交通も再開していたと見ている(榎本渉 2006, 143-144頁;同 2014, 95頁)。

²⁸ この時期の元朝の財政・商業政策と南海交易の関係については、四日市康博 2015 (b) を参照。また、 マラッカ海峡周辺の諸港市王国による海上貿易については、深見純生 2004, 同 2006 を参照。

を示している²⁹。先にも触れたように、日本と元朝の間でジャンク船が盛んに往来するようになるのは、次代の成宗テムル=ハーン朝後半期からであり、戦役以後、世祖フビライ朝末期までは交易も決して活発ではなかった。その理由は、やはり元朝-日本戦役であった。といっても、二度にわたっておこなわれた第一次・第二次日本侵攻(文永・弘安の役)の影響ではない。第三次の日本侵攻が計画されていたからである。日本の商船が通商を再開した至元二十九年(1292)の時点で、なお日本侵攻計画が持ち上がっている。

至元二十二年(1285)、元朝では第三次日本侵攻をおこなうために征東行省が 設置され、その宰相にアタハイ、劉国傑、陳厳、洪茶丘らが任命された³⁰。翌年、 世祖フビライは日本よりもベトナムへの侵攻を優先する旨の宣言をおこない、ま た、高麗に隣接する東方三王家領で叛乱が続いたことから、一旦日本侵攻の中 止が宣言されるが、東方三王家の叛乱やベトナム、チャンパー、ジャワの戦役 が収束した至元二十九年(1292)に、再び日本侵攻の建言がおこなわれた。高 麗王忠烈王もそれに賛同したことから第三次日本侵攻が実現に向けて動き始め た³¹。しかし、この時、既に世祖フビライは高齢であり、二年後の至元三十一年 (1294)、フビライの死去にともなって第三次日本遠征もそのまま沙汰止みとなっ た。つまり、第一次・第二次の日本侵攻が収束した後の十年間は、未だ「戦後」 とは言えなかったのである。むしろ、条件さえ揃えば、いつフビライが三度目の 日本遠征を命じてもおかしくない状況が続いており、「戦争直前」と言っても差 し支えない状況であった。これは元朝と隣接していたベトナムやチャンパーにお いても同様である。しかし、結局、第三次の日本侵攻は実現しなかったのに対し て、チャンパー、ベトナムに対しては第二次、第三次の侵攻がおこなわれてい る。さらには、その後、ジャワに対しても遠征軍が派遣されている。この違いは やはり、ベトナム、チャンパー、ジャワが南海交易の幹線ルート上に位置してい た要衝であったのに対して、日本は当時の海上交通の大動脈とは外れたところに 位置していたことが大きいと考えられる。ベトナム、チャンパーを経由する「西 洋航路」に対して、日本や琉球が福建地方やマニラなどと結びついた「東洋航 路」が重要性を増すようになるのは十六世紀以後のことである³²。この時点では、 元朝は南海を経由してイスラーム諸国まで達する「西洋航路」沿線の国々に対す る経略を優先させていた。それは、当然、軍事・政治上の意味合いだけでなく、 経済・商業的な目的が多分に含まれていた。元朝によるベトナム侵攻において も、続くジャワ侵攻においても、商人や貿易を目的とした招撫をおこなう一団が 遠征軍に同行している33。しかし、日本侵攻においては、そのような貿易振興的 な目的を持った人間が同行していた痕跡が確認できない。あくまでも高麗経略・ 南宋経略の延長線上としての日本経略実施であった。結果として、そのような背 景の違いによって第三次日本侵攻が実現に至らなかったのではないだろうか。世

²⁹ 榎本涉 2006; 同 2014,

^{30 『}元史』巻一三,世祖紀一〇,至元二十二年十月癸丑

³¹ 「高麗史」巻二九, 世家三〇, 忠烈王三, 忠烈王十八年〔八月〕丁未; 巻三〇, 世家三〇, 忠烈王三, 忠烈王十八年〔九月〕壬午

³² 東洋航路・西洋航路に関しては、四日市康博 2015 (b) を参照。

³³ 四日市康博 2015 (b), 26-29頁。

祖フビライの死後に即位した成宗テムルは大徳三年に禅僧の一山一寧を使節とし て日本に朝貢を促しているが³⁴、フビライの時代に比べると日本に対する姿勢は かなり軟化しており、既に武力によって冊封に組み込む意図は無かったとみられ る。成宗テムル朝以後も中央ユーラシア方面ではモンゴル宗族間の武力衝突が絶 えなかったのとは対照的に、日本を含む海域アジア諸国に対する軍事侵攻はほぼ 見られなくなる。よって、成宗テムル朝以後をもって日本-元朝戦役もようやく 戦後を迎えたと見て差し支えないだろう。日元間の交易が活況を呈するのはまさ にこの時期である。

では、元朝-日本戦争以前と以後では、どのような違いが見られるのであろう か。村井章介によれば、日宋・日元の交易には貿易船到来頻度の規制、日本人の 渡海規制、銅銭流通禁止などの規制が実施されていたが、それらはいずれも建前 上のものであったという35。しかし、元朝の第一次日本侵攻の直後から鎌倉幕府 は具体的・実効的な規制措置を取り始める。弘安四年(1281)、鎌倉幕府は新た に入国する外国人に対して規制するという法令を出し、次いで正安二年(1300) には鎮西探題に外来者の管理・監督の権限を付与し、「異賊防禁」の名のもとに 鎮西探題の軍事機能を強化した³⁶。これらがきっかけとなって博多には次第に公 権力の支配が浸透していったと村井は説明する。しかも、博多を構成する博多浜 と息浜はその後の支配者が別々となり、都市博多の一体性を阻害したと同時に公 権力の関与を強める結果となったという。このように見ると、元朝-日本戦役と いう短期的な軍事インパクトが政治的・経済的・文化的な長期インパクトとして その後も大きな影響を与えていったことがわかるだろう。

これと同様のことは元朝側にも言うことができる。榎本渉は元朝-日本戦役以 後の日元交通の展開について、従来あった戦役以後に貿易政策が消極化したとい う説を否定し、元朝側の倭船警戒根拠を日本の招撫失敗による不臣服であったと 結論づける37。私もこの論に賛同する。元朝の日本侵攻という戦役自体、日本の 臣従による冊封体制への編入を目的としたものであり、その後の元朝側の警戒は 戦争そのものに対する反動よりも、朝貢国として日本を管理下に置くことができ なかったことに起因するのであろう。しかも、元朝側の警戒にもかかわらず、盛 んに交易船が往来しているという事実は、両国間の交易による利益が両国政府の 没交渉や相互不信を上回るほどのものであったことに他ならない。特に日本側か らのアプローチには強いものがあり、日本と元朝間を往来していた交易船は中国 のジャンク船であったにもかかわらず、主に日本側の需要に添う形で運行されて いる38。このような日元交易船は日本側では「寺社造営料唐船」と呼ばれている

^{34 『}元史』巻二〇,成宗紀三,大徳三年三月癸巳。なお、この国書の写しが金沢文庫に残されている(『金沢 文庫古文書』6773)。

³⁵ 村井章介 2013 (a), 264-266頁。

³⁶ 鎌倉幕府追加法四八八条(異国警固条々)、七〇一条(牒使来着時在所并問答法事)(『中世法制史料集』 第一巻, 249頁, 307頁); 村井章介 2013, 265頁。

³⁷ 榎本渉 2007 (b), 106-117頁: 森克己 1975, 366-370頁, 511-525頁。 江静 2000, 同 2002 も参

³⁸ その理由としては、日本から元朝側に航行する交易船はいずれも元朝側の市舶司廃止・下海禁止期間と 関係なく元朝側の港(主に慶元)に入港しているが、日本へ帰航する際には市舶司廃止・下海禁止期間中は出 港することができず、下海禁止令が解除されて初めて出港していることが挙げられる。詳しくは、四日市康博 2016で取り上げた。

が³⁹、これは或る意味、貿易構造や内容の変化を反映したものであった⁴⁰。例えば、経済面では元朝からも宋銭を多く含む大量の中国銭が日本に輸入され、銀が日本と元朝の双方向に流通していたが⁴¹、モンゴル帝国初期はユーラシア全体を銀が環流した時代として知られている。また、元朝下における書画・陶磁器・茶文化などは日本における「唐物」受容と不可分であり、それは続く明代 - 室町時代にも継承されてゆく⁴²。それらの中には必ずしもモンゴル的とは言えない要素も含まれるが、南宋の文化が元朝統治下の華北・江南で継承され発展していったものであり、やはり元代には元代の特徴がある⁴³。元朝後半期に日本と元朝間での僧侶の往来は空前の盛行を迎えたが、村井章介や榎本渉はこの時期を「渡来僧の世紀」と呼んでいる⁴⁴。これらの文化交流は一見すると「モンゴルの衝撃」と結びつかないような印象を受けるかもしれないが、それらはモンゴルの覇権下に隆興した経済・文化交流によってもたらされたものであり、やはり「モンゴルの衝撃」の一環なのである⁴⁵。

おわりに: 「モンゴルの衝撃」とは何であったのか

日本だけを主体に考えると、「モンゴルの衝撃」とは戦役そのものが最大かつ 主体的なインパクトであったと思われがちである。実際、従来のモンゴル襲来研 究は、主に戦役前の外交関係や戦争そのものだけに焦点が当てられてきた。しか し、先に見たように、海域アジアの他の諸地域の事例も勘案してみると、「モン ゴルの衝撃」とは決して戦役のみではなく、むしろ、戦後の政治関係・経済関係 こそが社会や文化に大きな影響を及ぼした「長期的インパクト」であったことが わかる。さらには、戦前・戦中に生じた政治的なインパクトがその後の経済的・

^{39 「}寺社造営料唐船」に関しては、村井章介 2003、村井章介 2013;中村翼 2013などを参照。また、寺社造営料唐船の個別の事例に関しては、福島金治 1991;福島金治 1996;永井晋 2010も参照。

⁴⁰ 南宋期に博多から多く出土する「綱」銘および「綱首」銘墨書陶磁器は元代になるとほぼ見られなくなる。これは、宋代の綱を中心とした海上貿易構造が元代には変容したことを示唆している。一方で、新安沈没船からは「綱司」銘の木簡が多数出土しているが、この「綱司」が「綱首」と同様の意味として用いられていたのか、或いは別の立場の者であったのか、未だ解決されていない。

⁴¹ 日本から中国への銀の流れは、『至正四明續志』巻五, 市舶物貨, 細色に「倭銀」として、日本の銀、特に対馬銀が慶元(現 寧波)経由で元朝に輸入されていたことが明らかである。一方、博多の聖福寺では江戸時代の享保元年(1716)に元代の銀錠が出土しており、その際の様子が伊藤東涯の『盍簪録』に記されている。これは銀の流通が決して一方行ではなく、中国から日本へも銀の流通があったことを示している。(『盍簪録』巻四)42 具体的な事例としては、例えば、村井章介 2003: 榎本渉 2003 などを参照。

⁴³ 端的な事例としては、日本の唐物文化・禅宗文化のなかに散見する「蒙古文字」、すなわち、パクパ字が挙げられる。日本では蒙古字をパクパ字として認識した上で積極的に持ち込まれたわけではなかったが、それでも随所にパクパ字が残されている。例えば、茶壺に利用された福建・広東産の褐釉四耳壺(後にルソン壺と呼ばれるようになる)や青磁にはしばしば漢字の吉祥句が刻されているが、兵庫・鹿児島・博多(新安船)・沖縄などではパクパ字のスタンプ印を刻した四耳壺やパクパ字銘のある青磁が出土している(たつの市埋蔵文化財センター 2015;石垣市総務部市史編集課 2008;鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006)。また、室町後期の臨済宗の禅僧、玉隠英璵は自らの名をパクパ字で表記した落款印を作成しているが(日本経済新聞社 2003)、これはパクパ字の漢字音との対応表を示した韻書である『蒙古字韻』を参照したと見られ、十五~十六世紀までは玉隠が住持を務めた建長寺、或いは金沢文庫などに日本に将来された『蒙古字韻』が残されていたと考えられる。

⁴⁴ 村井章介 2013 (b); 榎本渉 2007 などを参照。

⁴⁵ 実際、元朝-日本戦争に際しては、鎌倉幕府は日本に来ていた渡来僧や入宋僧のネットワークを最大限に活用して情報収集や諜報活動に努めたが、「渡来僧の世紀」と呼ばれる元朝期の僧侶往来の活況はその延長線上にあると言える。モンゴル襲来時における禅僧の活動とその後の展開については、伊藤幸司2009,同2010を参照。

文化的インパクトに深い影響を与えていたことが確認される。言葉を換えれば、 日本戦役に際して元朝・日本(鎌倉幕府・朝廷)双方から貿易や通交に関して規 制がかけられ、それが貿易構造そのものに直接影響を与えたわけであるが、その 状況とその後の揺り返しによる貿易隆興とは一連の流れとして捉えられなければ ならない。先の村井の説にあったように、日本-モンゴル戦争直後から日本側は 貿易規制を急速に強めて、新たな来航者を制限したが、それにより、それまでの 中国側に本拠を持つ漢人商人(いわゆる「宋商一)主体の貿易から博多に拠点を 置く漢人商人(「宋商」の子孫たち)に主体が移り、さらには漢人商人の日本定 住化が進むと、室町=明代には「宋商」の子孫を含む日本商人に主体が移って いったと考えられる。いずれにしても、鎌倉・南北朝=元代は日中貿易の構造が 転換する過渡期であり、それには元朝-日本戦役とその後の「モンゴルのインパ クト」が深く関わっていたのである。

本稿は紙幅の関係もあり、敢えて日本における「モンゴルの衝撃」の内容にど のようなものがあったのか具体的な事例は取り上げずに、「モンゴルの衝撃」が 軍事的・政治的なインパクトに限らず、それらの短期インパクトがさらに経済 的・文化的なインパクトに繋がったという点に主眼を置いた。本当にこのテーゼ が正しいのかどうか、それには日本以外の地域も視野に入れつつ、具体的な事例 を取り上げながら検証してゆかなければならないが、それは今後の課題として筆 を置くことにしたい。

史料

『元史』: 『元史』 校点本. 15 冊. 北京: 中华书局, 1976.

『蒙古字韻』: 照那斯图, 杨耐思(编)『蒙古字韵校本』北京: 民族出版社, 1987.

『四明續志』:中國地志研究會(編)『至正四明續志』宋元地方志叢書.台北:中國地志研究會,

『高麗史』:国書刊行会(編)『高麗史』上中下 . 国書刊行会 , 1977.

『盍簪録』: 森銑三ほか (編) 『随筆百花苑 6』 東京:中央公論社, 1983 所収.

『鎌倉幕府法 追加法』:佐藤進一、池内義資(編)『中世法律史料集 第一巻 鎌倉幕府法』東京: 岩波書店, 1955 所収.

Marco Polo. Le Devisement dou Monde (マルコ=ポーロ『世界の記述』):

-Marco/F/Benedetto: Luigi Foscolo Benedetto (ed.), il Milione : Prima Edizione Integrale. Firenze, 1928.

-Marco/R/Einaudi: Giovanni Battista Ramusio (ed.), I viaggi di Marco Polo. In Navigazioni e viaggi. vol.3, Venezia, 1559 (Giulio Einaudi (re.ed.), Torino, 1980.)

参考文献

榎本渉 2003「陸仁と道元文信をめぐって」『東アジア海域と日中交流——九~一四世紀』東 京:吉川弘文館, 2007, 212-269頁(原載:「一四世紀後半、日本に渡来した人々」『遙かなる 中世』20,2003.)

榎本渉 2006「初期日元貿易と人的交流」『宋代の長江流域——社会経済史の観点から』東京: 汲古書店. 231-272頁.

榎本渉 2007 (a) 『東アジア海域と日中交流——九~一四世紀』東京:吉川弘文館.

- 榎本渉 2007 (b) 「元朝の倭船対策と日元貿易」『東アジア海域と日中交流——九~一四世紀』 東京:吉川弘文館,106-175頁.
- 榎本渉 2014「宋元交替と日本」『岩波講座 日本歴史 第七巻 中世2』東京:岩波書店. 77-112 百
- 榎本渉 2015「13世紀の東アジア情勢と高麗・大越・日本」『日越交流における歴史、社会、文 化の諸課題』京都: 国際日本文化研究センター. 17-24頁.
- 深見純生 2004「元代のマラッカ海峡——通路か拠点か」『東南アジア——歴史と文化』18. 86-98 百
- 深見純生 2006「ターンブラリンガの発展と13世紀東南アジアのコマーシャルブーム」『国際 文化論集』34.81-97頁.
- 福島金治 1991「鎌倉極楽寺の唐船派遣について」『地方史研究』 233.
- 福島金治 1996「中世鎌倉律院と海上交易権——熱海船の性格と鎌倉大仏造営料唐船の派遣事情」『鎌倉大仏研究』1
- 石井正敏 2010「文永八年の三別抄牒状について」『中央大学文学部紀要 史学』56,1-34頁.
- 石垣市総務部市史編集課 2008. 『石垣市史考古ビジュアル版 5 陶磁器から見た交流史』石垣市.
- 伊藤幸司 2009「外交と禅僧——東アジア通交圏における禅僧の役割」『中国——社会と文化』 24.41-70頁.
- 伊藤幸司 2010「東アジアをまたぐ禅宗世界」荒野泰典・石井正敏・村井章介(編)『日本の対 外関係 4 倭寇と「日本国王」』東京:吉川弘文館、30-56 頁。
- 江静 2000「元代赴日中国商船鋭減原因初探」『中日文化論叢』1998.
- 江静 2002 〈元代中日通商考略〉《中日关系史料与研究》1.
- 鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006.『国指定遺跡 知覧城 (三)』知覧町:鹿児島県川辺郡 知覧町教育委員会.
- 川添昭二 1993「鎌倉末期の対外関係と博多——新安沈没船木簡・東福寺・承天寺」『鎌倉時代 文 化伝播の研究』東京:吉川弘文館.
- 李康漢 2016「高麗におけるモンゴルのインパクトとレスポンス」『国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト」予稿集』東京:昭和女子大学.
- 桃木至朗 2011『中世大越国家の成立と変容』吹田:大阪大学出版会.
- 森克己 1975『日宋貿易の研究』東京: 国書刊行会.
- 森平雅彦 2013『モンゴル覇権下の高麗——帝国秩序と王国の対応』名古屋:名古屋大学出版 会.
- 문화 공보부 문화재 관리국 (文化公報部文化財管理局) (編) 1981-85『新安海底遺物 (資料篇I-III)』서울: 한국 문화 공보부 문화재 관리국.
- 문화 공보부 문화재 관리국 (編) 1988『新安海底遺物 (綜合篇)』서울: 한국 문화 공보부 문화재 관리국.
- 문화재청, 국립해양유물전시관(文化財庁, 国立海洋遺物展示館)(編)2006『新安船 The Shinan wreck』1-3. 목포: 문화재청, 국립해양유물전시관.
- 村井章介 1988 (a) 「高麗・三別抄の叛乱と蒙古襲来前夜の日本」『アジアのなかの中世日本』 東京:校倉書房, 1988, 144-188 頁.
- 村井章介 1988 (b) 「蒙古襲来と鎮西探題の成立」『アジアのなかの中世日本』東京: 校倉書房, 1988, 189-235頁 (原載『史学雑誌』87/4, 1978より改編)
- 村井章介 2003「日元交通と禅律文化」『日本中世の異文化接触』東京:東京大学出版会, 2013, 171-213頁(原載:『日本の時代史10 南北朝の動乱』東京:吉川弘文館, 2003.)
- 村井章介 2010「蒙古襲来と異文化接触」『日本中世の異文化接触』東京:東京大学出版会, 2013, 375-400 (原載:荒野泰典・石井正敏・村井章介(編)『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』東京:吉川弘文館, 2010.)
- 村井章介 2013 (a) 「寺社造営料唐船を見直す——貿易・文化交流・沈船」『日本中世の異文化接触』東京:東京大学出版会, 2013, 241-272頁.

- 村井章介 2013 (b). 「肖像画・賛から見た禅の日中交流」 『日本中世の異文化接触』 東京: 東 京大学出版会, 2013, 273-294頁.
- 永井晋 2010「金沢文庫古文書に見る唐船派遣資料」『金沢文庫研究』 324.
- 中村翼 2010「鎌倉幕府の「唐船」関係法令の検討――「博多における権門貿易」説の批判的 継承のために」『鎌倉遺文研究』25.
- 中村翼 2013「日元貿易期の海商と鎌倉・室町幕府——寺社造営料唐船の歴史的位置」『ヒスト リア』241.
- 日本経済新聞社,東京国立博物館(編)2003.『鎌倉――禅の源流』東京:日本経済新聞社.
- Prawdin, Michael 1937. The Mongol Empire: Its Rise and Legacy. (tr.) Eden and Cedar Paul. Brunswick and London: Aldinetransaction.
- たつの市埋蔵文化財センター 2015.『謎のパスパ文字と光明山』たつの市埋蔵文化財センター. 佐口透 1970「タタールの平和」『岩波講座世界歴史 中世 3』 東京:岩波書店.
- 四日市康博 2001「パクス・モンゴリカ――東西交通の繁栄」『しにか』140, 50-55 頁
- 四日市康博 2015 (a) 「ユーラシア的視点から見たイル=ハン朝公文書——イル=ハン朝公文 書研究の序論として」『史苑』75/2,257-300頁.
- 四日市康博 2015 (b) $\lceil 13 \sim 14$ 世紀における中国 東南アジアの通交と貿易——元朝から見た 西洋航路上の南海諸国との関係を中心に」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』21,13-41頁.
- Yokkaichi Yasuhiro 2015. (ed.) Special Issue: Multilingual Documents and Multiethnic Society in Mongol-Ruled Iran, in Orient 50.
- 四日市康博 2016「14世紀の日本と元朝の海上交易における新安船」『 신안선 발굴 40주년 기념 국제학술대회——아시아대평양 해양네트워크와 수중문화유산』목포시:국립해양문화재연구소. 164-184頁.

指定討論

「モンゴル・インパクトの一環としての『モンゴル襲来』」を 受けて

「質問者/趙阮、回答者/四日市康博】

一(趙)四日市先生の発表を興味深く拝聴いたしました。モンゴルは、平和とインパクトが同時に存在する表裏一体であるという概念に積極的に同意し、またモンゴルの日本遠征もモンゴル・元帝国と日本との関係だけにとどまらず、東南沿海をはじめ海上戦略の全般的な脈略で把握しなければならないという点でも積極的に同意しております。ですので、発表を通じて大変勉強になりました。

私の質問は、まずモンゴル帝国に、元において、朝貢冊封の意味は何だったのかについてです。ある国に対しては冊封を要求したり、またある海上国家に対しては冊封なく朝貢だけを要求する場合がありました。そうした中国的な朝貢・冊封という方式を活用した目的とか、様相がどんなものだったのか、先生のご意見をお聞きしたいです。

二番目は、先生は、日本遠征でも東北沿海と 東南沿海では接近の方法が異なっていたといい、東南沿海は西アジア地域につながる貿易の 脈略でみなければならないとおっしゃいました。この東北沿海に対する海上戦略にはどんな 違いがあったのか、また目的はどんなことだったのでしょうか。

最後に、日本との関係において、最後の部分で政治的には国交が途絶えていたけれど、民間レベルでは交流が活発であったとおっしゃいました。その部分に関してもう少し具体的にお話を伺いたいです。そんな交流ができた要因、ま

たは背景は何だったのでしょうか。政府は消極 的だったけれど、民間では積極的な交流が可能 だった主体は一体誰だったのでしょうか。これ は、末梢的なことですが、宋商の子孫たちが博 多に接点をおいて、交流する方式に変わって いったとおっしゃいましたが、そうなった経緯 は何だったのでしょうか。もう少し具体的にお 話いただければと思います。

―― (四日市) まず一つ目の質問ですが、元朝モ ンゴル帝国といっても、皇帝が一人ですべて決め るのではなく、まわりには王族もおりますし、官 僚たちや大臣たちもいて、さらには地方にもさま ざまな官僚がいます。冊封・朝貢の場合も、実は 意志系統がいくつかありまして、皇帝のフビライ もしくはモンゴルの皇帝たちは、基本的には先ほ ども言ったように、従うか、逆らう者に兵を送る かの二択なのですが、それに対して臣下たち、特 に中国にもともと仕えていた金や、後から南宋か ら入ってきた臣下たちは、中国的な冊封の例にも とづいて策を行うようにフビライに言上したりし ます。また、福建省・浙江省にいる官僚たちはど ちらかというと貿易を重視しておりまして、征服 するよりも貿易を行ったほうがいいと進言したり します。最終的には、フビライの、皇帝の意向が 優先されるんですけれども、そのようにいくつか の思惑があります。ですから、東南アジアの、と くにインド洋沿海のほうは朝貢関係だけを結んで おりますが、実際フビライは本当は東南アジアや

インドまで兵を送ろうとした経緯があります。 ところがウイグル人のカルナダンという知識人 がフビライに対して、今日本とかベトナムに兵 を送ってかなり国が疲弊しているので、軍を出 すよりは貿易関係を結んで従わせたほうがよろ しいと諌めまして、それを最終的にフビライが 了承して結局軍は送らなかったという経緯があ るんですね。

このように、従わせようという力と、説得し てなんとか和平的に関係を結ぼうという考え と、貿易を優先しようという考えなど、元朝の 内部にもいくつかの考え方がありました。元朝 から遠ければ遠いほど、やはり軍隊を出すのは 負担がかかるのでやめようという考えがあった ので、結果としてインド洋のほうには軍隊を送 らなかったということになります。

二つ目のご質問ですが、日本の東北のほうの 貿易はどうかという話ですね。これは三番目の 問題ともかかわるんですけれども、基本的に元 朝の皇帝は臣服、臣従させようとするんです が、かといって貿易に否定的ではなくて、貿易 はかなり積極的に認めようという立場なんです ね。また、日本は民間貿易の関係を持ったと言 いましたけれど、実際には民間貿易といって も、日本の朝廷とか幕府が全くかかわってな かったという意味ではなく、彼らも一応参与は していたんです。バックアップというか、非公 式にスポンサーになったりとかするんですが、 元朝側も日本の船が来たときに、戦争直後で あったにもかかわらず、貿易を許可するんです ね。それは当然勝手に省の官僚が許可するので はなくて、中央の政府がきちんと許可したので 認められたということです。元朝側も別に日本 との貿易に否定的ではないということなんです ね。

これはベトナムとかインドネシアも一緒で、 むしろ戦争が終わったあとに貿易がかなり活発 になるという現象が起きております。日本も戦 争があったあとの10年くらいはあまり貿易は 行われないんですが、ある意味日本にもその現 象が起きているわけです。

実は日本にもベトナムにもフビライは第三次 遠征、第四次遠征というのを計画しておりまし て、14世紀になるまでは戦後ではなくて戦中、 戦争がずっと続いていた状態です。次の戦争の 準備をしているという状態なんですね。13世 紀の終わりにフビライが亡くなると、新しい皇 帝が即位しますけれど、そちらの皇帝は中央ア ジアのモンゴルの内紛を収めることを優先させ るので、アジアの国々を攻撃するのは控えるよ うになって、方針を転換するんですけれども、 それで初めて戦後というか、戦争が終わって次 のステージに入ることになります。そうする と、僧侶の往来ですとか、商人の往来というの がかなり活発になることになります。

先ほど質問があったように、もともと日本に は宋代からかなり中国人が博多などに来ており ました。すでに貿易する下地ができておりまし たので、彼らは引き続き、とくに元朝が支配し たからといって、浙江省や福建省の商人たちの 拠点がなくなったわけではなく、社会構造はほ とんど変わっておりませんので、引き続き彼ら と、日本と中国の寺院が軸となって貿易ですと か、お互いの交流が続けられることになるんで すね。ですから、国と国の正式な外交は行われ ていないんですが、そういう意味で両国とも貿 易には否定的ではなかった。障害となるような 政策はとくにとらなかったというので、そのあ と民間交易が活発になるという経緯がありま す。以上です。

発表論文 2



アミール・アルグンと彼が ホラーサーンなどの地域 において行った 2回の人口調査について

チョグト/朝克图

内蒙古大学

[原文は中国語、翻訳:宋剛(北京外国語大学)]

要旨

モンゴル帝国は世界的な大帝国である。モンゴル帝国の時期に、チンギスカンとその後継者たちは、一貫して対外の領土拡張を行い、東アジアとユーラシア大陸の各地域を征服し、史上空前のモンゴル帝国を確立した。モンゴル帝国によって行われた征服戦争は東洋と西洋にそれぞれ「モンゴル襲来」と「韃靼つむじ風」と呼ばれており、世界に揺さぶりを与え、食い止められない歴史の流れとなったのである。モンゴル帝国の対外拡張とともに、モンゴルを初めとする北アジア草原で活動する遊牧民族はアジアの中部から出て世界の舞台に登場し、モンゴルと世界各民族における地理と言葉の障壁を克服し、各民族の相互理解と融合を促し、史上空前の統一の状況を迎えた。この過程は人類のグローバル化過程を大きく促進し、世界歴史の進展に深い影響を与える。

本文はアミール・アルグンの西アジアにおける活動を分析することで、モンゴルが西アジア地域を支配する過程とその特徴を理解し、解釈しようと試みた。アルグンはモンゴルオイラトの部に属し、子供時代から、モンゴルの王族に任えた。その後西アジアに派遣され、ホラーサーンの第四代総督となり、西アジアとモンゴル高原の間を何度も往復した。彼はモンゴル帝国が西アジア地域を統治し、その支配を固める為に策を出し、モンゴル帝国に大きく貢献した。特に、彼はホラーサーンなどの地域において2回の人口調査を行い、当地の状況に基づく税収政策を制定し、経済発展を促し、モンゴル帝国が其の地域における長期にわたる統治を固め、堅実な基礎を築いた。

アミール・アルグンの西アジアにおける活動を研究することによって、モンゴル帝国の西アジア地域における統治と管理を理解するだけでなく、モンゴル帝国の多様性、世界化特徴を理解する上で、学術面と歴史面に重要な意義を有する。

はじめに

アルグンはモンゴルのオイラト部に属し、モンゴル帝国の時代に、影響力を 持っていた歴史上の人物である。彼はモンゴル帝国の支配するホラーサーンなど 西アジア地域の第四代総督であり、モンゴル帝国による西アジア地域の統治と管 理に様々な計策を出し、大きな役割を果たし、その名前を歴史に残した。当時、 著されたモンゴル帝国時代の歴史に関する様々な史料の中で、彼はアミール・ア ルグン、あるいはアルグン・アカなどと呼ばれている。彼はモンゴル帝国の西ア ジア地域に対する基本政策を忠実に実施し、モンゴルの大ハンが現地に対して 行った直接的な統治を強化し、経済発展を促進する上で、積極的な役割を果たし た。

国内外において、モンゴルの西アジア征服と統治に関する研究は多くない。そ の問題を扱う論文の中で、本田実信の論文「阿母河等處行尚書省考1 が相対的に 大きな影響力を持っている。その文章は、モンゴル帝国の西アジアに対する征服 と統治について詳しく記述しているが、モンゴル帝国が西アジアに派遣したア ミールたちの業績と彼らが取った具体的な措置については全面的には述べていな いから、この問題に関するさらなる研究が必要である。

モンゴル帝国の西アジア地域に対する統治と措置をさらに理解し把握するため に、本論考は上述の論文に基づいてアルグンの生涯の事績を簡単に述べ、同時に 彼がホラーサーンなどの地域において行った2回の人口調査の過程と意義を紹介 することにより、モンゴル帝国の西アジア地域における統治と措置を考査した。

1. アルグンの族源と早期の歴史活動について

アルグンの生涯と実績について紹介する前に、まず、その生涯と実績に関する 歴史上の記載を正確に理解し、把握する必要がある。モンゴル帝国の時代にラ シード・ウッディーンによって著された『集史』とジュヴァイニーによって著さ れた『世界征服者の歴史』などの史籍には、アルグンの生涯と実績についての記 載がある。これらの史籍によれば、アルグンはモンゴルのオイラト部に所属し、 モンゴル帝国の時代に、影響力を有する歴史上の人物であることが分かる。アル グンについて、ラシード・ウッディーンの『集史』オイラト部誌には次の記載が ある。

(史料一)

イランとトゥランには、過去も現在も多くのオイラト部アミールがいる。し かし、彼らが所属する氏族が分からない。彼らの出身は彼らの間でしか分か らない。その中に、アミール・アルグン・アカという人がいる。彼の出身 は人々に尊敬されるものではない。オゴデイ・カーン時代のある飢饉の年、

28

¹ 本田実信、『モンゴル時代史研究』、東京:東京大学出版会、1991年、101-127ページ。

彼の父は彼をジャライル部族のアミールであるイルゲ・カダンに売って、牛の足一本と交換した。アミール・イルゲ・カダンはオゴデイ・カーンのアター・ベク (師父) として仕えていた。しかし、イルゲ・カダンは自分の子をケブテウル (親衛) としてオゴデイ・カーンのケシク (宿衛) に入れると同時に、アルグン・アカも一緒に送った。アルグン・アカは機敏であるから、段々と地位を手に入れ、イランの国政を握ってバスカク (統治長官)の職まで担当した。

アルグンの出身と成長については、『集史』ジャライル部誌にも類似した内容が記載されている。

(史料二)

飢餓に面し、アミール・アルグンの父は、アミール・アルグンをイルゲ・ノヤンの父カダンに売って牛足と交換した。しかし、カダンは自分の息子にオゴデイ・カーンのケブテウル(親衛)を担当させた。また、アミール・アルグンを自分の息子のノコル(随伴)にさせた。即ち、アルグンはその子の召使いになった。アルグンは機敏で利口であり、また話し好きで頭がいい人だから、すぐに出世して、同世代の人々より高い地位を獲得した²。

以上の二つの記載において、アルグンの出身と成長に関する内容は基本的に一致している。しかし、細かく比べると、上記の史料には具体的な人名などに異なる点がある。例えば、(史料一)では「彼(アルグン)の父は飢饉の年に、彼をジャライル部族のアミール・イルゲ・カダンに売った」と記述されているが、(史料二)において、その人は「イルゲ・ノヤンの父カダン」である。上記の二つの記載のうち、どちらが事実と一致しているのだろうか? それに関しては、さらなる研究が必要であると思われる。いずれにしても、上記の記載を通じて、アルグンの出身の部族の情報を得た。また、その成長や経歴などの重要な情報も得られた。

それ以外に、ほかのモンゴル帝国の時代に著された史籍の中にも、アミール・アルグンの出身に関する記載が見られる。ジュヴァイニーによって著された『世界征服者の歴史』は、アルグンの事績を記載するもう一冊の重要な史籍である。この書ではアルグンのホラーサーンでの活動が豊富に記載されている。しかし、彼の出身と家族に関しては詳しく記載されていない。『世界征服者の歴史』では、アルグンの出身と家族について次にように記載されている。

(史料三)

アミール・アルグンはオイラト部の人であり、彼の父タイチュは千戸である3。

² ラシード・ウッディーン (著)、余大鈞、周建奇 (訳) 『集史』 第一巻第一分冊、北京: 商務印書館、1992 年、153ページ。

³ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、603ページ。

ここでは、アルグンの父の名前だけでなく、千戸であることも述べられた。こ れも重要な記載である。『集史』の記載によれば、オイラト部によって構成され る千戸は四つある⁴。しかし、四つの千戸について、『集史』には詳しい記載がな い。アルグンの祖先について、『集史』には前文で引用した二つの記載以外に、 何の情報も見つからない。しかし、アルグンの子孫に関しては詳しく記載されて いる。

(史料四)

彼の息子は、ケレイ・メリク、タリヤチ、ナウルーズ、レクズィ、ハー ジー、ヨル・クトゥルグ、ボルドクとオイラタイである⁵。孫はグレグ゚など たくさんいる。娘も大勢いる。何人かの娘は君主とアミールたちに嫁いだ。 また、彼の息子であるナウルーズとレクズィは(チンギス・ハンの)皇族の 娘と結婚し、チンギス・ハンの娘婿になった⁷。

アルグンがオゴデイ・カーンの宮廷に仕えた後のことについて、関連の史籍に は詳しい記載がない。しかし、『世界征服者の歴史』の記載から、アルグンの従 事した職務に関する情報が得られる。

(史料五)

彼(アルグン)は若いにも関わらず、オゴデイ・カーンの宮廷に入り、ビチ クチ(書記官)⁸を担当した。ますますカーンに寵愛された。まだ若い彼をガ バン⁹と一緒に、重要な使命を与えてヒタイ(北中国)に向かわせた。彼は少 しの間、ヒタイに留まり、カーンに謁見した。カーンはアルグンを重用し、 エディグ・テム ν^{10} とコルクズ¹¹の案件の審理と調査をアルグンに任せた¹²。 エディグ・テムルはコルクズが朝廷での地位を固める前に、機先を制し、コ ルクズの活動をカーンに報告した。そして、エディグ・テムルはトングズ¹³ (Tonguz) を推薦し、皇帝の前で、コルクズを貶しめ、罪を被らせた。チ ンカイ(鎮海)に恥を掻かせようとした人々は、彼のいない間に、カーンに 彼のことを告発した。結果として、アミール・アルグン、クル・ブカ¹⁴(Qur

⁴ ラシード・ウッディーン (著)、余大鈞、周建奇 (訳) 『集史』 第一巻第一分冊、北京: 商務印書館、1992 年、368ページ。

⁵ ケレイ・メリク、タリヤチ、ナウルーズ、レクズィ、ハージー、ヨル・クトゥルグ、ボルドグとオイラダイは漢 語でそれぞれ乞来-灭里,塔里阿只,涅兀鲁思,列克集,哈只,亦斡勒-忽都鲁,不勒都黑と斡亦剌台である。

⁶ 中国語で古列克である。

⁷ ラシード・ウッディーン (著)、余大鈞、周建奇 (訳)『集史』第一巻第一分冊、北京:商務印書館、1992 年、198ページ。

⁸ モンゴル語のbičigečiのトルコ語転写で、書記、秘書のことである。

⁹ 中国語で合班である。

¹⁰ 中国語で额得古铁木尔である。

¹¹ 中国語で阔儿吉思である。

¹² ジュヴァイニー(著)、何高済(訳)、翁独健(校)、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、603ページ。

¹³ 原文は通忽思である。

¹⁴ 原文は忽儿巴哈である。

Buqa)及びシャムス・アッディーン・カマガル 15 (Shamas-Din Kamagar) は皇帝の命令により、この案件の事情を調査した 16 。

以上の記載からも分かるように、アルグンはオゴデイ・カーンの宮廷に入ってから、ビチクチを担当したことがあった。前述の『集史』に記載された内容(史料一)(史料二)と一致している。しかし、彼はジャルグチ(断事官)として、エディグ・テムル¹⁷とコルクズの紛争に関わる。モンゴル帝国の時代に、ビチクチとジャルグチの職務は極めて近いため、筆者にはアルグンがオゴデイ・カーンの宮廷でビチクチを担当すると同時に、ジャルグチを兼任した可能性が大きいと判断できる。

2. アルグンによるモンゴル高原と ホラーサーン間の往復

西征が終わって、チンギス・ハンがモンゴル高原に帰った後、ホラズム・シャーの皇子ジャラール・ウッディーンはインドからホラーサーンに戻り、一部の町を奪い、モンゴルに激しい対抗を展開した。そのため、チョルマグンはオゴデイ・カーンの命令に従い、軍隊を率いて、ジャラール・ウッディーンと戦った。チンギス・ハンの時代に、モンゴルの軍隊はホラーサーンを占領し、ジョチはチン・テムルをその地域の長官に任命した。チョルマグンがホラーサーンに着いたのち、チン・テムルはオゴデイ・カーンの命令により、チョルマグンと一緒にその地域を征服した。現地の指揮権を争って、チョルマグンとチン・テムルの間に紛争が起こった時、オゴデイ・カーンは現地の指揮権をチン・テムルに渡すという命令を下した。こうして、チン・テムルはモンゴル帝国がホラーサーン地域

チン・テムルはホラーサーン各地に使者を派遣し、統治の基礎を固めた。当地の経済はすぐに回復し、さらなる発展を遂げた。チン・テムルが亡くなった後、ノサル¹⁸が総督になった。当時、モンゴルの統治者内部、そして、モンゴル統治者と現地官僚の間に、紛争が相次いだ。そして、現地官僚の権力は膨らみ、モンゴル帝国の税収を把握し、モンゴル帝国の統治者を悩ませた。

モンゴルの大ハンにとって、如何に現地に対する管理と統治を強化するか、税収の仕事をいかに有効的に展開するかは、解決すべき最大の問題である。だから、コルクズは総督になってから、人口調査や、税収の再開などの措置を取って、上記問題を解決し、ホラーサーンとマーザンダラーンなどの地域の統治秩序を回復した。しかし、当時、チン・テムルの息子であるエディグ・テムルとコル

に派遣した初代総督となった。

¹⁵ 原文は苫思丁・迦马格尔である。

¹⁶ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、589-590ページ。

¹⁷ 中国語で额得古铁木尔である。

¹⁸ 原文は诺撒耳である。

クズはその地域の指揮権奪取の紛争に陥り、宮廷で相手を誹った。大ハンは紛争 を解決する為に、事情調査をアルグンに任せた。最終的に、この事件はコルクズ の勝訴に終わった。コルクズは勝訴して引き続き総督を担当し、またアルグンを 連れてホラーサーンに帰った。まもなく、アルグンはまたモンゴル高原へ派遣さ れた。その後、コルクズはチンギス・ハンの黄金の氏族の者たちと言い争って、 死刑に処された。トレゲネ・ハトンは、アム川からファールス、グルジア、ルー ム及びモスルなどの地域の統治権をアルグンに渡した¹⁹。

アルグンはモンゴル高原からホラーサーンへ戻って、ヤルリグ՞᠐(勅書)を読 み上げて、各地の長官を任命し、そして滞納の賦税を徴収するために弛まぬ努力 を重ねてきた。チョルマグンとバイジュはホラーサーンに来てから、戦乱に乗じ てその地域を自分の私有財産とした。特に、オゴデイ・カーンが亡くなった後、 諸王は各地域を巻き上げて、勝手に賦税を徴収し、ヤルリグ(勅書)と牌子を発 行し、当地を混乱に陥らせた。この状況のもとで、アルグンは現地の秩序を迅速 に回復させる為に、税収軽減の政策を取ったので、現地の人々に称讃された。こ れまで、モンゴル統治者に反対する態度を持っていた人々も相次いでアルグンに 帰順した。

グユク・ハンが即位したのち、アルグンはモンゴル宮廷に赴き、グユクに謁見 した。グユクは彼に虎頭令牌とヤルリグ(勅書)を賜った。モンゴル高原からホ ラーサーンへ戻ったアルグンは、各地にさまざまな宮廷と庭園を建設し、現地の 人々に歓迎された。当時、アルグンの活動に反対するモンケ・ボラド²¹はモンゴ ル高原に赴き、グユクにアルグンを誹った。その情報を聞いたアルグンは、自ら 宮廷に赴き弁明しようとしたところで、グユクが亡くなった。そしてエルジギテ イがホラーサーンに進駐するという情報が伝わってきたため、アルグンはアミー ル・フサインをオルド(宮廷)へ派遣し、彼自身はホラーサーンに残ることにし た。アルグンはエルジギテイのために、積極的に食糧などの軍需物資を用意し た。しかし、各地の諸王子は勝手に賦税を徴収し、また、エルジギテイの徴発と 要求が過酷であったため、現地の人々は困り果てていた。

以上の状況に鑑み、アルグンは再び宮廷に赴き、現地の状況を如実に報告し た。朝廷でモンケ・ボラドと激しく論争し、勝利した。彼はホラーサーンに戻っ てまもなく、クリルタイ(大議会)に行ってモンケ・カーンに謁見し、ホラー サーンなどの地域の様々な問題を如実に報告した。モンケはアルグンにホラー サーンで土地と人口を調査させ、税収の徴収などを強化させるように命じた。

フレグがイランに到着した時に、アルグンは自ら迎え、また、フレグを強力に 支えた。まもなく、彼はフレグの命令に従い、再びモンゴル宮廷に赴き、モンケ に現地の状況を報告した。アバカ・ハンがイル・ハン国を統治した時期に、彼は 引き続き、各地の包税制の主管の職務を担当した。バラクがイル・ハン国に侵入 した時、アルグンはイル・ハン国の左翼軍隊を率い、バラクと戦ったが、失敗し

¹⁹ ジュヴァイニー (著)、何高済(訳)、翁独健(校)、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、604ページ。

²⁰ 原文は札儿里黑 (yarlīgh) で、勅令文書のことである。

²¹ 中国語で蒙哥孛剌である。

33

た。1275年に、アルグンはトゥース 22 のちかくにあるラートカーンの領地で亡くなり、ここに葬られた。

3. アルグンがホラーサーンで 人口調査を行った過程と意義

モンケ・カーンに謁見した時から、アルグンはホラーサーンなどの地域での賦税と雑税の徴収で起こった厳重な問題を如実に報告し、またアミール・ヤラワチのマーワラーンナフル地域での賦税徴収の方法を学ぶように提議した。ヤラワチのマーワラーンナフル地域での賦税徴収については、『世界征服者の歴史』に具体的に記述されていないが、この本の下編「アミール・アルグンがクリルタイに赴く」という章節の関連記載を通じて、次の内容が分かる。

(史料六)

結論の要点は以下のとおりである。民が負担する賦税と様々な恣意的な臨時税の数が多すぎることが、民が四散する原因となっている。だから、ヤラワチのマーワラーンナフル地域での賦税徴収の方法で、賦税を徴収すべきである。即ち、コプチュル(qupchur)税のことである。人々が毎年納める税金は財産と納付の能力に基づいて決められるから、規定額の税金を納めたら、同年内には納める必要がないし、ほかの税金を負担させてはいけない。このように決めた²³。

以上の記載によれば、賦税を徴収する具体的な方法は「ヤラワチのマーワラーンナフル地域における賦税徴収の方法」であり、即ちコプチュル(qupchur)税に関する内容であると推測できる。また、上記の「こうやって決めた」という言葉からも、アルグンがホラーサーン地域で、ヤラワチの賦税徴収と同様な措置を取ったと判断できる。アルグンは上記の決定をモンケに報告した。モンケは彼の提案を聞いたのち、以下の勅命を下した。

(史料七)

金持ちは毎年十ディーナールを納めるべきであり、財産に応じて、貧しい人は一ディーナールを納めるべきである。この税収の全部をハシャール (hashar)、ヤム (駅站) と使臣の必要経費 (ikhrajat) などに使う。それ以外は、民を邪魔してはいけないし、不法な徴収を行ってもいけない。さらに賄賂を受け取ってもいけない。彼 (アルグン) は各状況に応じて、ヤサ²⁴を

²² 中国語で图思である。

²³ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、615ページ。

²⁴ モンゴル語の音訳で、法律、条例のことである。

制定することができる25。

モンケの以上の勅令の内容から見れば、裕福な人と貧しい人に対し、異なる税 収方法を採用するという条文を制定したのはアルグンのアドバイスを採用したか らである。同時に、モンケはこの地域の最高の権力をアルグンに与え、ノコル26 たちと他の地方官僚を任命した。

アルグンはモンケに謁見し、ホラーサーンに帰ってから、大ハンの命令を如実 に実施し、各地に派遣するアミールとビチクチ(書記官)を新たに任命し、議論 を通じてコプチュル(qupchur)税27の徴収額を決めた。

(史料八)

彼は勅命に従い、アミールと書記たちを任命し、連日、勅命を受けたコプ チュル税の制定について相談を重ね、最終的に、人口調査を実施した時に、 毎年それを届けるように、税額を毎年十人ごとに純金貨七十ディーナールを 通達することを定めた。コプチュル税と人口調査のためにホラーサーンと マーザンダラーンにおいてアミールと書記たちを任命した。皇子たちのもと から来ていたモンゴル人アミールたちから二、三人、アミール・アルグンの 親戚であったナク28、ウルグ・ビチクチであったファフル・ウッディーンベ ヘシュティ29、有力なナーイブ(副官)であったサーヒブ(長官)・イッズ・ ウッディーン・ターヒル³⁰をホラーサーンとマーザンダラーンにおいて任命 した。イラクとヤズド方面にはナイマンダイと我が父サーヒブ・ディーワー ン(財務庁長官)31を任命した。(中略)そして、タルマダイ、サリグ・ブ カ32とマリク・サドル・ウッディーンに、人口調査、千人徴税区制定とコプ チュルの徴収をおこなわせるためにタブリーズのハージャ・マジュド・ウッ ディーン33と共に出発させた。(中略)彼はダルバンドを経由し、グルジア、 アッラーン及びアゼルバイジャーンに赴き、人口調査、コプチュル税の徴収 などの仕事を完成し、イラクに向かった³⁴。

以上の記録には、アミール・アルグンがホラーサーンなどの地域で行った人口 調査とコプチュル税の徴収の定額など具体的情報が記載されている。その人口調 査はホラーサーン、マーザンダラーン、イラク、ヤズド、グルジア、アッラーン とアゼルバイジャーンなどの地域で同時に行われた。人口調査を通じて、当地の

²⁵ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、615ページ。

²⁶ モンゴル語の音訳で、随伴・従者のことである。

²⁷ コプチュル税は財力によって納める税金が異なる税のことである。

²⁸ 原文は脑忽である。

²⁹ 原文は哈法合鲁丁・比希昔惕である。

³⁰ 原文は也速丁・塔希耳である。

³¹ 原文は撒希伯底万で、財政大臣のことである。

³² 原文は撒里合不花である。

³³ 原文は麦术督丁である。

³⁴ ジュヴァイニー (著)、何高済(訳)、翁独健(校)、『世界征服者の歴史』(下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、617-619ページ。

金持ちと貧乏な人々の経済状況を調べ、それに基づいて以上の税収の定額を定めた。つまり、徴収する税額について、現地の人々にとって負担できない状況を改善した。モンゴルの西アジアに対する統治が危機に直面した時、現地住民を安定させ、社会経済の発展を促進し、モンゴルの統治を固める面において、アミール・アルグンの以上の措置は積極的な役割を果たした。

アルグンの人口調査が完成した時に、フレグ・ハンがイランに到着した。アルグンはキシでフレグに謁見した。その後、彼はフレグに依頼され、再びモンゴル高原に赴き、現地の状況について報告した。アルグンはホラーサーンから来た異なる政治見解を持つ使臣たちとの論争で勝った。そして、モンケに信頼された。この時期に、モンケはホラーサーン諸地域を自分の親族と弟たちに分けた35。

アルグンはモンゴル高原から、自分の領地に帰って、アランバイ³⁶に行ってフレグに謁見した。フレグは彼をグルジアに派遣し、再び人口調査を行わせた。

(史料九)

アミール・アルグンはアッラーン地方にいるフレグに謁見しに行った。ここに到着して報告した後、彼はグルジアに行って人口調査を行い、現地住民を千人徴税区に分けた。初めてのコプチュル税の税額を毎年十人ごとに七十ディーナールを納めるべきだと定めた。ハシャール(hashar)、駅站(yams)と駅馬(ulagh)の費用と軍隊の出費は予想を超え、当時定めたコプチュル税の税額を以てカバーできないため、足りない分は定めた税額の比例に応じて分担させる。(中略)アルグンはこの状況を報告し、金持ちのコプチュル税の税額を500ディーナールに修正し、貧しい人々が納めるべき1ディーナールも比例に応じて調整するように命令された。新たな税収を行うために、人口調査も徹底的に実施された37。

上記の記載から分かるように、この調査において、アミール・アルグンは人口 調査を実施しただけでなく、現地住民を千人区に分け、コプチュル税の税額を改めて調整し、裕福な人々と貧しい人々に対して異なる税収政策を取った。

周知のように、アミール・アルグンの管轄地域に、その後イル・ハン国が建てられた。フレグをはじめとするイル・ハン国の統治者たちは千人徴税区を普及させ、現地に対して長期的かつ有効な統治を実施した。しかし、実際に、現地で初めて人口調査を行い、千人徴税区を実施したのはアルグンである。だから、モンゴル帝国がイランなどの西アジア地域を統治する過程において、アルグンは極めて重要な役割を果たしたといえる。我々には、アルグンの実績と彼の果たした役割について深く検討し、研究する必要がある。

³⁵ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、620ページ。

³⁶ 原文は阿兰拜である。

³⁷ ジュヴァイニー (著)、何高済 (訳)、翁独健 (校)、『世界征服者の歴史』 (下)、フフホト: 内モンゴル人民 出版社、1980年、621-622ページ。

指定討論

「アミール・アルグンと彼がホラーサーンなどの 地域において行った2回の人口調査について」を受けて

「質問者/エルデニバートル、回答者/チョグト]

----(エルデニバートル)チョグト先生は論 文の中でアルグンについて詳しく紹介していま すが、確かにアルグンはモンゴルの歴史上にお いて非常に重要な人物だと考えられます。チョ グト先生や本田先生が、この課題についてたく さん研究を重ねてきました。実は、元のモンケ ハン時代において、クビライ時代以前に、ユー ラシアに対する政策は何かというと、まずは燕 京、つまり現在の中国の北方地域、そして別失 八里 (ビシュバリク)、つまり現在の新疆ウイ グル自治区、また現在のイランやアフガンなど の地域がモンゴルの支配下に置かれました。こ れら西部地域の支配権力を握ったのは、まさに アルグンです。そのため、アルグンという人物 に対する研究は非常に重要です。チョグト先生 の論文にも書いてありますが、アルグンには多 くの子息がいます。アルグンがイルハン国に遠 征に行く時も、子息達を連れていったと思われ ますが、そこで一つの質問があります。アルグ ン一族はイルハン国においてどのような地位を 持っているのでしょうか。それからもう一つの 質問は、オイラト、明の時代に「瓦剌」と呼ば れる民族についてですが、モンゴルの歴史上、 とくに元の時代に入り、中原に対する支配を終 えてから、オイラトが非常に重要な位置を占 め、モンゴル人の歴史を変えたと言っても過言 ではないと思われます。当時、オイラト人はイ ルハン国においてどのような地位を持っていた のでしょうか。ペルシア語の史料における記載

は多いのでしょうか。以上です。

――(**チョグト**)アルグンの家族について、ラ シード・ウッディーンの『集史』の記載により ますと、アルグンには8、9人の息子がいて、 娘も何人かいますが、そのうち2人の息子はチ ンギスカン一族の娘と結婚した。ニュウルスと いう人物は、アルグンに次ぐイルハン国政界の 大物で、政治集団まで作り上げた。モンゴル族 がイランに行ってイルハン国を作りましたが、 当時モンゴルの各部族の人が異なる政治勢力と なり、お互いに権力闘争を行いました。親ハー ン派もいれば、反ハーン派もいて、様々な形で 闘争してきました。その中でニュウルスという 人は非常に勢力が大きいです。イルハン国の歴 史上においてよく現れる人物の一人だと思いま す。ですから私から見れば、アルグン一族はイ ルハン国において非常に大きな勢力を持ってい ると考えます。後にチンギスカンの親族にもな りました。

そして、オイラト族のイルハン国における地 位について申し上げますと、恐らくそんなに影 響力のある人物がいなかったと考えられます。 関連史料は今のところ見つかっていません。こ れに関しまして、志茂先生は詳しく研究してき ましたけれども、やはりアルグン以外に、そこ まで影響力のある人物はないようです。以上で す。

発表論文 2



蒙古襲来絵詞を読みとく 一二つの奥書の検討を中心に

橋本 雄

北海道大学

要旨

鎌倉後期に起こった蒙古襲来(モンゴル戦争)に関する史料は、存外少ない。そのなかでも、その戦争に参加した肥後国(現・熊本県)御家人の竹崎季 長が描かせたという「蒙古襲来絵詞」(宮内庁蔵)は、両度の戦争を活写した 希有な歴史資料として知られる。つまり、モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻は非常に重要な意味をもつ。

だが、この作品が現在の状態になったのは、江戸時代の寛政年間(19世紀初頭)の修理・成巻による。そして、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理では少なからぬ補筆が施されたとおぼしい。普通なら一つだけの「奥書」(巻末の作成趣意書)が二つも存在するほか、料紙の種類も一貫していないなど、謎だらけの絵巻である。

したがって、本作品を歴史研究の俎上にのせるためには、まず周到な史料批 判が必要である。絵画作品とは言っても、本絵巻はもとより実景を描写したものではない。本作品の現状から、ナイーヴに歴史的事実を読み取ることも論外である。この絵巻を最大限活用するために、周到な史料批判が必要なゆえんである。すなわち、本絵巻の成立にまつわる作成者の意図や目論見、原状の想像的復元など、近年のモンゴル戦争研究や絵巻そのものの研究の成果を踏まえて 究明してみたい。

こうした作業により、モンゴル戦争の表象論への、汎アジア史的足がかりが 得られれば幸いである。

はじめに

鎌倉後期に起こった蒙古襲来(モンゴル戦争)に関する史料の蒐集は古くから 進められてきた。なかでも、この戦争に参加した、肥後国(現・熊本県)御家人 の竹崎季長が描かせたという、通称「蒙古襲来絵詞」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵) は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料・絵画史料として著名である。モンゴ ル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻がもっている意義は極めて大きなものが ある。これはもはや斯界の共通認識と言ってよい。ただし、絵画作品の常とし て、迫力ある本絵巻といえども、もとより実景を描写したものではない(粉本・ 型紙の利用は日常茶飯事である)。この点を弁え、構築主義的に本絵巻を読み解 いていく必要がある。

ところで、この絵巻が現在の状態(現状)になったのは、江戸時代の寛政年間 (19 世紀初頭) の修理・成巻による。また、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛 政の修理までの間に、少なからぬ補筆や改作が施されたことも確実である。その もっとも典型的な具体例が、著名な次の場面であろう(図1)。3人の蒙古兵に 立ち向かう、流血の馬上の竹崎季長。彼の頭上付近には「てつはう」(鉄炮;『金 史』に見える「震天雷」カ)が爆裂している。そして図の左方には、日本兵の矢 から逃げ惑う蒙古兵の姿が窺える。ひときわ印象的なこの蒙古兵3人が、紙の継 ぎ方の分析や赤外線写真により、絵巻原本作成時には存在せず、のちに加筆され たものだという事実が明らかとなった(佐藤鉄太郎氏・太田彩氏)。またしばし ば注目される「てつはう」自体も、描画の時期はともかくとして、後世の書き入 れであるという意見が出されている(佐藤鉄太郎氏)。「てつはう」描画の時期は 措くにせよ、この場面は、別のストーリー仕立てだったものを、竹崎季長の勇猛 さを印象づけるために料紙の順序を入れ替えて成ったものである。

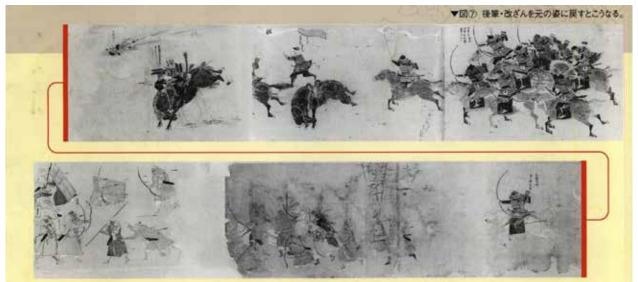
*最近、服部英雄氏は、3人の蒙古兵が本絵巻と同時期に描かれたものであ ると主張した。その筆致の巧みさは、工房の主が希代の歴史事件を渾身の力 で描いたためだとし、また紙継ぎ部分にわたって(多少遅れて、あるいは異 筆にて) 描かれたのは、通常、絵巻では紙一枚ごとに絵を描き、継いだあと に、紙をまたいで描くのが普通だからだ、とも述べている。しかし、卑見の みならず多くの論者が同じ意見だと思われるが、3人の蒙古兵の絵姿は、周 囲の蒙古兵と似ても似つかぬものである。異論もあるが、同一工房で描かれ た蓋然性は著しく低いと考えられる。また、絵巻は通常、ある枚数の紙を継 いでから、詞書きや絵画を描くものである(これは実際に絵巻物を実見すれ ば分かることである――ちなみに報告者は2017年5月、サントリー美術館 の『絵巻マニア列伝』展において、この点を中心に絵巻類を観覧したが、例 外なく、先に(ある程度の枚数の)紙を継いで文章や絵画を入れていること を確認した)。紙をまたぐから異筆の絵画が描かれても不自然ではないとい う論法は、簡単には成り立たないと考える。

図1の場面を、太田彩氏や村井章介氏の見解をもとに「復元」してみると、図

図1 (九州国立博物館 開館記念特別出陳 パンフレットより転載)

図2





(九州国立博物館 開館記念特別出陳パンフレットより転載)

2のようになる(「てつはう」については仮に残したが、制作当初には描かれていなかった可能性もある)。つまり、逃げ惑う蒙古兵たちを、竹崎季長とともに従軍した姉婿の三井資長——季長はむしろ資長の事実上の配下であったか(石井進説)——を筆頭に、馬や弓矢で追い込んでいく構図が本来の姿であった可能性が高いのである。

事ほどさように、本絵巻の現状から、歴史的事実を素朴に読み取ることは不適切・不可能である。また、本絵巻の物理的不自然さも枚挙に暇なく、ひとつずつ潰していかねばならない。先学によれば、料紙の種類やサイジング(滲みどめ)の有無なども一貫していない。詞書きや絵画表現のタッチの違いなどについても、数多くの指摘がある。要するに、本絵巻は、さまざまな謎を抱えた絵画史料

なのである。それゆえに、本絵巻に関する先行研究は輻輳を極めており、今後も なお、周到な史料批判を推し進めていく必要がある。それ抜きに、本絵巻を歴史 資料として十全に扱うことはできないだろう。

ただし本報告では、そうした画面上の絵画・書蹟分析から敢えて一線を画し、 また近年のモンゴル戦争研究の進展――とりわけモンゴル帝国史研究や鷹島(長 崎県松浦市)に沈んだモンゴル軍船に関する水中考古学の展開——については他 の報告や論著に譲り、本絵巻が現状に至るまでの前提条件を考えてみることとし たい。具体的には、本絵巻の全体的理解の鍵となる、「製書」に論点を絞って、そ の歴史的性格を見極める途を採りたいと思う。というのも、この「蒙古襲来絵詞 | には、普通なら一つだけしかないはずの「奥書」(巻末の作成趣意書)が二つも存 在し、それが必ずしも同一内容を語っていない、という謎を孕んでいるからであ る。本報告のタイトルに比して羊頭狗肉の感は強いが、まずは奥書A・Bの分析 に注力して、本報告の責めを塞ぎ、今後の研究の礎とすることを目指したい。

さて先述の通り、この絵巻を最大限活用するためには、さまざまなレヴェルの 史料批判が欠かせない。大前提として、発注者の意図や絵師の世界観に肉薄する まで、絵巻の現状にまとわりついたヴェイルを順次剝ぎ取る作業が不可欠であ る。しかし本報告でそのすべてを試みるのは不可能であって、上記の如く、問題 設定を限定した次第である。こうした作業の先に、「蒙古襲来」(モンゴル戦争) の実像・実態を逆照射する手がかりが得られるようになるであろうし、またモン ゴル戦争の表象論ともいうべき、イメージの世界の汎アジア史に広がっていくと すれば、望外の幸せである。

「蒙古襲来絵詞」を読み解くために

(1) 絵巻の概要説明

まず蒙古襲来絵詞について簡単に紹介しておく。本報告のタイトルには、わか りやすさも考慮して、便官的に通称「蒙古襲来絵詞」を掲げたが、本絵巻の主人 公にしてその活動を描いた、「竹崎季長の絵巻」、つまり「竹崎季長絵巻」と呼ぶ べきという意見も根強く、報告者は実際には後者に近い立場である。ただし、さ しあたり今は結論を留保しておきたい。

現在、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵される原本は、現状、上下(前後)2巻で構 成される。主人公にして発注主(作製依頼主)とおぼしき竹崎季長の家から流出 し、いずれの段階で熊本の大矢野家の所有に帰した。そして1825年(文政8)、 熊本藩主細川家に預けられ、江戸にもたらされて多くの武家の知るところとなっ た (例、松平定信の閲覧・摸写→「楽翁本」製作)。その後、近代に入り、1890 年 (明治23)、臨時全国宝物取調委員会の調査によって原本所有者大矢野家から 本絵巻が買い上げられ、宮内庁に収められた。現在、皇室の御物と言われるが、 実際には、現在は三の丸尚蔵館の所管品、という扱いである。

*なお、天草出身の大矢野家は文禄・慶長期に肥後南部の小西行長の与力となり、その後、西軍の小西家が関ケ原の戦いで滅びると、肥後一国を領することになった加藤家に所属(玉名郡下長田村に領地を安堵される)。加藤家改易後は細川家の家臣となり、玉名郡に拠点を有することとなった。

絵巻の法量は、おおよそ以下のとおり。前巻(上巻)がタテ40.3cm×ヨコ2450.6cm、後巻(下巻)がタテ40.2cm×ヨコ2111.8cm。順序等にはさまざまな見解があるが、通常、現状に即して、前巻に詞一から詞九まで、絵一から絵十まで、後巻に詞十から詞十六まで、絵十一から絵二十一までが配されていると考える。実に長大な絵巻物である。ただし、過去には3巻にまとめられたこともあり、また前後入れ替えや錯簡・刪除があったり、料紙の質や大きさがバラバラであったり、これは後段にて詳述するが、一部の詞書と絵とが別置されていた(大矢野家に秘匿されていた)ことがあるなど、作成時の状態を復原するのは極めて難しい。それゆえ、史料研究に関する蓄積も膨大である。たとえば、最低でも同様の絵巻が二本(正本・副本)作られたという説が唱えられており、それなりに有力と思われるが、果たして二本で済むのかどうか、三本説も唱えられており、今後も引き続き検討していかねばならない。

(2) 本絵巻研究の視角と課題

こうした絵巻物史料を理解するためには、絵(絵画部分)と詞(詞書き;文章部分)とから成る絵巻全体の細部はもちろん、通常、巻末に置かれる輿書(制作趣意書)を理解することが大切である。前者は絵巻の全体を通じて、細部にこだわる視点・方法であり、後者は、絵巻の全体を対象化して位置付ける、メタ的な視点につながる。絵巻研究は、前者と後者の緻密な検討と、両者の往復・接合とによって昇華されていくこと、贅言を要すまい。ただし、錯簡や改竄、補筆・加筆等の多い本絵巻に限って言えば、まず後者の全体的把握を優先させ、それにより、前者の細部の改変を解釈していく、という手順が重視されるべきと考える。それが、本絵巻が現状に至る過程を解明することにつながり、そのヴェイルを順次剝がしていくことで、制作当初の姿(原態)に近づいていけると判断するからである。

*とはいえ、細部の分析によって本来の絵巻の姿に近づくこと、あるいは絵巻の「実証性」を高める研究は着実に進んでおり、最近では、詞二の錯簡の分析を中心に、竹崎季長らの進軍の経路を解明した堀本一繁氏の研究などが際立っている。

さて、不思議なことに、本絵巻には奥書に当たる詞が二つ残されている(順番にA〔詞十五〕・B〔詞十六〕と便宜的に呼ぶ)。「永仁元年二月九日」(永仁元年 = 1293)という同じ日付ながら、それぞれ異なる筆致で、まったく異なる趣旨の内容が記される。

簡単にいえば、Aでは「〔安達〕泰盛の事」と書き出され、泰盛から「直に御 で文を給わり、御馬を給わる事、ただ季長一人ばかりなり」とあるように、御家 人竹崎季長が(海東郷地頭職を拝領するにあたり)鎌倉で世話になった安達泰盛 の鎭魂が謳われたと考えられている。

これに対してBでは、季長が帰依していたらしき甲佐社(大明神)に感謝し、 まさに海東郷地頭職に任じたことに報謝する内容が記される。具体的には、甲佐 の大明神がこの世に現われ、社壇の東の桜の枝に止った、この「東」とは関東 (「くわんとう」) のことであり、将来、地頭職を獲得する海東(「かいたう」) と 「同じ文字」なので――似ているすら思えないほど強引だが――、季長は関東へ の出訴を思いついた、そして実行に移して成功した、という筋書きである。

そしてもっとも興味深い事実は、この「永仁元年二月九日」という日付の表記 は当時存在せず、正しく書くとすれば「正応六年二月九日」とすべきだったとい う点であろう(荻野三七彦説)。永仁への改元は正応6年8月5日のことであり、 中国・朝鮮のごとき即位年(零年)の観念のなかった中世日本では、同年(1293 年)の8月5日までは正応年間、それ以後は永仁元年と記すのが普通である。つ まり、この「永仁元年二月九日」という書き方は、正応6年2月当時の人間には 知る由もない元号表記、つまり言うなれば「未来年号」なのであった。逆に言え ば、この目付の記載は、永仁改元以後のものと見るほかない。つまり、本絵巻そ のものが、文永・弘安の戦争時(1274・81年)を少なくとも十年以上くだる時 期に制作されたという事実を明示するわけである。それどころか、永仁元年をさ らに降ってしまう可能性すら否定できない。本絵巻の制作意図が見通せず、多く の研究者を悩ませることとなった所以である。

*こうした絵巻物には、ふつう奥書が添えられ、年月日も記載される。もし 「蒙古襲来絵詞」が正応6年当時に作成されたならば、「正応六年二月……」 と記されたであろう。当然、のちに改竄・改作を行なう人間は、この日付を なぞるのが自然と思われ、ゆえに本絵巻原本(宮内庁三の丸尚蔵館蔵本)の 原態が永仁元年以降のことだと推定できるわけである。

さて、近年、奥書A・Bともに絵巻そのものから切り離して理解すべきという 問題提起(宮次男説)が改めて強調された(服部英雄説)。服部氏曰く、Aにつ いて言えば、季長はその後、安達泰盛派と縁を切っていたと考えられ、だから岩 門合戦に参加しなかった、と説く。またBでは、絵巻そのものに熊野先達(熊野 神社系修験者・山伏)が登場するのに、阿蘇神社系の甲佐社(大明神)が出てく るのは如何にも後付けに過ぎないだろう(なお服部説に拠れば、肥後の熊野信 仰の拠点は玉名にあり、玉名周辺に位置する竹崎こそが季長の名字の地だとい う)、そもそも海東郷の地頭職を季長が得たということは絵巻の本体には一度も 出てこない、つまり絵巻と奥書Bとは対応しないのではないか、という問題提起 である。

ただし、Aの筆跡は、漢字にルビが振られるなどの特徴を持ち、書体・字姿を 見ても、のちに問題とする詞九――内容は詞二や詞七と相当程度重なり、とくに

詞九は漢字・仮名遣いの別があるも、詞七の冒頭部分とほぼ同一である——と同じ手(筆跡)と見てほぼ間違いない(宮次男氏・小松茂美氏・太田彩氏ら)。もちろんそこには季長が安達泰盛に訴え出る場面が記され、その恩顧が強調される論理展開である(ただし詞七と詞九との筆跡も異なるため、互いに別本に載っていたものと考えられる)。そうだとすれば、奥書Aを根拠に季長が反泰盛派の立場を取っていたという服部説は、現在の絵巻の全体構成から見れば首尾一貫していない、と言わざるを得ない。

*ちなみに、石井進氏は誤写混入と考えてか(小松茂美氏も別本からの混入に過ぎぬと見なす)、この詞九を『中世政治社会思想』(上巻)に収載しなかった。そのため、石井説では、詞十が「九」と番号付けされ、宮内庁本に依拠する詞書きの番号(通例・通説)と一つずつずれることとなった。つまり、奥書A(宮内庁本の詞十五)は石井翻刻では「一四」となり、奥書B(宮内庁本の詞十六)は石井説では「一五」と番付けされることとなった。この点、注意が必要である。

周知の通り、竹崎季長が恩顧に感じたであろう3名――安達泰盛・安達盛宗・小弐 (武藤) 景資――は、8代執権北条時宗・9代執権貞時の御内人筆頭の望頼綱の謀略により滅ぼされた(1285年(弘安8)、霜月騒動)。とくに泰盛派の小弐景質は、福岡県での岩門合戦(1284年(弘安7))において、当時家督を争っていた兄の小弐経資に滅ぼされてしまう(経資は必然的に反泰盛派の平禅門側につく)。この岩門合戦に際して、竹崎季長ら肥後の御家人勢がどのように動いたかは史料上不明であり、通説では、彼ら肥後勢は合戦に向かう余裕無く、泰盛派の小弐景資を助けることもできずに後悔を感じたのではいか、と推測する(川添昭二氏・石井進氏)。これに対して、服部英雄氏は、季長が当時すでに反泰盛派に転じていたので合戦に赴かなかったのだと判断したわけである。

だが、実際のところ、いずれの意見も、明確な実証的根拠があるわけではない。

2.「蒙古襲来絵詞」奥書 A・B の分析

(1) 奥書 A と詞七・詞二・絵二と—大矢野家の由緒論

そこで、本報告では、江戸時代の文政末期頃まで、原本の詞二と絵二とが大矢 野家に秘匿されていて、まったく知られていなかったという事実(堀本一繁説) に注目してみたい。

まず、詞二には、「白の大将〔その日の指揮官〕」たる小弐景資が登場する。景 資の面前を、絵詞の主人公たる竹崎季長が進み、先懸けを遂げたら鎌倉将軍に報 告してくれるよう、景資に依頼する(景資はこれに応諾)。これに対応する図様 が、下に掲げる絵二である(図3)。図版右側でどっかり座っているのが小弐景

資であり、詞二と対照すれば分かる通り、今は失われている本図の前半部分に、 おそらく竹崎季長が描かれていたのであろう (いずれの模本にも存在せず)。

問題は、いまや確認しえない、その季長の姿である。詞二によれば、先懸けを 急ぐ餘り、下馬の礼すら取らずに景資の面前を過ぎたことが記されている。おそ らく、絵二の欠失部分(図3の右方向)には、馬上の季長の姿が描かれていたこ とであろう。

図3を見れば容易に判断できる通り、そうした季長の非礼ぶりを意図的に隠匿 するために、絵二の前半部分が切り落とされたと見るのが自然である。そうでな ければ、竹崎季長の非礼な態度を説明する詞二が秘匿されたことの理由も見つか らない。武家の秩序や礼制の厳しい江戸時代にあっては、そうした非礼な場面を 持つ絵巻を後生大事にしていること自体、責めを受けるべき事柄だったのではな いか。

*とくに、下馬の礼を取らなかったことについては、武家の礼法に著しく抵 触した可能性、あるいは悪しき先例とされていた可能性がある。たとえば、 江戸時代の武家の教養書でもあった、鎌倉幕府の正史、『吾妻鏡』治承5年 (1181) 6月19日条には、頼朝配下の上総介広常が頼朝に対して下馬の礼を とらなかったことが問題となっている。「主君」頼朝への広常の反抗的な姿 勢は『吾妻鏡』の随処にあらわれ、おそらく広常を反逆者と見なすための 「伏線」が敷かれていたのだろう。この後、広常はいわゆる「東国独立論者」 として頼朝により粛正される (河内祥輔説)。なお、下馬の礼に関する日中 間の律令継受の問題については、大隅清陽氏の研究に詳しい。

このように考えるのは、詞二の内容と、詞七・詞九のそれとがほぼ被っている ――僅か5騎しか連れない竹崎季長が「日の大将」小弐景資に対して自分の先懸 けの意気込みをアピールする――にも拘わらず、後者の詞七・詞九には、季長が 下馬しなかったことへの言及が一切見られないからである。



(「蒙古襲来絵詞」前巻・絵二/太田彩『蒙古襲来絵詞』より転載)

図3

この点を推理するためにも、詞書きの書きぶりに注意してみよう。すると、詞 二は前欠ではなく、博多において、竹崎季長が「日の大将」小弐景資に先懸けの 企図を伝えることから始まっている。つまり、戦争の現場・当時の発言の記録で ある。

これに対して、詞七・詞九では、1275年(建治元)に季長が鎌倉についてから何とかしてようやく恩賞奉行安達泰盛の面前で庭中(訴訟)したときの台詞として書き起こされている。過去の出来事を振り返り主張する際に、くだんの「日の大将」云々のくだりが忠実に再現されたわけである。しかしながら、この訴えの文言のなかで、季長が小弐景資に下馬の礼を採らなかったことへの言及はまったくない。いくら先懸けのためとはいえ、上述の通り、本来なら武家として許されない行為だったからではないか。

繰り返しになるが、詞二およびこれに対応する絵二が大矢家にて秘匿されたことも、やはり無理からぬことと言うべきだろう。「先懸け」という行軍秩序を乱す「勇敢な季長」ではあったが――竹崎季長は小弐景資から博多息浜にて「一同に〔同時に・一斉に〕合戦すべし」と一度釘を刺されたにも拘わらず、手勢の少なさから「先懸け」で軍功を上げたいと申し出て許された経緯がある(詞二・詞七・詞九)――、上司たる「日の大将」景資に非礼な態度をとるほどの無礼者ではなかった、と筋書きを変えねばならなかった。そのために、上記の如き秘匿・删除が行なわれたのではないか。

*詞九(奥書Aと同筆)の料紙第43紙の右端には、松の枝が広見えるので明らかに前欠ではなく、また料紙を跨いで絵が描かれていたことが明瞭に窺える(大倉隆二氏・佐藤鉄太郎氏)。ただし、残念ながら詞九は後欠であり、全文が分からない。ただともかくも、この奥書Aと詞九との存在により、少なくとも二本の「蒙古襲来絵詞」が存在したことが確実になったと言えよう(奥書Aと詞九とを含むものが確実な「別本のひとつ」である)。

そして、くだんの奥書 A 一安達泰盛への謝意表明 一の問題に戻ると、この 詞九 一小弐景資に下馬の礼を採らなかったことを隠蔽 一と同筆ということが 決定的である。つまり、大矢野家は、竹崎季長を、一貫して安達泰盛 一小弐景資 ラインに位置づけようとしていたと思われる。というのも、それが自家の由緒作 成に有利に働いたからである。

第一に、大矢野家は自家の由緒を大宰大監〔じょう〕に求めており、これは大宰小弐〔すけ〕、つまり武藤家の次位・部下に当たる。要するに、近世の大矢野家は、自家と小弐氏(武藤家)との関係性の強さを強調(脚色・捏造)する必要があった。そのために、小弐景資に恩義を感ずる竹崎季長を、いわば媒介項として発見し、利用したのではないか。

また第二に、大矢野種保ら兄弟3人が1281年第二次戦争(弘安の役)の海戦で竹崎季長と行動をともにしていたかのように現状の絵巻では表現されていること(後巻・絵十六――「大矢野兄弟三人/種保」の語が明らかに後筆で書き込まれている)は、竹崎季長と大矢野家祖先とが戦場で生死を共にしたことを強調す

るためだろう。その季長は、弘安の役を扱う後巻では、安達盛宗(泰盛次男、肥 後守護代)軍との密な関係を描かれていることも付け加えておきたい。

*ただし、なぜ家督を相続し、岩門合戦で勝利した小弐経資の側に、大矢野 家は肩入れしようとしなかったのか、考える余地はあるだろう。それはおそ らく、これまでの研究史が明らかにしてきたように、岩門合戦後に筑後・豊 前・肥前・肥後の守護が北条得宗家一門に奪われてみすみす漁夫の利を取ら れてしまった経資の失態ぶり、加えて、のちの平禅門の乱(1293(正応6= 永仁元)) を経た翌年には旧泰盛派の復権が叶ったという事実が大きいだろ う。また、源平交替史観の強い江戸時代からすれば、平氏=北条家の支配に あらがった菊地氏・大友氏・小弐氏は英雄的存在であり、そこに自家が密接 につながるという「歴史」こそが重要である。大矢野家にとって、小弐氏や 菊池氏との密な関係が描かれた「竹崎季長絵巻」が有用視されたのも当然、 と言えよう。

これまた繰り返しとなってしまうが、最終的に細川藩(肥後・熊本)の藩士と なった大矢野家にとって、肥後の御家人であった竹崎季長と生死をともにしたこ と――もちろん上記の通り実話とは考えがたい――は、肥後に生きる際の正統性 を担保しえたと思われる。さすれば、大矢野家より先に本絵巻を有していたとい う名和顕興が甲佐社の神庫から本絵巻を横領した――あるいは大矢野家の人間が 押領した可能性も否定できまい――という説(桜井清香氏)も、まったくの空論 として捨て去ることはできないだろう。

(2) 奥書 B と竹崎季長置文—鎌倉後期九州の徳政状況

それでは、奥書Aや詞九は、江戸時代の偽作および別本からの混入であって、 その張本人は大矢野家、ということになるのであろうか。その可能性は高いと考 えられるが、いま一つ、奥書Bにも若干不自然な点があるので、それを確認して おこう。

竹崎季長自身が残した関係文書が、塔福寺文書等に残っている。なかでも著名 なのが、彼が知行地として安達泰盛・盛宗に認められた海東郷の所職(権益)の 一部が、氏寺の塔福寺や海頭郷神社(海東社)などに寄進されたことを示す「竹 崎季長置文」(遺言書兼寄進状)である(1293年(正応6)原作[第1版]、1314 年(正和3) 自筆改稿版〔第2版〕;『中世政治社会思想』(上巻) にも掲出)。と ころが、寄進された先の地名・社名の表記方法を見ると、違和感を覚えざるを得 ない。というのも、塔福寺文書等を見ると、すべて海頭郷神社と記され、絵巻の 奥書Bに見えた海東郷という表記がまったく見られないのである。本人の名前の 表記がともすれば変化するという中世において、これは些細な違いと思われるか もしれないが、もし夢想の神託により関東(鎌倉幕府・恩賞方)へ行き、海東郷 地頭職を給わったことを記念して本絵巻を作成した (奥書B)、というのであれ

47

ば、季長自身は海東の表記に終生こだわったはずではないか。要するに、「海頭」 (塔福寺文書)を「海東」(「絵巻」奥書B)と表記してしまうこと自体、後者(奥書B)が季長の意志と懸け離れている可能性を示唆する。

*奥書Bの最後には、「甲佐大明神の神徳を明らかにするため、これ〔蒙古襲来絵詞のこと――石井進説〕を記した」とある。ただし、現存する絵巻の詞書きや画面等では、甲佐大明神への竹崎季長の報謝の念を感じさせる場面がないことにも、石井進氏は注意を促す(しかしさほど配慮している形跡もないのだが)。なお、海東郷は甲佐社(肥後二の宮)の神領であり、ここで季長が所領を寄進した海東社(現・海東阿蘇神社)とは、海東郷におそらくは甲佐社(阿蘇末社)を介して勧請された阿蘇末社の一つであろう(いつ勧請されたかは分からないが、もし、季長が甲佐社の神徳に感じて勧請したのなら、季長が海東郷に入部した1276年(建治2)正月6日以後のことと思われる)。また塔福寺はこの海東神社の近くにあり、新しく建立した神宮寺(1293年(正応6=永仁元)ころ建立カ)に塔福寺僧を入れるなど、竹崎家の海東社・海東郷支配を強化する手段であったと見られる。

そして、奥書A・Bともに「永仁元年二月九日」と記した1293年は、上述の通り、8月まで「正応6年」であった。ところが、上記「竹崎季長置文」(塔福寺文書〔第2版〕・秋岡家文書〔第1版〕)の日付は「正応六年正月廿三日」の如く、正確な元号で表記されている。これがもっとも不審な点である。つまり、「置文」が同時代史料であるのに対して、奥書A・Bは、ともに後世の作だとしか考えられない。

総合的に見ると、先述の奥書 A 近世初頭に大矢野家が書き添えたか に どではないにせよ、この奥書 B も、やはり不自然さが拭い切れない。とはいえ、 同時代の政治・経済・宗教情勢に鑑みると、江戸時代の作とまで見なす必然性は 乏しいように思う。すなわち、竹崎家による海東郷の政治的・宗教的支配を強化 する動きが1276年(季長の海東郷入部)から1293年(海東社に神宮寺を建立、 また自身の所領を寄進)までの間に徐々に展開された。そして、その支配を実質 的に保全するものにするために、海東阿蘇社・新設神宮寺への寄進が取り決めら れたという見方である。

というのも、1293年(正応6・永仁元)4月、平禅門の乱が起こって旧安達泰盛派が復権した。安達泰盛はいわゆる「弘安徳政」(1284年(弘安7)6月)を主導し、別相伝所領(公家や武家の所有に帰した元の神領)を否定して本来の神領に戻す(神領興行)という、急進的な施策を採っていた(井上聡氏)。実際には、別相伝を否定する徳政政策はその後現われなかったのであるが、その後の1297年(永仁5)「永仁徳政令」や1312年(正和元)「正和の徳政令(神領興行法)」を見ても、神用を弁じない地頭御家人や下司名主の排除は共通しており一一前者が無力な公家によって消化不良に終わったのに対して、後者は武家により御家人の保護方針を打ち捨ててまで先鋭化した(村井章介説)——、御家人竹崎氏としてもこうした政策に危機感を覚えたはずである。しかも、旧泰盛派の復権

や北条貞時の専制方針---1293年 (永仁元)、裁判の最終的判断が得宗北条貞時 に集中する「執奏」制度を設け、翌年(1294)には貞時の裁定を覆そうとする 。。。。。 越訴(再請要請)は一切受け付けなくした――や伏覚天皇の親政志向――記録所 庭中を整備し、雑訴(土地・所領関係の裁判)を月6度も開催する決まりを作っ た――が徐々に明らかになるにつれ、竹崎氏としても何らかの対応を余儀なくさ れたことだろう。最悪の場合、ほんらい甲佐社(肥後二の宮、阿蘇末社)の神領 であった海東郷を否定され、所領・地頭職を甲佐社に回収されてしまう虞すら あっただろう。

そこで竹崎季長の採った策が、所領の一部を膝下の海東社(阿蘇末社)に寄進 したり、神宮寺を設けたり、仏物・神物を堅持する「置文」を作る、という方策 だったのではなかろうか。また、本主の甲佐社に対しては、こうした施策を正当 化するべく、自家(竹崎家)と甲佐社との強い由緒を語る必要もあっただろう。 そうした「深い因縁 | を語るために奥書Bが作成された――、という可能性はな いだろうか。

*こうした内政的動向と密接に絡み合った、対外的脅威の強まりがこの時期 に存在したことにも注意が必要である(川添昭二氏)。1292年(正応5・至 元29) 7月には元の義文権の書が鎌倉に到達し(『鎌倉年代記』)、同年には 都合3度目の高麗国書――元朝文書を仲介――が金有声らによって、10月、 大宰府にもたらされている(『金沢文庫古文書』・『高麗史』等)。 ��蘿(済州 島)に漂着した日本人商人を送還すると同時に、中間に立った高麗の金有声 によって国書の表現は柔和に改められたが、みたび、日本の元朝への帰順を 促す内容であった(植松正氏)。こうした元―高麗側の動きを承け、日本側 は対外的緊張を強いられ、同月には諸国国分寺・一宮等に異国降伏を祈ら せている(「東寺百合文書」)。11月にはのちの鎮西探題となる、国防指揮官 (大将)の選定にも取りかかっている(『親玄僧正日記』)。鎮西探題は、翌年 3月に北条兼時・時家を任命して発足するほか(村井章介説)、4月には前述 の通り平禅門の乱が起こって旧泰盛派が復権、6月には伏見天皇が親政を開 始した。

確かに、1293年(正応6)[第1版]~1314年(正和3)[第2版]の竹崎季長 置文(塔福寺文書等)に「海頭(御社)」とあるのに、奥書Bに「海東」と記さ れるのは、やはり不自然である。だが、その趣旨に照らして、両者がまったく無 関係なものと見るのも難しいと考える。「正和の徳政令」が出されたのは正和元 年(1312) 九月以前であり(村井章介説)、塔福寺文書の竹崎季長奥書〔第2版〕 はそれへの対応としておそらく改稿された。奥書Bは、この後、何らかの事情で 海東郷地頭職が不安定になったときなどに、「海頭」と「海東」との違いにあま り頓着しない、季長の子孫などによって作文されたのではないか。むしろ、鎮 西 (九州)を代表する字佐神宮 (八幡宮) の式年遷宮 (1289年(正応2)) が遅 れ、完了するも僅か2年で弥勒寺とともに焼亡した事件(1309年(延慶2))や、 これと前後する九州の筥崎宮・香椎宮の焼亡、後深草上皇・亀山上皇・後二条天

皇の死歿、鎌倉大地震、疫病の流行、慶元での日本商人騒擾事件(榎本渉氏)、得宗貞時の死去など、社会不安が相次ぎ、徳政の機運が高まっていたことに留意したい。実際、それゆえに1312年、「正和の徳政令」が発せられたのである。そして同法令は、「権力が上から強行的に一円領〔神領〕を創出しようとした法令」であったために、巨大な影響力を持ち得た(村井説)。仮に、御家人竹崎家の海頭郷地頭職の「正統性」と、神威とを幕府・探題や阿蘇社に向けて強調するとすれば、奥書Bの内容は実に効果的だったと言えよう。

繰り返しになるが、そうした情勢のなかで竹崎家が自領保全を図る手段の一つが、自身と甲佐社・海東郷とのつながりをアピールする竹崎季長置文であり、また奥書Bの作文だったのではないか。そしてこうした内容の文面の奥書Bを付した上で、「蒙古襲来絵詞」の一本が、甲佐社に寄進されたとみるのが自然であろう。

もし、以上の如き推論が多少とも的を射ているとすれば、奥書Bは、正和年間を若干下る時期に記された蓋然性が高いと考える。ただし、奥書Bの作文と、蒙古襲来絵詞の海東社への奉納とが、同一時点のことであったかも分からない。今後の課題としたい。

おわりに

羊頭狗肉の感は免れないが、以上の議論を、補足も含めてまとめておく。

まず「絵巻」奥書Aについて。――おそらく、大矢野家にとって都合の良い 奥書Aは、近世になって、肥後・熊本藩士として生きることになった大矢野家 が作成(捏造)したものではなかろうか。肥後菊池氏の存在が絵巻のなかで強調 されていたことは元々のものと見受けられるが、本絵巻冒頭に記された「豊後国 守護大友/兵庫守頼泰之手/軍兵」の画中註は、詞書きにも対応するものがな く、不審である。小弐・菊池・大友の鎮西三大勢力との関係、とくに菊池・大友 は阿蘇との関係(?)をアピールするための加筆なのではなかろうか。大友氏が 阿蘇社内部に明瞭に関わるようになるのは16世紀・戦国期のことであり、これ も画中註記が鎌倉・南北朝期よりも大幅に遅れる可能性を示唆しよう。

次に奥書Bについて。――竹崎季長の海東郷支配と直接・間接に関係する奥書Bは、弘安・永仁・正和の徳政状況が九州内で影響力を保つなかで、季長の子孫が自領の保全のため――つまり別相伝否定や地頭御家人排除を趣旨とする徳政令が出た場合、それに対抗するため――、甲佐社との縁の深さを強調するべく起草したものであったと推察される。

なお、宮次男氏や服部英雄氏が結論するように、本来、奥書 A・Bと絵巻本体とは別物であったと見ることは、ある程度正しいだろう。しかし、石井進氏の論の如く、まったく絵詞と無関係であったと断ずるのも難しい。別言すれば、絵巻の現状を理解するためには、奥書 A・Bの趣意をこそまず追究すべきなのであって、基本的には、奥書 A・B それぞれに整合するように絵巻は改編されてきたと見るべきと思う。だから、絵巻と奥書とは、決して「無関係」の一言で片付ける

べきではない。一気に「蒙古襲来絵詞」原態に辿り着くことが極めて困難である 以上は、こうした段取りを踏んで徐々に考察を進めていくほかないと思う。

また、石井説の如く、竹崎季長が安達泰盛・小弐景資らを追慕するために「蒙 古襲来絵詞」を制作したという可能性は、まだ払拭され切ったわけではない。本 報告が論じたのは、後筆と見られる奥書A・Bの歴史的性格に過ぎないのであっ て、いまは分からない「蒙古襲来絵詞」原態・原本制作時の竹崎季長の思惑は、 依然としてヴェイルの彼方にあるからである。

今後、この「蒙古襲来絵詞」をさらに踏み込んで分析するためには、上記の 如き奥書A(近世初頭?)や奥書B(正和年間以降?)の歴史的特徴を踏まえつ つ、その都度行なわれたであろう改作・加筆等を析出していくことが求められよ う。もちろん、奥書A・Bそれぞれのシェーマにそぐわない加筆や改竄、刪除等 が存在する可能性も当然あるだろう。また逆に、「絵巻」現状そのものの分析か ら、奥書AやBに対する本論の評価を改めていかねばならぬ場合も生ずるだろ う。今後、報告者も微力を尽くし、引き続き、本「絵巻」の絵解きに挑戦してい くことを誓いたい。

主な引用・参考文献

石井 進1972「竹崎季長絵詞」(詞書き翻刻・解説)『中世政治社会思想』(上)岩波書店 ※ 新装版1994

―1991『中世史を考える――社会論・史料論・都市論』校倉書房

---2000 『鎌倉びとの声を聞く』 NHK 出版 (日本放送出版協会)

井上 聡2013「神領興行法再考」『東京大学日本史学研究室紀要別冊 中世政治社会論叢』同 研究室

植松 正2015「第二次日本遠征後の元・麗・日關系外交文書について」『東方学報』

榎本 渉2007『東アジア海域と日中交流:九~一四世紀』吉川弘文館

大倉隆二2007『「蒙古襲来絵詞」を読む』海鳥社

大隅清陽2011『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館

太田 彩2000『絵巻=蒙古襲来絵詞』(日本の美術414) 至文堂

荻野三七彦1932「蒙古襲来に就ての疑と其解釈」『歴史地理』59巻2号

川添昭二1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版

工藤敬一1974「竹崎季長おぼえがき」『日本歴史』317号

河内祥輔2013『頼朝がひらいた中世――鎌倉幕府はこうして誕生した』(ちくま学芸文庫) 筑

小松茂美1988『蒙古襲来絵詞』(日本の絵巻13) 中央公論社 ※ 再版1990

佐伯弘次2016「蒙古襲来以後の日本の対高麗関係」『史淵』153輯

桜井清香1967『元寇と季長絵詞』徳川美術館

佐藤鉄太郎2005『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』錦正社

------2016「元寇の実相:服部英雄著『蒙古襲来』の実証的批判」『軍事史学』52巻2号中村一紀1975「蒙古襲来絵詞について」『熊本県文化財調査報告書(17)竹崎城』熊本県教育委員会

服部英雄2014『蒙古襲来』山川出版社

宮 次男1964「蒙古襲来絵詞について」『日本絵巻物全集 (9) 平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞』 角川書店

村井章介1988『アジアのなかの中世日本』校倉書房

-----2001『北条時宗と蒙古襲来:時代・世界・個人を読む』(NHKブックス)日本放送 出版協会

-----2006『中世の国家と在地社会』校倉書房

堀本一繁1998「「蒙古襲来絵詞」の現状成立過程について」『福岡市博物館研究紀要』8号

-----2012「『蒙古襲来絵詞』の復原にみる竹崎季長の移動経路」『交通史研究』78号

指定討論

「蒙古襲来絵詞を読みとく―二つの奥書の検討を中心に」を 受けて

「質問者/李 命美、回答者/橋本 雄]

――(李) 絵画に対する分析だったのでとても 興味深く拝読しました。ただ、日本内部の政治 状況など、私がよく知らない部分が多くて、正 確に理解したのかどうかはわかりませんが、蒙 古襲来というのが、当時そしてそれ以降の日本 人たちによってどんな風に消費されているのか を示す内容として興味深く拝読いたしました。 まるで推理小説を読むような感じでもありまし た。そこで、私のよくわからない部分、よく理 解できなかった部分について簡単にご質問させ ていただきます。

まず、これはある意味答えのない質問かもし れませんが、全体的にこんな奥書とか、絵画の 修正や削除が行われたのにはどんな政治的目的 があったのでしょうか。もちろんこんな目的で と、お話された部分で十分把握でき、共感もで きるのですが、しかし、奥書の筆跡に違いがあ りすぎますし、先ほどおっしゃったように紙の 質にもかなり違いがみられ、絵の修正もかなり 目立ってしまっています。もし、何か政治的目 的をもって加筆したならできるだけ違いが判ら ないようにするべきで、最初からこうですよと いう感じで表現するのが重要だと思うのです が、なぜこんなに目立つように、違いがはっき りわかるようにしたのでしょうか。技術がな かったからでしょうか、または他の認識の違い の問題なのでしょうか。そこが知りたいです。

もう一つは、奥書Bつまり詞十六です。この 部分はいわゆる塔福寺文書との比較を通じて、

これはたぶん竹崎季長自身かその子孫が作った もので、政治的な目的をもっているものだとい う解釈もとても興味深かったのですが、最後の 部分でそれにも拘わらず塔福寺文書で見られる 漢字表記と奥書Bの漢字表記と海東郷の表記と の違いは、アピールする対象の違い、または季 長の政治姿勢が表す方法の違いだとお話されま したが、その部分をもう少し詳細にご説明くだ さい。

もう一つは奥書Aと関連しての質問です。 季長が小弐景資にまず先懸けで攻撃したいと建 議をする際に、馬から降りる「下馬の礼」すら 取らなかったという事実が記録された絵二、ま た詞二が大矢野家によって隠されていて、そこ から解釈が始まるようで相当面白い部分ではあ りますが、ある意味ここにある「下馬しなかっ た」という記録が、その後ここに見られる奥書 Aとか、または詞七、詞九にはそんなことが記 録されてなかった。何か意図的な削除ではない かという部分と関連して、知りたいと思ったの は、江戸時代の武家の礼と鎌倉幕府の武家の礼 が日本の社会では若干違いがあるのではないか という疑問です。鎌倉時代もやはり武家の礼が あったと思えるのですが、その時期に描かれた 絵画には馬から降りてない姿が描かれていたと いうのは、先ほどおっしゃったように当時のあ る切迫した状況を表現するための他のアピール かもしれないと思うのです。だとすればその後 詞七、詞九でそのような内容が載せられてない

のは、事後に何か回想する場面であったためとか、別にそんな内容を入れなくてもいいから入れてないのではないかという感じもしました。それと関連して、私はよくわかりませんが、大矢野家に隠されていた詞二と絵二が発見された、つまり外部にオープンされた経緯と関連して、記録や関連内容があるのかについてもお聞きしたいです。以上です。

一(橋本) 1点目のご質問ですが、要するに 筆跡とか紙の違いがあまりにも明瞭なのは、か えって不自然ではないか、ということですよ ね。バレないようにするのが普通であると。私 もそうあるべきだと思います。ただ、絵巻を作 るというのはものすごくお金も手間もかかりま す。例えば全部作り直して、新しいコピーを作 ればきれいなのができるわけですが、それはで きないし、やらない。それはなぜでしょうか。

この絵巻物は2本とか3本、内容が同じか、 関連性の極めて強いものが作られていますが、 それがいったんバラバラになって、寄せ集めら れたときに、実は時代によって順番が違うんで す。写本はいっぱい残っています、少なくと も40本以上。その書写の時期によって順番が 違うので、その時々の保存されていた様子がわ かるんですね。ですから元のものを活かすとい うのでいくと、ぐちゃぐちゃで複雑なんですけ れども、組み合わせて作ったほうが、かえって 古めかしいというかお金もかからないし、とい うことになります。ちなみに今の現状、今の姿というのは江戸時代の末期に作られていますから、竹崎季長とか全く知らないところで行われています。ですから、古いものを大切にしようという意識で作られたと思います。

二番目のご質問は、まだ私もよくわかりません「東」と「頭」という漢字の違いですけれども、たぶん現地では「頭」の字をよく使っていたのではないでしょうか。現地に即した、現地の人向けの表現であったと考えております。

それから三番目のご質問の「下馬の礼」をと らなかった件に関して、緊迫感を強める一種の レトリックではないかという話だと思います が、それはとても面白いですね。ただ、やっぱ り怒られているんですよ。馬を降りないのか と。それと、抜けがけ・先駆けは許さないぞと も。一番乗りしてはだめだ、軍隊は皆一斉に進 軍するんだと、だからやめろと言われるんです が、けれどそれを振り切って彼は行くんです ね。だから、かなり彼はルールを破っている。 ですから、あとのほうで鎌倉の偉い人に会うと きには、やはり敢えてその部分を隠して報告し たという可能性もあるかなと思っています。ま た、江戸末期まで隠されていたこの詞二と絵二 とがオモテに出てきたことに関する史料はな く、詳細は不明です。以上です。

発表論文 🗸



モンゴル帝国時代の モンゴル人の命名習慣に関する 一考察

エルデニバートル/额尔敦巴特尔 内蒙古大学

[原文は中国語、翻訳:宋剛(北京外国語大学)]

チンギス・ハーン及びその子孫による大規模な対外征服戦争中、漢、女 真、西夏、高麗、欽察(キプチャク)、阿速(アスト)、斡鲁思(オロス)な どの諸民族および国の人々はモンゴル地域へ移民された。14世紀に元朝が 滅亡した後、モンゴル高原にいたこれらの複雑な背景をもつ人々はモンゴル 人として融合してゆく。モンゴル帝国時代のモンゴル人は他の国、民族、部 落及び地域の名を自分の子供に名付ける習慣があった。例えば、撒里答(サ ルタグ)、鎖郎哈(ソランガ)、唐兀歹(タングダイ)、忻都(インド)、嚢加 台(ナンギヤタイ)、蛮子台(マンジタイ)、合失(カシ)、阿速台(アスタ イ)、欽察、斡羅思(オロス)、馬札儿(マジャール)、阿魯渾(アルグン)、 術赤台(ジュルチディ)等。このような名付け習慣はモンゴル人の他民族・ 国家と交流やコミュニケーションを持っていたことを物語っている。元朝が 滅亡した後、モンゴルに融合していたこれらの民族・国の名称もモンゴル部 落の苗字として定着した。17世紀のモンゴル史料には粛良合(ソランガ)、 撒児塔兀 (サルトール)、勒哈刺沁 (ハラチン)、阿速等 (アソード) 等の名 称が多数現れるのである。

はじめに

モンゴル帝国の時代に、モンゴル人は征服した部落及び地域の名を自分の子供 に名付ける習慣があった。清の時代の著名な考証学者銭大昕¹は早くもこの現象 に気づいた。周知の通り、モンゴル部族長のイェスゲイの息子のテムジンという

54

¹ 銭大キン、『十駕斎養新録』、江蘇古籍出版社、2000年、第200-201ページ。

55

名は、まさに征服した部落タタル部族長の名、テムジン・ウゲにちなんだものだという。『元朝秘史』に記載される内容は当時のモンゴルの社会生活をそのまま反映している。『元朝秘史』、『元史』、『集史』などの史書を参照すれば、その現象が普遍的であることに気付くだろう。例えば、サルタグ(回回²)、ソランガ(高麗)、タングダイ(西夏人)、ヒンドゥー(インド人)、ナンギャタイ(南宋人)、マンジタイ(南宋人)、カシ(河西人)、アスタイ、キプチャク、オロス、マジャール、アルグン、ジュルチェデイ(女真人)などがそれである。

氏族名というのは、社会の産物であり、特定な歴史段階における文化や心理を表すと同時に、民族・部族間関係や文化交流も反映している³。モンゴル人の「部族の名を人に名付ける」という命名習慣に関する考察を通じて、モンゴル人と異民族人との接触や交流の歴史のみならず、多くの異民族人がモンゴル化された現象も明らかにすることができる。

紙幅に限りがあるため、本論考では、モンゴルと上述した国・民族・部族との 関係、及び史料に記載される異民族、或いは部族に因んで名付けられたモンゴル 人だけを事例として取り上げ、その現象について簡単に整理する。

1. キタイ (Khitai)、ジュルチェデイ (Jürcidei)、ジャウト (Jaqut)

キタイという言葉は、契丹(キタン)という民族の名に由来する。金朝・元朝 の時代において、モンゴル人のうち、キタト(Khitat、契丹の複数形)と称され た民族は、「漢児」(漢人) という意味合いを含み、契丹人、女真人、秦嶺・淮河 より北の地域の漢人を指す。『元朝秘史』第251節には、モンゴル語の音訳で、 「乞塔 $^{\text{lg}}$ (キタト/漢人たち) 亦 $_{\text{ff}}$ 兒格訥 (イルゲヌ/民の) 阿 $_{\text{lg}}$ 忽台 (アクタイ /アクタイなる)阿勒壇(アルタン/金の)合阿納(カァニ/皇帝に)」と書か れている。傍訳には「契丹 百姓的 金主名 金 皇帝行」と解釈されている。 キタト (Khitat) と類似な意味を持つもう一つの言葉はジャウト (Jagut) であ る。『元朝秘史』第134節によれば、タタル部族長のメグジン・セウルトゥが、 チンギス・カンとトオリル・カン(オン・カン)に殺された後、それを聞いた王 京丞相は大いに喜び、チンギス・カンに「ジャウト・クリ」という称号を与え たという。『元朝秘史』第134節に、「札中忽場亦去兒堅」という文があり、傍訳に は「金人毎 百姓」(金人たちなる民)と解釈される。元の時代には「漢児」或 は「漢人」と訳され、金朝の支配下に置かれていた各民族を指す4。 モンゴル人は 女真のことをジュルチン(Jürčen)と呼び、『元朝秘史』には何度も現れる。例 えば第247節には、モンゴル語の音写で「主義兒扯敦」と記されてあり、「女真の」 と解釈されている。

² 回回民族の略称である。また、回族とも呼ばれる。

³ 納日碧力戈、『姓名論』、社会科学文献出版社、2002年、第83ページ。

⁴ 蔡美彪、『糺与糺軍之演変』、『遼金元史考索』、中華書局、2012年、第232-242ページ。

『元史』の記載によると、元の時代において、「乞台」、「乞塔歹」、「乞答解」、 「乞
嗣」、「乞台不花」、「乞塔台」という名前の付いたモンゴル人が多くいた。例 えば、以下のような例がある。

『元史』巻三、憲宗本紀:「(七年九月)、駙馬ラチンの息子であるキタイ(乞 解)をダルガチに任命し、オロスを鎮守させた⁵」

『元史』巻一百一十七、帖木儿不花 (テムル・ブカ) 伝: 「至正十二年、廬州 境内に賊軍が現れ、…それぞれで廬州を平定せよと本部の兵士及び諸王のキ タイダイ (乞塔万) に命じた6

『元史』巻一百二十一、畏答児(クイルダル)伝:「モンケが死去する。孫は リワダイとキタイダイ(**乞答**解)の二人だけである⁷|

チンギス・カンの建国の功臣である兀魯兀部(ウルウト部)のジュルチダイ (主儿扯歹・ジュルチェチ、術儿徹丹・ジュルテタン、術徹台・ジュルテタイと も転写される)は最初にジャムカに帰順し、それから軍隊を率いてチンギス・カ ンに帰順した。モンゴルの軍隊とケレイト族はハランジンサタで戦った。ウルウ ト部とマングト部が先頭に立ち、オン・カンの子イルカを矢で撃った。モンゴル の建国当時、ジュルチダイは左翼ウルウト部四千戸の長に任命され、チンギス・ カンはケレイト族長オン・カンの弟ジャア・ガンボの娘イバガ・ベキを彼に賜っ た8。

『元史』巻一百二十、術赤台(ジュルチダイ)伝:「ジュルチダイはウルウダ イ氏である」

ラシードゥッディーンによれば、チンギス・カンにはナイマン部の妃が生んだ 息子がいて、その名はジュルチダイ(術儿赤台)であるという9。

『元史』巻一百一十八、孛禿 (ボト) 伝: 「太祖はジュルチダン (術兒徹丹) をエルグネ河まで密かに派遣した 10 |

『元史』巻一百二十一、畏答児(クイルダル)伝:「太祖はケレイト部のオ ン・カンとハラチンにて対陣したが、多勢に無勢であった。帝はウルウト軍 に先陣をきるように命じたが、将軍のジュルチダイ(術徹台)は馬を止め て、命令に応じなかった¹¹」

『元史』巻一百二十八、土土哈(トトカ)伝: 「十五年、シリギを金山の外に

^{5 『}元史』巻三、憲宗本紀、第50ページ。原文: (七年九月) 以驸马剌真之子乞斛达鲁花赤, 镇守斡罗思。

^{6 『}元史』巻一百一十七、テムルブカ伝、第2912ページ。原文:至正十二年, 庐州境内贼起, …… 命以所部 兵及诸王乞塔歹等分道击贼。

^{7 『}元史』巻一百二十一、クイルダル伝、第2988ページ。原文: 忙哥卒, 孙只里瓦斛、乞答斛。

^{8 『}元朝秘史』第208節。

^{9 『}集史』第一巻第二分冊、第91ページ。

^{10 『}元史』巻一百一十八、孛禿伝、第2921ページ。原文:太祖尝潜遣术儿徹丹出使,至也儿古纳河。

^{11 『}元史』巻一百二十一、クイルダル伝、第2986ページ。原文:太祖与克烈王罕对阵于哈剌真, 师少不 敌。帝命兀鲁一军先发, 其将术徹台, 横鞭马鬃不应。

57

追放し、ジャウダイ(扎忽台)等を虜にした12」

『元史』巻一百三十五、忽都伝:「クト……太宗時代に至るまで、鎮西行省を務め、モンゴル軍、漢軍を率いて河中府、潼関、河南を攻め、バイジス、ジャウダイ(扎忽歹)、アルスランとともに秦鞏や仁和の諸堡を攻めた。またバイジスと京兆を鎮守した。…クトの子はジャウダイ(扎忽歹)である 13」

2. タングド (tan y ud)、カシン (Qašin)

唐兀(タング)はモンゴル語における党項の漢字音写である。タングート人及び彼らによって建立された西夏国のことでもある。「合申」(カシン)という言葉は「河西」の発音が変化した結果であり、当時のモンゴル人は西夏のことをこのように呼んでいた 14 。チンギス・カンが建国した後、西夏は初の征伐する対象となった。1205年、1207年、1209年の三度侵入し、モンゴルに臣属し貢物を捧げるよう屈服させた。『元朝秘史』の第249節によれば、「チンギス・カンはそこから出発しカシの人々を征服した」とある。1226年、チンギス・カンは再び西夏へ遠征した。翌年、西夏はモンゴルに滅ぼされた。

オゴデイ・カーンの第五子の名前はカシである。ラシードゥッディーンによれば、「彼はチンギス・カンがタングートと呼ばれる河西地域を征服した時生まれたから、カシという名前を付けた。しかし、彼はお酒が好きで、いつも酔っていた。そういう乱暴な飲み方のせいで、オゴデイ・カーンは彼に先立たれてしまった。彼が死んだ後、カシ(即ち、河西という名前)は禁じられた。これ以来、其の地域はタングートと呼ばれるようになった¹⁵」。カシの息子はカイドゥである。

3. ソランガ (Solangga)

ソランガはモンゴル人の高麗人に対する呼び方として、最初は漢字による音写の「莎郎合思」(Solangqas、言葉 Solangqa の複数形)と『元朝秘史』の第274節に現れ、「高麗」と傍訳されている 16 。

元王朝の後期の高麗人奇氏オルジェイ・クトゥクは元順帝トゴン・テムルの皇后である。至元六年(1340)に、皇子アユルシリダラを生んだ。こうして、モンゴルの皇族にも高麗人の血統が混じった。待望の皇子アユルシリダラを生んだから、奇氏は皇子の生母として次皇后になった。至正十三年(1353)アユルシリダラは皇太子に冊立された。二十五年(1365)、奇氏は正皇后に昇格し、摂太

^{12 『}元史』巻一百二十八、トゥトゥカ伝、第3132ページ。原文:十五年,追失烈吉逾金山,擒扎忽台等以献。

^{13 『}元史』巻一百三十五、忽都伝、第3278ページ。原文: 忽都……至太宗时为镇西行省, 领蒙古、汉 军从攻河中、潼关、河南, 与拜只思、扎忽歹、阿思兰攻秦鞏及诸堡, 又与拜只 思守京兆。……忽都子扎忽歹。

^{14 『}中国歴史大辞典』、第414ページ、周清澍が編纂した「唐兀」という条目である。

^{15 『}集史』第二卷、第12ページ。

^{16 『}中国歴史大辞典』(遼夏金元史) 第337ページ、周清澍が編纂した「肃良合」という条目である。

尉によって、玉冊と玉宝を授けられた。冊文によれば「粛良合氏は名族の出身 で、朕のそばに遣える」とあって17、奇氏を皇后に冊立する勅書には「奇氏を粛 良合(ソランガ)氏に改める¹⁸」とある。トゴン・テムルの勅書によれば、奇氏 という漢風の名前をモンゴル語の名前に改名し、それが高麗人全体の族名とな り、「名族」と認定されたのである。そして、粛良合(ソランガ/Solangga)の 漢訳の字を規定した。

ほかに、『元史』に皇帝が定めた族名「粛良合」を氏名とする、朴サインブカ という人が記載されている。彼の姓が高麗民族の姓「朴」であり、名前がモンゴ ル語の「サインブカ」(Sayin-Buqa)で、良い雄牛という意味である。また、漢 民族の士人を真似て徳中という字を付けた。朴賽音不花伝によれば、彼は「粛良 合台(ソランガダイ)人」である。古代モンゴル人が氏名を述べる時は、族名の 後に氏名と接尾語を加える。男性の氏名の接尾語は「-dai/dei」であり、女性の 氏名の接尾語は「-jin」である。朴賽音不花(パク・サインブカ)は高麗人であ るから、彼は粛良合氏—Solangqadaiである。粛良合は始め宿衛でスクルチを担 当した。スクルチとは即ち、「内府の傘持ちを担当するケシクの執事」である。 彼は奇皇后に勧められ、宿衛に務めることができ、また官利器庫提点や奇皇后が 設立した資政院判官に任命され、軍事を担当する同知枢密院事に昇任した。高麗 の合浦、全羅等の軍民万戸を管轄し、大司農、嶺北行省平章にも任命された。至 正二十四年(1364)に翰林学士承旨になった。さらに、集賢院大学士、宣政院 使、中書平章政事を歴任した。二十八年、明の軍隊は大都に迫り、彼は数百人の 兵士を率いて承順門を守った。城が攻め落されたため彼も捕虜になったが、降伏 しないため殺されてしまった¹⁹。

漠南五投下のイキレス部にいた建国の功労者でチンギス・カンの義理の弟ボト の曾孫の名前はソランガ(鎖郎哈)であった。彼の娘は武宗ハイシャンの皇后で あり、明宗コシラの生母、順帝トゴン・テムルの祖母である²⁰。

4. ナンギャ (Nangia)、マンジ (Mansi)、 カラジャン (Qarajang)

ナンギャ/ナンジャ(南家)はそもそも、金朝が宋人をナンジャ(南家)と 呼んでいたことに由来する。モンゴルはその呼び方を受け継ぎ、また、複数を 表す語尾—sを加え、ナンギャスと呼んだ²¹。元の時代において、ナンギャスは またマンジと呼ばれていた²²。カラジャンとは、元の時代における雲南の地域名

58

¹⁷ 原文: 咨尔肃良合氏, 笃生名族, 来事朕躬。

^{18 『}元史』卷一百一十四、オルジェイ・クトゥク皇后奇氏伝; 卷四十六、順帝本紀、第 971 ページ。原文: 改 奇氏为肃良哈氏。

^{19 『}元史』卷一百九十六、パク・サインブカ、第4435ページ。

^{20 『}元史』卷一百一十八、ボト伝、第2923ページ。

²¹ 伯希和、『南家』、冯承鈞訳、『西域南海史地考证译丛』二编、中华書国、1995年、第57ページ: 『中国 歴史 大辞典』(辽夏金元史) 第353ページ、周清澍が編纂した「南家」の条目である。

²² 賈敬顔・朱風編、『女真訳語・蒙古訳語集』、天津古籍出版社、1990年、第3ページ。

或いは民族名である。元のモンゴル語碑銘には、雲南行省のことを「Qarajang qingšing (カラジャン行省)」と書いてある²³。

『元史』巻一百三十六、哈剌哈孫伝:「オロナウル氏。曾祖父はキシリクである。……父はナンギャタイ(嚢加台)であり、憲宗モンケに従って蜀を討ち、軍営で死去した 24 」

『元史』巻一百二十七、伯顔伝:「……子の嚢加歹(ナンギャタイ)は枢密副 使である²⁵」

『元史』巻一百二十九、紐璘伝:「ニルンはサルジウタイ人である。……子 イェスデル」イェスデルという人物について、「長男のナンギャタイ(南加 台)は四川行省平章政事である²⁶

『元史』巻一百三十一、嚢加歹伝:「ナイマン部人である。アジュに従って襄陽を囲み、襄陽が降服した。その功績により漢軍千戸に封じられた。バヤン丞相に従って复州を討ち、宋人と戦い、風波湖にて敗北した。……27」

『元史』巻一百七、諸王表:「アムガの子はマンジ(蛮子)大王である28」

『元史』巻一百七、諸王表:「鎮南王トゴンの子は文済王マンジ(蛮子)である²⁹」

『元史』巻一百九、諸公主表:「魯国大長公主ナンジャチン(囊家真)は世祖の娘であり、ナチンの子テムルと結婚した。その後、テムルの弟のマンジタイ(蛮子台)と再婚した³⁰」

『元史』巻一百一十八、特薛禅伝:「ソランハト(唆児火都)は、また、アルチの子である。……ソランハトの諸孫は、ジャバル・シャー、バヤン、マンジ(蛮子)、……³¹」

ケレイト氏のフスンの曾孫トゥメドの子の名はカラジャン(哈刺章)である 32 。

元朝末期の名宰相トクトアーの長男の名はカラジャン(哈刺章)である³³。 カンクリ人イェスデルの子の名はカラジャン(哈刺章)である³⁴。

^{23 『}中国大百科全書・中国歴史・元史』、中国大百科全書出版社、1985年、方齢貴が編纂した「合剌章」の 条目である。第40ページ。

^{24 『}元史』巻一百三十六、ガルガスン伝、第3291ページ。原文: 斡剌纳儿氏。曾祖启昔礼。……父嚢加 台、从宪宗伐蜀、卒于军。

^{25 『}元史』巻一百二十七、バヤン伝、第3116ページ; 馮承鈞、『元代的几个南家台』、『馮承鈞西北史地論 集』、中国国際広播出版社、2013年、第185-201ページ。原文: 子嚢加歹, 枢密副使。

^{26 『}元史』巻一百二十九、紐璘伝、第3246ページ。原文: 纽璘,珊竹带人。……子也速答儿; 长子南加台,官至四川行省平章政事。

^{27 『}元史』巻一百三十一、囊加歹伝、第3184ページ。原文:乃蛮部人,从阿术围襄阳,襄阳降,以功授汉军千户。从丞相伯颜攻复州,与宋人战,败宋兵于风波湖。

^{28 『}元史』巻一百七、宗室世襲表、第2728ページ。原文:阿木哥之子蛮子大王。

^{29 『}元史』巻一百七、宗室世襲表、第2726ページ。原文: 镇南王脱欢之子文济王蛮子。

^{30 『}元史』巻一百九、諸公主表、第2758ページ。原文:鲁国大长公主囊家真,世祖女,适纳阵子帖木儿,再适帖木儿弟蛮子台。

^{31 『}元史』巻一百一十八、デイ・セチェン伝、第2917ページ。原文: 唆儿火都者, 亦按阵之子。……唆儿 火都之诸孙若孛罗沙、伯颜、蛮子、……。

^{32 『}元史』巻一百二十二、フスン伝、第2917ページ。

^{33 『}元史』巻一百三十八、トクトアー伝、第3348ページ。

^{34 『}元史』巻一百三十三、イェスデル伝、第3238ページ。

5. サルタグ (sartaq)

撒里答(サルタグ)という言葉はSartaqの音写である。また、撒里答(sartaq) は撒儿塔兀勒(サルタウレ)とも音写された。モンゴル人はホラズム、ブハー ラー、サマルカンドなどの地域のムスリム商人やそれらの地域をサルタグまたは サルタウルと呼んだ。サルタウルの語源はサンスクリット語のSartnavahoであ り、「商人」という意味である。最初はペルシア語を話す現地商人に対するトル コ人の呼称であり、即ち隋唐時代の「薩宝」であった。トルコ語の発音はサルタ ク「Sartag」であり、モンゴル語では、複数形であるサルタウル(Sartaul)と 形容詞形のサルタクタイ(Sartaqtai)となる 35。『元朝秘史』には「撒儿塔兀勒 (サルタウル・Sartaul)」、「撒儿塔黒臣 (サルタヘチン・Sartagčin)」などの言 葉が何度も現れ、「回回」と注釈が加えられている。

『秘史』 § 254: 「帖兀訥(テウヌ/その) 豁+亦納(ホイナ/後に)成吉思+ 合罕 (チンギス・カーン/チンギス・ハンは) 撒儿塔兀^動 (サルタウル/サ ルタウルの) 亦兒格捏 (イルゲニ/民によって) 兀+忽納 (ウクナ/ウクナ を) 帖里兀田 (テリウテン/頭とする) 札温 (ジャウン/100の) 額^勒赤 你顔(エルチンイェン/使臣らを)者惕古周(ジェドグジュ/阻んで〔殺さ れた])」。

「撒儿塔兀勒 亦儿格(サルタウル イルゲン)」はムスリムの民と解釈されて いる。ここではホラズム人を指し、或いはイスラーム教を信じる西域人のこと を指す。1219年から1225年まで、チンギス・カンは中央アジアのホラズム・ シャー国に対し、大規模な遠征を行った。モンゴル語でサルタクチン・アヤン 「Sartagčin avan」と呼ばれる³⁶。

サルタグはよくあるモンゴル人の名字である。特にホラズムを征服したジュチ の家系においても、その名前を持つ者が何人もいる。バトの長男の名前はサルタ グ(撒里答)である37。グユク・ハンが死んだ後、サルタグは父の命令に従い、 軍隊を率いて憲宗モンケ・カーンを擁護した。後に、キプチャク・ハン国の西方 を守り、オロス諸国(ロシア)を統轄した。フランスのフランシスコ会修道士で あるギョーム・ド・ルブルクはモンゴルに赴き、バトの長男であるサルタグと何 度も会った³⁸。

ジョチ・ハンの長男はオルダである。オルダの長男の名前もサルタクタイであ る³⁹。

60

^{35 「}ソ連」著者:ウラディミロヴィチ・バルトリド、訳者:羅致平、『中亜突兀史十二講』、中国社会科学出 版社、1984年、第132-133ページ;『中国歴史大辞典』(遼夏金元史)、上海辞書出版社、1986年、第518 ページ、周清樹による「サルタク」の項目である。

³⁶ 亦隣真、『至正二十二年蒙古文追封西丁王忻都碑』、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、 2001年、第693ページ。

³⁷ 余大鈞、周建奇訳、ラシードゥッディーンが編集した『集史』第二卷、1985年、第127ページ:波義耳英 訳,周良宵訳注『チンギス・カンの後継者たち(『集史』第二巻)』、天津古籍出版社、1992年,第139ページ。

^{38 『}柏朗嘉賓蒙古行紀 魯布魯克東行紀』、耿昇、何高済訳、中華書局、1985年、第313-317ページ。

³⁹ 余大鈞、周建奇訳、ラシードゥッディーンが編集した『集史』第二卷、第116ページ。

61

オゴデイ・カーン国時期に、第一次高麗遠征を行ったモンゴル軍隊の将軍の名前はサルタグである。1231年、サルタグは命令を受け、高麗に進攻し、連戦連勝して高麗の王城に迫った。高麗の国王は使者を派遣し、講和を申し入れた。高麗の京、府、県にダルガチ(=鎮守)七十二人を残した⁴⁰。翌年、七月に、高麗の国王は江華島へ逃げ、モンゴルが残したダルガチを殺した。八月に、モンゴル軍が襲来した。1235年に、サルタグは再び命令を受け、高麗を征服し、開京(現在朝鮮開京)の處仁城を攻撃したが、高麗軍隊に射殺されてしまった⁴¹。

フビライ・カーンの臣下にはサルタクタイ・ノヤンという人がいる⁴²。ラシードゥッディーンによれば、「アナンダの臣下にはサルタグという人がいて、イスラーム教に反対し、大ハンに謁見し、アナンダがよくモスクで祈りを捧げ、宴会で『コーラン』を読むと愚痴をこぼした」という。

6. キプチャク (Kipcak)

キプチャク族は、元々エルティシ川流域に住んでいた。「キプチャク」(Kipcak) という名前は中世ペルシア語kipに起源し、「紅色」或は「浅い色」という意味 であり、cakはすべての草原住民に対する通称である。だから、キプチャクの意 味は「浅い色の肌を持つ草原住民」である。欽察人は「クマン人」と呼ばれてい たことがある。その名前の起源はコーカサスにあるクマン川である。キプチャク 族はイランとトルコの後代である。七世紀に、キプチャク人はトルコ人に追い払 われ、西へ移動した。十一世紀中頃、キプチャク人はヴォルガ流域とウクライナ 草原地域に定住した⁴³。『元朝秘史』の記載によれば、1205年、チンギス・カンは エルティシ川流域でメルキト族の残余勢力を打ち負かし、その首領トクトアー・ べキは殺されて、クドゥら三人の息子はカンクリを経由し、キプチャク草原まで 逃げた。1216年、チンギス・カンはスベーデイにカンリン、キプチャク、オロ ス (ロシア)、マジャール、アスなど11の国への遠征を命じた 4 。オゴデイ・カー ンの時期、バトが統率した先鋭部隊がドナウ川まで侵攻した侵略戦争は『元朝秘 史』でキプチャクチン・アヤン「Qibcagcin ayan」と呼ばれる45。バトはサライ に都を建て、キプチャク草原を領地としたことから、キプチャク・ハン国と呼ば れた。

キプチャク族の首長のフルスマンと父バンドチャはモンゴルに帰服した。バンドチャは憲宗モンケに従ってアスの都メゲスを攻め、その後、キプチャクの百人の兵士を率いてクビライ・カーンに従って大理へ遠征して宋を討伐し、その功績で「強さと勇ましさを以て称讃される」と評価された。バンドチャの子のトトカ

^{40 『}元史』卷二百八、高麗伝、第4608ページ。

⁴¹ 鄭麟趾:『高麗史』卷二十三、高宗世家二。

⁴² 余大欽、周建奇訳、ラシードゥッディーンが編集した『集史』第二卷、第318ページ。

⁴³ 烏云卒力格: 『喀喇沁万戸研究』、 内モンゴル人民出版社、2005年,第14-15ページ。

^{44 『}元朝秘史』第199節、第262節。

⁴⁵ 亦隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第693ページ。

は勇敢で戦いにたけている人であり、しばしば戦功を立てた。クビライは「キプ チャク人の民や王たちは、全員がトトカに帰属し……勇ましく強い人材を選び出 し、皇帝の直属軍に配備する」という命令を下した⁴⁶。従って、多くのキプチャ ク人は奴隷になる運命を免れ、親衛軍に配属された。そのうち、精鋭たちはまた キプチャク諸衛に配属され、元朝の侍衛親軍となった。そのほか、トトカの一族 は元朝皇帝の馬を管理しており、バンドチャは「尚方馬畜を管理し、季節になる と馬乳を取り帝に捧げる。その馬乳は色が清らかで味が良く、カラ・ス(純粋な 馬乳 ※この場合の「カラ」は「黒」ではなく「純」の意味)と称される。そ のため、バンドチャの率いるキプチャク人はカラチと名付けられた⁴⁷」。そこか ら、カラチとは、純粋な馬乳を取るという職業にちなんだ名前だということが 分かる。以来、カラチ(哈剌赤)はキプチャク軍・キプチャク衛の別名となっ た48。カラチの牧畜民は太僕寺に所属し、チンギス・カン大オルド(大天幕)の 各牧場に配属され、主に上都、大都、ユニ・バヤ、セレンゲボル(現在の遼河上 流)、アラクマキ(現在の内モンゴル西ウジムチン旗辺り)等の地域に集まって いた⁴⁹。1328年、トトカの孫のエル・テムルはキプチャク諸衛に支えられ、外部 からモンゴル地域のカラチ軍の支援を得ることによって、クーデターを起こし、 文宗トク・テムルを皇帝に押し立てた。それ以来エル・テムルは長年朝廷の権力 を握り続け、キプチャク諸衛及びモンゴル地域のカラチ軍を支配下に置いてい た。エル・テムルが亡くなり、子のタンギスは鎮圧されたが、トトカー族のキプ チャク衛及びカラチ軍に対する支配が完全に潰えたわけではない。

オゴデイ・カーンの第六子であるガタン・オグルの息子にはキプチャク(欽 察)と名付けられた人がいる50。

『元史』巻二十一、成宗紀四: 「(大徳七年)、六月、欽察千戸等の貧乏な人に 鈔三万七千八百余錠をほどこした⁵¹ |

7. アス (As)

阿速 (アス)、または阿思 (アス)、阿宿 (アスク)、阿速惕 (アスタイ) など と音写される。元々、アス人は北コーカサスに住んでいたイラン系民族であり、 ギリシャ正教会を信じ、ダルバンドのヴォルガ河の河口域に移住し、ビザンツ、 グルジア、オロスと緊密な関係を持っている。1221年、スベーデイなどが軍隊 を率いてコーカサスから、大和嶺を超えて北へ進み、アス人などの部族連合軍を

^{46 『}元史』巻一百二十八、トトカ伝、第3132ページ。原文: 钦察人为民及隶诸王者、皆别籍之以隶土土哈 ……选其材勇,以备禁卫。

^{47 『}元史』巻一百二十八、トトカ伝、第3132ページ。

⁴⁸ 宝音徳力根:『応紹不万戸的変遷』、『中国人文社会科学博士硕士文庫(続編)』(歴史学巻)。

^{49 『}元史』巻一百、兵志三、第2553-2554ページ。

^{50 『}集史』第二卷、第21ページ。

^{51 『}元史』巻二十一、成宗四、第452ページ。原文:(大徳七年) 六月, 给钦察千户等贫乏者钞 三万七千八百余锭。

大敗させた。1239年、モンケ・カーンが軍隊を率いてアスのメゲス城を包囲攻撃した。国主のハングスは兵士を率いて降服したため、モンケの軍隊が千人くらい拡充された。ハングスの子のアタチに率いられた新たな軍隊はアス軍となり、モンゴルへ連れ戻された 52 。中原に移住したアス人の多くは軍隊に入った。至元九年(1272)、アス・バートル軍を編成し宋を攻撃した。武宗の時期に、左右アス両宿衛を設置した 53 。以来、アス衛が元朝親衛兵の精鋭となった。1323年、テシたちがクーデターを起こして英宗を殺したのは、まさにアス衛の力に頼ったのである 54 。

モンケ・カーンの息子にアスタイという人がいる 55 。ラシードゥッディーンによれば、モンケ・カーンには「クトゥニという妃がいて、出身はエルジギン部族である。モンケ・カーンと彼女の間に息子が生まれて、アスタイと名づけられた。アスタイはアリク・ブケと手を組んでクビライに対抗した 56 」。

8. オロス (Oros)

斡羅思(オラス)、または斡羅斯(オラシ)、兀羅思(ウラス)、兀魯思(オロス)、阿羅思(アラス)とも音写され、複数形はオロスタイである。ヴォルガ川から西のモスクワとキエフ地域にあたる。十三世紀に、ロシアは幾つかの公国に分かれた。1223年、モンゴルの軍隊は初めてヴォルガ川地域で敵を撃破し、その南部に侵入した。バトの西征の後、ロシアはキプチャク・ハン国に降伏した。一部の人が捕虜になり、奴隷としてモンゴルと中原地域に連れていかれた。

至順元年(1330)に、「宣忠扈衛親軍都万戸府を設置し、官位は正三品であり、オロスの軍隊と兵士を統率し、枢密院に従属する⁵⁷」。十二月、一万のオロス人を集めるように命じられ、百頃の田地を賜り屯田させた。翌年の四月に、万戸府を宣忠扈衛親軍都指揮使司に変えた⁵⁸。(『元史』巻34、35、文宗紀三、四;巻100、兵志三、屯田)カイドと妻テレンチンの間に生まれた息子の名前はオロス(斡羅思)である。ラシードゥッディーンによると「カイドと境を接する地域をオロス(斡羅思)に渡し、彼に大きな軍隊を託した」という⁵⁹。

元文宗の乳母であるオルジャの夫の名はオロス(斡羅思)である。『元史』 巻三〇、文宗紀一:「(天暦元年) 九月、乳母オルジャを雲国夫人に追封し、 夫のオロスに太保の官位を贈り、雲国公に追封し、忠懿と諡した⁶⁰」。

^{52 『}元史』卷一百三十二、杭忽思伝、第3205ページ。

^{53 『}元史』卷九十九、兵志二、第2527ページ。

^{54 『}元史』卷二百七、鉄失伝、第4600ページ。

^{55 『}元史』卷一百七、第2723ページ。

^{56 『}集史』第二巻、第2733ページ。

^{57 『}元史』巻三十四、文宗紀三、第758ページ。

^{58 『}元史』巻一百、兵志三、屯田、第2562ページ。

^{59 『}集史』第二巻、第16ページ。

^{60 『}元史』巻三十、文宗一、第712ページ。原文:(天历元年)九月,追封乳母完者云国夫人,其夫斡罗思赠太保,封云国公,谥忠懿。

『元史』巻一百三十四、斡羅思伝:「オロス(斡羅思)はカンクリ族である。 \cdots 至元年十九年内府必閣赤(ビジェーチ/ビチクチ)に任じられた 61 」。

9. マジャル (majar)

馬札儿 (マジャル)、または馬扎 (マジャ)、馬茶 (マチャ)、馬劄 (マジャ)、 馬札剌(マジャル)と音写される。即ち現在のハンガリーおよびバシュグルド である。1241年春に、バト、スベーデイなどが率いるモンゴル軍がハンガリー を攻撃した。間も無く、モンゴル軍が首都ペスト(Pest)の近くに来たため、マ ジャル軍が出兵したが大敗した。十二月、バトが軍隊を率いてドナウ川を渡り、 グラン(Gran)城を占領した。

メルキト部のバヤンの弟であるマジャルダイ (馬扎兒台、1285-1347) は武 宗、仁宗に仕えた。泰定四年(1327)、陝西行御史台治書侍御史を担当し、また 兵部尚書、御史大夫、知枢密院事等を歴任した。至元三年(1337)、太保に任命 され、枢密院に属して北方を鎮守した。六年にバヤンについで右丞相を担当し た62。

『元史』巻一百、兵志三:「河西務ウンディチ(杖士)百戸マジャル(馬札 JL) ⁶³ |

10. ヒンドゥ (Hindu)

ヒンドゥ(忻都)という言葉はインドをさす。『元朝秘史』第261、264節でヒ ンドゥス(— s は複数を表す語尾である)と表示されている。至正二十二年に追 封された西寧王ヒンドゥ(忻都)公神道碑はまさにヒンドゥ(Hindu)の墓のた めの碑である⁶⁴。

11.アルグン (Argun)

ポール・ペリオによると、「アルグン」(Argun) は部族の名前であり、十一 世紀末のマフムード・カシュガリー (Kašigari) でも知られている Argu 部族で あり、現代の「カラ・キルギス」(Kara-Kirghiz)のArgin或はArgun族と関連 している 65」という。アルグン人は中央アジア7大河川地域からチュイ川まで、

64

^{61 『}元史』巻一百三十四、斡羅思伝、第3263ページ。原文: 斡罗思, 康里氏。……至元十九年为内府必 闍赤。

^{62 『}元史』巻一百三十八、馬札儿台伝、第3339ページ。

^{63 『}元史』巻一百、兵三、第2557ページ。原文:河西务玉提赤百户马札儿。

⁶⁴ 亦隣真前掲文、『亦隣真蒙古学文集』、内モンゴル人民出版社、2001年、第690ページ。

⁶⁵ ポール・ペリオ、『荨麻林』、『西域南海史地考证译丛三编』、第58ページ。

65

即ちキルギス共和国とカザフスタン共和国の一部の地域に住むトルコ系部族である。チンギス・カンの西方への遠征に際して、その部族が集結し、アルグン軍となった。ケレイト人のフスンに率いられたアルグン軍は中央アジアに向けて出征し、サマルカンドやブハーラーを攻めた。太宗オコデイの時代に、アルグン軍は回回工匠三千戸に加入し、シーマーリン、豊州、下水という地域に駐在しながら「ナシシ」という緞子の生産に携わった。元恵宗の時代に、アルグン部軍が設置され、宮の出入口の警備に置かれた⁶⁶。

初代イルハンのフレグの孫アルグン(1255-1291)はイルハン朝の第4代君主である。

オイラト部のアルグン(阿儿渾)は元太宗の時代にビジェーチ/ビチクチ(書記官)に就いた。それから、コルクズを補佐しイラン諸州を支配した。ナイマチン(トレゲネ)皇后元年(1242年)、コルクズに継ぎイラン諸州の総督に就任し、民事に関わる行政事務を整備し、違法な納税を撤廃した。憲宗元年(1251年)、アム河等處行尚書省事を任じ、人口調査や課税体制の整備に取り組んだ。モンケ・カーンがフレグを西征に派遣し、フレグがイランの出征軍を率いる総司令となり、その命令を受けて財務の管轄に携わった。その後、またアバガの子アルグンを補佐しイランを鎮守した。さらにイルハンと通婚関係を結び、地位が高く権力があった。67。

12. ダーシマン (dašman)、ジューク (juqu)

ダーシマン(dašman)は、元代のイスラーム教知識人の呼称である。中央アジアのイスラーム教徒は自分の教師や神学者のことをダーネシュマンド(Danishmand)と尊んで呼ぶ。ペルシア語で「知識人」という意味を持つ。モンゴル人が最初に触り合ったのは中央アジアのイスラーム教徒であったため、イスラーム教知識人の総称としてこの呼称を使った。モンゴル語でダーシマン(dašman)と書き、漢字で「答失蛮」と音写される。元の時代に、ユダヤ人は「ジューク」(術忽、主鹘、竹忽、主吾・(juqu))と呼ばれていた。

『元史』巻三十三、文宗紀二:「僧、道、エルケウン、ジューク、ダーシマン の商人は従来の制度に従って納税せよ⁶⁸」

元の時代において、ダーシマンと名付けられた人は少なくなかった。以下のような例がある。

⁶⁶ 楊志久、『元代的阿儿渾人』、『元史三論』、人民出版社、1985年、第229ページ。

⁶⁷ 余大鈞、『元代人名大辞典』、内蒙古人民出版社、2016年、第429ページ。

^{68 『}元史』巻三十三、文宗二、第732ページ。原文 : 僧、道、也里可温、术忽、答失蛮为商者,仍旧制纳 税。

ケレイト氏ダーシマンは年少時に藩邸にてクビライを補佐し、ビジェーチ (書記官)を務めた。クビライ即位に際し、第一ケシクのビジェーチに就任 した69。

太宗オゴデイの在位期間、ジュークデイというジャルグチ(断事官)がい た70。

おわりに

モンゴル帝国が建国されて間もなく、チンギス・カンは大規模な対外征服戦争 を起こし、西夏が最初の征服対象となった。西夏を降服させた後、引き続き金朝 に対する征伐を起こし、それと並行してカラキタイ(西遼)及びホラズムを滅ぼ した。晩年に入り、また西夏を滅亡させた。チンギス・カンの後継者である太宗 オゴデイは、さらに金朝を滅ぼし、金朝支配下の広い領土を自らの版図に収め た。また、西洋各国や高麗に対し、征伐戦争を展開した。グユク、モンケの在位 期間、南宋と高麗に対して征伐を引き続き行いながら、さらに吐蕃、雲南、西ア ジア・メソポタミア流域のバグダードのハリーファ(カリフ)を支配下に置い た。クビライの在位期間、南宋を滅ぼした後、次々と日本、安南、占城(チャン パ王国)、ミャンマー、ジャワ等の国へ軍隊を派遣し遠征を展開した。建国され て半世紀、モンゴルはすでにユーラシアに跨がる大帝国となっていた。13世紀 のペルシア歴史学者ジュヴァイニーはチンギス・カンとその子孫たちをジャハー ングシャー「世界征服者」と評価した。その呼称は、人々の視野が大分広くなっ た現在においても過大評価ではないと言えよう。一族が三世代にわたってこのよ うな大規模な戦争を起こすのは、人類の歴史上において極めて珍しいことであ る。今では一部の歴史学者が13世紀をモンゴル人の世紀と呼んでいるのも、こ の戦争が世界的な規模に広がっていたからである⁷¹。

征服戦争で行われた殺戮は非常に残忍である。その一方、遠征によってモンゴ ル人とユーラシア各民族の視野が広げられ、東西交流も盛んになった。チンギ ス・カンとその後継者の起こした征服戦争は、形成されはじめたモンゴル民族に 多大な影響を与えた。今は亡き教授のイリンチン(亦隣真)は「多くのモンゴル 人は故郷を離れ、彼らの子孫はモンゴルに征服された各民族に融合した。その 代わりに、征服された各民族は次から次へとモンゴル民族に融合してきた」。漢 人、キプチャク人、アスト人、オロス人、カンクリ人、ペルシア人、アラブ人、 キタイ (契丹) 人、ジュルチン (女真) 人、高麗人などがそのうちに含まれてい る⁷²。15世紀以後、モンゴル民族に融合したあらゆる民族や国家の名も、徐々に

⁶⁹ 楊志久、『元代的几个答失蛮』、『元史三論』、人民出版社、1985年、第221-225ページ。

^{70 『}元史』巻八十一、選挙一、第2017ページ。

⁷¹ 楊訥、『世界征服者-成吉志汗及其子孫』、華夏出版社、2000年、前言。

⁷² 亦隣真、『中国北方民族与蒙古族族源』、『亦隣真蒙古学文集』、内蒙古人民出版社、2001年、第580 ページ。

モンゴルの各部落の名、もしくはモンゴル人の名字となった73。

1368年、元朝の中原に対する支配が終わり、モンゴルの宮廷も北のモンゴル地域に移された。14世紀以後、元朝の一部の近衛兵や官僚組織、異民族などの名はモンゴル遊牧集団の名として使われ、再びモンゴル・漢の史籍に現れた。例えば、15-16世紀のアスト部、カラチン部、ヨンシエブ部などがそれである。15世紀初期、アス衛と名付けられた遊牧部落が徐々に形成され、モンゴル語でAsud(アスド、アスの複数形)と呼ばれた。アスド部及びカラチン部はアスドの貴族のアルダイの支配下に置かれていた。

元朝のカラチ軍及びその親族は15世紀に入ってからカラチン人となり、それ 以来モンゴル中央六万戸の一つであるヨンシエブ万戸の重要な構成部分となっ た。また、元朝のカンクリ人も同じようにモンゴル人に融合した。

カンジン(杭錦)(カンクリの別名)という名はオルドスのあるオトク(部落)に使われるようになり、最終的にはオルドスの旗名となった 74 。ほかに、『黄金史綱』に記載される一部のタングト人、例えばタングトのドレンゲリ(Tangud-un Dülenggeri)、タングトのテムルカダク(Tangud-un Temürqadaq)、タングトのアジャ・テムルなど 75 を検証してみると、タングトという民族名がすでにモンゴル人の名字として使われたことがわかる。また、サガン・セチェンの『蒙古源流』に記載される「ソランガ人(Solongqas)クトゥ・ブカ(忽都巴哈)」 76 、「ソランガ人サンガルダル(桑哈勒都儿)」 77 などもそれと同様である。

⁷³ 烏蘭、『关于蒙古人姓氏』、『蒙元史暨民族史論文集—記念翁独健誕辰一百周年』、社会科学文献出版 社、2006 年、第 102-103 ページ

⁷⁴ 亦隣真、『額済納 阿拉善 杭錦』、陳暁偉訳、『元史論丛』第十四輯、第197ページ。

^{75 『}漢訳蒙古黄金史綱』、朱風・賈敬顔訳、内蒙古人民出版社、1985年、第189、191ページ。

⁷⁶ 烏蘭、『「蒙古源流」研究』、遼寧民族出版社、2000年、第273ページ。

⁷⁷ 烏蘭、『「蒙古源流」研究』、遼寧民族出版社、2000年、第277ページ。

指定討論

「モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関する一 考察」を受けて

「質問者/四日市康博、回答者/エルデニバートル]

―― (四日市) 名前からモンゴルのユーラシア の覇権をみるという、とても重要かつ、なかな かないご発表だったと思います。

私の質問は、細かい点2点と大きな点1点で す。細かいところからいいますと、アルグンと いうのを一つ取り上げられていますけれども、 アルグンはマルコポーロとか、他の現地の資料 にも見られる名前です。リ・チアン先生が論文 を書いていますが、トルコ系の混血人のことを アルグンと呼んだというのが出てくるので、そ れにかかわるのではないかと思いますけれど、 エルデニバートル先生の見解はどうでしょう か。

もうひとつ、マジャールに関してですが、元 の時代に出てくるマジャールはハンガリーのこ とではなく、いわゆる今のバシキール人(バシ コルト/バシュクルト)のことではないか。要 するにフィン系スキタイの子孫からモンゴルの 時代にトルコ化したバシキール人ではないかと 思われるんですが、この点、どう思われますで しょうか。

もう一つ大きな質問としては、モンゴル人の 名前はかなりいろいろな問題に関連してきま す。たとえば民族の支配に関しても、昔は四階 級制というのがあったと言われていたのが、最 近はそのような階級・階層があったのではなく て、それぞれ民族ごとに行政統治が異なってい たという意見のほうが一般的です。その際、モ ンゴル人がかなり優遇されたというのは変わら

ない見解です。実際には漢人とか高麗人もそう ですし、イスラム教徒、ウイグル人であって も、モンゴル人の名前をもらうとモンゴル人と 同じ権利を享受できたということがいわれてお ります。実際にモンゴルの皇帝もキリスト教の 名前と仏教の名前とイスラム教の名前と三つ 持っている皇帝などもおりまして、それぞれ名 前というのがかなりモンゴルの時代、重要な要 素であったことがわかるんですね。支配した場 所の地名を名前につけるというのは、非常に重 要な問題だと思うのですが、一方でそういう宗 教ですね。先生も途中で言及されておりました が、イスラム名ですとか、仏教名ですとか、そ ういう名前をつけるという事例は、このような 地名を名前につけるという事例と何か関係があ るのかどうか質問したいと思います。

―― (エルデニバートル) ご質問ありがとうご ざいます。アルグンは確かに非常に重要な部族 です。これについて、ポール・ペリオや中国 南開大学の楊志玖は色々と研究を行いました。 ポール・ペリオは、アルグンとは一つの部族の 名前であるという観点を持ち、「必ず十一世紀 末のKašigariが記載したArgu部族と合致し、 現代の『黑姓乞儿吉思(カラキラギシ・Kara-Kirghiz)』のArgin或はArgun族と関連してい る」と述べています。

アルグンに関しましては実に内容が豊富で、 様々な方面から申し上げたいと思います。アル

グンは当時、中央アジアの七河流域(セミレチエ地方)・楚河流域(チュイ川地域)一帯、つまり現在のギルギス共和国全域、カザフスタンの一部に住む突厥部落です。チンギスカンの時代には、西からやってきたアルグン人は一つのアルグン軍隊を組みました。その後、ケレイト部の哈散納(フスン)に率いられ、中央アジア征服戦争において非常に重要な役目を果たしました。面白いことに、太宗オコデイ時代に至って、アルグン軍は回回工匠三千戸に加入し新たな軍となり、蕁麻林、豊州、下水という地域に駐在しながら、納失失(ナシシ)という棉織物の生産に携わりました。豊州はつまり現在のフフホト市です。

宗教について、モンゴル人はイスラム教やキリスト教から大いに影響されました。20世紀初期において、モサトというイスラム教宣教師がモンゴルのオルドスで20年間宣教活動をしました。1368年以降、イスラム教の宣教師たちは中原地域から姿を消しましたが、一方キリスト教のオルドスにおける影響は20世紀までずっと存在していました。一部のモンゴル人、例えば汪古部の人がキリスト教に入信していました。それに関してモサトの考察の中にもいくつか証拠が見つかります。

私が考察を通じて申し上げたいのは、今、国 や国史の研究はますます重要視されてきまし た。しかし純粋な漢民族人あるいは純粋なモン ゴル人を強調するよりもっと良い方法があると 思います。100年以上にわたるモンゴル帝国時代には、実際多くの外来文化、民族、人種が取り入れられたので、視野の狭い考えは捨てたほうがいいと思います。

―― (四日市) 仏教についてはどうでしょう。

一 (エルデニバートル) 古代モンゴル人の名字と名前についての研究は大きな課題だと思います。数年前から関心を持つようになりました。実は、元の時代は宗教を平等に扱い、人が宗教を問わず同じようにリスペクトされるというような時代です。しかしその中で、仏教はやはり非常に重要な宗教だと言えます。なぜかというと、仏教の言葉を人に名付けるのが普遍であり、アヨシダラ、アヨラリワなどいずれもシッタン名、仏教名です。以上です。

発表論文 5



モンゴル帝国と火薬兵器 ―明治と現代の「元寇」 イメージ

向 正樹

同志社大学

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく 変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作やメディアを通じ、モンゴ ル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。では国民レベル でのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に 利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家 矢田一嘯(1859-1913)のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の日本の漫 画での描写を比較してみたい。モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴 は、先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は専門研究で、その時代に存 在したことが証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすで に実用化していたかのように描かれている。

モンゴルは中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程で、堅 固な城壁に囲まれた都市を攻略するが、その過程で様々な兵器を導入し、さ らには南中国遠征に際しては、水軍も創設された。モンゴル帝国は中国やホ ラズムなど征服の過程で各地の様々な技術(と技術者集団)を吸収していっ たことが知られる。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、 未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどの ように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

1. 様変わりしたモンゴルのイメージ

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作¹やメディア²を通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。多元社会を治める柔軟性と経営マインドに富んだ統治集団としての新しいモンゴル像が、世界に破滅をもたらした征服者としてのステレオタイプと取って代わる。モンゴル人第一主義、九儒十丐、ラマ教の狂信といった古色蒼然たる旧説は痛烈に批判された。

では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家英田一嘯(1859 – 1913)のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の中国の観光地のパノラマ展示や日本の漫画での描写を比較してみたい。

(1) 矢田一嘯と元寇記念碑運動

矢田一嘯は明治期に活躍した洋画家で、歴史を題材としたパノラマ画を数多く残した人物である。安政5年(1858)横浜に生まれ、日本画を学んだのち洋画を学び、明治15年(1882)頃にアメリカやヨーロッパに渡り、帰国後、上野パノラマ館に戊辰戦争のパノラマ画を描き注目を浴びた。

パノラマ館とは、円筒形の建物内部に大画面を巡らせた見世物施設である。 1794年にロンドンで生まれ、ヨーロッパ、アメリカに広がった。矢田も海外滞在中にそれらを目の当たりにしたと考えられる。明治23年(1890)に開業した上野パノラマ館は日本最初のもので、浅草・大阪・京都・熊本・富山にも建造された。

矢田はその後、熊本に九州初のパノラマ館ができたとき、そこに西南戦争のパノラマ画を描いて活躍した。明治27年(1894)、福岡に移ると、湯地丈雄の元寇記念碑を建設する運動に賛同し、そのために元寇を題材とした一連のパノラマ画を描いた。元寇記念碑の建設された東公園には、それらを展示するため、元寇記念パノラマ館もつくられた 3 。矢田はまた解剖学の知識を生かして博多人形の育成にも尽力し、そして、大正2年(1913)に没した 4 。

(2) 元軍イメージの変遷―明治・現代日本と中国

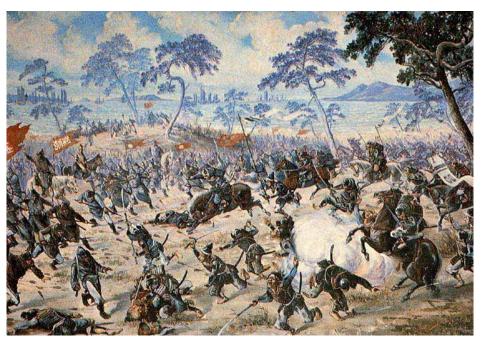
矢田のパノラマ画には元軍の際立った特徴のひとつである火薬兵器の使用が しっかりと描かれている(図1)。有名な「蒙古襲来絵詞」(図2) に描かれた博

¹ 杉山正明『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国―』(角川選書227), 角川書店, 1992; 『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道―』(朝日選書525), 朝日新聞社, 1995; 『モンゴル帝国の興亡』講談社, 1996.

² NHKスペシャル「大モンゴル」(1992年放送) など.

³ 後述の佐野前励上人によって銅像前の広場に建てられたが、大正中期に大暴風雨によって倒壊した. 太田弘毅編著『元寇役の回顧―記念碑建設史料―』錦正社, 2009, p. 164.

⁴ 以上, 太田, 2009 および西本匡伸編『よみがえる明治絵画―修復された矢田―嘯「蒙古襲来絵図」―』福岡県立博物館, 2005, より.



矢田一嘯 蒙古襲来絵図 「博多上陸」 本佛寺 うきは市ホームページ>くらし>歴史・伝統文化>元寇の油絵 本仏寺より http://www.city.ukiha.fukuoka. jp/imgkiji/pub/detail.aspx?c_id=71&id=22 2017 年 7 月 10 日閲覧



図2 「蒙古襲来絵詞」前巻、絵7 宮内庁 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:M%C5%8Dko_Sh%C5%ABrai_Ekotoba.jpg?uselang=ja 2017年7月10日閲覧

多に上陸した元軍との戦闘シーンに想像力を加えて立体感を出した構図となって いる。湯地丈雄・高橋熊太郎『元寇』にも「てつはう」が炸裂する「蒙古襲来絵 詞」の挿絵が描かれるほか 5 、次のように記しており、あきらかに火薬兵器に特別 な注意が向けられていた。

元の軍勢はすでに中央亜細亜地方に於て、百戦を経たる雄将猛卒にして、 其の指揮の整い進退の駆引自由自在なる、戦場の法すべて我が国人の意外に

⁵ 湯地文雄・高橋熊太郎 『元寇―日本と蒙古の対戦―』 鵜飼兵太郎出版, 1893, p.69. 同一内容が湯地丈 雄・高橋熊太郎『少年世界 元寇』(学友館, 1891) として先に出版されている.



図3-a 銃 (たかぎ七彦『アンゴルモア―元 寇合戦記―』第4巻, p. 42 より)



図3-b 天河(ママ)汗 (同第5巻, p. 106より)



図3-c ウルス (同第1巻p.54より)

出でたりける、殊に毒矢を射かけ、火矢を放ち、鉄砲を打ちかくる、其の音空に鳴り渡りて雷の如くひびきわたり、之にふるるものはいかに勇猛なりといえども直に命を落としけり…⁶

今日、モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、さらに先進的な火薬 兵器の描写である。特に近年は、その時代に存在したことが完全には証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれる例もある。例えば、近年、たかぎ七彦の漫画『アンゴルモア 元寇合戦記』では、後述のようにクビライ時代には存在が確認されていないはずの金属管形火器が登場する「(図3-a)。氏の作品は綿密な調査に基づく斬新な描写を特徴とする。例えば、唐が鮮卑系王朝であり、唐皇帝が「天可汗」として世界に君臨したとか。(図3-b)、モンゴル帝国を「ウルス」と記述するのは (図3-c)、近年の研究動向を踏まえたものとみられる。モンゴル人登場人物のセリフや軍旗に、パクパ文字、ウイグル文字モンゴル語が多用され、異国感を表現しているのが印象的である(図3-d)。これに対し、矢田一嘯のパノラマ画では元軍の旗は基本的に漢字で「右軍」「東路」「大元水師」などであった。モンゴル側の人物を描く際、ときにかれらの価値観の独自性を表現しつつも、共感可能な人間的な側面も同時に際立たせているのは(図3-e、f)、グローバル世界の多様性を反映した、極めて現代的な表現感覚であるといえよう。

⁶ 湯地・高橋, 1893, p. 64.

⁷ たかぎ七彦 『アンゴルモア 元寇合戦記』 第4巻, 角川書店, 2015, pp. 37-38.

⁸ 同上, 第5巻, 2016, p. 106. 唐=「鮮卑系王朝」説や唐太宗の「天可汗」称号については森安孝夫 『シルクロードと唐帝国』講談社, 2007, p. 138, 164参照.

⁹ 同上,第1巻,2015,p.54.



図3-d パクパ文字・ウイグル文字 モンゴル語 (同第6巻 p.46より)



図3-e モンゴル将軍 (同巻3, p. 171 より)



図3-f モンゴル将軍 (同巻3, p. 172より)

最近、中国大陸の例で、興味深いのは、広東省江門市新会区にある宋元崖門海 戦文化遊覧区である。1276年、崖門に行宮を置いていた南宋の幼主趙昰(端宗) を元が海戦のすえ滅ぼしたのにちなみ、行宮が置かれた場所に作られたテーマ パークである。南宋側の視点で作られている。園の最奥部には、楊太后を祭った 慈元廟、文天祥・陸秀夫・張世傑を祭った大忠祠、宋軍の兵士を祭った義士祠の 三つの真新しい廟宇が並び立つ。その建造の資金を香港・マカオの住民のほかア メリカ在住の華僑が出している(図4-a)。対モンゴル戦争の記憶が、遥かな遠 隔の地にあって当地出身の人々のアイデンティティーの核となっている様が興味 深い。

園内の建物のひとつには、最近描かれたとみられる南宋と元の戦いを描いたパ ノラマ画が展示されている。そのなかの一枚には元軍が大口径の大砲を発射する 絵がある(図4b)。また、入口付近の建物で、海戦の様子を描いた再現CG映像 がスクリーンに流れていたが、その映像中にも元の艦隊が大砲を一斉射撃するさ まが描かれていた(図4-c)。園内の展示によれば、元軍が大砲を使用したことを 含め、海戦の詳細を描くという地方文献のコピーが展示されていた。たしかにそ こには「砲」を使用したとの記述がある。しかし、この「砲」が何を指すのか、 実は難しい問題なのである。

2. マンジャニークと火薬兵器 一軍事技術の東西交流

火薬兵器が世界史において果たした役割については、つとに多くの議論があ る。15世紀以降のヨーロッパ人のアジアや新大陸進出の前提条件として、造船



図 4 -a 宋元崖門海戦文化遊覧区 2016 年 2 月 23 日筆者撮影



図4-c 同 再現CG映像



図4-b 同 パノラマ画

技術、航海技術とならび火薬兵器の改良が挙げられる。またそれ以前の時代に幾度もユーラシアの歴史を大きく動かしてきた騎馬遊牧民の勢力が定住農耕民社会の帝国に対して劣勢に置かれた一要因としても、後者による火薬兵器の導入が挙げられる。しかし、もっとも早く火薬兵器の開発を進めてきたのは中国王朝であった¹⁰。しかもそれを戦争に本格的に導入したのは北方騎馬遊牧民系の政権であった。

ユーラシア東西に跨る史上最大の帝国をうち立てたモンゴル―その最大の武器は、騎馬遊牧民ならではの組織力と機動力であった。しかし、特に中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程では、堅固な城壁に囲まれた都市の攻略が必要となり、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された¹¹。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地

¹⁰ Jerry H. Bentley, Old World Encounters: Cross-cultural Contacts and Exchanges in Pre-modern Times, Oxford University Press, 1993, pp. 181-184; Needham, Joseph. Science & Civilization in China, Vol. 5: Chemistry and Chemical Technology, Part 7: Military Technology: the gunpowder epic. New York: Cambridge University Press, 1986; テンプル, ロバート著, ジョセフ・ニーダム序文, 牛山照代 訳『図説 中国の科学と文明』河出書房新社, 1992, 改訂版2006, pp. 380-387 (原著Robert Temple (Foreword by Joseph Needham), The Genius of China: 3000 Years of Science, Discovery & Invention, Patrick Stephens Ltd., 1986; Carlton Publishing House, 2006).

¹¹ 蕭啓慶「蒙元水軍之興起与蒙宋戦争」『漢学研究』第8巻第2期 (16号), 1990, 177-200; 向正樹「蒲寿庚軍事集団とモンゴル海上勢力の台頭」『東洋学法』89 (3), 2007, pp. 80-82.



『集史』アラビア語写本に描かれる平衡鍾型投石器 エディンバラ大学図書館蔵 図5 $(https://en.wikipedia.org/wiki/File:MongolsBesiegingACityInTheMiddleEast13thCentury.jpg\ \pounds \ \mathcal{Y})$ 2017年7月10日閲覧)

の様々な技術(と技術者集団)を吸収していったことが知られる12。それは軍事 技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の 火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など 様々な面から考察してみたい。

モンゴル帝国が征服戦争の過程で、中東で改良された平衡錘型投石器マンジャ ニーク(図5) のような攻城兵器など、新しい軍事技術の導入に積極的であった ことはよく知られている13。マンジャニークはもともとの意味は投石機である。 いかにより大きな巨石を飛ばし、ユーラシア大陸の都市に一般的な堅固な城壁を 破壊するか、を主たる使用目的としている。『集史』には、1258年のフレグ軍に よるバグダード攻めの際、周辺の山から石をあつめ投石機で飛ばし城壁に穴をあ けた記述がある。巨石を飛ばせるマンジャニークがバグダード陥落の決め手で あった。

ところが、実はこの戦役に火薬兵器が使用された事実も無視できない。しか も『集史』によればそれは中国由来のものであった。『集史』フレグ・ハン紀に よると、1251年、第4代皇帝モンケが、弟フレグにバグダード遠征を命じた際、 中国から三種類の兵器を扱う技師1000名を派遣させている。それらは扱う兵器 の種類によってManjanīqī, Naftandaz, Charkhandazとペルシャ語で記されてい る¹⁴。それぞれ、ペルシャ語で「Manjanīg を扱う者」、「Naft を投射するもの」、

¹² 松田孝一「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」「平成12~13年度科学研究費補助金基盤研 究(B)(1)研究成果報告書碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎 的研究』(研究代表者: 松田孝一; 課題番号: 12410096), 2002, pp. 171-200.

¹³ 杉山, 1992, p. 237;1995, p.177

¹⁴ コンスタンティン・ムラジャ・ドーソン著, 佐口透訳注『モンゴル帝国史』4 (東洋文庫235) 平凡社, 1973, p. 138; 拉施特主編, 余大鈞訳 『史集』 第3巻 (漢訳世界学術名著叢書) 北京: 商務印書館, 1997, p. 138; Фазлаллах Рашйд ад-Дйн, Джами ат-таварйх: критический текст А.А. Али-Заде, Москва: Изд-во Наука, 1965, Persian text, p. 22.

「Charkh を投射するもの」を意味する。Manjanīg は先述のマンジャニークであ り、Naftはもともとは石油を意味する語であるが火薬の意味もある。Charkhは 火箭(所謂ロケット)のようなものであろう。従来これらは、「石・石油・槍を 投射する…」とか「砲手・火炎放射手・弩手」とか解されている。

モンゴル帝国時代の用例については、Naftを石油と解するのが一般的である。 それはアラビア語やペルシャ語の話される世界においては正しい判断かもしれな いが、石油におとらず火薬が兵器として使用された中国にもその用例は通じるか どうかは大いに再考の余地がある。例えば、イブン=バットゥータ旅行記に、中 国ジャンクの搭乗者としてNaftを投げる兵についての記述がある。旅行記の訳 注を行った家島彦一氏はNaftについて「石を綿でつつみ石油を浸して点火し…」 と推定して述べている¹⁵。しかし、Naftという語はのちに火薬の意味ももつよう になる。イブン=バットゥータの旅行記は中国ジャンクについて語っているので あり、しかもイブン=バットゥータよりも70年も前に「てつはう」が存在して いることから、Naftを火薬と解する方が正しいと考えられる。

また、バグダード包囲戦のとき、脱出しようとした敵軍への砲撃でブカテムル という将軍が率いる軍が "gawārīr naft" を使う記事がある ¹⁶。 Qawārīr とは、ペ ルシャ語で「フラスコ」や「瓶」を意味し、アラビア語 qārūra (t) (意味は「ガ ラス瓶、くすりの瓶」) の複数形 gawārīr に由来する。「ナフトを何か割れやすい 容器に詰めたもの」だろう。もしnaftが火薬なら、内蒙古や九州で出土してい る陶製の火薬玉だろう (図6)。この火薬玉が旧金朝の華北出身の漢人部隊の武 器であるなら、『金史』にみえる「震天雷」に近いものとみられる。つまり、バ グダード陥落の決め手はあくまでも投石機であったが、「震天雷」に類する火薬 兵器も同様に活躍したということである。

1268年から1273年までのモンゴルによる襄陽攻撃の際、遠征軍首脳の一人ウ イグル人将軍エリクカヤが西域のような強力な投石機があればと考え、皇帝ク ビライがイルカン国(フレグ家)当主アバカに依頼し阿老瓦丁(アラー・ウッ



図6 てつはう 松浦市埋蔵文化財センター

¹⁵ イブン=バットゥータ著, イブン=ジュザイイ編, 家島彦一訳注『大旅行記』(東洋文庫691) 第6巻, 平凡 社, 2001, p. 128; 184, 注163.

¹⁶ Фазлаллах Рашид ад-Дин, 1965, Persian text, p. 57.

ディーン)と亦思馬因(イスマーイール)が中国に派遣され¹⁷、襄陽の城壁を破 壊した。

中国には火薬兵器の震天雷があったが、マンジャニークほど強力な投石機がな かった。逆に西にはマンジャニークはあったが火薬の弾丸をそれで飛ばすという 発想がなかった。それぞれの足りない部分を補うように融通させた柔軟さと構想 力こそが、ユーラシア世界帝国を築いたモンゴルの真骨頂ということができる。

3. 二種類の火薬兵器と「砲」のジレンマ

モンゴル帝国(元)の時代は早くから火薬兵器を発達させ使用してきた中国に おいても、おそらくはそれが戦争に広範囲に投入されたという点で画期に当たる 時代とみられる。この時期の火薬兵器使用についての記述は、漢文文献のなかに おそらく豊富にある。しかし、それがどのような形態のものだったのか特定する のは難しい。元の時代に「砲」と呼ばれていたので、実物の存在が確認できる火 薬兵器には、以下に述べるように陶製爆弾と金属管形射撃性火器の二種類がある こと、その組み合わせが幾通りか考えられること、これらを指す漢語がはっきり しないこと、などの問題があるからである。

漢語において古くから火薬兵器を指す文字として「砲」(のちに「炮」)が使用 されてきた。「砲」は本来「礟」と書かれ、巨石を投じる機械を指し、火薬兵器 登場以前の『後漢書』袁紹伝に用例がある。石へんが意味を表し、つくりの「包」 が音を表す (一説には轟音を表現するという)。これがおそらくは金~元にかけ ての時期に火薬兵器を指す字となった。博多湾や伊万里湾で実物も発掘されてい る火薬兵器の「てつはう」の漢語表記もそれであろう。ところが、同時にこの 時期には先述の投石機マンジャニークが「回回砲」と呼ばれていた。そのため、 個々の用例で「砲」がどちらを指すのか、にわかには判然としない。しかし、考 古発掘の成果を踏まえつつ、文献の用例を子細に分析することで見えてくること もあろう。そこで以下にいくつかの仮説的考察を加えてみたい。

a. 陶製爆弾

「てつはう」とは、直径15センチ、陶製の球形の器に火薬を詰め爆裂させたもの である。1281年の日本遠征の際、4千隻のモンゴル軍船が沈んだとされる長崎県 松浦市鷹島沖海底からは、胄や矢束など多くの遺物とともに「てつはう」が発見 された。海底からの遺物は外部を覆う貝殻のせいで形状を判別しがたいことが多 く、また、金属遺物は錆と貝殻が厚く固着し、元の形状を探るために、三次元立 体像を高速・高出力で撮影できるX線CTスキャナーが活用されている。鷹島か らは内容物が残る「てつはう」も見つかり、X線CT調査によると、内部に短冊

^{17 『}元史』巻128, 阿里海牙伝, p. 3125 (中華書局); 同巻203, 工芸伝, 亦思馬因, p. 4544 「亦思馬因, 回回氏, 西域旭烈人也. 善造砲, 至元八年與阿老瓦丁至京師. 十年, 從國兵攻襄陽未下, 亦思馬因相地勢, 置 砲于城東南隅, …」;蘇天爵『元朝名臣事略』巻2, 丞相楚国武定公(阿里海涯), p. 33 (中華書局) 「九年, 公 請以西域礟攻樊城…」

状に割った鉄片、陶器片様のものが詰められていることが確認された。鉄片には 気泡があり鋳鉄が使用されていることが判明する。これらが火薬の爆裂と同時に 破砕・飛散して強い殺傷能力を実現していたと考えられるという。口付近には繊 維質の痕跡がみられ、導火線あるいは有機物の内蓋があったと考えられている¹⁸。

日本遠征に「てつはう」を投入した皇帝クビライの時代、元軍が火器部隊を活用した記述は少なくない。漢人将軍の張栄の子君佐は南宋平定戦で、「火砲」を使用しているし¹⁹、先述のナヤンの乱でも、元軍の李庭が決死隊に「火砲」をもたせて夜襲をかけ自爆し、敵を大混乱に陥れる記事がある²⁰。また、元が南宋の残党を滅ぼした崖山の戦いで、南宋の艦隊に対し、「砲」を用いる策が検討されていたという記述がある。この提案に対し、「砲」を用いても「火起これば則ち舟散ず.戦うに如かず.」という反対意見があったことが記されている。それに続く戦闘のシーンでは、「弧弩火石交作」したと描写され、海戦での火器の使用を裏付ける²¹。

b. 金属管形射擊性火器

さらに、驚くべきことに、近現代の銃や大砲の祖形とみられる金属管形の射撃性火器までもが、モンゴル帝国軍によって広く用いられていた。中国の学界では「火銃」などと書かれる銅製・鉄製のこうした兵器は、宋代の竹筒を用いた「火筒」のようなものから派生して中国で独自の発展を遂げ、明代に広範に用いられていたことが従来知られていた 22 。だが、現在中国にはすでにおそらく 10 をゆうに超える数の「火銃」が元代のものと推定され、博物館などに展示・収蔵されている。近年、内蒙古蒙元文化博物館が収蔵するパクパ文字で大徳 2 (1298)年の銘が刻まれた全長 $^{34.7}$ センチ、口径 10 センチの銅火銃が本物と認定され(図 7) 23 、これまで紀年をもつもののなかで最古のものとされていた中国国家博物館



図7 パクパ文字大徳 2年銘銅火銃 内蒙古蒙元文化博物館

¹⁸ 今津節生「4. 長崎県松浦市鷹島海底遺跡出土品のX線CT調査」「蒙古襲来, 元の軍船からみえてくるもの」 (鷹島神崎遺跡国史跡指定紀念シンポジウム要旨集), 2013, pp. 287-300.

^{19 『}元史』巻151, 張栄伝, p. 3582.

^{20 『}元史』巻162, 李庭伝, p. 3798.

^{21 『}元朝名臣事略』巻6, 元帥張献武王, 中華書局本, p. 106.

²² 劉旭『中国古代火薬火器史』鄭州, 大象出版社, 2004, p. 31,53.

²³ 鐘少異, 斉木徳·道爾吉, 硯鴻, 王兆春, 楊泓 「内蒙古新発現元代銅火銃及其意義」 『文物』 2004年11月 (総第582号), pp.65-67+3 plates.

蔵の至順3(1332)年の紀年の銅火銃に代わり最古のものとなった。

この銅火銃は元の上都遺跡周辺の牧民の家で発見されたという。おそらくは上 都守備隊のものと推定される。大徳2年というと、クビライ政権末期に帝国を揺 るがしたチンギスの弟の一族であるナヤン、カダアンの反乱が収束してから6年 後であり、元はまだ東部モンゴリア方面への警戒を解くことができず、火器部隊 を配置し睨みを利かせていた可能性もあろう。

c. 船上での火薬兵器使用?

1984年、中国山東省登州港の蓬莱水城で三艘の古船が出土した。その中の一 艘は残長が28.6メートル、残幅5.6メートルであり、全長32.2メートル、幅6メー トルの中規模戦船であるとみられ、元代末期か明初のころのものと推定されてい る。この古船とともに、石弾、「銅砲」、「鉄砲」が出土したという²⁴。火銃を使用 した海戦が想定されていたとすると、火器を装備した軍船が中国に現れていたこ とを示唆する驚愕すべき例である。

おわりに

以上、火薬兵器を中心として、日本におけるモンゴル帝国像の変化、そして、 軍事技術からみたモンゴル時代のユーラシア交流について、見てきた。モンゴル 帝国の火薬兵器使用の技術史的な考証も重要ではあるが、本稿で注目したいの は、明治と現代日本の元寇イメージの対比において、火薬兵器がひとつの鍵とな るのではないか、という点であった。

湯地丈雄らは、『元寇』結論において、中央アジアの地、トルキスタンなどが チンギスカンの脚下に屈したのは、忠臣義士がいなかったのではなく、「愛国の 心」が足りなかったのであるとし、「我が大日本帝国の人民」は時宗の英断や諸 将の胆勇だけでなく、「愛国の心」がなければ、強敵を挫き、わが帝国の威武を 海外に輝かし、日本男児の勇気を世界に示すことはなかったであろう、と述べて いる25。また、湯地は矢田一嘯の元寇大油絵の画集に付した序に、日清戦争後の 明治30年(1897)、当時の情勢を、「宇内の形勢東洋の危機、益々迫るの秋」と し「今や平和親睦なりと雖も、戦後の警戒、又前日に倍するものあり」と認識し ていた²⁶。その背景には、日露戦争を控え、欧米列強に対抗しつつ国家の生存戦 略を立てなくてはならなかった明治の日本が置かれた状況が色濃く反映されてい る。これはまた今日われわれが置かれている状況ともどこか似かよう。

ユーラシア東方に史上屈指の衝撃をもたらしたモンゴル襲来の記憶は、漫画か ら、TVドラマ、映画など表現の場が広がっていくなかで、今後、どのようなイ ンスピレーションを人々に与え続けるのだろうか。日本をとりまく極東情勢が不

80

²⁴ 席龍飛『中国造船史』武漢:湖北教育出版社, 2000, p. 210; 山東省文物考古研究所, 煙台市博物館, 蓬莱市文物局『蓬莱古船』北京: 文物出版社, 2006: 彩図 20, 41, 図版 4.

²⁵ 太田, 2009, p. 106.

²⁶ 太田, 2009, p. 128.

透明さを増すなか、中国の経済大国化や海洋進出は話題となりやすい。世界史的に見れば、中国シーパワーの拡大は、明の鄭和から実に600年ぶりの現象である。外洋艦隊の運用という意味では、「鄭和による大航海はモンゴル帝国の海洋政策の続きである」といわれる²⁷。鄭和の大航海のときには日本列島は巻き込まれていないが、モンゴル襲来のときには対馬や博多などが戦場となった。漫画『アンゴルモア』で描かれるハイテクの象徴としての火薬兵器は、およそ730年ぶりに先進的な軍事大国として海上に台頭する隣国への畏怖のシンボルなのであり、人々の不安な心理を代弁している、というのは考えすぎだろうか。

矢田一嘯のパノラマ画においては、残虐性が誇張されて描かれ、モンゴル襲来の恐怖にみちたイメージが形作られていた。しかし、『アンゴルモア』で、元軍兵士の戦利品の奪い合いなど醜い面が描かれることはあっても、それは日本側の登場人物の裏切りや悪逆非道な行為などよりもひどく扱われているわけではない(そもそもこの作品には、湯地・矢田のような愛国主義的なテーマが与えられているわけではない)。火薬兵器の描写についても、宋元崖門古戦場の再現CGに比べれば控えめですらある。しかし、敵対する他者は、(その非道性を強調することで自己と区別され、それとして認識される以外に)実際よりも強大な力をもつかのように描かれる傾向があるのも常である。日本・ヨーロッパ・イスラーム史料におけるモンゴル軍イメージをはじめ古今東西の歴史記録にそうした例は数知れない、イラクの旧フセイン政権の核疑惑もそうした面をもつだろう。モンゴル軍の恐怖イメージは、紋切り型の誇張表現がリアリティを持たなくなったいま、新型火薬兵器によってしか成立しえないといえるのではないか。

^{27 『}新編高等世界史B 最新版』帝国書院, 2002, p. 147.

指定討論

「モンゴル帝国と火薬兵器 ―明治と現代の『元寇』 イメージ」を受けて

「質問者/チョグト、回答者/向 正樹]

―― (チョグト) 向先生の論文「モンゴル帝国 と火薬兵器 | についてですが、明治時代、それ から現代の元寇に対する日本人のイメージや元 寇の絵画から、近現代の日本人に対する元寇の 影響を紹介するというのが、論文の主要な側面 だと思います。蒙古襲来に関しまして、各国 が、というよりは各国の後世の人がそれぞれ異 なる認識と理解をし、自分なりの解釈や観点を 持っています。主に自分の民族の立場から解釈 することが多いです。したがって、民族によっ てその認知・イメージも異なります。向先生は 主に明治と現代の日本知識人のイメージを取り 上げて解釈してくださいました。大変示唆に富 んだお話で、元寂に関する理解をより一層深め ることができました。これは1点目の感想で す。

2点目としまして、絵の中の武器を考察する ことを通じて、元の時代で使われた火薬兵器を 明らかにし、また史料に基づいた解釈をなさ り、大変興味深く拝聴しました。モンゴル・元 の時代の歴史、とくにモンゴルという国の歴史 を研究する時には、やはり色々な側面から考察 したほうが良いと思います。文化交流や国際化 という面から考えると、非常に興味深い問題だ と思います。モンゴル・元の時代において、世 界の「一体化」や「グローバル化」などの言葉 がありましたけれども、実はこの時期も兵器が 発達する重要な時期だと思われます。向先生が おっしゃいましたように、火薬兵器はこの時期

から徐々に戦場に使われていったと、これは恐 らく問題ありません。先ほど張佳先生もご質問 されたのですが、南宋の時代には、今中国の史 料に記録が残っているのが、1123年李成桂が 銅の火薬兵器を使ったという、これは最初の記 録です。それから、『金史』にも管の形をした 火薬兵器の記載があります。金と宋が対陣する 時には火薬兵器も少し発展しました。しかしそ の時の火薬兵器とは主に竹製と木製のものだっ たので、製造技術も発達していなかったし、あ まり使うのに便利なものではなかったのです。 元以降は、宋、金の基礎を踏まえて金属製の火 薬兵器を作り出したわけです。記載から、火銃 という名前で呼ばれていたことが分かります。 金属で作られた火銃の出現は、当時対陣する双 方にとっても、当時の戦争においても非常に重 要な転換点だと思います。

ですから、モンゴル・元の時代における科 学技術の進歩ということは見逃してはいけま せん。モンゴル・元の時代の科学技術につい て、例えば中央アジアの天文学、アラビアの数 学など色々な学問が導入され、また発展してい ました。これが我々の注目すべきところだとい うふうに考えています。そういう意味では、向 先生の研究は大変興味深い内容だったと思い ます。先ほど元代中後期になって火銃が戦場 で使われるようになったとおっしゃいました が、朱元璋と張士誠の戦いで使われたとの記載 は確実にあります。当時、ヨーロッパでは確

か、そのような武器はまだなかったのではない かと思いますが、人類の歴史においても大変重 要な発明だったと思います。

最後に一つ質問をしたいと思います。元の大徳2年に、火銃が現れました。写真も見せてくださったのですが、内モンゴルの蒙元文化博物館が収蔵するこの銅の火銃ですけれども、内モンゴルの蒙元文化博物館はどこにあるのでしょうか。どのようにこの火銃を手に入れたのでしょうか。教えていただけませんか。

-- (**向**) 質問から答えたいと思いますけれど も、実は私はこの博物館へは行ったことがあり ません。2004年ごろだったでしょうか、北京 大学にこの博物館の展示品が来て展示されてい たんです。そのときの紹介では、この蒙元文化 博物館というのは民間の方が出土したものをい ろいろと集めていて、だからあまり考古学的に はっきりといつのものとか、どこから出てきた かというのがわからないものが多かったんです ね。そのあと、たぶん内モンゴルの先生が、こ れらの銘文を読むなどの研究をされて、文物を 紹介されたという、それしか私は知りません。 ただ、内モンゴルの蒙元文化博物館、民間の博 物館があるということで、確か数年前NHKの 取材班も見に行ったという話を聞いてはいるん ですが、私自身どこかというのははっきり把握 できていないのです。

―― (チョグト) 少し補足しますが、実は今年、内モンゴル大学のある学生も元の兵器についての修士論文を書きました。その論文の中でも同じくこのことに触れました。彼も大徳2年の銅の火銃を例として取り上げたのですが、その火銃の出所やそれ以上詳しいことは調査していませんでした。どこから来ているのか言っていませんでした。それに関する信憑性の高い史料の証拠は無いのか興味を持って、ということでお聞きました。以上です、ありがとうございました。

発表論文 6

朝鮮王朝が編纂した 高麗史書にみえる 元の日本侵攻に関する叙述

孫衛国

南開大学

[原文は中国語、翻訳:宋剛(北京外国語大学)]

朝鮮王朝は建国初期から、編年体で『高麗史』を編纂しようと努力を重ね てきたが、実現できなかった。李朝世宗の勅命により、高麗朝の歴史を紀伝 体で編纂し、139巻の『高麗史』を仕上げ、朝鮮王朝に正統性を付与した。 『高麗史』における元の日本侵攻に関する記載は、高麗の自主性を強調し、 高麗が元王朝の要求に巧妙に対応したことを表わし、高麗が提供した軍隊の 食糧、人力などを細かく記録している。そして、高麗を裏切って元王朝に投 降した高麗人を「反人」と見なして、「叛逆伝」に収めたことからは、高麗 が宗藩関係のもとで独立自主を求めようとした意識と努力が伺える。『高麗 史』章節「忠烈王世家」と「金方慶伝」には、元の日本東征の歴史について 類似の記述がある。高麗の将軍は戦争の勝負を左右する肝心な人物である が、モンゴルの最高司令官は専断的であり、他人の意見を聞かず、ひたすら 自分の意見を通そうとした。その上、「暴風雨」に遭って東征を失敗に導い た。『元史』と日本史書と比べて、『高麗史』に見える元の日本東征に関する 記述は極めて偏っている。東アジア三国の歴史事件に関して、「一国史」の 枠から抜け出し、「東アジア史」の目線から考査してから初めて、歴史の真 相に近づくことができる。

はじめに

至元十一年(1274)と至元十八年(1281)に、フビライは二回にわたって日 本遠征に踏み切った。これは近世東アジアにおける歴史上の一大事件であり、後 世に深刻な影響を与えた。元の藩属国として、高麗王朝は元の日本遠征において 重要な役割を果たした。元は高麗に日本遠征のための造船や物資の用意を強要し

た。同時に、高麗王朝も元と協力し、遠征軍を派遣した。朝鮮王朝の鄭麟趾によって編纂された『高麗史』での関連記載は、高麗王朝が日本遠征で果たした役割を考査する上での肝心な資料であり、また朝鮮王朝の遠征に対する見方を検討する上で肝心な根拠である。『高麗史』に見える日本遠征に関する記述は「元宗世家」、「忠烈王世家」、「兵誌」や「金方慶伝」などの章節で散見される。内容はバラバラだが、詳しく分析すれば、日本侵攻の理解に繋がると思う。また、戦争時、元の要求に対して行われた高麗の巧妙な対応を分析することにより、元王朝と高麗の宗藩関係の特徴を明らかにしたい。

1. 朝鮮王朝が『高麗史』を編纂した意図と経緯

1392年、李成桂は高麗の幼い王から高麗王位を簒奪して高麗王を称した。朝鮮王朝の正統性を確立するために、李成桂は即位するとすぐさま明へ使者を派遣し、「権知国事」の名義のもとで、「朝鮮」と「和寧」の二つの名前を持ち出し、積極的に明を宗主とする宗藩関係を築こうと努めた。そして、明の太祖朱元璋から「朝鮮」の国号を使うことを許され、李成桂とその臣下は喜んで受け入れた。かつて、箕氏朝鮮が周武王によって朝鮮侯に封じられたという歴史を踏襲して、明王朝の皇帝から冊封を受け、宗主国に承認され、その正統性を確立しようと努めた¹。同時に、建国の初期から、李成桂は高麗王朝の歴史の編纂を最重要の仕事として、本国の歴史から、新王朝の合法性を見出そうとした。韓国の学者が指摘した通り、「高麗時期の史料を整理することで、高麗王朝の問題を指摘した。これらの問題を克服して確立した朝鮮王朝の正統性を体現するだけでなく、新しい統治理念の方向も確立しようとした²」。政治面における要請から、朝鮮王朝も高麗史の編纂を始めた。

最初は編年体で高麗の歴史編纂の仕事を展開した。太祖四年(1395)、李成桂は鄭道伝に『朝鮮王朝実録』などの史料をもとに、編年体の『高麗国史』の編纂を命じ、全37巻の『高麗国史』が仕上がった。今この本は失われている。

「各王朝の実録を集め、検校侍中文仁公閔漬の『綱目』、侍中文忠公李斉賢の『史略』、侍中文靖公李穡の『金鏡録』を集めて編纂する。左氏の編年体を真似て、三年かけて仕上げた。三十七巻である。その書には誤りもたくさんある。大体の内容は、元宗を肯定し、僭越な記載が多いし、後から訂正すべき所がたくさんある³|。

史書の編纂はすぐに完成したが、集めた史料の数が限られたし、且つ当時の李成桂に関する記載は事実に合わないと思われ、「僭越な記載が多い」と批判された。しかし、この本の史論は『高麗史節要』に大量に取り入れられ、後世に伝

¹ 陳尚勝、『朝鮮王朝が明王朝に対する事大観』、『第三回韓国伝統文化国際学術シンポジウム論文集』、済南、山東大学出版社、1999 年、第924ページ。

^{2 (}韓国)朴仁鎬『韓国史学史』、全莹、金錦子、鄭京日訳、香港亜洲出版社、2012年、第55ページ。

^{3 『}東文選』巻93『進高麗史序』、漢城:慶熙大学出版社、1968年。(原文:於是採摭各朝実録、及檢校侍中文仁公閔漬『綱目』、侍中文忠公李斉賢『史略』、侍中文靖公李檣『金镜錄』、彙而輯之。做左氏編年之体、三年而成、為卷三十有七。顧其書、頗有舛誤。至於凡例、以元宗以上、事多僭擬、往往有所追改者。)

わった⁴。そして、後の高麗史の編纂のための基礎を築き上げた。

太宗十四年(1414)、太宗は春秋館事河侖、卞季良などに『高麗国史』の再 編集を命じた。しかし、二年後、河侖はなくなり、再編集の仕事もやむなく 止めさせた。世宗元年(1419)、勅命により、編纂の仕事が再開した。三年後 (1421)、完成した本を国王に捧げたが、依然として世宗の意に召さない。世宗 五年(1423)、世宗は卞季良、柳観、尹淮などに史書の改編を命じた。翌年に、 『讎校高麗史』が完成したが、意見が一致せず、発行できなかった。世宗十三年 (1431)、世宗は監春秋館事申概、権踶に高麗史料を幅広く集め、高麗史を編纂 するようにと命じた。世宗二十四年(1442)八月に、編集の仕事が終わり、『高 麗史全文』と名付けた。世宗三十年(1448)に、この史書は初めて印刷された。 多くの史料を取り入れたが、主旨が明らかではないから、後年、本の発行は停止 した。しかし、この本は『高麗史』と『高麗史節要』の編纂のための、豊富な資 料を提供している5。

最初の数十年間、朝鮮当局は高麗史の編集の為に、全力を尽くしたが、意に適 う史書を得なかった。世宗三十一年(1449)、金宗瑞、鄭麟趾は世宗の命令によ り『高麗史』を再編修し、編年体を紀伝体に切り替えた。『進高麗史箋』に述べ た通り、「凡例は司馬迁の『史記』に従い、大義は皇帝の裁断に準じる。藩国と して名義を示すために、本紀ではなく、世家に編入する⁶」。編年体で編纂する場 合、朝鮮王朝の正統性を確立しにくい。太祖は建国の当初から、編纂の仕事を始 めたが、数代を経て、幾つかの史書を編纂したにもかかわらず、朝鮮国王の意に 適うものはない。紀伝体で再編集するしかない。「歴史に対する批判的分析と構 造性の理解の面で、紀伝体の記述は編年体より有利であるし、朝鮮王朝統治者 が高麗歴史を編纂する目的に当てはまる⁷」。文宗元年(1451)八月に、『高麗史』 の再編修が完成した。全書は目次2巻、世家46巻、志39巻、表2巻と列伝50巻 からなり、合計139巻である。そして、金宗瑞は紀伝体『高麗史』に基づき、編 年体で書き直した。翌年の二月に、『高麗史節要』が完成した。全書、35巻であ る。二冊の本により、高麗王朝の歴史の編修を通じて、朝鮮王朝の正統性を確立 する目的が実現した。

『高麗史』は国王に関する内容を「世家」に編入し、藩属国としての地位を表明 したが、宋、元など中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体 で記述した。これにより、高麗王朝の相対的独立性を表した。高麗王朝は建国し て以来、相次いで五代、宋、遼、金王朝の皇帝の年号を使用していた。高麗の元 宗から、モンゴルの年号を使用したが、忠烈王によって李成桂の政権が覆される まで、元王朝の年号を使い続けた。高麗は中国の諸王朝と付き合ってきた。文化 の面で、高麗王朝は宋王朝を正統としてきたが、宋王朝との宗藩関係は非常に短 い時間しか続かない。そして、宗主国は次々に遼、金と元と変わっていった。高

^{4 (}韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、第55ページ。

^{5 (}韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、2012年、第57ページ。

⁶ 『東文選』巻44『進高麗史箋』(原文:凡例皆法于迁史,大义悉禀于圣裁。避本纪为世家,所以示名分之

^{7 (}韓国) 朴仁鎬 『韓国史学史』、2012年、第56~57ページ。

麗王朝は遊牧民族に建立された中国王朝に対して、政治や軍事の面で臣服しなければいけないが、文化の面では自負を持ち、臣服しなかった。朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』では、歴代の高麗王の記述が天子を意味する「本紀」ではなく、諸侯の歴史をさす「世家」となっている。藩王としての地位を表したが、『高麗史』は、中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体で記述した。この折衷の方法によって、高麗の藩属国としての地位を認めながら、完全には臣服せずに、独立自主の意識を持っているという朝鮮王朝の基本的な認識をはっきりと表明した。以上のように二つの意識の結合は『高麗史』編纂の基調となった。

高宗五年(1218)に、モンゴルの軍隊は契丹の残余勢力を追い掛け、高麗に入り、高麗と公式に接触し始めた。まもなく、兄弟盟約を結び、公式に往来する。モンゴルは何度も高麗に財物を強要したから、高麗は不満を持つようになった。モンゴルの使臣が帰国の途中で殺されてしまい、両国の間で戦争が起きた。1231年から1258年まで、モンゴルは七度も侵攻を行った。高宗四十六年(1259)に、太子王倎をモンゴルへ派遣し、双方が平和交渉を行った。丁度その時、モンゴルの大汗が逝去して、王倎は自らフビライを迎えに行った。フビライは即位し、元王朝を建てた。まもなく、高麗の高宗も逝去した。フビライは王倎を高麗まで送って即位させた。王倎は元宗となり、両国の平和の道を開いた。元宗の時代から、フビライは高麗の協力のもとで、日本遠征の準備を始めた。朝鮮王朝は高麗を中心に、歴史の編修を始め、その方針を『高麗史』全体に貫いた。だから、『高麗史』における元の日本遠征に関する記載は朝鮮王朝の「モンゴル襲来」の物語である。

2. 『高麗史・世家』における元による 日本進攻の史料の選択や編纂の原則

元が日本遠征を始める前に、フビライは使者を日本へ派遣し、日本と緊密な関係を築こうと要請した。この過程が長く続いた。当初から、高麗王朝はやむを得ず元王朝の日本東征のお先棒を担いだ。『高麗史』の詳しい関連記述には、やむを得ず感や、不満である意識が溢れ、また元王朝の威圧のもとで、高麗王朝が独立した姿勢で本国の利益を守ろうと試みた様子が伺える。高麗王朝を中心に、本国の意識と本国の立場を明らかに表明することは『高麗史』編纂の基本的な原則である。主に次の面に表われている。

まず一つ目。戦争の準備段階で、元王朝の理不尽な要求に対し高麗がやむを得ず対応したことを全面的に記述している。

元宗七年(1266)、日本遠征の前に、フビライは高麗を経由して使者を日本へ派遣した。高麗人趙彝の密告によって、フビライは高麗と日本の頻繁な往来を知り、使者黒的、殷弘を高麗へ派遣した。そして、使者に持たせた詔書によれば、フビライは高麗に使者と同行するように命じ、命令に違反した場合、元に対する忠実を疑うしかないと脅かした。高麗はやむを得ず、枢密院の副使宋君斐、金賛などを黒的に同行させた。しかし、日本へは到達しなかった。元宗八年(1267)

正月に、宋君斐、金賛とモンゴルの使者は巨済松辺浦に着き、「荒波を恐れて」 帰った。元宗は宋君斐に黒的と一緒に元王朝へ復命に行き、皇帝に上奏するよう に命じた。上奏書は幾つかの意味を含んでいる。第一は、使者が日本へ到達でき なかった理由について説明する。荒波はきわめて険しいので、使者の安全が懸念 された。また、日本人が「頑固で粗野で礼儀知らず」、モンゴルの使者の安全を 保証できないから、途中で帰るしかない。第二は、元王朝の皇帝が趙彝の話を聞 き、高麗と日本が緊密に往来していると信じていることについて弁明した。とく に「且つ日本は、素より小邦と末だ嘗て通好せず」と強調し、但し対馬島の人 が、時に貿易によって、金州に往来するのみであり、それ以外の日本人と一切往 来したことがないから、趙彝の進言はうそである。第三に、元王朝の世祖が即位 して以来、高麗は深く世祖の仁恤を蒙り、深く心に刻んでいる。「聖恩は天大に して、誓いて報せんと欲す。如しなすべきの勢いありて、心力を尽さざらんに は、天日の如きものあり⁸」。少しでも恩返しできればと願っている。これは決意 を表す上奏書であり、高麗が責任から逃れるために、弁明する為の上奏書でもあ り、外交辞令を羅列したものである。モンゴルは初めて日本へ使者を派遣するこ とは空振りに終わった。当時高麗はこの件に興味がなく、いい加減に済ましただ

モンゴル側も高麗の口実がよく分かった。八月一日、黒的、殷弘及び宋君斐な どが罪を問う勅命を持って再び高麗を訪れた。フビライは勅命において、高麗の 責任を逃れるための計略を指摘し、高麗のいい加減な態度と不誠実さを非難し た。「天命は諶を難んじ、人道は誠を貴ぶ。卿は先後食言すること多し。宜しく 自省すべし9」と高麗を厳重に警告した。さらに、フビライは日本へ使者を派遣す る決意を強く表した。「必ず要領を得るを似て期となせ10」、必ず結果を出すまで 諦めない決意を表した。最後に、高麗の「誓いて報効せんと欲す¹¹」という言い 方に対して、今こそ報効すべき時だと指摘した。元王朝が硬軟両方の手段を用い たから、高麗はやむを得ず、使臣を日本へ派遣し、日本遠征のお先棒を担ぐしか ない。

数十日を経て、高麗国王元宗は起居舎人の潘阜を遣わし、蒙古書および国書を 持って日本に向かわせた。蒙古書に曰く、「高麗は朕の東藩なり。日本は(高麗 に)密邇し、開国より以来、また時に中国に通ずるに、朕の躬に至りて、一乗の 使いの似て和好を通ずるなし。尚お恐る、王の国のこれを知ること、末だ審かな らざるを。故に使いを遣わし、書を持して、朕の志を布告せしむ。冀わくは、自 今似往、通問して好みを結び、似て親睦せん。且つ聖人は至りては、夫れ、孰れ か好む所ぞ。王、それ、これを図れ¹²」とのたまう。フビライは日本と使者を派

88

⁸ 鄭麟趾『高麗史』巻26 「元宗世家二」、元宗八年正月癸丑。台北:荘厳文化事業有限会社、1996年(聖 恩天大、誓欲報効、如有可為之勢、而不尽心力有如天日)。

⁹ 原文:天命难谌. 人道贵诚. 卿先后食言多矣. 宜自省焉。

¹⁰ 原文: 以必得要领为期。

^{11 『}高麗史』巻26 「元宗世家二」、元宗八年八月丙辰。

^{12 『}高麗史』巻26 「元宗世家二」、元宗八年八月丁丑。(原文:高丽,朕之东藩也:日本密迩,开国以来,亦时 通中国,至于朕躬,而无一乘之使以通和 好,尚恐王国知之未审,故遣使持书布告朕志,冀自今以往,通问结好, 以相亲睦。且圣人以四海为家,不相通好,岂一家之理哉!以至用兵,夫孰所好,王其图之)。

遣し合うという願望を表し、日本に通好を願う国書を出して貰いたいという願望を伝え、「似て親睦せん」。もし日本が元の要求を無視したら、元王朝は軍隊を派遣すると脅かした。同時に、高麗も日本に国書を奉じ、モンゴルに対する見方を伝え、日本に元王朝の皇帝に臣事することを勧めた。よって、元王朝と日本は往来しなかった上に、お互いもよく知らないが、フビライは高麗国王を通じて、日本に使者を派遣し合うという要請を伝え、両国の間で友好関係を構築しようとする意思を表した。高麗国王は両国の媒介にはなりたくないが、モンゴル帝国の高圧のもとで、やむをえずモンゴル帝国の皇帝フビライの詔書と高麗の国書を日本へ送り、使者を派遣し合うように要請した。モンゴル帝国は日本に使者を派遣し、好意を表したが、日本は取り合わなかった。その後、フビライは再び使者趙良弼を日本へ遣わした。

このように『高麗史』の「元宗世家」では、高麗がモンゴルの威嚇を受け、日本へ使者を遣わした史実は詳しく記述されている。その史実には、高麗のやむをえず消極的な態度が隠れている。そして、文章の中には、モンゴル帝国の威力が明らかに表われている。関連の評論がないにも関わらず、幾つかの詔書から、元王朝の威嚇が明らかに伺える。即ち、朝鮮王朝の史官がこの歴史を記述する時に、表した嫌悪の情である。実際に、高麗の使者を通じて伝えたのは単なる前ぶれであり、フビライの日本に対する野心は使者往来に止まる訳がない。

元宗十二年(1271)正月に、「モンゴルは日本国信使秘書の趙良弼及び忽林 赤、王国昌、洪茶丘など四十人を遣わした¹³」。そしてフビライの詔書を持って きた。彼らはモンゴル帝国が高麗を経由し、日本へ派遣した最初の使者団であ り、実際に二回に分けて派遣されている。一回目は、趙良弼を国書使者として日 本へ遣わし、そして趙良弼は高麗の「寵臣」康允紹を同行させた。二回目に、忽 林赤、王国昌、洪茶丘などは予備使臣として、兵士を率いて海上で待機した。注 意すべきなのは、もともと洪茶丘は高麗人であり、彼の父がモンゴルへ帰服した から、彼はモンゴルの将軍になった。史料の中に、洪茶丘が郊外へ迎えに行った 高麗国王元宗を見ても「拝謁しなかった¹⁴」ことを特筆した。即ち、洪茶丘が臣 下として国王へ拝礼しなかった。この件を取り上げ、洪茶丘の傲慢な態度をよく 表し、高麗君臣と朝鮮の史官の不満を引き立てた。

日本がモンゴルの使者派遣の要請を取り合わないから、モンゴルは軍隊派遣の 準備を開始した。出兵する前に糧秣を準備しておくべきである。糧秣を準備する ために、忻都は軍隊を率いて高麗へ屯田した。そして、高麗に協力してもらい、 三千匹の牛、農耕機具や種などの用意を求めた。その後、高麗は殿中監郭汝弼を 派遣し蒙古へ陳情書を提出した。モンゴルに困窮を訴え、要求を一つずつ断っ た。

中書省から公文書を承り、元軍が鳳州に屯田し、農耕用牛、器具、種や軍隊用食糧の準備の命令を受けた。農耕用牛は、前に上奏した通り、弊国の都

^{13 『}高麗史』巻27 「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

^{14 『}高麗史』巻27 「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

には家畜を農耕に使う人が殆どいない。他の地域には家畜を飼う農耕民がい るが、多くても一か二匹に過ぎない。貧乏な人は大抵農具(耒耜)を以て、 或は牛を借りて耕作する。今、牛等の家畜は、全羅道食糧の運輸のため、餓 死や疲労で大半を失った。元来弊国の農民は多くの農耕用器具を持っていな いが、要求を達成できなくても、出来るだけの数を揃えるように努めた。種 は、農民が毎年耕作して、租税を納めて、食糧とする。……軍隊用の食糧に ついて、弊国の貯蔵した食糧は逆賊に奪われたもの以外、全部駐屯する軍隊 や馬そして討伐の軍隊に提供し、使い切った。国内外からの賦税や徴用は農 民の大負担となり、生計すら問題になったが、さらに、種や餌がたくさん徴 用された。秋に軍隊用の数万碩はどこから調達すべきだろうか15。

高麗が提出した陳情書は、責任から逃れる為に様々な口実を設けて、困窮を訴 えている。『高麗史』では、このような陳情書や、高麗がいかにモンゴルの要求 に対応したかをめぐって重点的に記述した。朝鮮王朝の史官は『高麗史』を編纂 する時も、宗主国の明王朝に同じ感情を抱いた。元王朝に比べて、明王朝は朝鮮 王朝に対してそれだけの物資や食糧を求めてはいなかった。しかし、明朝の初 期、高麗に、毎年処女と火者の貢進を求め、宦官を派遣した。それは当時の朝鮮 王朝にとって、耐えられない大きな負担である16。それゆえ、『高麗史』を編纂す るときも、その史実を重点的に記述し、藩属国としてのやむをえない気持ちを表 しながら、藩属国としての反抗も表現した。その反抗は大した効果を得なかった が、朝鮮王朝が自主意識を持っていて理不尽な待遇に甘んじている訳ではない証 拠である。

陳情書だけでなく、またフビライに朝鮮王朝に対する請求を放棄させる為に、 断事官・沈渾を派遣し、陳情や請願を繰り返していた。

「百姓は皆皇帝の百姓であり、牛、農耕機具、種など全部徴用されて生計 を失ったら、酷い労役を服し疲れきって、苦難に堪えられぬ百姓は餓死する のを恐れている。また、反逆者は豊作であり、愚民たちは反逆者になりかね ない! 陛下ははじめからこんな状況に至るとご存知なら、必ず、なぜはじ めから実情を報告せず、わが百姓をこんな境地に迫るのかと問い詰めるだろ う。今実情を報告しないと、将来誰がその責任を取るだろうか¹⁷。

90

^{15 『}高麗史』巻27『元宗世家三』、元宗十二年正月丙寅。(原文:承中书省牒,凤州屯田,农牛、农器、种子、 军粮等事。若乃农牛,如前表奏,小邦京中鲜有畜使者,外方农民虽产之,饶者畜养亦不过一二头,贫者多以耒耕, 或相赁 牛而使之。今外方牛畜,悉因全罗道粮饷转输,以至饥困,损失者大半。农器,则小邦 人民元来未有赡庀 者,此皆虽不得如数,并当随力供办。种子,则百姓趂年畊作,以修 贡赋用,其余以为粮料。……军粮,则大军之 后,小邦元来蓄积,除逆贼攘夺外,悉因 供亿留屯军马及追讨军马,罄竭无余。中外臣民征敛者累度,犹不连续, 且又泛计种子、蒭秣,接秋军粮凡几万硕,此则何从而致之耶!)。

¹⁶ この問題に関して、陳学霖『明王朝の人物と伝説』を参照ください。香港:香港中文大学出版社、1997

¹⁷ この問題に関しては陳学霖の『明代人物と伝説』、香港: 香港中文大学出版社、1997年。(原文:噫!此 百姓皆是皇帝之百姓, 乃此农牛、农器、种子一皆收夺, 使失其业, 则恐百 姓决定饥死, 其又在此者役烦力竭, 不 堪困苦。而从逆贼者,靡有歉艰,则焉知愚民有 所贰于彼哉!圣鉴若知如此,必曰何不揆力陈实,早达宸所,使我 百姓至于此极?然则谁当任其责?)。

この陳情書から、高麗は全力を尽くしてモンゴルの要求を満たそうとする姿勢を表したが、より重要なのは、百姓を代弁して皇帝に困窮を訴えたことである。 農耕用牛、機具、種など全部徴用されたら、百姓は生計を立てる道がないから、 窮地に追い込まれて、謀反を起こすかもしれない。けれど、「百姓は皆皇帝の百姓である」から、モンゴル皇帝にもそんな事態になってほしくないと信じ、命をかけて陳情し、皇帝に高麗の百姓の苦境を伝える。実際には、再び抗争を表す。

元宗十三年(1272)の正月に、趙良弼は日本から高麗へ戻り、日本の使者十二人を連れてきた。高麗の国王元宗はすぐに、報告と祝賀のために使者を大都へ派遣した。同年の十二月、元は再び日本に帰順を説得するために趙良弼を派遣した。しかし、一回目ほどうまくいかなかった。元宗十四年(1273)三月に、趙良弼は日本の太宰府を訪れたが、都に入ることは許可されないから、再び高麗に戻るしかなかった。モンゴルは使者を日本へ派遣すると同時に、忻都と洪茶丘がモンゴルの軍隊を率いて元宗十四年(1273)四月までに、三別抄に占領されていた朝鮮半島東南沿海の諸島を占拠し、珍島、耽羅を平定し、日本遠征の準備を行った。討伐の経緯は「忠烈王世家」に簡略に記述されている。

一回目の日本遠征にあたり、高麗は受動的に元王朝の要求に対応せざるを得なかった。二回目の日本遠征に当って、高麗の国内は積極的に参加し、その意思決定に加わろうと試みて、出来るだけモンゴルの将軍の権限を制限し、高麗への影響を最小化する。二回目の日本遠征を決定する時に、高麗の国王忠烈王は大都にいって自ら皇帝の命令を受けた。『高麗史』に意思決定の過程は次のように書かれている。

忠烈王は七つの希望条項を上奏した:一、我が軍は耽羅を鎮戍(鎮守)する兵を以て、東征を補うこと;二、高麗、漢の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てること;三、洪茶丘の職任を加えず、臣も亦、征東行中書省の事を管轄すること;四、小国の軍官、みな牌面(勲章などの類)を賜ること;五、漢の地浜海の者を梢工、水手に充てること;六、按察使(地方行政監察官)を遣わして、百姓の疾苦を見させること;七、臣が自ら合浦に到って、軍馬を閲送をすること¹⁸。

よって、高麗の国王は日本遠征に参加することを非常に重視し、大臣を皇帝に 拝謁させ、自ら東征の命令を受けたいと上奏してもらった。他の臣下を通して勅 命を受けるのではなく、直接に命令を受けることで、主導権を握ろうとした。戦 略の制定と軍隊の派遣について、忠烈王は七つの希望条項を上奏した。一方で、 高麗、漢の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てると要請した。船員も高麗の兵 士に頼るのではなく、漢の地浜海の者を梢工、水手に充てることにより、高麗王 朝の責任を減少する。そして、洪茶丘の権限を抑制し、洪茶丘の職任を加えない

^{18 『}高麗史』巻29 「忠烈王世家二」、元宗六年八月辛卯。(原文:王以七事请:一以我军镇戍耽罗者,补东征之师;二减丽汉军,使阇里帖木儿益发 蒙军以进;三勿加洪茶丘职任,待其成功赏之,且令阇里帖木儿与臣管征东省事;四小 国军官皆赐牌面;五汉地滨海之人并充梢工水手;六遣按察使廉问百姓疾苦;七臣躬至 合浦阅送军马)。

と要請した。高麗の国王と洪茶丘は犬猿の仲であるからだ。高麗の国王は阇里帖 木儿とともに日本遠征を担当すると要請した。忠烈王の意図は明らかであり、日 本遠征において、他人に牽制されたり、日本遠征のため、政敵に権力を握られ、 高麗の国政に影響を与えたりするようなことを避けるために、忠烈王は主導権を 握ろうとした。『高麗史』はそれに重点をおいて記述している。フビライは忠烈 王の希望条項を採用しなかったが、忠烈王の意見は重視した。九月丙辰、モンゴ ル日本遠征の軍隊を拘束する為に、遠征の元帥府鎮撫也速達齎が来た。「その一 ……本国の食糧の貯蔵、梢工、水手、一切の軍隊の需要などは、それぞれの人に 担当させ、下された命令通りに用意させた。失敗を起こさず、徴用されるのを待 つ。その一、取り扱う人の中に、国法を恐れず、放火し食糧を焼き尽くした人が いる恐れがある。食糧は大事であるから、それぞれの人に担当させることで、関 連規定を公布し、違反する場合は、担当者の罪を問う19」。皇帝は忠烈王が提出 した七つの希望条項に応えて、日本遠征の将軍たちの行動を拘束し、高麗への悪 影響を避ける為に、この二つの規定を出した。『高麗史』にモンゴルの日本遠征 の軍隊がもたらす危害は詳しく記述されていないが、忠烈王が第二次日本遠征ま でに行った積極的な行動から、日本遠征がもたらす危害が伺える。忠烈王が高麗 への影響と危害を防ぐ為に積極的に行動を取り、ようやく報われた。

戦争準備の段階において、最初高麗王朝はやむを得ずモンゴルの要求に応え、 巧みに対応し、困窮を訴えたが、第二次日本遠征の前に、高麗の国王は積極的に 対応し、主導権を握るために行動を取った。これらの行動や変化は『高麗史』に 詳しく記述されている。そこから高麗王朝が宗主国の元王朝に対する抗争やお茶 を濁す態度が伺える。また、高麗王朝が独立自主を獲得しようとする意志が明ら かである。

次に二つ目。高麗は戦争のために大量の人力、食糧、馬の餌などを消耗した。 それが高麗にさまざまな困難を齎したことは『高麗史』に詳しく記述された。

前述したように、高麗王朝は元王朝のさまざまな要求に対し、口実を設けて いい加減に対応した。『高麗史』は高麗のやむを得ない立場を表現しようと試み た。高麗が消耗した物資、直面する困難、日本遠征のために作った戦艦、そし て、消耗した人力、食糧、馬の餌などが一々記述され、元王朝の日本遠征のため に払った対価もよく表した。例えば「(元宗) 十五年の春正月、元は総管察忽を 派遣し、三百艘の戦船の建造を監督した。すべての人々を徴用対象とし、高麗の 担当者にすべてを任せる……徴用や監督が厳しく行われる……交州道で部夫を任 命し、職人など三萬五千人あまりを徴用させ、造船所に派遣する。当時、駅站に 往来する人が後を絶たず、徴用等の負担が大きく、期限が迫っている。人々を苦 しませる 20」。元宗十五年(1274)二月甲子に、高麗王は別将李仁を派遣し、元 王朝に準備の状況を報告させる。今までの準備、消耗した食糧、些細なことまで

^{19 『}高麗史』巻29 『忠烈王世家二』、元宗六年九月丙辰。(原文: 其一……据本国见管粮储船只梢工水手, 一切军须,请照验行下合属,如法准备,听候区 用,勿值临时失误。其一,经行去处,窃恐不畏公法之人,放火烧 草,事系利害,请照验行下合属,出牓禁约,如违,罪有所归)。

^{20 『}高麗史』巻27 『忠烈王世家三』、元宗十五年正月。(原文:(元宗)十五年春正月,元遣总管察忽监造 战舰三百艘,其工匠役徒一切对象,全委本国应副…… 兴役催督甚严……于交州道各为部夫,使征集工匠役徒 三万五百余名,起赴造船所。是时, 驿骑络绎,庶务烦剧,期限急迫,疾如雷电,民甚苦之)。

全部皇帝に上奏し、特に高麗が直面する困窮を表明し、さらに百姓の困窮を訴え、最後に「毎年の徴用と税収は相次ぎ、期限もなく、人々はどうすることもできない! 百姓に同情し、税収等を減免し、子孫後代を恵ませる²¹」と懇願した。 減免を懇願し、民力を養うことにより、百姓を苦境から脱出させようとした。

高麗はよく元王朝に経済のことを報告した。高麗は常に提供した食糧の数を元王朝に報告し、一つ一つきちんと整理した。忠烈王三年(1277)に、高麗は使者を派遣し、中書省に上書し、「弊国は元七年以来、珍島、耽羅を討伐し、東征大軍の食糧は百姓に徴収し、そして、合浦鎮辺軍、耽羅防守軍隊、塩白州帰順の軍隊と闊端赤のために、一年間食糧一万八千六百二十九石二斗を提供し、また牛や馬の餌を三万二千九百五十二石六斗も提供した。すべては元の測量単位斗で計算する。全部を百姓から徴収した。今度屯田軍の三千二百石の食糧と闊端赤の食糧はどこから徴収すべきでしょうか!²²」。特に、「すべては元の測量単位斗で計算する」を特筆した。高麗がこれらの食糧を非常に重視する姿勢が伺える。一回目の日本遠征のために、高麗が集めた食糧である。二回目の日本遠征にあたって、食糧を集めるために、様々な方法を講じた。上記の内容は『兵誌』により詳しく記載されている。

忠烈王三年(1277) 二月に、諸王百官から庶民まで、米を徴収し、洪茶丘軍の食糧に充てる……八年(1282) 四月、東征所用兵隊の食糧は十二万三千五百六十石余りに達した。九年(1283) 二月に、各道に都に転送されていない食糧を全部軍隊の食糧に充てる。三月に、諸王百官及び工商業者、奴隷、僧侶から軍隊食糧を徴収した。諸王、宰枢、仆射米二十石;宰枢、三品の顕官米十五石;宰枢、三品の顕官或は四、五品の文、武官米十石;文武六品、侍衛護軍八石;文官、武官七八品参上解官六石;東班九品参外副使校尉南班九品四石;正雑権務隊正三石;东西散職業中僧一石;白丁抄奴所由丁吏諸司下典独女官寺奴婢十斗;商人七石大户;中户五石;小户三石。唯七十歳以上の男女から徴収してはいけない²³。

この史料には高麗王朝が軍隊の食糧を集める為に、取らなければならない方法が記載されている。第一、この史料から、二回目の日本遠征の間に、軍隊の食糧を集める為に、高麗王朝の国王から、庶民まで皆定量の食糧を徴収し、前線の軍需を確保したことが伺える。第二、日本遠征は高麗社会のあらゆる面に損害をも

^{21 「}高麗史」巻27 「忠烈王世家三」、元宗十五年二月甲子、原文:岁令供给,罔有期限,将无奈何!兹实悯焉! 乞皆蠲免,以惠远人。

^{22 『}高麗史』巻28 『忠烈王世家一』、忠烈王三年二月丁卯。原文:小邦自至元七年以来,征讨珍岛、耽罗、日本大军粮饷,悉于百姓科收,尔后见在合浦镇边军、耽罗防护军、盐白州归 附军并阔端赤,一年都支人粮一万八千六百二十九石二斗,马牛料三万二千九百五十二石六 斗,皆以汉斗计。亦于百姓科收,今者所遣屯田军三千二百并阔端赤等粮料,更于何处索之!

^{23 『}高麗史』巻82 『兵志二』(原文: 忠烈王三年(1277)二月,令诸王百官以至庶民,出米有差,以充洪茶 丘军粮……八年(1282)四月,东征所支兵粮十二万三千五百六十余石。九年(1283)二月,命各 道禄转未输 京者悉充军粮。三月,令诸王百官及工商奴隶僧徒出军粮有差:诸王、宰枢、仆射、承旨,米二十石;致仕宰枢、显官三品十五石;致仕三品显官、文武四五品十石;文武六品、侍卫护军八石;文武七八品参上解官六石;东班 九品参外副使校尉南班九品 四石;正杂权务队正三石;东西散职业中僧一石;白丁抄奴所由丁吏诸司下典独女 官寺 奴婢十斗:贾人大户七石;中户五石;小户三石。唯年七十以上男女勿敛)。

たらし、すべての人に影響が出てしまったことがよく表明されている。一回目の 日本遠征の前に、モンゴルの軍隊は高麗で駐屯し、食糧を生産し、軍隊の食糧準 備のための高麗の負担を軽減した。二回目の日本遠征の前には、モンゴルの軍隊 は駐屯しなかったから、高麗の王朝は全国民を動員し、すべての国民が食糧を寄 与した。第三、『高麗史』は特に「兵志」に、軍隊の食糧を集める問題について 述べている。「世家」の部分に、軍隊の食糧など物資の供給が詳しく述べられて いることを裏付けるものである。この部分の史実は注目すべきである。

『高麗史』巻29「忠烈王世家二」忠烈王六年(1280)十月戊戌条に、元中書行 省の移牒を収録し、東征の軍事移牒を転載した。主に兵士の逃亡やその処置につ いて検討する内容である。且つ文章は長くて、日本侵攻の過程の記載よりもはる かに長いことから、この問題の重要性がわかる一方、朝鮮王朝の史官が元王朝の 問題を喜ぶ態度も伺える。六年十一月、中書省に上奏し、準備の状況を報告し た。「弊国は兵戦九百艘、梢工水手一万五千人、正軍一万人を用意した。兵隊の 食糧は漢の計量単位で表示する場合、十一万石、他の物資や機械なども数えられ ないほど用意した。全力を尽くし、聖恩に報いる²⁴」。これは準備の事項を詳し く述べ、皇帝に忠誠心を表すための長編の上奏文である。この巻には、二つ極め て長い上奏文が収録され、高麗が日本遠征のために払った努力と代価を表現し た。朝鮮王朝の史官から見れば、高麗の準備と貢献がなければ、元王朝の日本遠 征は実現できない。高麗は単に日本遠征の先棒を担いだだけであるが、高麗社会 に対し、深遠かつ全面的な影響を持っている。

三つ目。『高麗史・忠烈王世家』は二回の日本遠征の経緯について、簡略に説 明した。記載の史実は高麗の将軍を中心とした。

元十一年(1274)十月、日本は元麗連合軍第一次の日本遠征を「文永の役」 と呼ぶ。『高麗史・忠烈王世家』にこの戦争についての記述は数行しかない。

冬十月乙巳に、都督は金方慶を、朴之亮、金忻を知兵馬事、任豊を副使に 任命する。金侁を左軍使、韋得儒を知兵馬事、孫世貞を副使、金文庇を右軍 使、羅裕、朴保を知兵馬事、潘阜を副使に任命し、三翼軍を呼ばれる。都督 は元の都元帥忽敦、右副元帥洪茶丘、左副元帥劉复亨などと一緒に、モンゴ ルや漢軍二万五千、我が軍八千、梢工と水手六千七百、戦艦九百艘余りを率 いて日本を討伐し、一歧島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて 別々の道を進み、倭は退却した。殘骸が累々とし、夕方になってようやく 停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巌崖に触れて大敗し、金侁が溺死し た25。

94

^{24 『}高麗史』巻28 『忠烈王世家一』、忠烈王六年十一月己酉(原文: 小国已备兵船九百艘,梢工水手 一万五千名,正军一万名。兵粮以汉石计者十一万,什物、机械不可缕数,庶几尽力,以报圣德)。

^{25 『}高麗史』巻28 『忠烈王世家一』、即位年十月乙巳(原文:冬十月乙巳,都督使金方庆将中军,朴之亮、 金忻知兵马事,任恺为副使;金侁 为左军使,韦得儒知兵马事,孙世贞为副使;金文庇为右军使,罗裕、朴保知兵 马事,潘阜为副使,号三翼军。与元都元帅忽敦、右副元帅洪茶丘、左副元帅刘复亨,以蒙汉 军二万五千、我军 八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘征日本,至一歧岛,击 杀千余级,分道以进,倭却走,伏尸如麻,及 暮乃解。会夜大风雨,战舰触岩崖多败,金侁溺死)。

元十八年(1281)、日本は元王朝の第二次遠征を「弘安の役」と呼ぶ。『高麗 史・忠烈王世家』に今度の日本遠征についての記載は数行しかない。

七年五月戊戌に、忻都、茶丘及金方慶、朴球、金周鼎等は戦艦を率いて日本を討伐した。

癸亥、行省総把報: 当月二十六日、諸軍は一歧島へ向かい、忽鲁勿塔船軍 一百十三人、梢手三十六人は暴風に遭い、方向を失った。郎将柳庇を派遣 し、元王朝に事情を報告した。

六月壬申に、金方慶等は日本と戦って、三百人余りの敵を殺した。翌日再 び戦闘し、範文虎は戦艦三千五百艘と十万余りの軍隊を率いて戦った。暴風 雨に遭い、軍隊は全部溺死した。

八月己卯に、別将金洪柱は合浦から出発し、行宮へ東征群戦敗の知らせを 報告した。元帥などは再び合浦に戻った。

同じ月に、忻都、茶丘、範文虎などが帰還し、元王朝の軍隊で犠牲になった数は十数万以上である。

十一月壬午、各道は東征軍九千九百六十人、梢工水手一万七千二十九人を 派遣し、生還者は一万九千三百九十七人しかない²⁶。

二つの史料を総じて見れば、次の結論が得られる。

第一、簡略な記述は『高麗史・忠烈王世家』が日本遠征の戦争を重視していないことを裏付ける。あるいは、戦争の経過は注目される重要な歴史事件ではない。

第二、簡略な記述だが、どんな内容が記載されているかは注目すべきである。 高麗の軍隊の将軍たちや制度整備の状況などが重点的に紹介された。初回の日本 遠征において、八千人しかいない高麗の軍隊は、左、中、右という三部分に分け て、それぞれの将軍によって指揮されたと記載されているが、元王朝の将軍につ いては手短に触れただけである。人数から見れば、高麗の軍隊はごく一部しか占 めていないが、『高麗史』においては、高麗の軍隊に重点を置いて記述されてい る。第二次の日本遠征の記述にも高麗の将軍たちを重点的に紹介し、日本遠征に 参加した高麗の将軍たちの名前が紹介されただけでなく、本に記載される唯一の 勝ち戦は高麗将軍金方慶が指揮した高麗の軍隊によるものであり、敵軍の三百人 を殺した。元王朝の戦争状況については、敗戦しか触れていない。

第三、具体的な戦争状況についての記述は簡略であり、二回の敗戦にも「暴風」が言及された。初めての日本遠征には「一歧島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて別々の道を進み、倭は退却した。殘骸が累々とし、夕方になってようやく停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巌崖に触れて大敗し」と記載さ

^{26 『}高麗史』巻29 『忠烈王世家二』(原文:七年五月戊戌,忻都、茶丘及金方庆、朴球、金周鼎等以舟师征日本。癸亥,行省总把报:是月二十六日,诸军向一歧岛,忽鲁勿塔船军一百十三人、梢手三十六人,遭风失其所之。遣郎将柳庇告于元。六月壬申,金方庆等与日本战,斩首三百余级;翼日复战,茶丘军败绩,范文虎亦以战舰三千五百艘、蛮军十余万来会,值大风,蛮军皆溺死。八月己卯,别将金洪柱自合浦至行宫,告东征军败,元帅等还至合浦。是月,忻都、茶丘、范文虎等还,元官军不返者,无虑十万有几。十一月壬午,各道按廉使启:东征军九千九百六十名、梢工水手一万七千二十九名,其生还者一万九千三百九十七名)。

れている。日本を討伐し、最初は勝ったが、夜から暴風雨となり、「暴風雨」に 負けた。いわゆる「神風」のことである。第二回に「暴風に遭い、方向を失っ」 て、「暴風雨に遭い、軍隊は全部溺死した」。東征失敗の直接の原因ともいえる。

第四、二回の戦争の記述とも、具体的な損失が言及された。史料の第一段落に は、戦艦の大部分が沈没すること以外、左軍使「金侁が溺死した」事も特筆され た。「金侁」は高麗の最高指揮官であった。後の『年表』には、「十月、金方慶と 元の元帥忽敦、洪茶丘などは日本を討伐し、一歧で戦敗し、犠牲になった兵士は 一万三千五百人以上²⁷」。上記史料の第二段落に元軍の死傷状況に関するデータ がたくさんある。そのデータは元軍の東征の死傷状況を明らかにした。後文の 『年表二』に「元十八年、忠烈王七年五月まで、金方慶と忻篤(都)、茶丘が日本 を討伐し、覇家台で戦敗し、犠牲になった者は十万を超えた28」が記載されてい る。一回目の討伐の記述と類似し、短いし、簡略であるが、冷淡な態度を明らか に表すともいえる。

以上のことから、『高麗王・忠烈王世家』のその戦争に関する記述において、 高麗軍隊は主役であり、モンゴルの軍隊は単なる脇役にすぎず、日本の海戦も背 景にすぎない。史料の選択は、『高麗史』の主体意識を明らかに表している。『高 麗史』はこの戦争を全面的に記述するのではなく、高麗の軍隊の役割を示し、選 択を経た書き方である。

『高麗史』日本遠征における 高麗の将軍たちに関する記載

紀伝体の史書は人物をめぐって展開し、歴史事件の記述に人物の伝記が加わ る。『高麗史』の人物紀伝はこの戦争に参加する将軍たちの一部分しか取り上げ ていない。主に、「金方慶伝」、金方慶の子金忻付の紀伝、その部下朴球付の伝 記、「金周鼎伝」、「羅裕伝」や金文庇伝の附録「李貞伝」などである。その他 に、例えば李蔵用、洪福源、趙彝有など関連人物の伝記もある。これらの伝記の 中で、「金方慶伝」にこの戦争は詳しく記載されたが、他の人物の伝記はその戦 争について簡単に触れただけであり、触れない者すらある。人物の生前の表現に 基づいて、人物を肯定的に記述するものがあり、例えば「金方慶伝」である。反 面の典型例もあり、例えば趙彝と洪福源は全部「叛逆伝」に編入される。よっ て、『高麗史』は強い政治的意図から、人物を選択し、記載している。

『高麗史』の「叛逆伝」は六巻からなる。序言は「孔子『春秋』を作る。尤も 乱臣賊子及び地に據り以て叛する者を巌にす。其れ誅死する者は而して貸(寛 貸:刑罰をゆるくする)せず。後(世)に生きる者を戒める所以なり。夫れ人臣 が忠順なれば則ち其の身栄え、其の宗族を保って、美名を後世に流(惇)す。叛

^{27 『}高麗史』巻29 『年表二』(原文:十月,金方庆与元元帅忽敦、洪茶丘等征日本,至一歧战败,军不还者 万三千五百余人)。

^{28 『}高麗史』巻29 『年表二』(原文:元至元十八年,忠烈王七年五月,金方庆与忻笃(都)、茶丘征日本,至覇 家台战败,军不还者十万有奇)。

逆者は未だ脂が鼎鐘(人を刑罰でかまゆでにするのに用いた)を潤さざること有らず。其の族を赤(誅滅)して其の(祭)祀を覆(顛覆)す者は戒めざる可けんや。叛逆伝を作る²⁹」。『高麗史』において、元王朝に投降し、高麗に損害をもたらした人の多くは「叛逆伝」に編入された。例えば、東征の将軍の「洪福源伝」と「趙彝伝」は「叛逆伝」に編入された。趙彝は「科挙の殿試に合格し、進士となって叛逆し、元王朝に帰服し、秀才として、諸国の言語を理解できて、宮廷に通っている」。彼は軍隊を率いて高麗を討伐したことがない。『高麗史』によれば、彼はフビライに「高麗と日本は親交を交わし、元は日本へ使者を派遣した時に、高麗の人々に案内させる」と進言した。だから、高麗は使者宋君斐を元王朝の使者に同行させる。その後、何度も高麗を「中傷」したから、『高麗史』には「彝はいつも高麗を中傷し、不満が鬱積し死んだ」と記載されている。『高麗史』は高麗を「中傷」する人々を貶し、「金裕、李枢なども反逆者である³⁰」と述べた。彼らを「叛逆伝」に編入し、「反人」という呼び方から、朝鮮王朝の史官がこれら金や権力のために国家を裏切った人々を恨むことが伺える。

洪福源は洪茶丘の父であり、「叛逆伝」に編入された。『高麗史』には洪茶丘伝がないが、「洪福源伝」の中に、洪茶丘の悪行が記載されている。洪福源はもと高麗の西京郎将であり、高宗二十年(1233)に、宣論使鄭毅を倒す為に挙兵したが、失敗し、モンゴルへ逃げた。「福源は元王朝で東京総管を担当し、高麗軍民を率いて、四十余りの城を屈服させた。百姓たちも帰伏した。彼は高麗を中傷し、軍隊と一緒に高麗に行き来した……一年後元王朝の兵隊が到達し、州郡を占拠した。すべて福源が導いた結果である³¹」。その後、洪福源は高麗の人質永寧公諄のモンゴル人の妻に失礼な行動を取ったから、死刑に処された。「家産を没収し、彼の妻と子茶丘、君祥等を拘束し福源の帰還を待つ。福源の子たちは父の死を悔やみ、高麗を中傷してまであらゆる行動を取った³²」。元宗二年(1261)、フビライが即位した後、洪福源の冤罪を晴らし、彼の息子洪茶丘に父の職務を継承させた。「帰服した高麗軍隊と百姓を統率する総管である³³」。それ以来、洪茶丘は元王朝の官僚であり、高麗の出身という点から、高麗の関連事務の処理を任された。洪茶丘は高麗に同情することもなく、いつも高麗を困らせるから、高麗の君臣たちは洪茶丘を恨んでいる。

高麗の国王忠烈王はかなり洪茶丘を憚っていた。彼はフビライに洪茶丘を元王朝に呼び戻してほしいと進言し、高麗に置いてはいけないと表明した。「洪茶丘がいる限り、国を治めにくい! 洪茶丘は軍隊事務だけを担当すべきだが、国家

^{29 『}高麗史』巻127 『叛逆伝一』序(原文:孔子作《春秋》,尤严于乱臣贼子及据地以叛者,其诛死者而不贷,所以戒生者于后也。夫人臣忠顺,则荣其身,保其宗,而美名流于后;叛逆者未有不脂润鼎镬,赤其族而覆其祀者,可不戒哉!作《叛逆传》)。

^{30 『}高麗史』巻130『叛逆伝四、趙彝伝』(原文:有金裕、李枢者,亦反人也)。

³¹ 原文:福源在元为东京总管,领高丽军民,凡降附四十余城民皆属焉。谗构本国,随兵往来……然自是元兵岁至,攻陷州郡,皆福源导之也。

^{32 「}高麗史」巻130 「叛逆伝四、洪福源伝」(原文:籍没家产,械其妻及子茶丘、君祥等以归。福源诸子憾父之死,谋陷本国,无所不至)。

³³ 原文:管领归附高丽军民总管。

政務まで勝手に口を挟んだ……元王朝が軍隊を弊国に置くなら、鞑靼の軍隊或は 漢軍を派遣してください。しかし、洪茶丘の軍隊は、呼び戻してください³⁴」。 忠烈王から見れば、洪茶丘が勝手に国政に介入し、独断専行するから、忠烈王は 国を統治するすべもない。だから、自ら皇帝に洪茶丘を呼び戻してほしいと進言 した。フビライは朝鮮国王に関連事項を注意したが、忠烈王は「それは洪茶丘の 妄言である」と糾弾した。フビライは「茶丘だけでなく、多くの人がそう言っ た | と返した。フビライが「忻都はいかがだろう | と聞いたら、忠烈王は「忻 都、韃靼人であり、彼を派遣してもいい。茶丘はいつも高麗の軍隊を中傷した。 忻都を信じるしかない。洪茶丘と高麗の軍隊を呼び戻し、韃靼漢軍と交替してく ださい 35」と答えた。よって、忠烈王にとって、洪茶丘が皇帝に讒言を告げるよ り、むしろ韃靼人忻都をもって洪茶丘に取って代わったほうがましである。高麗 の国王と洪茶丘は犬猿の仲である。同時期、洪茶丘は耽羅を守っている。フビラ イはトラブルを防ぐ為に、忻都と洪茶丘を呼び戻した。高麗はこの時機に乗じ て、耽羅を守るという任務を受け、さらに、耽羅を自分の支配に置く。東征の期 間に、「元は洪茶丘を総管とし、戦船の建造を監督した。洪茶丘が徴用や監督を 厳しく行い、各州道で部夫を任命し、職人などを徴用させる。各道で騒然とす る。また、皇帝は洪茶丘に高麗の農業の指導を任せ、また洪茶丘を東征の副元帥 に任命した。忠清道の梢工や水手が期間に遅れるから、洪茶丘は部夫を処罰し、 大府卿朴暉を以て大将軍崔沔に取って代わる36」。この史料は元が高麗の人力や 物資を徴用する事に触れたが、主に洪茶丘が戦争に乗じて高麗に危害をもたらし た行為について記述する。彼は東征の副元帥であるが、高麗の利益を損害する一 方で、达魯花赤よりも遥かにひどかった。洪茶丘のためには立伝していないが、 洪福源伝の中に洪茶丘の行為を記述した。この伝記で、洪茶丘の行為の時代背景 として、元王朝が高麗から物資等を徴用していることを記述した。洪茶丘を元王 朝の人と見なしたにもかかわらず、洪茶丘を「叛逆伝」に収め、彼を叛逆として 扱う。趙彝が「叛逆伝」に編入される理由と同じであり、朝鮮王朝の史官は国家 の立場から、彼らを批判し、モンゴル帝国に降伏した高麗人を貶し、「反人」と して「叛逆伝」に編入した。

洪福源、趙彝が『叛逆伝』に編入される反面、金方慶は肯定すべき対象として 取り上げた。金方慶は兵部尚書翰林学士まで担当した。二回にわたる日本遠征に おいて、金方慶は高麗の軍隊の最高責任者であり、その伝記は二回の戦争につい て詳しく描写している。一回目の東征について、「金方慶伝」は次のように述べ た。

(元宗) 十五年、皇帝は日本の征伐を企てて、方慶と茶丘に戦艦の建造を命

^{34 『}高麗史』巻28 『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申(原文: 然茶丘在焉, 臣之为国, 不亦难哉! 如茶丘 者,只宜理会军事,至于国家 之事,皆欲擅断……上国必欲置军于小邦,宁以鞑靼汉儿军,无论多小而遣之,如茶

^{35 『}高麗史』巻28 『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申(原文:忻都,鞑靼人也,可则可矣。使茶丘在,则 与高丽军妄构是非,虽忻都不能不信,望令茶丘与高丽军皆还 于朝,以鞑鞑汉儿军代之)。

^{36 『}高麗史』巻130『叛逆伝四、洪福源伝』(原文: 先是), 以茶丘为监督造船官军民总管。茶丘克期催督 甚急、分遣部夫、使征集工匠、诸道骚然。 帝又命茶丘提点高丽农事、又命为东征副元帅。 茶丘以 忠清道梢工水 手不及期,杖部夫,使大将军崔沔以大府卿朴晖代之)。

じた。元の要求通りに戦艦を建造する場合、費用がかさみ、間に合わないか ら、全国国民が心配した。方慶……は高麗船を建造した。其の年に、元宗が 薨去し、忠烈王が即位し、方慶と茶丘は軍隊を率いず、一人で祝賀の意を表 しに来た。方慶が合浦に戻り、都元帥忽敦、副元帥茶丘、刘复亨と一緒に戦 艦の建造状況を確認した。方慶が中軍に、朴之亮、金忻が知兵馬事に任命さ れ、任豊が副使、枢密院副使金侁が左軍使、韋得儒が知兵馬事、孫世貞が副 使に任命された:上将軍金文庇は右軍使であり、羅佑、朴保が知兵馬事、潘 阜が副使に任命され、三翼軍と呼ばれ、忻都が金印を授けられる。モンゴル 軍隊や漢軍合わせて二万五千人、高麗の軍隊八千人、梢工や水手六千七百 人、戦艦九百艘を率いて、合浦で女真族の軍隊を待つ。女真族の軍隊が着い たら、対馬島へ出発し、日本兵士をたくさん殺した。一歧島に至り、倭の 兵士が海岸で待っていた。之亮、方慶壻と趙抃は日本の軍隊を追い払った。 日本の軍隊が投降を求めたが、再び交戦した。茶丘と之亮は千人余りの敵を 殺し、戦艦を三郎浦に残し、軍隊を分けて別々の道を進み、多くの敵を殺し た。日本の軍隊が急に現れ、中軍と交戦し、方慶は両手に剣を握り、退却せ ず、矢を出して大声を出し、倭人は退却した。之亮、忻、抃、李唐公、金天 禄、申奕などが奮戦し、倭人の軍隊は大敗し、殘骸が累々とした。忽敦は: 「モンゴル人は戦いに長けているが、ここまでとは思わなかった!」諸軍隊 と戦い、夕方になってようやく停戦した。方慶は忽敦と茶丘に「兵法によ れば、千里県軍の意気込みは食い止められない。我が軍隊の数は少ないが、 敵の土地に立ち、兵士たちは自分のために戦い、まるで孟明が船を焼却した ごとく、背水の陣を敷いて戦った」と言った。忽敦は「兵法において、敵の 実力を軽視し、自分の戦果を過大評価し、疲れた兵隊を率いて大量の敵と戦 うことは、最善な戦略ではない。取り敢えず軍隊を率いて帰った方がいい。」 と言った。复亨は矢に刺されて、先に船に乗り、軍隊を率いて帰った。その 夜に、暴風雨に遭い、戦艦は巌崖に触れて大破し、金侁が溺死した。合浦で 奪い取った兵器などを皇帝や国王に捧げ、国王は枢密副使の張镒を派遣し軍 隊を慰労し、方慶に先に戻ると命じた。そして方慶を上柱国判御史台事に任 命した³⁷。

^{37 『}高麗史』巻104『金方慶伝』(原文:(元宗)十五年,帝欲征日本,诏方庆与茶丘监造战舰。造船若依蛮样,则工费多,将不及期,一国忧之。方庆……用本国船样督造。是年元宗薨,忠烈即位,方庆与茶丘 单骑来陈慰,还到合浦,与都元帅忽敦及副元帅茶丘、刘复亨阅战舰。方庆将中军,朴 之亮、金忻知兵马事,任恺为副使,枢密院副使金侁为左军使,韦得儒知兵马事,孙世 贞为副使;上将军金文庇为右军使,罗佑、朴保知兵马事,潘 阜为副使,号三翼军,忻 即绶也。以蒙汉军二万五千、我军八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘,留合浦以待女真军,女真后期。乃发船入对马岛,击杀甚众。至一岐岛,倭兵陈于岸上,之 亮及方庆壻赵抃逐之,倭请降,复来战。茶丘与之亮、抃击杀千余级,舍舟三郎浦,分道而进,所杀过当。倭兵突至,冲中军,长剑交左右方庆如植,不少却,拔一嚆矢,厉 声大喝,倭辟易而走。之亮、忻、抃、李唐公、金天禄、申奕等力战,倭兵大败,伏尸如麻。忽敦曰:"蒙人虽习战,何以加此!" 诸军与战,及暮乃解,方庆谓忽敦、茶丘曰:"兵法:千里县军,其锋不可当,我师虽少,已入敌境,人自为战,即孟明焚船淮阴背 水也,请复战。" 忽敦曰:"兵法小敌之坚,大敌之擒,策疲乏之兵,敌日滋之众,非完 计也,不若回军。"复亨中流矢,先登舟,遂引兵还。会夜大风雨,战舰触岩崖多败, 优堕水死。到合浦,以俘获器仗献帝及王,王遣枢密副使张镒慰谕,命方庆先还,加上 柱国判御史台事)。

第二次日本遠征の状況については、『金方慶伝』で次のように述べている。

「七年三月、日本遠征へ出発した。方慶は先に義安軍に軍隊を検閲し、後 で国王も合浦に来て諸軍隊を検閲した。方慶と忻都、茶丘、朴球、金周鼎な どが出発し、日本の世界村大明浦に到達し、檄文を以て通事に知らせる。周 鼎先は倭人の軍隊と交戦し、諸軍隊も戦場に加わり、郎将康彦(康師子)等 が死んだ。六月、周鼎、球、朴之亮、荆万户等は日本の軍隊と交戦し、三百 人以上の敵を殺した。日本の兵士が急に攻め込み、官軍を破り、茶丘は馬を 捨てて逃げた。王万戸は横から進攻し、五十人余りの敵を殺し、日本の軍隊 が退却して、茶丘は命が助かった。翌日再び戦ったが、戦敗した。軍隊の中 で疫病が広がり、死者は三千人を超えた。忻都、茶丘などは戦況は不利であ り、かつ範文虎は時機を遅れたことを考慮に入れ、軍隊の撤退を議論した。 「勅命によれば、江南軍と東路軍を派遣し、其の月に一歧島に到達すると見 込んでいる。今南軍はまだ着いてないが、我が軍隊が先に到達し、数回も 戦って戦艦や食糧を大量に消耗した。どうするべきだろう?」という。方慶 は黙り込んだ。十日以上経ったが、議論は進展を遂げていない。方慶は「勅 命により、三ヶ月の食糧を用意したが、今は一ヶ月の食糧がまだ残ってい る。南軍が進攻する時を待って、必ず敵軍を破る。諸将軍は異議を出す勇 気がない。その後、文虎が十万以上の軍隊や九千艘の船を率いて到達した。 八月、暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体は浦に流れて浦を塞い だ。死体を踏んで浦を通ることもできる。遂に軍隊を撤退した38」。

この二つの史実に対する描写は、東征の戦場のもう一つの姿を明らかにしてい る。幾つかの特徴がある。第一、元王朝の東征の記載の中で、『高麗史』におけ る最も詳しい史料であり、「忠烈王世家」の記載より詳しいし、細部の記述がた くさんあってより具体的である。この歴史の記述は、金方慶を中心に展開し、金 方慶の戦功と勇ましい行いを浮き出させている。それ故、金方慶を中心に、彼の 言行を記述する事により、この戦争で行動を表現することがこの史料の本筋であ る。前述したように、金方慶は高麗の有名な将軍であり、立派な家柄をもち、輝 かしい戦功を建てた。この二回にわたる戦争から、金方慶が勇敢で戦争に詳し く、重責に適う人材であることが伺える。

第二、この史料では、金方慶がまるで戦争の決め手のようである。第一次戦争 が激しい時に、金方慶「矢を出して大声を出し、倭人が退却した……倭人の軍隊 を大敗させ、殘骸が累々とした」、モンゴルの元帥も「モンゴル人は戦いに長け ているが、ここまでとは思わなかった!」と言って彼を褒めた。戦争状況が有利

100

^{38 『}高麗史』巻104『金方慶伝』(原文:七年三月,出师东征。方庆先到义安军阅兵仗王至合浦,大阅诸军。 方庆与忻都、茶丘、朴球、金周鼎等发,至日本世界村大明浦,使通事金贮檄谕之。周鼎先与倭交锋, 诸军皆 下与战,郎将康彦(康师子)等死之。六月,方庆、周鼎、球、朴之亮、荆万户 等与日本兵合战,斩三百余级。 日本兵突进,官军溃,茶丘弃马走,王万户复横击之,斩五十余级,日本兵乃退,茶丘仅免。翼日复战,败绩。军 中又大疫,死者凡三千余人。忻都、茶丘等以累战不利,且范文虎过期不至,议回军,曰:圣旨令江南军与东路军 必 及,是月望会一歧岛,今南军不至,我军先到数战,船腐粮尽,其将奈何?方庆默然。旬余,又议如初。方庆曰: 奉圣旨,赍三月粮,今一月粮尚在,俟南军来合攻,必灭之。诸将不敢复言。既而,文虎以蛮军十余万至,船凡九千 艘。八月,值大风,蛮军皆溺死,尸随潮汐入浦,浦为之塞,可践而行。遂还军)。

であって、彼は勝利に乗じて追撃するように勧めたが、採用されず、暴風雨に 出合って兵船が沈没して戦敗した。第二次討伐の時も、金方慶が高麗軍隊を指 揮し、「三百人余りの敵を殺し」勝利を納めた。モンゴルの軍隊は何度も失敗し た。洪茶丘甚至仅以身免、最終"暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体 は浦に流れて浦を塞いだ。死体を踏んで浦を通ることもできる。"これらのこと から、戦争が如何に激しかったかが伺える。このような比較法を以て、金方慶の 戦功を浮き彫りにした。

第三に、この史料は『高麗史』の他の史料と同じであり、高麗の軍隊の戦場での様子を表している。『高麗史』だけでは戦争の状況を全面的には把握できない。高麗の軍隊に関する内容は朝鮮王朝当局が作り出したものであり、大げさで、作り話とも疑われる。実際に、史料の偏っている表現を無視して、戦争の立場から見れば、元王朝が戦争を起こし、高麗はやむを得ず元の先棒を担いだだけである。高麗の軍隊は単なる補助的な役割を果たしていて、戦争の勝負を決めるわけがない。従って、『高麗史』の一部の内容は大げさであり、作り話の部分すらある。例えば、金方慶と元帥の対話は本当の話だとは考えられない。朝鮮王朝の歴史の編集者が、これらの会話を知るわけがない。たとえ高麗王朝が関連の書類や資料を残していても、そんな対話が記録されるわけがない。従って、合理的な想像を通じて、金方慶の戦争での重要性を誇大し、彼を輝かしく表現している。『高麗史』の関連記述には、多少このような大げさな部分がある。

総じて、『高麗史』は高麗に忠実であるかどうかを人物の判断基準とする。たとえ高麗が元王朝の藩属国であっても、『高麗史』は高麗を裏切って元王朝に降伏した人を「反人」と見なし、「叛逆伝」に編入する。金方慶は日本遠征で高麗の最高将軍であり、高麗東征の代表人物、英雄の模範として仕上げた。金方慶の伝記において、金方慶を中心に朝鮮史官は合理的な想像による金方慶との対話を通じて、モンゴルの東征をより立体的なものにし、金方慶が東征の戦争の決め手であるというイメージを作った。モンゴルの将軍は失敗の象徴で、東征の失敗に主な責任を負うべきだとした。

終わりに

朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』は、章節「忠烈王世家」と「金方慶」で、元の日本遠征の二つの、類似しているものの少し異なる姿を表わした。基本的な主旨は同じであり、高麗王朝のこの戦争における貢献を浮き彫りにし、高麗の将軍の戦功を宣伝した。『高麗史』によれば、高麗はこの戦争の決め手であり、元王朝の元帥が高麗の将軍の進言を聞かないから、暴風雨に遭い、戦敗したとする。誠にフランスの歴史学者ミシェル・ド・セルトーが述べた通り、官撰の歴史の編纂は国家理性によって成し遂げたものである。「現存の材料に基づいて、専門の手法を以てある「環境」における諸要素を「処理」し、緻密な記述を作り上げ

た39」。従って、この史料は朝鮮王朝の史官によって構築されたものであり、明 王朝が編纂した『元史』や日本の関連史書の記載とは大きく異なる。

『高麗史』と『元史』を比べたら、様々な相違点に気付くはずである。例えば、 洪茶丘が金方慶を誣告する案件について、『高麗史』には金方慶は功績を上げて 賞賜を貰い、朝廷の官員たちに排除され、叛逆の罪と誣告され、「(洪) 茶丘は 高麗を憎んでいて、高麗を中傷しようと企てた。方慶を陥れることを聞いたら、 中書省に調査を依頼する40 。洪茶丘は様々な手を講じて、金方慶を迫害しよう とした。金方慶は苦しめられ、フビライは尋問した後に、金方慶のでっち上げ の罪名を晴らした。『元史・高麗伝』には「十四年正月、金方慶などが反乱し、 皇帝は確信し反乱を鎮圧するように命じたが、また忻都、洪茶丘に軍隊を整え させた4」と記載されている。この伝記では金方慶を反乱と見なし、『高麗史』で は洪茶丘が金方慶を罪に陥れる。両者は正反対の見方を示している。『高麗史』 と『元史』において、様々な記述は矛盾していて、金方慶案件は典型的な例であ る。『高麗史』において、金方慶は重臣と見なされ、彼のために立伝したが、『元 史』に金方慶は反乱の容疑者とみなされた。洪福源は『元史』に功臣と見なされ たが、『高麗史』の「叛逆伝」に編入された。

このような大きな違いに我々は注意しなければならない。いかに東アジア三国 に及ぶ歴史事件を扱うべきか、いかにそのような問題を防ぐべきか、或は史書に おける作り話をいかに分析すべきかなどは一国の立場と角度から歴史を判定して はいけない⁴²。史料を扱う時、陳寅恪が「他国の旧典を以て我が国の旧典を補う べきだ43」と指摘した。より重要なのは、国と民族の枠から脱却し、一国史の束 縛から脱して、東アジアの立場から全体を眺めたとき、初めて歴史の真相に近づ くことが可能になるのである。

^{39 (}フランス) ミシェル・ド・セルトー、『歴史のエクリチュール』、倪复生訳、北京:中国人民大学出版社、 2012年、第11ページ。

^{40 『}高麗史』巻104 『金方慶伝』(原文:洪茶丘与本国有宿憾,欲伺衅嫁祸,闻方庆事,请中书省来鞫)。

^{41 『}元史』巻208 『外夷一・高麗』第4620ページ。北京:中華書局、1976年(原文:十四年正月,金方庆 等为乱,命愖治之,仍命忻都、洪茶丘饬兵御备)。

⁴² 葛兆光は『「一国史 | と「東アジア史 | の間に:13~16世紀東アジアの三つ歴史事件を例として』(『中国 文化研究』2016年冬の巻)に「一国の歴史の立場、角度から東アジアの歴史を観察すれば、「死角」や「盲点」 があるかもしれないから、一国の歴史ではなく、東アジアの立場から、これらの歴史事件を見直すべきだ」。

⁴³ 陳寅恪「王静安先生遺書序」(『陳寅恪集 金明館叢稿二編』(北京:三聯書店、2001年) 第248頁。

指定討論

「朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に 関する叙述」を受けて

[質問者/金甫桄、回答者/孫衛国]

――(金)孫先生がお話された高麗史の編纂過 程で、編年体から紀伝体という史書の構成方式 などに朝鮮時代の認識のようなものが含まれて いるという基本的な主張について概ね同意しま す。ただ、いくつかコメントというか、少し付 け加えて申し上げたいと思います。先ほどの発 表の中ではお話がなかったと思うのですが、韓 国語の通訳を聞いていると、発表文の後半部に 朝鮮のある士官たちが、多分想像で書いただろ うとおっしゃった部分がありました。しかし、 基本的に『高麗史』という歴史書の特性は、今 まで基本的に高麗時代に生産された、つまり高 麗時代に作成された文書に基づいて朝鮮時代の 編纂者たちが編纂したと理解されています。ど ういう意味かというと、つまり朝鮮時代の人々 が想像や任意で入れた文章や単語ではなく、基 本的には高麗時代の人たちが残した言葉、つま り文章、そのような文章に基づいて整理してい るという事実です。

もちろん、紀伝体という構成過程で資料の構成または選別などでは、確かに朝鮮時代の人たちの考えが反映されていたでしょうけれど、とりあえず選別された記録の内容、文章には高麗時代の人々の表現が含まれていると考えなければならないようです。いくつか例がありますが、高麗後期に李在賢(イ・ジェヒョン)という人が書いた記録がたくさん『高麗史』に引用されている部分を見ることができます。また、高麗前期のおもしろい逸話として、高麗が宋に

送った外交文書に、宋の年号と契丹、遼の年号 を同時に書いた記録も残されています。朝鮮時 代の人たちの認識で書いていたなら、このよう な部分を修正したりして入れたかもしれないの に、そのまま引用をするのが基本的に高麗史編 纂の大原則だったといえるようです。

その次にまた、高麗史の特性についてお話し しながら、とくに日本遠征と関連して高麗の立 場を強調しているとおっしゃいましたが、極め て当然な話ですが私の考えをもう少し付け加え ると、これが『高麗史』という高麗の歴史を整 理した本であるため、高麗の立場を盛り込んで おり、また、朝鮮から見る高麗の立場が当然含 まれていると思います。つまり、日本遠征とい う13世紀の大事件が、もし成功した事件だっ たなら、軍事作戦の部分とか、成功した後の部 分が非常に強調されていたでしょうに、この2 回にわたる戦争は、結果的に失敗した戦争であ り、だから高麗自身において、戦争の過程に対 する強調よりも、戦争準備過程で、自分たち がどれだけ努力したのかとか、または被害を 被ったという部分を強調する方向でまとめら れ、または朝鮮の立場でもそんな部分を認めた り、強調する方向で『高麗史』が編纂されたと 思います。3番目に、これは2番目とも関連し ますが、金方慶の場合、彼の列伝にすごく詳 しく多くの記録が盛り込まれていますが、彼 はちょうど1300年に亡くなりました。1300年 に死んだ後、彼の墓誌銘が伝えられています、

(墓誌銘というのは) お墓に一緒に埋める石碑 というものですね。それが記録に残っているの ですが、それを見ると、金方慶の官歴が詳しく 書かれています。そこに日本遠征に参加したと か、1次2次どちらにも参加した記録は残って いるのですが、本当に簡単に参加したとだけ書 かれているのです。むしろ強調されている部分 は、第1次遠征以前に彼が高麗の王であった忠 烈王と共にクビライに会いに行った時、クビラ イが宴会を開いてくれて、金方慶をモンゴルの 丞相の席に座らせてくれたという部分を強調し ています。

つまり、金方慶がモンゴルからどのような処 **遇を受けたのかという部分を強調している記録** だと言えます。つまり、ここでも1300年に作 成した高麗時代の人々の記録方式で戦争そのも のより (この戦争は負けた戦争なので) 戦争そ のものはとても簡略に記録して、かえってそれ 以前に彼がモンゴルからどのような待遇を受け たのか、または、彼の官歴がどんなものだった のかという部分を強調していると思います。

それでこのような部分を考えてみると、この 高麗史とする歴史書が朝鮮時代に編纂されたた め、朝鮮の認識が反映されたという事実はある でしょうが、かえって朝鮮時代の人々が高麗時 代、特に、日本遠征と関連した部分をどのよう に考えていたのかという部分をもっと知るため には、『高麗史』より少し後で編纂された歴史 書ですが、『東国通鑑』とか、または朝鮮後期 に編纂された『東史綱目』など、他の朝鮮時代 の人たちが直接記述した歴史書を参考にする方 がむしろこの戦争に対する朝鮮人たちの記憶や 認識を把握するのに、より有効な方法ではない かと思います。以上で質問を終わります。

- (孫) ご質問ありがとうございます。確か におっしゃる通りです。まず、高麗史は高麗当 時の史料に基づいて編纂したものです。それに 関して私は大変同意します。しかし史料をいか にして選別し、いかにして選択するのか、史料 に何を書き、何を取り除くのか、それはやはり 朝鮮王朝自らの意志が出てきます。想像による 内容もあると思います。というのは、「金方慶 (キムバンギョン) 伝」、『予稿集(中国語版)』 の68ページには「金方慶厲声大喝」というの がありますが、キムバンギョンの話や仕草な ど、非常に細かいところが描かれています。恐 らく中国人は司馬遷の『史記』を連想するかも しれませんが、同じように多くの人物の会話が あり、例えば鴻門の宴、人物一人一人の目つき や仕草が細かく記述され、それも想像によるも のにちがいないでしょう。なかなか史料の根拠 は見つかりません。

では二つ目、高麗史は何を書くのか、何を書 かないのかについて、当然高麗の史料に基づい て書いたわけですが、編纂の過程も実は選択の 過程であり、歴史を構築する過程だと考えられ ます。なぜかというと、歴史そのものを完璧に

再現することはできません。我々が今画像や映 像を通じて人々に見せる「歴史」はある意味で 編集されたものなので、当時も同様に、文字で 歴史を編集し、歴史を構築したわけです。そし て次は、キムバンギョンの碑文についてです が、碑文は一つの非常に重要な史料です。当時 はクビライと面会し、丞相の位に任命されまし た。ただ、碑文を史料として使う時には慎重で なければなりません。もしその碑文が唯一の史 料ならば、その信憑性は疑われます。なぜな ら、碑文を書いたのはふつう親族もしくは親友 だったので、作り話の部分もあるわけです。明 代の歴史家王世貞の言葉を借りて言いますと、 「国史人恣而善蔽真」、つまり国史には杜撰が多 い、そして「家史人腴而善溢真」、家史とは族 譜であり、つまり、家族編纂の歴史には阿諛迎 合的なもの、お世辞の部分が多いです。ただも しほかの史料が補足して証拠となれる場合、も ちろん碑文を使っても問題はありません。

最後に三つ目、『高麗史』における朝鮮王朝の叙述を全面的に理解しなければならないとおっしゃいましたけれども、大変同感です。 『高麗史』以外、『東国通鑑』などほかの史料も読んでおいた方がいいと、私もそう思っております。私の論文は主に高麗の正史にフォーカスしているので、その面にはあまり触れていませんが。以上です。

発表論文



日本遠征をめぐる 高麗忠烈王の政治的意図

金 甫桄

嘉泉大学

「原文は韓国語、翻訳: 李 へり(韓国外国語大学)]

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な出来事は、モンゴルが高麗に進 攻することで高麗にも大きな影響を与えた。モンゴルが高麗に影響を及ぼした 期間は、「抗蒙」といわれる戦争期と「干渉期」という戦争後の時期に分ける ことができる。2度にわたって試みられた「日本遠征」は、干渉期に当たる。 これは、モンゴルが高麗に日本の降伏を勧告するように招諭を要求したが、招 諭が失敗に終わった後モンゴルが高麗を携えて直接日本征伐を推進させた征 服事業であった。

これまで「日本遠征」は、モンゴルが主導し高麗は彼らに動員された戦争 として理解する傾向が強かった。しかし、当時の高麗王(元宗および忠烈王) は、第1次遠征と第2次遠征の間に消極的な回避からより積極的な加担へと態 度を変化させていることがうかがえる。本稿ではこの事件において当時の高麗 王であった忠烈王が態度を変えた部分に注目してみたい。つまり、態度の変化 に込められた忠烈王の狙い、政治的目的が何なのかについて調べてみたい。

13世紀後半、忠烈王の政治的な立場に対して、近年集中して検討が行われ ている。最近の研究の特徴の一つは、高麗をみる立場の変化である。つまり、 高麗が一方的にモンゴルによって動員されたという点を強調する傾向から抜 け出し、この時期モンゴルの影響力が強く投射されている状況で、高麗または 国王がこのような状況をどのように活用したのか、そしてその変化が高麗ーモ ンゴル間の関係にどのように働いたのかという部分に注目している。

この過程で忠烈王の地位はとても象徴的である。彼は、高麗の国王でありな がら、モンゴルと王室間の婚姻をした最初の国王であり、後には征東行省とい うモンゴルの地方最高単位の長官である丞相になった。しかし、モンゴルの 「駙馬(貴人の娘婿)」としての地位、またはモンゴル王室との婚姻は高麗が先 に提案した内容であり、「征東行省」はモンゴルが設置したにもかかわらず忠

烈王は、行省内で自分の役割も要請した。言い換えれば、高麗王つまり忠烈王は、モンゴル帝国の威勢を借りて王権を確立し、権力を強化しようとする方向からモンゴルの駙馬、丞相という要素を通じて政治的な効果を期待した。

1170年から100年間続いた武臣政権時期に高麗の王権は弱化し続けた。1270年に武臣政權が崩壊し、王政が復古したが、すでにモンゴルとの関係の進展により高麗の様々な既存の体制に変化が現れた。すぐに忠烈王とクビライの娘「忽都魯掲里迷失(後の「荘穆王后」)」との婚姻のように高麗とモンゴル間で王室婚姻が成立し、中書門下省と6部中心だった高麗の官制は僉議府と4司体制となることで、官制もモンゴルの要求によって格下げ、改編された。そして、ダルガチのようなモンゴルの官職や軍隊が高麗に常駐した。こうした状況の変化は結果的に高麗の王権を安定・強化させる要素を再設定するように強要することになった。

そして、モンゴルは使臣の趙良弼を日本に送り降伏を勧告させ、外交的な接触が失敗に終わると戦争を準備した。使臣の派遣や2度にわたる戦争において、高麗は全面的にモンゴルに協力した。第1次遠征当時、高麗は1274年に高麗は30,500人を徴発し、900隻の船を建造し、高麗軍6千人、水夫6,700人が動員され、1281年の第2次遠征当時は戦艦900隻、軍事1万人、水夫17,000人を動員した。こうした莫大な人的、物的負担に高麗は深刻な困難を経験し、負担の重さを幾度もモンゴル王朝に訴え出た。

こうした政治的な部分、特に忠烈王にフォーカスしてみると、経済的な負担に対する高麗側の訴えとは違った脈略が垣間見える。忠烈王は、遠征準備の負担を訴えながらも日本の遠征に対して反対はしなかった。時にはそれに応じる姿すら見える。特に、第1次遠征当時、モンゴル軍と高麗軍の指揮層の混乱像を敗戦の原因として指摘し、第2次遠征においては指揮層の統一性を強調した。そして、そのため高麗側の武官たちを万戸職に任命、金牌賜與など、モンゴル式の官制による指揮権を認めてくれることを要請したりもした。これにモンゴルは、忠烈王の要請を受け入れ、さらには高麗王、つまり忠烈王を征東行省丞相として任命した。これにより高麗王が行省の丞相を兼任する始まりとなった。

ここで忠烈王が注目した部分は、次の三つである。第一に、日本遠征事業に対するモンゴルの強力な意志を王権強化に活用するため、忠烈王は、モンゴルの風習や制度に対する部分を強調した。すぐに、モンゴルの支配層の一員である「駙馬」の義務を強調し、モンゴルが自分に指揮権などを認めさせる名分を提供した。二番目に最初の部分の延長線上でモンゴルに対して指揮権を要請し、これを高麗の将軍たちに適用することになることで、高麗軍はモンゴル軍との一元的な指揮体系を構築することができた。何よりも高麗軍をモンゴルの軍事制度である「万戸」で自分が事実上「任命」できるようになった。三番目に、指揮権に対する忠烈王の要請をモンゴルが受け入れ、それに忠烈王を行省丞相に任命することで、モンゴルは高麗王の役割を認めた。

結局、日本遠征を準備するプロセスの中で、忠烈王はこのプロセスを自分の 王権強化に利用しようとする狙いを持っていたと言える。そして、その狙いは 忠烈王が丞相となる時点で、ある程度所期の目的を達成したと評価できる。

はじめに

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な事件は、朝鮮半島への侵出により 高麗に絶大な影響を及ぼした。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」 と言う戦争時期と「干渉期」と言われる戦争後の時期に大別することができる が、1219年から14世紀半ば以降の約200年という期間にわたる。2度の「日本遠 征|は後者の時期に当たる。はじめモンゴルは高麗に日本の降伏を促すように招 諭を要求したが、「日本遠征」とは、その失敗の後、モンゴルが高麗を引き連れ て直接に日本征伐をおこなうとした征服事業であった。

これまでの研究のなかで「日本遠征」に関しては、モンゴルが主導し高麗がそ こに動員された戦争と理解する傾向が強かった。筆者もこの遠征に高麗が動員さ れたという事実を否定するわけではない。ただし、筆者が注目したいのは、忠烈 王の立場が第1次遠征と第2次遠征の間に消極的回避から積極的加担へと変わっ ていくことが見過ごされてきた点である。そこで、本稿では態度の変化の背景に ある忠烈王の意図や政治的な狙いが何なのかをまとめたい。

ところで、最近の研究トレンドは、高麗が一方的に日本の征伐に動員されたこ とを強調する従来の傾向から離れ、この事件を高麗自体がどのように活用したの かという部分に注目している。こうした立場からの理解は、大きく二つに分けら れる。一つはイ・ミョンミを中心とする研究であり、高麗王がモンゴル帝国の威 を借りて王権を確立し、国王の地位を確固たるものにする意図から態度を変化さ せたと論じられている。結果的に、日本遠征の推進組織である征東行省の丞相を 忠烈王が兼ねることになり、国王の地位が確固たるものになったという。もう一 つは、モンゴル帝国で駙馬(皇帝の娘婿)という位置づけを確保した高麗王、つ まり忠烈王が自身の立場による「助軍の義務」を積極的に活用したという理解が ある。この二つの見解に多少の違いはあるが、忠烈王がモンゴル帝国の丞相や駙 馬などの地位を通じて政治的な効果を期待したという点では共通している。

そこで、本稿は忠烈王の立場をより具体的に見ることにその目的を置く。

日本遠征の進行の過程

高麗が日本遠征に参加することになったきっかけは、モンゴルの使節団を案内 して、日本を招諭させる役割を担ってからである。1266年(元宗7)にモンゴル がヒズル(黒的)と殷弘を使者として日本へ派遣しようとした際、高麗に彼らを 案内させた。案内役として宋君斐・金贊らが護送を担当したが、巨済島に至り風 浪の険しさを理由に帰朝した。その翌年にモンゴルは日本招論を高麗に委任し、 高麗は潘阜を派遣して、モンゴルおよび高麗の国書を持って日本に行くことに なった。しかし、日本がそれらを受け入れなかったため、成果をあげられなかっ た。その後、10数回にかけてモンゴル人と高麗人が日本に派遣されたが、拘留 や殺害を受けてモンゴルの日本に対する外交的な招諭は失敗した。

計6回にわたる使節団の派遣が失敗すると、モンゴルは日本を直接に征伐しよ

うとした。そこで、高麗に戦艦の造船を命じ、黒山島をはじめ高麗の南端にモンゴルの官吏を派遣して地形を偵察させた。また、軍糧を確保するという名目で高麗に屯田を設置した。1271年(元宗12)にはその経営のために屯田経略司を設置して、モンゴル軍を鳳州・金州・鹽州・黄州・白州・海州など10ヶ所に派遣した。高麗は戦争による荒廃のなかでもモンゴルの要求に応えるために努力せざるを得なかった。

1274年6月にはひとまず日本遠征の準備が整った。こうした準備を経て、ついに東征都元帥府の忻都(きんと)と洪茶丘(こうちゃきゅう:ホン・タグ)の率いる蒙漢軍25,000名を中心に第1次日本遠征が断行された。ここには金方慶を都督使として兵士8,000人、船頭6,700人、そして艦船900艘を準備した高麗も参戦することになった。第1次遠征当時、博多一帯での最初の戦闘でモンゴルと高麗の連合軍は一時的な勝利を収めたものの、結果としては敗北に終わった。当初、金方慶が率いる高麗軍は博多一帯で勝ち続けていた。日が暮れると、忻都は一旦退却することを主張したが、金方慶はこの勢いに乗じてもう一度闘うことを主張した。しかし、忻都の主張通りにモンゴルと高麗の軍隊は一旦退却することになった。周知のようにこの時の退却は連合軍の敗北につながる決定的瞬間であった。とにかく、モンゴルの主張に従ったばかりに第1次遠征は失敗に終わり、さらには13,500人ものの人々が帰らぬ人となった。ここで注目すべき点は、高麗とモンゴルの指揮官の間で戦勢への判断と対処について見解が食い違っていたことである。

第1次日本遠征が台風で継続できず失敗に終わっても、モンゴルのクビライはその計画を諦めず、また日本に宣諭使を派遣する一方で、戦争の準備を指示しつづけた。そして、1279年(忠烈王5)に南宋を完全に征服し、ある程度の余力ができると、日本遠征にさらなる拍車をかけるようになった。この時、高麗は南部の延辺を侵略しはじめた倭寇を退治するため、またモンゴル帝国内での地位を強化するために積極的に参加した。このことにより、翌1280年に忠烈王は日本遠征の推進機関である征東行中書省の丞相に任命された。こうした地位の向上にともなって、高麗に駐屯する忻都・洪茶丘などモンゴルの武将たちの横暴をある程度は抑制できるようになった。

しかし、一方で高麗はまた大きな負担を抱えるようになった。高麗は兵士10,000人、船頭15,000人、艦船900艘、軍糧11万石をはじめ、多くの軍事力を準備することになり、そのため国のすべての生産力の動員を余儀なくされた。第2次日本遠征は、高麗から征東行省麾下の高麗軍・蒙漢軍が、中国の江南地方から征日本行省麾下の江南軍が全力をかけて日本を攻撃したが、台風に会い10余万人の損失を出したまま失敗に終わってしまった。

ここで筆者が注目したいは、高麗の態度である。まず、日本に降伏を勧めなけ

ればならなかった初期の状況をみてみよう。

- 1) 1267年の春、正月宋君斐と金贊がモンゴルの使節団とともに巨済島の 松辺浦に到着して風浪の険阻を見て怖がって引き返してきた。王(元宗)は もう一度宋君斐を黒的(ヒズル)とともにモンゴルへ派遣し、(モンゴル皇 帝に次のように)報告させた。「詔書で示されました使節団を案内して日本 と友好関係を結ぶ件に関しては、陪臣の宋君斐と金贊らを派遣して、使節団 に同行させました。(しかし) 巨済県に到着して遠く対馬を眺めていると、 大きな海が10.000里にもおよび、波浪が天にまで届くのが見えました。(彼 らはこれを見て) 『こんなに危険なのにどうやって上国の使節団を案内して 危険を恐れず進んでいけるだろうか。たとえ対馬に到着したとしても、彼ら (対馬の人々) はかたくなで荒々しく礼儀を知らないので、もし不慮の事故 にあえば、将来どうすべきか』と思い、ともに引き返してきました。また、 日本は本来私たちとは外交関係がなく、ただ対馬の人々が時折貿易をするた めに金州(現在の慶尚南道金海市)を往来するだけでした。我国は、陛下が 即位されてから仁徳をこうむり、30年の戦争の末にやっと息を吹き返すこ とになり、延命しております。(クビライの) 聖恩は偉大でございますが、 (我々は) 功を立ててその恩に報いることを誓いたいと思っております。も しできることなのに心身を尽くさないのだとすれば、天の太陽が我々を見て いることでしょう」と。[(丁卯) 八年 春正月 宋君斐・金贊與蒙使, 至巨濟 松邊浦, 畏風濤之險, 遂還. 王又令君斐, 隨黑的如蒙古, 奏曰, "詔旨所諭, 道達 使臣,通好日本事,謹遣陪臣宋君斐等,伴使臣以往,至巨濟縣,遙望對馬島,見 大洋萬里, 風濤蹴天, 意謂'危險若此, 安可奉上國使臣, 冒險輕進?雖至對馬 島,彼俗頑獷,無禮義,設有不軌,將如之何?是以,與俱而還,且日本素與小 邦, 未嘗通好, 但對馬島人, 時因貿易, 往來金州耳, 小邦自陛下卽祚以來, 深蒙 仁恤, 三十年兵革之餘, 稍得蘇息, 綿綿存喘, 聖恩天大, 誓欲報効, 如有可爲之 勢, 而不盡心力, 有如天日."] (『高麗史』巻26 世家26、元宗8年(1267) 正 月)
- 2) 癸丑日、モンゴルが黒的(ヒズル)と殷弘などを派遣し、(次のような) 詔書を送ってきた。「今、貴国の人趙彝(ちょうい)は、『日本は高麗と近い 隣国であり、典章(制度や法律)や政治に賛美するに足るものがあります。 また、漢・唐の時代から使者を派遣して中国と通じてきました』と述べてい る。だから、今に黒的らを日本に派遣して友好関係を結ぼうと思う。貴国は 使節団がその地に到着できるように案内し、東の国の人々を悟らせ、中国の 義をしたわせるようにせよ。そなたは責任をもつべきであり、(使節団の同 行者が)風浪の険阻を理由にしたり、あるいは未だ日本と通行がないことを 理由にしたりさせるな。彼ら(日本)が命令に従わず使臣を拒否するかもし れないなどと言い訳をさせるな。そなたの忠誠心はこのことで明らかになる であろうから格別に努めよ」と。「癸丑 蒙古遣黑的・殷弘等來, 詔曰, "今爾國 人趙彝來告, '日本與爾國爲近隣, 典章政治, 有足嘉者. 漢唐而下, 亦或通使中

國. 故今遣黑的等,往日本,欲與通和,卿其道達去使,以徹彼疆,開悟東方,向風慕義. 兹事之責,卿宜任之,勿以風濤險阻爲辭,勿以未嘗通好爲解. 恐彼不順命,有阻去使爲托. 卿之忠誠,於斯可見,卿其勉之."](『高麗史』卷26世家26、元宗7年(1266)11月癸丑(25))

以上の事例をみると、外交的に日本を招諭しなければならない状況に対し、高麗はとても困惑しながらもこの問題を最大限に回避しようとしていたと思われる。もし日本が外交的招諭に応じて、モンゴルに降伏すれば幸いだが、そうでない場合、モンゴルが戦争をしてでも日本を降伏させようとするのは自明なことである。そして、その戦争に高麗が直接的ないし間接的に関与しなければならなくなることも自明だからだ。さらに、日本の反応が降伏に対しては否定的だろうということもある程度予想できる。この点は、1268年に高麗が日本に送った国書の記述からも分かる。「急に他の形式の服を着た人たちと一緒に海を渡っていけば、貴国は私たちの意図を疑うのでないかと思う。(中略)クビライの命令を拒めず、モンゴルの使臣を海側まで連れてきたが、風浪が険しいという言い訳で時間を長引かせ、結局戻った。これは我国が貴国に対してどんな考えを持っているのかを示すものである」(『鎌倉遣文』9845号、高麗國牒狀案)。

そして、引き続き第1次征伐を準備する過程で、高麗はモンゴル側に戦争準備のための負担が自国にとって無理な量であることを何度も訴えた。

3. 第2次征伐をめぐる忠烈王の意図

しかし、第2次征伐の過程では、以前とちがった様相が現れた。今まではモンゴルが高麗に日本の招論を要求していたが、この段階になると逆に高麗が日本征伐を先に持ちかけている。次の史料を見てみよう。

3) 王(忠烈王) は次のように言った。「日本は一概の島に住む東夷で、地勢が険しいことをいいことに帰順しないで、なんと王(皇帝:クビライ)のなさることに抵抗しています。臣が思うに、(高麗は皇帝の)徳に報いたことがありません。(そのため)願わくば、また船を作り、穀物を集めて(日本を)罪に問いて討伐すれば必ず成功するでしょう」と。(そこで)皇帝(クビライ)は「王(忠烈王)は戻って宰相たちと深く議論してから人を遣って話させよ」と言った。[王又奏曰,"日本一島夷耳,恃險不庭,敢抗王師,臣自念,無以報德,願更造船積穀,聲罪致討,蔑不濟矣."帝曰,"王歸與宰相熟計,遺人奏之."](『高麗史』卷28、忠烈王4年(1278)7月甲申(3))

忠烈王はクビライに対し、高麗が先に日本を征伐することを提案している。事実彼がクビライに日本の征伐事業をけしかけているようなものといえよう。もちろん、この発言は高麗―モンゴル間の懸案として浮上していた金方慶冤罪事件を解決しようとするなかで出たものである。モンゴルが元々やりたがっていた日本

征伐について、高麗が積極的に応えようとする過程で提案された。とにかく、こ の言葉の前提には日本征伐という事業をある程度負担できるという高麗側の状況 があってのことであり、できるだけ負担を避けようとしていた第1次征伐の時と 最も大きな違いともいえる。

だとすれば、日本征伐を巡って第1次までと第2次の時の高麗の態度に変化が 生まれたのはなぜだろうか。その点について論じてみよう。第2次征伐に忠烈王 が以前より積極性を見せたことの背景には、高麗がモンゴルとの関係を好転さ せ、さらに一歩進んで、洪茶丘など高麗在駐のモンゴル勢力をけん制する理由 があったと見られている。もちろん、こうした解釈は否定できず、大きく見て間 違っているとも思わない。但し、これは当時の高麗側の政治的背景は説明できる が、態度の変化の直接的な理由というには多少分析が不足している。

つまり、高麗―モンゴルという国家間の関係だけでなく、国王の立場から見た 他の側面も考慮されるべきだろう。特に、第1次征伐と第2次征伐を準備した主 体である2人の高麗国王の違いに注目したい。元宗と忠烈王は親子関係であり、 100年間続いた武臣政権のなかで弱化した王権を回復させようという傾向は両者 に共通する。しかし、モンゴルを理解し、受け入れる部分では違いがあり、次の エピソードがその点をよく表している。

4) 西北面に王(忠烈王)が赴き、公主(姫)を迎えた。順安公悰、廣平 公譓、帶方公澂、漢陽侯儇、平章事・兪千遇、知樞密院事・張鎰、知奏事・ 李汾禧、承宣崔文本・朴恒、上將軍・朴成大、知御史台事・李汾成が従っ た。(a)王(忠烈王)が汾禧たちに対して弁髪しないことを責めると、(汾禧 たちは) 「臣が弁髪にするのを嫌がっているのではなく、他の人たちが一緒 にやってくれることを待っているだけです」と答えた。モンゴルの風俗であ り、頭頂部から額まで四角くして真ん中のところの毛髪だけ残してそり上げ るが、モンゴル語で「ケグル(怯仇兒)」という。王は元に入って朝会をす るときにすでに弁髪をしていたが、国人はまだやっていなかったのでそれを 叱ったのである。後に宋松禮と鄭子璵が弁髪をして朝会をすると、他の人々 も皆それに従った。かつて印公秀が元宗に元の風俗に従って服飾を直すこと を勧めた際、(b)元宗が「私にはとても祖宗の法を急に変えられないので、私 が死んだ後にあなたたちが自分でやりなさい」と答えたことがあった。[幸 西北面, 迎公主. 順安公悰廣平公譓帶方公澂漢陽侯儇平章事兪千遇知樞密院 事張鎰知奏事李汾禧承宣崔文本朴恒上將軍朴成大知御史臺事李汾成從行. 王 責汾禧等不開剃,對曰,"臣等非惡開剃,唯俟衆例耳"蒙古俗,剃頂至額,方其 形, 留髮其中, 謂之怯仇兒. 王入朝時已開剃, 而國人則未也, 故責之. 後, 宋松 禮鄭子璵開剃而朝,餘皆效之.初,印公秀勸元宗,效元俗,改服色,元宗曰,"吾 未忍遽變祖宗之法. 我死之後, 卿等自爲之." [(『高麗史節要』卷19、忠烈王 卽位年(1274)10月)

1274年に高麗に入国した斉国大長公主を忠烈王が迎えた際の逸話であり、モ ンゴル風のヘアスタイルである弁髪のことが論じられている。(a)と(b)は、弁髪に

対する元宗と忠烈王の立場を対比している。(b)に見られるように、元宗は弁髪をはじめ服飾をモンゴル式に変えることができないとし、臣下たちには自分が死んだ後にしてほしいと述べた。対して、(a)によれば忠烈王は他の人々より先に弁髪にして、まだ弁髪をしていない李汾禧たちを叱っている。父の元宗よりも積極的にモンゴルの影響を受け入れようと努力する忠烈王のスタンスが理解される。

また、第2次征伐を提案・準備する過程での忠烈王の発言を詳細に検討する必要がある。彼は征伐を準備するなかで七つの要請をした。

- 5)王(忠烈王)は七つの項目について要請をした。「1. 耽羅を守っている 我国の軍隊を東征軍に補充させること、2. 高麗軍と漢軍を減らし、闍里帖 木兒(チェリテムル)にモンゴル軍をもっと徴兵させて、出征させること、 3. 洪茶丘の職任を高めず、彼が成功するのを待って賞を与えること、また 闍里帖木兒には臣(忠烈王)とともに日本遠征に関する職務を管掌させるこ と、4.我国の軍官に皆牌面を下賜すること、5.漢地の海辺の人々を梢工(船 頭)と水手(水夫)に充てること、6. 按察使を派遣し民の苦情を把握する こと、7.臣(忠烈王)が直接合浦(現在の昌原馬山)に行き、兵士と馬を点 検して送ること」であった。皇帝(クビライ)は「建議したものをすべて受 け入れる」と言った。[王以七事請,"一,以我軍鎭戍耽羅者,補東征之師,二, 减麗漢軍,使闍里帖木兒,益發蒙軍以進,三,勿加洪茶丘職任,待其成功賞之, 且令闍里帖木兒,與臣管征東省事,四,小國軍官,皆賜牌面,五,漢地濱海之人, 幷充梢工水手,六,遣按察使,廉問百姓疾苦,七,臣躬至合浦,閱送軍馬."帝曰, "已領所奏."](『高麗史』巻29 世家29、忠烈王6年(1280)8月乙未(23))
- 6) 我国の兵士と民たちは早くから珍島・耽羅・日本の3カ所で何度も戦功 を上げたにも関わらず、まだ賞をもらっていません。願わくば以前の戦功を 調査してそれぞれ牌面を下賜して、(こうした行賞を)後代の人たちにも勧 めてほしいと思います。兵士1,000人ごとに摠管と千戸各1名、摠把各2名で あり、下記のように氏名を列挙します。願わくば上將軍・朴之亮、大将軍・ 文壽、羅裕、韓希愈、趙圭、親從將軍・鄭守琪、大將軍・李伸、朴保、盧 挺儒、安社ら10名を摠管に、大将軍趙抃、将軍安迪材、許洪材、金德至、 徐靖、任愷、金臣正、李廷翼、朴益桓ら10名を千戸に、中郎將 柳甫、金天 祿、李臣伯、辛奕、崔公節、呂文就、安興、李淳、金福大、車公胤、李唐 公、郎將朴成進、高世和、中郎將宋仁允、郎將玉環、桂富、金天固、李貞、 徐光純、咸益深ら20名を摠把にしていただくことを願います。[小國軍民. 曾於珍島·耽羅·日本三處,累有戰功,未蒙官賞,伏望追錄前功,各賜牌面,以 勸來効. 每一千軍, 摠管千戶各一, 摠把各二, 花名, 抄連在前. 請以上將軍朴之 亮,大將軍文壽·羅裕·韓希愈·趙圭·親從將軍鄭守琪·大將軍李伸·朴保·盧挺儒 ·安社等十人爲摠管. 大將軍趙抃, 將軍安迪材·許洪材·金德至·徐靖·任愷·金臣 正·李廷翼·朴益桓等十人爲千戶,中郎將柳甫·金天祿·李臣伯·辛奕·崔公節·呂 文就·安興·李淳·金福大·車公胤·李唐公, 郎將朴成進·高世和, 中郎將宋仁允, 郎將玉環·桂富·金天固·李貞·徐光純·咸益深等二十人爲摠把.](『高麗史』巻

29 世家 29、忠烈王6年(1280)11 月己酉(11))

これらの史料を見ると、忠烈王は高麗の武将たちにモンゴルの官職を要請して おり、また対象の候補者も提示している。具体的には彼らに対する萬戸の任命や 牌面の下賜などを忠烈王が積極的に要請している。このことはモンゴルの官職な どの授与が高麗王の要請のもとで行われていたことを物語っており、忠烈王の狙 いが強く込められているものと言える。

だとすれば、忠烈王の意図は何なのか。まず、彼の要請として、洪茶丘の昇進 を制限し功績を待って褒賞することを提示している。ここには洪茶丘をけん制し ようとする意図が窺われる。さらに、表面的にはモンゴルと同じ官職名を使って 一元的な指揮体系を構築しながらも、事実上は高麗軍をモンゴル軍から分離し て、指揮をする上での混乱を避け、実際には高麗軍の指揮府の人選過程で自分が 直接介入しようとする意図として理解される。

こうした忠烈王の要請をクビライはすべて受け入れ、高麗に虎符などを下賜し た。このことによって、忠烈王は金方慶をはじめ、高麗の武将たちにモンゴルの 官職名と印章を次のように下賜することができた。

7) 元の皇帝(クビライ)が王(忠烈王)を開府儀同三司中書左丞相行中書 省事に冊封し、印信を下賜した。また、金方慶を中奉大夫管領高麗軍都元帥 に、知密直司事の朴球・金周鼎を侶勇大將軍左・右副都統に任命し、皆に虎 頭金牌と印信を下賜した。趙仁規を宣武將軍・王京斷事官兼脫脫禾孫として 任命して金牌と印信を下賜し、朴之亮など10名を武徳將軍・管軍千戸に任 命して金牌と判子を下賜した。趙抃ら10名を侶信校尉管軍摠把に任命し、 銀牌と印信を下賜し、金仲成など20名を忠顯校尉管軍摠把として任命した。 [帝冊王爲開府儀同三司中書左丞相行中書省事, 賜印信, 又以金方慶爲中奉大 夫管領高麗軍都元帥, 知密直司事朴球·金周鼎爲佋勇大將軍左右副都統, 並賜 虎頭金牌·印信. 趙仁規爲宣武將軍王京斷事官兼脫脫禾孫, 賜金牌·印信, 朴之 亮等十人爲武德將軍管軍千戶, 賜金牌及印, 趙抃等十人爲侶信校尉管軍摠把, 賜銀牌及印, 金仲成等二十人爲忠顯校尉管軍摠把.](高麗史卷29世家29、忠 烈王6年(1280)12月辛卯(23))

金方慶・朴球・金周鼎は1281年3月、合浦に軍隊を率いて出ており、この時 のモンゴルの官職任命が日本征伐のための編成の所産であったことがわかる。つ まり、忠烈王が高麗の武将たちに対するモンゴルの官職の任命を要請し、これが 受け入れられた。そして、こうしたモンゴルの官職を与えられた武将たちは、第 2次日本征伐に参加している。このように見ていくと、この時、忠烈王が官職を モンゴルに要請した意図は、モンゴル軍と同じように構築された指揮体系のなか で自分の影響力を行使していくことにあったと推測できる。

このような事実からは、萬戸などモンゴルの官職や金牌などの地位を「下賜」 する形を借りて、軍の統帥権を確立しようとする忠烈王の意図が読みとれる。忠 烈王はモンゴルの官職に関する人事権行使を通じて、統帥権の掌握、さらには彼

らの忠誠心まで確保した。つまり、萬戸などの地位の任免や与奪など人事権を通 じて、国王の臣僚に対する掌握力を高めたといえる。

そして、もう一つ考慮しなければならないのは、征東行省の存在である。同省はモンゴルが日本征伐のために設置した軍前行省であり、軍司令部の性格をもっていた点はすでに古くから指摘される。1280年に第2次征伐の準備過程で設置された征東行省は、今度は高麗に置かれ、忠烈王が その丞相に任命された。同年6月頃の日本征伐に対する議論にはじまり、モンゴルは10月に忠烈王を征東行省の左丞相、12月に右丞相に任命した。そして、日本遠征が終わった1283年6月には、征東中書省の左丞相に任命された忠烈王が、阿塔海(アタカイ)とともに征東行省の職務を管掌するようになった。今や、忠烈王は、征東行省内でも最も高い地位にあった。

高麗の官職だけを持った同国の大多数の官人たちにとって高麗王は唯一の命令権者であり、彼らからは一国の支配者という地位が無理なく認知されていた。しかし、行政官などモンゴルの管制に編入された高麗出身の官人たちにとって、高麗王は「唯一の」君主ではなかった。現実的にはモンゴル皇帝の地位と影響力がより大きかった。そのため、高麗王にはモンゴル官僚体系内の高位職を確保し、さらに行省の人事に影響力を発揮できる丞相という地位が切実に求められた。形式上の最終命令権者は皇帝であったが、高麗王は萬戸や摠管など軍官をはじめモンゴルの官職の任命に高麗官人たちを推薦できる形を作り上げることができた。そうすることで、高麗王はモンゴルの官僚である高麗人と君臣関係を維持しえた。まさにここに第2次日本征伐に積極的であった忠烈王の政治的目的があったといえよう。

むすびにかえて

忠烈王はモンゴル皇帝の駙馬(皇帝の娘婿)でありながら、征東行省の丞相の 1人であった。つまり、高麗国王、駙馬(皇帝の娘婿)、丞相という三つの地位 を持っていた。彼は高麗の国内だけでなく、モンゴルの官僚体系との関係から自 身の政治的地位を確保できた。こうした地位の確保のために、忠烈王はモンゴル の日本征伐、特に第2次征伐を積極的に活用したといえる。

結果的に忠烈王の意図は、それなりに成果を上げたと評価できる。しかし、彼はその後「ナヤン乱」の過程で平壌に出て行き、クビライに助軍の意志を明かしてもいるが、彼にとってこの行動はモンゴル王室の一員という地位を維持するために必然的なものであった。言い換えれば、モンゴルに依存することで王権を確保・強化しようとした忠烈王の選択は、高麗の政治的・外交的なスタンスを限定させる結果をもたらした。

指定討論

「日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的意図」を受けて

[質問者/ツェレンドルジ、回答者/金甫桄]

―― (ツェレンドルジ) ご発表ありがとうござ いました。質問を一つしてくださいとのこと だったので、一つだけお聞きします。第2次日 本遠征の時、忠烈王がした役割について言及さ れましたが、それは高麗史にある記録だけを基 にしてお話されたのでしょうか。または、他の 元史とか中国側の文献資料などを検討されたの でしょうか。お聞きしたいです。

---(**金甫桄**) ご質問ありがとうございます。 とりあえず、基本的に『高麗史』をはじめ韓国 側の史料が中心です。中国の史料、特に『元 史』は、ほとんど高麗側で表現されていますよ ね。そこで私が今この時代を扱う時には一通り 見ますが、本稿では基本的に『高麗史』に基づ いて書いたと言えます。

―― (ツェレンドルジ) それだけでは、他の史 料なども必要だったのでは、という気がしま す。なぜなら『高麗史』にも間違った、または 誇張されたものがあったので、これからはそん なこともご検討いただければと思う次第です。

――(金甫桄) そうですね。当然のご指摘だと 思います。これから十分に検討したいと思いま す。ただ、高麗側としては、元宗や忠烈王の立 場が著しく強調される傾向がありますが、私の 論文の目標が忠烈王の意図を彼の父親の時とは 違っていたというのを調べるのが目的だったの で、もっと強調されたり、偏っていたりしたか もしれない『高麗史』に依存した感はあります が、傾向を見るのにはさほど問題はなかったと 思います。この論文を完成させるにはご指摘の 通り、他の史料でさらに補っていきたいと思い ます。

―― (ツェレンドルジ) 史料に対する解釈では 注意しなければなりません。なぜなら、ある学 者たちはとても誇張して解釈をする傾向がある からです。例えば、忠烈王がモンゴルの皇帝 (継承) 権にとても近かったとか、(皇帝継承 権) 7位だったとかというけれど、7位と言っ てもその間にどれだけ多くの人がいるのかとい うことです。(絶対にありえないのに7位とい う言葉だけ鵜呑みにして) それだけ聞いて皇帝 になれたかもしれないとか思うかもしれません が、実はどれだけ皇帝継承権から離れていたか などもこれから検討していただいて、注意深く 研究してくださればと思います。以上です。

発表論文 名



対蒙戦争・講和の過程と 高麗の政権を取り巻く 環境の変化

李命美

[原文は韓国語、翻訳:全相律(東京大学)]

要に

モンゴルとの戦争と交渉、また講和に至る過程は、高麗のなかで政権を掌握 していた 武臣政権が終わり、王権が回復されていく過程と連動していた。本 発表では、このような過程にみられる高麗王権-政権をめぐる政治-外交的環 境の変化について検討してみたい。

以前の高麗の外交-交渉相手とは違い、モンゴルは遊牧国家としての周辺との関係形成を戦争の時期から講和の段階に至るまで持続的に強く要求してきた。30年から40年にわたる戦争と交渉の過程において、高麗側はこのような要求にそのまま応ずることはなく、そのときの状況に応じて対応した。その結果の一つとして挙げられるのが高麗宗室の外交的-政治的活動であった。このような様相は、政治単位の首将間の直接的な対面やそれを含めた個人間-家門間の関係を重視したモンゴルの関係形成の在り方と関連したものであった。高麗王朝体制において太子を含む宗室は、その政治的-外交的活動が表面に表れることは殆どなかったが、モンゴルとの戦争を期に浮き彫りになった高麗宗室の活動の様子は、戦争が終わってからも続き、高麗-モンゴルの関係、及びその中での高麗国王権をめぐる環境の変化をもたらした。

一方で、高麗-モンゴル間の「完全な」講和に至る過程は、高麗の元宗が武臣執権者であった林衍により廃位され、再び復位される過程と重なっているが、この過程もまたモンゴルとの関係による高麗王権をめぐる状況の変化の一面をみせてくれる。既存の東アジア国際秩序の中において、高麗国王は中国皇帝の「冊封」を受けていたが、それは事後的な性格が強いものであり、実際に高麗国王の即位と退位(あるいは廃位)は高麗の内部事情によるものであった。しかし、世子(以後、忠烈王)の請婚(求婚)と請軍が受け入れられ、軍を帯同したモンゴルの詔使が派遣されることになると、高麗王権は「実質的な冊封」と「皇室との通婚」という二つの関係を通じて皇帝権と直接つながるこ

とになった。それは既存の国家間関係の形で存在していた「冊封」が実質化し ていく変化であると同時に、モンゴルにおける政治単位間の関係を媒介-維持 する重要な形式であった通婚という家門間の関係形成の形が、高麗-モンゴル の関係にも適用されることになる変化である。それは、相互に関係しながら高 麗王権をめぐる環境の変化をもたらしており、このような変化は、以後、高麗 - 元の関係のなかで発生する様々な政治的事件を誘発した構造的な変化であっ たと言える。

導入―講和のための、モンゴルの要求条件、 「モンゴル的(従属) 関係」の形成方法

1231年、モンゴルは、高麗に侵入した。当時、崔氏武臣政権が権力を握って いた高麗朝廷は江華島への遷都を断行した。以後30年以上に及ぶ間、講和と戦 争を繰り返しながら、モンゴルは講和の条件として、いくつかの事項を一貫して 求めた。そこには、江華島に遷した都を再び開京に戻すことに対する要求(出陸 還都)、王の親朝、納質、郵驛の設置、供戶數籍、助軍、兵糧調達、達魯花赤の 設置など、モンゴルが征服地に要求した普遍的な事項が含まれている(これらは 一般的に「6事」と呼ばれる)。これらの要求事項は、モンゴルが服属国を直接 統治しなくても、その政治・軍事・経済に関する重要な問題を直接制御するため に要求されたものである。

その中でも、本発表では、国王の親朝と納質要求を主に扱うことにする。本発 表で特にこの二つの問題に注目する理由は、これらが、「モンゴルが、他の政治 単位と関係を形成し、維持する方法、すなわち遊牧社会における政治的ネット ワークの形成とそれが維持される方式」と関連しているからである。支配一族間 の世代を重ねた通婚もこのような方法の一つであり、高麗王室もその対象となっ ていたが、それは元々、モンゴル側が高麗に要求した事案というより、高麗武 臣執権者による国王(「元宗」)の退位という事件を収拾する過程で「突発的に」 (高麗世子によって) 提起され、実現されたことである。一方、国王の親朝と王 室の子弟を「質子」、いわゆる「トルガク[禿魯花、turyay]」とする要求は、モ ンゴルがすでに戦争初期から行ってきたことである。

モンゴルが「納質」を要求した一次的な理由は、講和を介して戦争を終了させ ると共に、服属国の首長の子弟を「人質」としようとした両側面がある。しか し、戦争の終了という短期的「事件」の後、両者の関係が長期的に持続する状況 でトルガクとしてモンゴルに入ったいわゆる「人質 質子」は、通常、ケシク[怯 薛、kešig]に入り、モンゴルの皇帝・皇室及び支配層と個人的な関係を形成し、 新しい支配層として再教育される。これらの点は、その時期及びその後にモンゴ ルに入った高麗宗室も同様である。

一方、講和のため、国王の「親朝」を要求したのも、政治単位首長間の直接的 な関係形成に対する要求という点では「納質」要求と一脈相通ずることがある。 モンゴルで政治単位首長間の直接的な関係が政治単位間の関係において重要な意

味を持っていたのは、戦争で勢力の糾合と分裂が繰り返されていた遊牧社会の特性、そして分封を通じて設定されたモンゴルの国家体制の講和分立的・分権的性格と関係している。モンゴルにとって、戦争中の国、あるいは政治単位と講和を結ぶために、その国王、あるいは首長との直接的な関係(個人間・家系間の関係)を持つのが何より重要であった。その表現手段の一つが、首長たちが皇帝を直接面對して服属を表する「親朝」だった。また、これらの関係を持続的に維持するためには、首長一族の子弟をモンゴルに呼び、入侍させる「トルガク[禿魯花]派遣」が必要とされ、必要に応じて首長の親朝も継続的に行われていた¹。これらの首長個人間・家系間の直接的な関係形成は²、それまで主に使臣を媒介して間接的に行われる冊封と、朝貢という形を用いて行われる国家間の関係の形成方法に慣れていた高麗の立場では、異質なものであった。それに対して、高麗側ではこれらの事案に対して要求されたままの形ではなく、高麗なりの解釈を加え対応した。さらに、そのような対応が両者の関係の進展に応じて変化しながらも、高麗社会、特にその政治的環境に影響を及ぼしたことも、本発表でこの二つの問題に注目する理由である。

以下では、講和のための要求条件に含まれていた国王親朝と納質要求に対する 高麗側の理解と対応について考えてみる。そして、そのような対応方式が両国関 係の安定の後、どのように変化し、その変化の様相が反映する時期における「高 麗-モンゴル関係」の特徴とその政治的影響についても簡単に説明する。

2. 国王親朝要求の解釈と対応 一宗室の外交活動:講和交渉の使行団引率

モンゴルは1231年(高麗高宗18)1次侵入の後、高麗が講和を結んだ状態で 江華遷都を断行すると、これを理由に再び高麗に侵入してきた。そして撤軍の 条件として国王が、モンゴルに来て直接皇帝に会うこと、つまり、親朝を要求 した³。これは、一次侵入以降国王の親朝なしに結んだ講和の不安定性が江華遷都 によって顕著になったための要求であった。しかし、高麗側はあれこれ理由をつ け、これを受け入れず、以降もモンゴルの侵入と国王親朝の要求は引き続き、最 終的には1258年、崔氏政権終息後、太子の親朝を通じて両国間の講和が実現さ れた。

高麗側で国王が親朝要求に応じなかった理由には、心理的な抵抗と武臣執権期

¹ そのためモンゴルにとって親朝は諸王・封君がカーンに臣服する象徴であり、これを拒否することは背反と認識された。モンゴルでの親朝、朝覲に関する詳細な内容については、以下を参照されたい。李治安、1989 「元代分封制度研究」、天津古籍出版社、297-299。

² モンゴル支配層の個人間・家系間の関係の具体的な形及びその意味と関連についてはキム・ホドン、2010 『モンゴル帝国と世界史の誕生』、トルベゲ、pp.96-100を参照。

³ 高宗19年(1232) 11月に、モンゴル皇帝に送った、本当に表の内容のうち、皇帝の調書の内容を云々し、国王が直接朝覲する問題と関連した高麗側の立場を表明した部分があることを通じ、(「高麗史」巻23、高宗19年11月) これに先立ち高麗に渡された、モンゴル皇帝の調書に国王の親朝を要求する内容があったことを知ることができる。高宗19年11月以前、同年7月に、モンゴルの調書が渡されている。(「高麗史」巻23、高宗19年7月に庚辰朔)

という政治的状況などが複合的に作用されたもので、高麗は国王親朝という、モ ンゴル側の要求を避けながらも、一方で、その要求に内在している安定的な関係 成立には応じようと、それなりの工夫を凝らしたと考えられる。講和交渉の過程 における宗室の活動と講和以降宗室が正使として活動していたことが、その事例 である。

高麗の宗室が正使として使行団を率いる様相はモンゴルとの関係で現れるユ ニークな使行様相の一つで、この時期の高麗 - モンゴル関係の一側面を示す事例 とも言える。モンゴルとの関係で高麗宗室が使行団を率いた事例は以下の通りで ある。

表)高麗宗室が対モンゴル使行団を導いた事例(典拠:「高麗史」、「高麗史節要」)

20/ 1	可能が至りがことコル区门口でも	- /C-F/) (/C	
番号	使行時期	人物	使行目的
1	高宗 26 年(1339) 12 月	新安公 王佺	戦争中の交渉
2	高宗 32 年 10 月 壬午	新安公 王佺	戦争中の交渉
3	高宗 40 年 12 月 壬申	安慶公 王淐	戦争中の交渉
4	高宗 44 年 12 月	安慶公 王淐	戦争中の交渉
5	元宗 元年(1260) 4 月 丙寅	永安公 王僖	皇帝即位の賀礼
6	元宗2年4月己酉	太子 王諶	アリクブケ(Ariq Böke)平定の
			賀礼
7	元宗 6 年 正月 乙未	廣平公 王恂	元宗親朝の時の厚意に対する謝礼
8	元宗8年11月甲午	安慶公 王淐	新年の賀礼、日本招諭関連報告
9	元宗 11 年 8 月 戊辰	世子王諶	聖節賀礼、ベ・ジュンソンの反逆
			の報告
10	元宗 13 年 正月 甲申	濟安侯 王淑	「大元」国号制定の賀礼
11	元宗 14 年 正月 癸亥	帶方侯 王澂	祭祀・婚礼許諾の謝礼
12	元宗 14 年 閏 6 月 己未	順安侯 王悰	皇后・皇太子の冊立賀礼
13	忠烈王即位年(1274)9月戊	濟安公 王淑	王女の下嫁・国王爵位継承の謝礼
	戌		
14	忠烈王 12 年 5 月 庚午	濟安公 王淑	皇太子「眞金」の死亡の弔意
15	忠烈王 18 年 閏 6 月 丙戌	世子 王璋	聖節賀礼
16	忠烈王 即位年(1298)正月	平陽侯 王眩	禪位許可の謝礼
17	忠烈王 復位年(1298) 9 月	中原侯 王昷	復位謝礼
18	忠烈王 29 年 11 月 戊寅	濟安公 王淑	前王の帰国要請
19	忠肅王 7 年(1320) 6 月 己巳	丹陽大君 王	皇帝の即位賀礼
		珛	
20	忠肅王8年3月	丹陽大君 王	年号改正・太后冊封賀礼
		珛	

高麗宗室が、モンゴル側に使臣として派遣された事例は、戦争中の交渉の過程 で行われた4件の事例とモンゴルと講和が行われた1259年以降の16件の事例、 計20件の事例が確認される。そのうち元宗在位期間中の事例が8件で、この時 期に宗室正使派遣が集中していることが注目される。特に元宗代の最初の事例で ある元宗元年(1260)4月の使行では「高麗 – モンゴル間」の講和が実現され、 元宗が即位した後、初めてモンゴルに派遣した使行でもある。

モンゴルとの関係で宗室が正使として使行団を率いるようになった背景にはま ず、このような事例が、通常、特別な事案と関連した儀式的使行だったというこ とである。上記の表のように宗室が使行団を率いた事例には、新年・聖節の賀礼 のような定例使行も含まれているが、皇帝の政敵平定賀礼や王室間の通婚成功の 謝礼などの特別な事案の賀礼或いは謝礼のための使行が多数含まれている。

高麗が宗室を正使として派遣したのはモンゴルとの関係の初期における特別な意味と重要性を意味し、関連した使行の格を高めるための人選であったと推測できる。一般的に、外交のための国家間の使行で、「使臣」、特に正使の格は、使者派遣主体が相手国との関係においてどれ程の意味と重要性を与えているかを反映するものである。正使の「格」をどのような基準で選定し、構成するかは使行の目的と派遣主体及び対象によって異なる場合がある。高麗の前期、宋との関係で派遣された高麗側使臣を見ると、高麗では使臣の家の背景と官品、学識などを使臣人選の重要な基準として設定していたことが分かる⁴。このように、宗室を正使として派遣した背景には、高麗が家の背景や官品といった「正使の格」の基準を最大限に高め、モンゴルとの関係において最大限の意味と重要性を付与しようとした側面があると考えられる。

一方、このように宗室が正使として派遣された事例がモンゴルとの関係以前に 観察されないのは、これらが関係を結ぶ対象であるモンゴルの影響を受けた側面 があることを示している。その具体的な一面を高麗宗室の使行が始まった初期の 状況を通して確認することができる。高麗の宗室が使臣として派遣された最初の 事例は、1339年(高宗26)の新安公王佺の使行である。この使行以来、高宗代 では全4回にわたって宗室使臣を派遣している。しかし、これらの使行には、そ の目的が明記されていないが、当時の戦争の過程で戦争終結の前提条件として、 モンゴル側が要求していた国王親朝の問題と関連していると考えられる。

前述したように、モンゴルは2次侵入以降、講和の条件として、国王の親朝を要求した。以後1235年(高宗22)から開始された3次の侵入中、モンゴルは、高宗26年(1239)4月と8月二度にわたって使者を派遣して国王がモンゴルに親朝することを再度要求し、12月には、高麗が新安公王佺と少卿宋彦琦をモンゴルに派遣した⁵。以降、高宗の次男であり、元宗の弟である安慶公王淐も1253年(高宗40)と1257年に、二度にわたってモンゴルに派遣された、これも当時新たに皇帝位に上がった憲宗モンケ(Möngke)が軍事的侵入と共に国王あるいは王子(太子であると考えられる)の親朝を要求したことに伴う措置であった⁶。要するに、宗室の使行は、モンゴルとの戦争の過程でモンゴルが継続的に要求した国王親朝を避けながら、モンゴルの圧迫から抜け出すための高麗側の臨機応変の一つとして開始されたものと考えられる。その後も高宗は、モンゴルの使者が王に江外で出迎えることを要求されるが自らは出迎えず新安公王佺を送って使者を迎えることにした⁷。また、モンゴル軍が侵入してきて王と太子が直接降伏することを要求されたときにも永安公王僖を代わりに送った⁸。

これらの宗室の使行は高麗側が期待したように、モンゴル側の国王や太子に対する親朝あるいは直接降伏の意味としては認められなかったようだ。1239年(高宗26)モンゴルに行った新安公王佺は翌年9月に戻ってきて皇帝が王の親朝を要

⁴ パク・ヨンウン、1995・1996 「高麗・宋交聘の目的と使節の考察(上)・(下)」 『韓国学報』 21・22。

^{5 『}高麗史』巻23、高宗26年4月、8月、12月。

^{6 『}高麗史』巻24、高宗40年8月己未、庚午、10月辛未、12月壬申;44年7月壬申、12月。

^{7 『}高麗史』巻23、高宗37年6月庚子。

^{8 『}高麗史』巻24、高宗45年6月丙申。

求したことを再度伝え、安慶公王淐自身も「王子」だったため、1257年(高宗 44) の「王子入朝」の要求による入朝にもかかわらず、翌年モンゴルは、再び太 子の親朝を求めてきた。そして太子王倎(後に元宗)の親朝を通じて、漸く両国 間の講和は成立された。つまり、当時モンゴル側は、国王・太子との直接的な関 係を求めただけで宗室を使臣に送るように要求することはなかったが、前者に対 して拒否感を持っていた高麗側9は、モンゴル側の要求を「高麗の立場」で調整 し、宗室を使者として派遣することになり、これらは講和後も同様であった。

自らモンゴルに入朝して講和を成功させた後、即位した元宗は、世祖クビライ (Khubilai) の即位を賀礼するために、モンゴルへの初めての使行団に宗室永安 公王僖を派遣し、しばらくしてクビライが即位過程で競争したアリクブケ(Arïq Buka)との戦争で勝利したことを賀礼するための使行団には息子であり、太子 であった王諶を正使として派遣した。そして、上記の表でも示したように、これ らの使行はその後も数回続いた。自ら親朝をすることに対して拒否感を持ってい る状況で、また通婚など、「モンゴル的(従属)関係」の要素が介入されていな い高麗-モンゴル関の関係において、元宗は伝統的に国家間の関係を媒介する主 要な手段であった使行の格を高めることにより、モンゴルとの講和を維持しよう としていたと考えられる。これは、以前の使臣人選基準に基づき、使行団を率い る正使の格を最大限に高めることに、当時高麗側が認識していたモンゴルの立場 とあわせて、宗室を使臣として登用するという高麗の工夫によってなされた。つ まり、宗室の正使派遣は自ら太子として入朝した経験もあり、自分の入朝が行わ れるまでの過程をよく知っていた元宗が自分の立場から、過去高麗が経験してき た中国王朝との使行の様相に、モンゴルとの関係形成過程で見られた特徴的な側 面をある部分収容し折衝した結果として生まれたものである。

これは、「モンゴル的(従属)関係」を基本にして高麗との関係を考えていた モンゴルと、東アジア的な関係に基づいてモンゴルとの関係を考えていた高麗の 間に、未だに完全な同意・定着がされていないことを示していると同時に、その ような関係に悩まされた元宗と高麗側の視点も反映していると言える。このよう に元宗と高麗-モンゴル関係において、首長の個人・首長家との直接的な関係の 形成と維持という、「モンゴル的(従属)関係」の要素は、それ自体の機能より も定例・儀礼的使行という国家間の関係を介して間接的に表現されたのである。 しかし、これらの側面は忠烈王代以降王室間の通婚や国王親和条のような直接的 な関係が高麗-モンゴル関係に全面的に導入されて活用される過程で、徐々に減 少していくことになる。

ところが、先述の表で示したように、宗室を正使として派遣する事例は元宗代 に集中的に現れ、忠烈王代以降、特に1298年忠烈王と忠宣王の間に発生した重 **祚事件後にはあまり現れない。それにはまず、忠烈王代以降、国王自らがモンゴ** ル帝国と通婚したり、積極的に親朝に臨んだりして、個人間・家系間の関係を中 心とした「モンゴル的(従属)関係」の要素が前面に浮上されることになり、あ

⁹ 講和後も高麗側では国王の親朝に否定的な認識を示しているが、これは元宗5年、モンゴル側の親朝要求 に対する高麗側の反応を通しても確認することができる。(『高麗史節要』巻18、原種5年5月)

えて宗室の正使を派遣するという折衷案を使う必要がなくなった。これは言い換えれば高麗とモンゴルの関係において定例・儀礼的な使行が持つ重要性と意義が縮小されていく様相とも関連している。これらは、使行自体において実務使行の重要性と意義が増加した結果でもあるが、両国間の関係を安定させ、安定した関係を定期的に相互に換気・維持させる主な手段が使行、特に定例・儀礼的な使行の他にはなかった時期の国家間の関係とは異なり、高麗-モンゴル関係において高麗国王が、モンゴルの皇帝・皇室と直接結んだ関係等、高麗とモンゴルの関係を媒介する他の手段が非常に重要な意味を持って登場することになり、使行の格を高めて関係の重要性を強調する必要が以前に比べて縮小された状況と関連している。

一方、忠烈王代以降宗室正使派遣事例が明らかに減少されたのは高麗-モンゴ ル関係において宗室が持つ意味と重要性の問題が関連していると考えられる。こ れは、この時期の高麗-モンゴル関係の性質とそれに基づいた高麗の権力構造の 問題、また国王の位相の変化とも関連している。高麗-モンゴル間の関係は、冊 封と朝貢という形を用いて形成される東アジアの伝統的な国家間の関係要素と通 婚などを通じて形成されるモンゴル的(遊牧社会での)個人間・家系間の関係要 素が相互に有機的に結合されている関係である。これらの関係に基づいて形成さ れたモンゴル服属期の権力構造における高麗国王の位相変化は大きく三つに分け ることができる。①高麗国王のモンゴル皇帝の諸侯としての地位が外交秩序上だ けでなく、高麗の内部においても実質的な意味を持つようになったということ、 ②モンゴルの皇帝権が実質的な最高権力として存在し、それとの関係(個人間・ 家系間の関係を含む)を使用して権力が付与される構造において、高麗国王は、 モンゴルの皇帝・皇室と同じような関係を形成した他の権力主体と競争しなけれ ばならなかったこと、③最後に以上のような過程を介して王朝体制において高麗 王室が持っていた血縁の正統性における権威の重要性が縮小されたことである。 このような変化は、既存の冊封-朝貢関係において形式的に機能していた高麗・ 高麗国王の諸侯・諸侯としての地位が実質化したのに加えて、「駙馬」の地位や 「通婚という関係」を通して「非常に特別だが、変動可能であり、多元的に形成 されうる関係」に、高麗国王権がかなり依存することになったことも、「行省丞 相」という地位を通して官僚としての属性がある部分、高麗国王の地位に移入さ れた結果であると考えられる。このような王の地位の変化は、以前の高麗という 政治単位の中で、独自の論理に基づいて最高権力として存在してきた高麗国王権 が、モンゴル服属期に入り、その上位、そして競争関係の他の権力者との関係の 中に位置づけになったこと、さらにそれにより発生した変化ということで「相対 化」と表現することができる。

このような高麗・モンゴル関係とそれに基づいた権力構造は、1269年元宗復位 過程を経て成立されたが、高麗国王と臣僚たちがモンゴルとの関係と、それに基 づいた権力構造の全貌を認知し、活用していく過程は段階的に行われた。高麗国 王と臣僚たちが、このようなモンゴル服属期の権力構造の特徴を完全に認知され たのは、1298年忠烈王と忠宣王間の重祚過程を通じてであった。この事件によ り、高麗国王と臣僚たちは高麗国王が皇帝と形成した関係に問題が発生した場

合、国王が退位されることもあるということを認識し、以降忠肅王の時代に発生 した瀋王擁立の動きの過程は、王室直系でなくても、彼らが皇帝・皇室と形成し た関係が国王-皇帝の関係よりも密接して強固な場合、その関係に基づいて、国 王に挑戦することが可能であることを示した事例である¹⁰。このような状況で国 王がモンゴルに派遣する重要な使行を宗室に引率させるのは多少政治的にリスク になる行為であった。そのため、忠烈王代以降宗室を正使として派遣するケース が確実に減少した背景にはこのようなモンゴル服属期権力構造の認識問題も影響 していると考えられる。

トルガク[禿魯花、turyay]の派遣と 宗室のケシク参加

使行を通じた宗室の活動は、元宗代以降、特に忠烈王代重祚以降にはほとんど 現れないが、高麗宗室の政治的・外交的活動は、他の通路を通して引き続き行わ れた。特に注目されるのが、モンゴルのケシク[怯薛、kešig]制度である。

高宗28年(1441)4月、高麗では顯宗の子孫である宗室永寧公王俊を王の息子 であると「だまし」両班のご子息10人と共にトルガクに送った。これは、モン ゴル側の要件である「6事」のうちの一つである「納質」の要求に応えるもので あると同時に、前年モンゴル側の国王親朝要求を補うための措置でもあった。以 後王俊が王の息子ではないことが「発覚」するが、彼のモンゴル朝廷での活動 が認められ、引き続きモンゴルに滞在しながら遼瀋地域の総管として務めること になる。高麗側の最初のトルカク派遣は上記のように、やや「曖昧に」行われた が、後にも、引き続きモンゴル側の要求に応じてトルガクが派遣され、トルガク として派遣された高麗の宗室はケシクにも参加した。ケシクは宿衛のモンゴル式 表現で、チンギス・ハーンと親密な関係にあり、信頼を受けた代表的なヌケー ル(nöker)家をはじめ、新たに服属した政治単位長の子孫や親族を含む、モン ゴル帝国の親衛隊である。これはモンゴル帝国の主要な支配層を構成する集団で あった。ケシクに他の政治単位長の子孫を召喚して参加させるのは、モンゴルの 立場から、他の政治単位の服属を担保するための手段としての側面だけでなく、 モンゴル支配層にしつけをするという意味もあった¹¹。また、対象者の立場では ケシクに参加している間、モンゴルの政治勢力との交遊を介して、その政治的基 盤を拡張することができる。

これらのことは高麗の場合も同様であった。若い年齢で即位した忠穆王と忠 定王を除く高麗国王はすべて即位前、モンゴルでケシク生活を経験した。忠烈 王は元宗12年(1271、世祖至元8)から王位を継承した元宗15年(1274、至元 11) までに、重祚した忠宣王は忠烈王16年(1290)~24年(1298、成宗大德2)

© 2018 SGRA

124

¹⁰ 以上、モンゴル服属期の権力構造についてはイ・ミョンミ、2016、『13~14世紀の高麗・モンゴル関係の 研究-征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合位相の探求』慧眼、参照。

¹¹ 森平雅彦、2001年、「元朝ケシク制度と高麗王家 - 高麗・元關係における禿魯花の意義について」、「史 學雜誌」第110編第2号。

正月、そして同年8月に廃位された後、1308年に復位するまで(武宗至大1)、以降同年11月に、モンゴルに行ってから、チベットに配流される忠肅王7年(1320、英宗即位)までケシク生活を行なった。忠肅王は忠宣王が復位し、ケシクに召喚され、王位を継承する忠宣王5年(1313、仁宗皇慶2)までケシク生活を行なった、忠惠王も忠肅王15年(1328、天順帝致和1・明宗天曆1)から17年(1330、文宗至順1)までケシク生活をして王位を継承したが、忠肅王が復位するようになり、再度ケシクに召喚された。しかし、不誠実な生活を理由に忠肅王後5年(1336、順帝至元2)に高麗に帰国措置された。恭愍王もやはり忠惠王復位後ケシクに召喚されて1351年王位を継承するまでケシク生活を行なった12。

モンゴルのケシクに参加した高麗宗室は世子に限定されたわけではない。モンゴルとの関係序盤には王室の直系ではない人物がトルガクとして派遣されることもあったし¹³、上記の高麗国王の事例の中でも、忠肅王と恭愍王の場合のように、「世子」ではない状態でケシクに召喚された事例が含まれている。忠宣王の次男だった忠肅王は忠宣王が復位した後、兄である世子王鑑と共に、モンゴルに宿衛として召喚された。モンゴル側が二人の王子を一緒に送信するように命令したからであった¹⁴。恭愍王の場合も兄である忠惠王が復位した後、宿衛に召喚されたので、世子としてケシクに参加したわけではない。実現されたわけではないが、恭愍王即位後、忠惠王の庶子である釋器を召喚したのも、彼をケシクに入らせるためのものであった可能性が高い。

モンゴルが「世子」ではない高麗宗室を宿衛に呼び入れたのは、明らかではないが彼らを次期の国王位継承権者にすることで、万が一の場合に備えようとしたからだと思われる。高麗の臣僚たちはこのような形でモンゴルのケシクに入られた宗室を事実上、次期王位継承権として認識していた。これは高麗臣僚たちが「王祺(後の恭愍王)がケシクに入れられたとき」、彼を「大元子」と称していたことからも推測できる¹⁵。「元子」というのは、元々王の長子を指す言葉で「元子=世子」、または「元子=王位継承権者」を意味するものではない。ところが、当時高麗の臣僚たちは忠惠王の弟である王祺をあえて「大元子」と称したのは、彼が「世子」に冊封されたわけではないが、モンゴルで宿衛をすることになった次期継承権者であると認識していたことに起因する。このように、モンゴルのケシク制度が高麗に王位継承候補資格を提供し、その政治的環境を助成する制度として認識され、機能していたため、それまで同様の役割を果たしていた高麗の太子制度には変化が見られた。

光宗代に導入された高麗時代の太子制度は大きく冊封と東宮官運営に分けられる。通常在位中の王[現王]の長男を太子に冊封することにより、血縁の正統性

¹² ケシク参加期間は、代替的なもので年度単位を中心に表示し、一時的に帰国した期間は、表示しなかった。高麗国王の即位前のケシク参加状況及び考慮宗室のケシク参加状況の具体的な内容については森平雅彦の上記の論文(注11)、2001年を参照。

¹³ モンゴルとの講和が行われる前である高宗28年(1241)、モンゴルにトルガクとして行った永寧公王綽、忠烈王の帶方公王澂及び彼の息子である中原公王昷などがそのような事例である。その他、忠宣王から瀋王位を継承した王暠とその孫として瀋王位を継承した王篇朶不花もケシクに参加した。

^{14 「}高麗史」巻124、尹碩傳。

^{15 「}高麗史」巻38、恭愍王叢書忠惠王後2年5月。

を基盤として権威が与えられる場合、東宮官の任命と運用は、彼が即位した後、 「事前に」国王として王権を行使するための政治的環境を与えてくれる。太子の 教育と護衛を担当した東宮官は、それ自体が太子の王としての資質育成のための ものであるが、後に国王が統治を行う過程において官僚との関係を予めて形成す ることを可能にする制度でもある。東宮官に任命された人物は、通常、任命当時 高位官職を兼ねている場合も多く、そうでない場合でも、太子が王位に上がった 後、高位官職に就いていたことが確認できる¹⁶。さらに、太子制度は後継を取り 巻く政局分裂の可能性を遮断するという面で現国王の政治的基盤を安定させるた めのものでもある。太子の冊封が王によって行われるということが決定的ではあ るが、東宮官の構成においても以前の説明で分かるように太子の政治的且つ人的 基盤は事実上現国王にあったと思われる。

このような高麗の太子制度はモンゴルとの関係によって多少変化することにな る。まず、格式な面において高麗の王位継承権者である太子が諸侯国の位相を反 映して「世子」に格下げされた。一方、高麗前期の事例では、太子の冊封は順次 に行われていたものであり、通常現王の長男を太子にして[立太子、爲太子]、東 宮官を任命して太子府を構成し、教育をさせた後、適切な時期に、彼を太子に冊 封した[冊太子]。太子を立てた[立太子]後、太子を冊封する[冊太子]までの時差 は多様である。元宗代から忠烈王代までの世子制度運用は高麗前期と同じ様相を 示す。しかし、このような「世子制度」は、忠宣王代に入ってから大きく変化さ れ、王権と王位継承の過程を安定させるための機能を失い、正常に運用されなく なる。

忠宣王の長子の王鑑と次子の王燾(後に忠肅王)はそれぞれ1310年(忠宣王 後2) 正月と1313 (忠宣王後5) 3月に「世子」として王位を継承した記録から 両方ともに世子だったことが確認できる。彼らが世子になった時期は、王鑑の場 合、忠宣王が復位した1308年8月以降1310年正月前、彼の弟の王燾は王鑑が死 亡した1310年5月以降、「世子として王位を受け継ぐ」1313年3月以前であった と推定される。ところが、忠宣王の二人の王子に関して、特に王位を継承した忠 肅王については、その冊封と関連する記録だけでなく、その世子府の構成の記録 が見当たらないことに留意する必要がある。これらは、以降の世子にも同様であ

忠肅王の長子である、世子の王禎(後の忠惠王)については、彼が1328年(忠 肅王15) に「世子として」モンゴルの宿衛に行ったことは記録として残ってい るものの、やはり世子冊封や世子府構成などについての記録は確認できない。そ こには、忠肅王が瀋王との紛争の時、モンゴルに召喚されて1325年になって漸 く高麗に帰国できたことが影響していると考えられる。しかし、その後1328年 に王禎が世子として(宿衛のために)、モンゴルへ行くまで、3年程の時間があ り、瀋王との王位継承紛争の後も政局安定のための政治的行為として世子冊封や 世子府設置などが必要だったと考えられるが、関連する記録が見当たらないとい う点は、先行した元宗代や忠烈王代の王世子冊封及び関連制度の運営の様相と対

126

¹⁶ キム・チャンギョム、2008年、「高麗顯宗代東宮官インストール」「韓国史官報」33。

比されるところである。

忠惠王の長子であり、王位を受け継いだ忠穆王には「世子」という記録が確認されない。忠穆王が即位した当時8歳だったことを考慮すれば、子供の年齢のために忠惠王の在位時に「まだ」世子として立てられなかったら可能性がある。さらに、忠宣王が復位した後、長男を世子に立てたが、実質的な政治基盤を確保するための世子府の設置や世子の地位を確定する世子冊封などは事実上行われていなかった。もちろん、これらのことは、記録上の問題である可能性もある。しかし、現国王の公式王位継承者としての太子-世子が持つ位相を考慮すれば、世子を冊封する儀式は、それ自体が重要な意味を持つ。また、太子の冊封礼の後、関連赦免令を下したり、太子の誕生日を節日として記念するなど、高麗前期の前例と比べたら、実際の冊封が行われたとしても、その記録を残さなかった当時の状況は、それなりの意味を持っている。一方、忠定王と恭愍王が「先代王[前王]」の息子ではなかったことも、「世子」になれなかった理由の一つとして考えられる。

このように、特に忠宣王代以降、太子/世子制度が適切に運用されなくなったのは、この制度の基底にある王位継承に関する高麗伝来の観念が持っていた権威と規定力がモンゴルとの関係において弱体化されたのに起因する。このような変化は、当然のことながら高麗王権をめぐる政治的環境にも大きな変化をもたらした。

伝統時代の王朝体制で太子が国王に次ぐ権力を持ちながらも王権への脅威にならないのは、彼の権力が国王によって託されたものであり、太子の政治的基盤が国王のそれと直結されていたからである。しかし、次期王位継承権者が高麗におらず、モンゴルの朝廷でケシクに参加することになり、国王は自分の後継が独自勢力を形成する過程をコントロールできなくなった。太子制度を通じて構成された太子の政治的且つ人的基盤が国王の支配圏に含まれていた時に比べて、ケシク制度で設定された世子あるいは継承候補者の勢力基盤は王のそれと重なりを見せながらも違う部分もあった。そのために、宿衛期間とその能力に応じて、宗室の勢力基盤が独立に拡大することが可能となった。

また、この時期に繰り返されていた継承紛争の過程で国王が廃位される事態が相次いだが、高麗国王は前国王の身柄も掌握できなかった。それぞれ1298年と1332年に、モンゴルで廃位された忠宣王と忠惠王は両方、モンゴルに召喚され、宿衛期間を再度経た後、それぞれ父王が死亡してから復位した。1332年に廃位後、再びケシクに入った忠惠王が不誠実さを理由に帰還措置されたことを見ると、彼らをモンゴルに召喚し、ケシクに参加させたのは「再教育」の意味が大きいと思われる。ところが、モンゴルの意図とは別に、廃位された国王の上記のような措置は、「前王」の身柄を「現王」が掌握できなくするとともに、「前王」の復位可能性を残しておくことにより高麗の権力の中心を二元化させ、国王権を制約する結果をもたらした。いわゆる「反元改革」を断行した恭愍王が、モンゴルが召喚した忠惠王の庶子である釋器に反逆罪をかぶせて誅殺しようとしたことや、その後、モンゴルにいた忠宣王の孼子である德興君塔思帖木兒の送還を要求したこともすべてこれらのモンゴル服属期における権力構造を克服しようとした

ものである。

一方、ケシク制度は、国王をめぐる政治的人間関係網、すなわち臣僚たちとの 関係にも影響を及ぼした。世子あるいは王位継承の可能性を持った宗室がモンゴ ルに宿衛する過程で、高麗臣僚たちが彼らを随行することになり、これらは以前 太子府東宮官と同じような役割をするようになった点に注目する必要がある。つ まり、王位後継者が高麗の現政権と密着した高麗臣僚たちとの関係を通じて政治 的基盤を磨くのではなく、離れた地域であるモンゴルで、場合によっては10年 にも及ぶ長期間、随行する臣僚たちと関係し、またはモンゴル内の勢力と関係 し、政治的基盤を構成するようになる。このような随従臣僚たちは彼らが随従し た人物が王に即位した後、いわゆる「側近勢力」として、主要な政治的基盤とし て活躍したのも周知の事実である 17。

これらの随従臣僚たちの中には、彼ら自身がケシクに参加したりする場合も あったが、これらのケシク参加は、臣僚当代に限らず、その子弟に受け継がれ継 承された。つまり、モンゴルとの関係で高麗国王が自分の核心的且つ政治的人間 関係を形成する重要な通路の一つであったケシク制度は、一方では高麗の臣僚た ちが国王の制御から外れ、皇帝権と直接的に繋がることを恒常的・構造的に可能 にしたのである。既存のような国王を頂点に形成された高麗の政治的人間関係網 が皇帝を中心に再編されたものである。

結 75 4.

モンゴルは高麗との関係において既存の東アジアの国際社会で国家間の関係を 規定していた(形式的な側面で)、いわゆる「冊封-朝貢」という儀礼的形式に加 えて、遊牧集団間の関係維持において重要な意味を果たしていた首長や首長一族 間の直接的な関係を形成するいくつかの方法を適用させようとした。30年に及 ぶ戦争の過程で講和の条件として提示された国王親朝と質子―トルガク派遣要 求は、そのような過程で生まれたものである。このような要求に対して高麗は、 積極的にそれに応じることなく、自分たちが慣れていた国家間の関係をベース に、それなりの解釈を加えながら対応を行った。その中でも、モンゴルとの関係 以前にはほとんど現れなかった高麗宗室及び太子の政治的・外交的活動に著しい 変化が生じたのである。

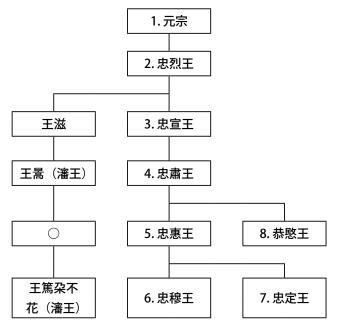
高麗 - モンゴル関係の初期における宗室や太子 / 世子の政治的・外交的活動は、 主に「高麗対モンゴル」という関係の構図の中で高麗側の利害関係を反映して行 なわれた。戦争当時講和交渉の主体として取り上げられたり、関係の序盤に正使 として使行団を引率した宗室の活動もこのような意味として行なわれたものであ る。また、初期のトルガクとして派遣された傍系宗室や太子/世子の活動もやは り、このような文脈で理解することができる。しかし、両国関係の展開とモンゴ

¹⁷ モンゴル服属記の側近勢力については、キム・グァンチョル、1991年、「高麗後期世族層研究」、東亜大 学出版;イ・イクジュ、1996年、「高麗・元関係の構造と高麗後期の政治體制」、 ソウル大学国史学科博士学位 論文を参照。

ル皇帝権を実質的に左右する権力構造が形成されるにつれ、これらの側面も変化 を見せることになる。

つまり、実質的な最高権力である皇帝権との関係に基づいて権力が付与されるにつれ―これらの「関係」には「1:1」で結ばれる「君主対君主」の関係だけでなく、「1:多」で形成される「個人間・家間」の関係も含まれて―高麗国王は、国王になり、その地位を維持して王権を行使するためには、自ら、モンゴル皇帝・皇室との関係に依存しなければならず、同じような関係を形成した他の権力主体とも競争しなければならない状況に置かれた。また、世子がモンゴルでケシク生活をするようになるため世子の身柄とその政治的人間関係が高麗国王の制御範囲を脱することになり、重祚が頻発する中、廃位された国王も、まずはモンゴルに召喚され、ケシクに入れられる。また、現国王においても廃位されたら前国王の身柄を自ら掌握することができなくなる。つまり、モンゴルとの関係及びそれに基づいた権力構造のため、高麗宗室や世子は高麗国王と異なる政治的立場をとる存在となったのである。

そのため、宗室正使派遣のように、高麗側でモンゴル側の要求にそれなりの解釈を加えて進行していた部分は確実に減少していく変化を見せた。しかし、モンゴルが他の政治単位との関係で普遍的に運用し、帝国運営の根幹にもなったケシク制度を通じて宗室/世子の政治活動は維持されるしかなかった。つまり、首長個人間あるいは支配一族との間の直接的な関係を通して、政治単位間の関係が形成・維持されていたモンゴルの関係形成方式は高麗においても適用され、これは高麗王権を取り巻く環境に変化をもたらし、そのような変化は高麗-モンゴル関係の中で発生したいくつかの政治的事件を発生させた構造的変化であったと見なすことができる。



<参考資料 > モンゴル服属期の高麗国王の位継承図

指定討論

「対蒙戦争・講和の過程と高麗の政権を取り巻く環境の変化」 を受けて

「質問者/孫衛国、回答者/李命美]

――(孫)中国の歴史において、元の時代は非 常に重要であるという点について、ご来会の先 生達は必ずしも全員賛成するとは限りません が、ただ西洋においては一つの重要な課題だと いえます。我々中国の学者たちはよく元、ある いはモンゴル帝国時代の中国歴史に与える影響 を検討します。昨日も内藤湖南の「唐宋変革 論」に触れましたが、宋は唐とかなり異なるこ とが分かります。実はそのほかに、宋と明の違 いもかなり大きいのです。その原因は何かとい うと、やはり元からの影響が大きかったからだ と思います。一部の中国の学者は、元は中国の 歴史に大きな影響を及ぼしたのは、モンゴル帝 国が草原民族の人身的支配従属関係を中央王朝 の制度に導入したからだと指摘しています。宋 の時代の君臣関係はかなりゆるいものでして、 元になってそれが主従関係に転換され、さらに 明、清になって、君臣関係はかなり厳しくな り、君主の地位が非常に高く、臣下の地位が非 常に低くなりました。それが、人身的支配従属 関係を中央政権に用いた結果だと思います。

李命美先生の論文では、まさに高麗とモンゴ ルの宗藩関係を取り上げて人身的支配従属関係 を検討しています。中でも宿衛・怯薛(ケシ ク) 制度に重点を置いています。宿衛制度とい うのは、実は一種の私的関係だと思います。国 王、王子あるいは王世子がモンゴルの王宮に 行って宿衛を担当するというのは、実はかえっ て両国のプライベートでの関係を一層深めたわ けです。本来の宗藩という国と国の関係に、新 たに個人、家族、姻戚の関係を取り入れ、ある 意味では宗藩関係に新たな要素を取り入れたの です。要するに、元と高麗の間には姻戚関係、 あるいは猶子関係が築かれたわけです。それ は、非常に大事なテーマだと思います。李命美 先生の論文から大変啓発されました。

ここで二つの質問をしたいと思います。一つ 目は自分の論文と少し関わりますが、高麗王朝 は仏教を重んじつつ、実は儒教も取り入れてい ました。儒教の華夷観から、モンゴル民族に よって成立したモンゴル帝国・元朝は確かに夷 狄に属します。そうすると高麗王朝に対する正 統性は改めて検討すべきではないでしょうか。 朝鮮王朝が清の臣下となってから、長い間反清 の思想が盛んであり、ひいては清を討伐すると いう北伐思想も出てきました。そのような思想 は高麗王朝の時代においてはそれほど強烈では なかったけれど、多少影響はあるとは思いま す。それについて、高麗の国王や臣下はどのよ うに対処したのか、李命美先生にお伺いしたい と思います。

そして二つ目は、宿衛制度の高麗王朝政権に 対する影響についてです。宿衛制度は元にも大 きな影響を及ぼしたのですが、高麗の王世子は 元の宮廷に行き、長い間宮廷に住み、元の宮廷 内政治闘争にも巻き込まれました。ですから、 宿衛制度は積極的と消極的両方の影響を持って いると考えられます。論文には高麗に対する宿

衛制度の影響が言及されていますが、では元朝 にはどのような影響を与えていたのでしょう か。以上です。

---(**李**) いい質問をしてくださいましてあり がとうございます。一つ目の質問は、とにかく 高麗王朝が儒教の影響を多く受けていて、ある 意味そんな高麗からすると野蛮族ともいえるモ ンゴルの政権に対して、なぜその後の朝鮮が清 に対して取った態度のように拒否反応を示さな かったのか、またはこの問題をどのように解決 したのかという質問ですね。それと関連して申 し上げますと、まず高麗王室が基本的に通婚を 通じて府馬(娘婿)になったりもしたし、こん な風にとても積極的にモンゴルの政権に対し て、先ほどおっしゃったように融合的中国化が 行われたので、実はそれほどというか、とくに その後に関係が安定してからはモンゴルが野蛮 族だと思っているような節の認識はどこにも見 当たりません。残っている記録を通じてはです ね。戦争期には、彼らの使臣たちがしていたと ても野蛮な行動に対しては異質だと思うという 表現が多々ありましたが、安定してからはそん なものも確認されません。つまり、高麗なりに これを合理化させたというか、合理化という より実際にそのように認識したかもしれませ ん。色々な文集資料を通じて見てみますと、と くに、世祖クビライ代以降に、世祖クビライが もちろんモンゴルの大汗としてのアイデンティ ティを持っていたからかもしれませんが、中国 の皇帝として漢化したり、いわゆる漢法をたく さん導入して施行したので、高麗の文人たちの 立場としては、中国ではなく異民族の王朝では あるけれども文化的に中国化したと理解してい たように思います。だから、とくにその後清に 対して朝鮮が示したような反感は、高麗では確 認されないのだと思います。

二つ目は、ケシク制度の影響についてご質問 いただきましたが、その部分は大きく高麗王朝

の政権に対する影響、元に対する影響のご質問 でした。高麗王朝の政権に対する影響は、先ほ ど私が中国を中心とした冊封朝貢関係がずっと 続いてきたのが、元代になるとかなり実質的に 作動し始めたと申し上げました。こうした問題 においてある意味モンゴルの皇帝がわざと国王 を冊封したり廃位させたりする状況になったの ですが、こうした状況でもある意味個人的な関 係が浮き彫りになった側面があります。また、 一方では発表で少し触れたモンゴル側がどんな 意図であれそれとは関係なく高麗側としてこの ケシクに参加した宗室を王室の後継者として認 識する中で、身分意識という面でも相当な変化 をもたらします。高麗ではもともと母系が賤し い場合、孽子(オルジャ、妾の子)といって王 位継承権がありません。しかし、この時期にな ると、たとえ高麗の身分制度ではオルジャで王 位継承権がなくても、ケシクに参加すること で、または元皇室との関係を通じて何らかの可 能性を与えられる事例が多くなり、そういった 様相も見られます。次に、元のケシク制度、高 麗の宗室がケシクに参加することが元の及ぼし た影響だとすれば、最も代表的な例が忠宣王の 事例になると思います。忠烈王の息子であった 忠宣王は、クビライの外孫でもありましたが、 相当長い間元にいながらカイシャン(元武宗) を擁立する過程で重要な役割をしたという事例 があります。以上です。

発表論文 🔾

北元と高麗との関係に 関する考察

禑王時代の関係を中心に

ツェレンドルジ

モンゴル国科学院 歴史研究所

[原文は韓国語、翻訳: 李 へり(韓国外国語大学)]

明に首都を奪われ北への撤退を余儀なくされた1368年から1388年までの元 を「北元」と呼ぶ。北元の時期は、中元の覇者がはっきりせず、情勢がどのよ うに変わるか予断を許さない過渡期的な時期であった。

北元と高麗の関係は、大きく「恭愍王時代の関係」と「禑王時代の関係」と いう二つの時期に分類することができる。恭愍王時代には元と明が角逐をして いる隙をみて高麗は自主性を強化させる政策を行なった。1369年、恭愍王政 権は、元との関係を断絶し、明と事大関係を構築した。それだけでなく、元の 領土を征伐するなど、敵対的な態度を示した。恭愍王のこうした処置はあまり にも性急な判断であった。そうしながらも恭愍王は、事実上北元とも関係を完 全に断ち切れず両端関係を結んでいた。

1372年を前後に北元は、内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も 活発化した。しかし、恭愍王が親明政策を頑なに固守したため、高麗に対する 懐柔政策は失敗した。

恭愍王を継承した禑王時代から高麗と北元関係には大きな変化が見られた。 高麗は、ただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶していた 北元とも関係修復を試みた。しかし、このような試みは反対勢力の猛烈な反対 により、紆余曲折の末、やっと達成された。

高麗の北元との関係再開は、恭愍王の一方的な外交政策を修正し、明をけん 制しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった。当時の東アジア勢 力バランスを維持しようとする努力の結果であった。

本稿では、禑王時代の北元と高麗との関係の推進過程、そしてこの関係が当 時東アジアの歴史に及ぼした影響及び結果に関して全体的に検討してみたい。

133

1. 北元に対する高麗の外交路線の変化

北元と高麗の関係は大きく「恭愍王時代」と「禑王時代」という二つの時期に 分類することができる。恭愍王時代に高麗は、元と明が角逐する合間を縫って自 主性を強化させる政策を繰り広げた。1369年、恭愍王政権は、元との関係を断 絶し、明との事大関係を樹立させた。それだけでなく元の領土を征討するなど、 敵対的な態度を示した。恭愍王のこのような措置は、あまりにも性急な判断だっ た。一方で、恭愍王は事実上北元との関係も完全には断絶できずに両端外交を 行った。

1372年前後に北元は、国内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も活発化させた。しかし、恭愍王が親明政策を取り続けたため高麗に対する懐柔政策は失敗した。

恭愍王を継承した禑王時代に、北元と高麗の関係には大きな変化があった。恭愍王が殺害された後、北元が瀋王脱脱不花を高麗王に任命したことを見れば、当時噂になっていた北元が国王を交代させたという話もあながち嘘ではなかった可能性もある。親明外交路線を取っていた恭愍王が1374年9月に殺害された後、恭愍王が主導していた親明外交路線は混乱に陥るようになった¹。

恭愍王が殺害され、同年11月頃、貢馬を徴集するために高麗に派遣されていた明の使者である林密、蔡斌などが、帰途の途中にある開州站に到着した際、護送官の金義が蔡斌とその息子を殺害し、林密を捕らえて北元に逃げる²という事件が起きた。明に請諡・承襲使、告計使として派遣されていた使者たちはこの事件のことを聞くや否や早々に帰還した。これにより高麗と明の間の友好関係は事実上断絶した。その後も明の問責を恐れた官吏たちが使者として行きたがらないことによって、高麗は恭愍王殺害と明の使者殺害事件が発生した直後に明に対して適切な解明をすることができなかった。従って、禑王の王位継承を通報し、その承認を得るのが難しくなった。

1374年11月、ナガチュ(納哈出)がムンバラブカ(文哈刺不花)を高麗に派遣し、駱駝1頭と馬4頭を持ってきたが、これは恭愍王の 3 殺害後、北元から来た最初の使者であった。使者を通じて恭愍王の死後の情勢を把握しようとしていたようだ。

それから1ヶ月後の12月、李仁任政権は判密直司事の金湑(キム・ソ)を北元に送り、恭愍王が没したことを知らせた 4 。これにより、恭愍王の殺害事実は明より先に北元に通報された。禑王が即位した後、李仁任政権では明と北元どちらも事大の対象国として認め、禑王冊封を要請した。つまり、恭愍王末期の親明一辺倒の外交路線に変化があった 5 ということだ。

しかし、金湑(キム・ソ)を北元に派遣したのは、恭愍王の喪を知らせるため

¹ キム・スンジャ、韓国中世の韓中関係史、ヘアン、2007、82頁.

² 高麗史巻133、列伝46、辛禑1、11月.

³ 高麗史巻133、列伝46、辛禑 1、11月.

⁴ 高麗史巻133、列伝46、辛禑 1、12月.

⁵ キム・スンジャ、前出の書籍(2007)、83-84頁.

であり、これは禑王の冊封とは無関係であった。喪を知らせることと王位継承の 承認に対する要請は別のことであった。つまり、恭愍王の喪を知らせると同時に 恭愍王時代まで続いていた親善関係を維持しようとする狙いだった。しかし、こ のように先制の使者を派遣したことを北元が逆手にとり、禑王冊封にまで関与し 始めた。その後に起こったことが、それを裏付けている。禑王元年(1375)正月 にナガチュ(納哈出)が使者を高麗に派遣して正式に関与しはじめた。ナガチュ は「先王には息子がいないが今誰が王位を継承したのか」と聞いた。ナガチュが このような質問をしたのは、この時すでに、恭愍王に代を次ぐ太子がいないので 瀋王暠の孫である脱脱不花を奉って高麗王にしてしまっていたからだ。しかし、 李仁任などは、明・元どちらに対してもいい顔をする両面外交路線を選んではい たけれども、王権のことまで北元の要求通りにするのには反対であった。

同年4月、李仁任が何人もの臣下たちを従えて孝思観に出て行き、太祖の霊魂 に誓って、「本国の無頼漢たちが瀋王の孫を手懐けて北側の辺境に来て王位を窺 うので、我々同盟する臣下たちは力を尽くしてそれを防ぎ新王を助け奉ります。 この誓いに変わりがあれば、天地と宗廟社稷が必ず隠密な罰を下す」6、とした。 つまり、李仁任らは瀋王を高麗王に擁立した事件に反対し、自分たちが推戴し た禑王の地位を少しでも揺るがしてはならないということを表明するための対策 だった。

同月に判事の朴思敬が北元から帰還し、明徳太后に次のように告げた。

ナガチュ曰く「貴国の宰相が金義を派遣して、王が亡くなったのに後継ぎ がなく瀋王を奉って王にしたいというので、皇帝は「瀋王を」奉って貴国の 王にした。もし、先王に息子がいれば朝廷から絶対に瀋王を送りはしない」 と、いった7。

この話を聞いた恭愍王の母親である明徳太后は李仁任を呼びつけ「宰相が金義 を元に派遣したという話は私も聞いて久しい。そなたたちは知らないのか⁸/と、 聞いた。ここで言及されている朴思敬をいつ北元に派遣したのかについての記録 はないが、北元に派遣された金湑の副使として派遣したとみる見解りがある。

ちょうどその頃明の使者を殺して北元に逃げた金義の部下が高麗に戻ってきた が、この時李仁任と安師琦らは彼を手厚くもてなした。これを見た朴尙衷は国王 に上訴文を提出した。

金義が使者を殺した罪を当然追及しなければならないにも関わらず宰相た ちが犯人の随行員たちを手厚く待遇しているということは、安師琦が金義を そそのかして使者を殺させた証拠となるものです。つまりこの罪を明かさな

⁶ 高麗史節要巻30. 辛禑元年4月.

⁷ 高麗史巻126, 列伝39, 姦臣 2.李仁任:「納哈出謂臣言, 爾國宰相, 遺金義請云, 王薨無嗣, 願奉瀋 王爲 主故, 帝封爲爾主. 若前王有子, 朝廷必付遣瀋王也.」

⁸ 高麗史節要巻 30, 辛禑元年4月: 「太后召仁任曰, 宰相遣金義如元, 予聞此言久矣. 卿等獨不知乎.」

⁹ 池内宏、「高麗末における明及北元との關係」・史學雑誌・, 29-1, 2, 3, 4/1917,満鮮史研究・中世 第三 冊, 1963, 282面.

ければ今から国の災いが始まります10。

この上訴に対しては久しく対応されなかったが、この時になって太后がその上訴を都堂に下し、また安師琦を監獄に入れた。その後、安師琦が他人の家に逃げていき刀を取り出し自決すると、その死体を処刑した¹¹。これを見ていた李仁任は、「金義の元への派遣は、賛成事・康舜龍、知密直・趙希古、同知密直・成大庸らがやったことだ」とし、彼らをみな遠方へと流刑にした¹²。

次いで同年4月高麗は、判密直・李子松を西北面都巡問使兼平壤尹に、賛成事・池奫を西北面都元帥に、門下評理・柳淵を東北面都元帥に任命し、各道の兵を徴発して北元の侵攻に対して守備させたが、後に国境の情勢は平安であるという情報を受けてすぐに中止した¹³。

高麗はただ対外的に圧力を受けただけではない。瀋王に協力する余地を持った人物たちが高麗の国内にも依然として存在していた。僧である小英が自分の手下何人かを北方に送り、秘密裏に瀋王に書信を渡して「今の国の状況は、臣下が王様を殺し、また王様が臣下のゴマすりに騙されている。国権はただ権勢のある臣下の手中で手籠めにされているので、もし今の時期に兵を起こしてくれれば大事を成すことができる¹⁴」とした。また、禑王元年(1375)9月に泥城元帥崔公哲の下、200人が反乱を起こし軍民たちを殺害して鴨緑江を渡っていった¹⁵。こうした事例は禑王即位の初期における親元勢力の活動を示すものと言える。こうした状況の下で、李仁任政権はどんな対策を使ってでも瀋王が高麗国王に擁立されるのを防がなければならなかった。1375年4月に李仁任は百官たちと共に連名で文を書き北元の中書省に訴えようとしていた。その文書には次のように書かれている。

世祖皇帝が王業を成すときに、我国の忠敬王がいち早く皇帝に謁見するために入朝し、皇帝のご恩を被り、貴朝廷の世襲する王たち及び駙馬(皇帝の娘婿)たちの礼に準じて王位を授かりました。そして、忠烈王は公主(皇帝の娘)を与えられ駙馬(皇帝の娘婿)となり、忠宣王が生まれ、忠宣王から忠粛王が誕生し、これまですべての王位が世襲されてきました。しかし、英宗皇帝の時に、江陽君王滋の息子であり、我が王室の支派に分かれていった完澤禿、瀋王暠が現れ、王位を争奪しようとしたけれど、貴朝廷が判別してくれたので実現できなかったのです。その後、先王である伯顔帖木兒は、まさに忠粛王の息子として襲位しており、その24年に遺言で彼の真の息子である元子の王禑が襲位するように指示しました。謹んで判密直事・金湑を派遣して先王の計音を伝えさせたところ、彼が貴朝廷に行った今になって知ることになったのですが、完澤禿、瀋王の孫である脱脱不花は、我が国に嫁

¹⁰ 高麗史巻112, 列伝25, 朴尚衷: "尚衷上疎曰: 金義殺使之罪, 在所當問, 宰相待其從者甚厚. 是師 琦嗾義殺使, 其迹已見. 今若不正其罪, 社稷之禍, 自此始矣."

¹¹ 高麗史節要巻 30, 辛禑元年4月.

¹² 高麗史節要巻 30, 辛禑元年4月.

¹³ 高麗史巻 133. 列伝46. 辛禑元年4月.

¹⁴ 高麗史巻 133, 列伝46, 辛禑2年7月: "今國家, 臣弑其君, 主諛臣諂, 國柄專在權臣, 若引兵來, 大事可成."

¹⁵ 高麗史巻133, 列伝46, 辛禑元年9月.

にきた公主の皇孫でもないのに邪な野望を抱いて王位を争奪するために力 を入れている。これは、世祖皇帝が制定したのとは大きく違反することなの で禁止してくださることを願います16。

しかし、左代言の林樸、典校令の朴尚衷、典儀副令の鄭道傳は、「先王が計策 を決定して南の明を慕っていたのに、今や北の元を慕うなら不当である」と、 言って署名しなかった¹⁷。

つまり、李仁任政権は、北元の軍事作戦に備えると同時に外交での打開策を考 え、危機を克服するため、北元に高麗王として擁立した脱脱不花を廃位させるこ とを要請したのである。この文書が、北元に伝えられたのかどうかは明らかでは ない。これに対し、高麗から文天式を北元に派遣し、その文書を伝えたという推 測がある¹⁸。しかし、北元で禑王 2 年(1376) 10 月に高麗に伝えた擴廓帖木兒の 書信に「伯顔帖木兒王には、息子牟尼奴があり、国民の推戴を受けて国事をして いるという事情を抄兒志から聞いて知った」としているため、上記の文書は北元 に伝わらなかったようだ。抄兒志は禑王2年2月に高麗に行ってきた人で、もし 文天式が上記の文を北元に伝えていたなら、北元がその後から来た抄兒志から高 麗の事情を聴き知ったとは言わなかっただろう。

どうやら当時李仁任政権が取った脱脱不花を拒否した措置は情勢に合ってい た。先王が殺害され新王が冊封もされていないところで、たとえ虚名に過ぎな かったとしても脱脱不花を王に推戴すれば危険なので、どんな計略を使ってでも それを防ぐ必要があった。

これより一カ月後の1375年5月に北元が使者を派遣してきた。彼は、その前 (1374年12月) に金滑を北元に派遣して恭愍王の葬事を知らせた後、北元から送 られてきた使者であった。

この使者が持ってきた文書には、「バヤンテムル(恭愍王)は我々を裏切り、 明に付いたので貴国の王を殺した罪を許す」とあった。この時に李仁任と池奫が 元の使者を迎えようとしたので、三司左尹の金九容、典理摠郎の李崇仁、典儀副 令の鄭道傳、藝文應教の權近などの激しい反対に会い、使者は開京に入れなかっ た。李仁任などは賛成事・黄裳を西北面道体察使に、左副代言・成石璘を体察使 として任命し、江界に派遣して北元使者を慰労し送り返した。その結果、彼らが 高麗に来て直接脱脱不花の王位継承問題を掲げることを防ぎ、国の根本を覆す混 乱を予防した19。

1375年8月に泥城萬戶は、「瀋王母子が反逆者である金義と進奉使金湑の群れ を従えすでに信州に到着した」と報告した。これに高麗が恐れ、いくつもの道の 兵士を徴発して北元の侵略に備えた。しかし、この知らせは嘘であったことが明 らかになった。この時鴨緑江以北で頻繁に略奪事件が発生し、高麗では金義が北 元の軍隊を連れてきたと疑ったが、瀋王の軍隊ではなく難民であることが確認さ

136

¹⁶ 高麗史巻126、列伝39、李仁任.

¹⁷ 高麗史節要巻30、辛禑元年4月.

¹⁸ 池内宏, 前述の論文、294面.

¹⁹ 盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994、635頁.

れた20。その後約半年間北元と高麗の間で使者の交換は行われなかった。高麗は、 禑王2年(1376)2月に 李原實を送ってナガチュ(納哈出)を訪問させた。同年 5月、北元から吳抄児志が来ると、禑王はこれを手厚くもてなした²¹。明との関係 が断絶され、北元との関係の最も重要な問題である脱脱不花の高麗王擁立問題も 解けず、禑王即位自体も不安定を感じると、これを解決するために高麗の朝廷で は、ナガチュを通じて北元との公式的な関係再開を試みた。この時まで高麗は北 元の使者を受け入れなかったため、北元にも高麗に対する不信感があった。しか し、ナガチュに使者を送った数日後に安州の副元帥王安德は瀋王が死んだと報告 した。北元との外交関係再開を取り巻く高麗官吏たちの葛藤は早くから学界の注 目を受けており、当時の政治勢力を親明派、または親元派に分けて説明する傾向 が一般的であった。ただ、一部の学者たちはこうした立場を批判しながらこの葛 藤は単純に外交関係に対する見解の差からくるわけではなく、高麗国内の政治勢 力間の政治的対立の結果であったと主張した。そして、当時執権勢力であった武 将たちが北元との外交関係に積極的であった理由は、明が高麗に対して高圧的な 姿勢を取ることで反明の雰囲気が高潮しており、特に明の使者の殺害事件により 明との外交関係が収拾しにくくなった事実と、北元が脱脱不花を高麗王に冊封す ることで、高麗を軍事力で脅威した状況を指摘した²²。北元との公式的な関係の再 開は単純に軍事衝突を防いだり、禑王冊封を受けるための行為であるとは説明し にくい。特に、当時北元で高麗を軍事的に圧迫したことはなく、北元の軍事が高 麗の領土を攻撃してきたという情報は嘘であったことが後日明らかになった。

大体、北元との関係の再開は、対内的及び対外的という二つの目標の下で行 われたと言える。対内的には当時執権者であった李仁任などにとって、彼らの執 権を持続させるためには対外的安定が必要であり、このため明に対して一方では 使者を送りながら、また元とも関係を持ち、両国の脅威の中で自国の利益を図っ た23。北元との関係再開は明との関係を絶つという意味ではなかった。李仁任は、 明の使者殺害事件とつなげて元と縁故のある 賛成・康舜龍、知密直・趙希古、同 知密直・成大庸などを流刑にして、親明的な勢力非難に対する自分の名分を立て た2。また、李仁任、池奫らに対し、明との関係を絶ち北元との関係を再開させよ うとしているので、彼らを死刑に処してほしいと上訴した反対勢力をも大挙粛清 した。こうすることで、李仁任らは自分の地位を確固たるものにして対外政策を 勝手に施行していった。一方、北元との関係再開は対外的にはもっと重要な意味 を持っていたと言える。先学たちが指摘した禑王冊封などは完全には否定しにく い事実だが、これより大きく重要な目的があったと言える。事実、禑王即位時点 では東アジアの国際情勢に少なからず変化があった。特に、北元においては元順 帝(妥懽貼睦爾)が大都(現在の北京)から北側に逃げた混乱期とは情勢がかな り変わっていた。北元は1372年に明の大規模な征伐軍を撃破し、政局も安定した。

²⁰ 高麗史巻114、列伝27、楊伯淵.

²¹ 高麗史節要巻30、辛禑2年5月庚午.

²² 金塘澤、「高麗禑王元年(1375) 元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤」、震檀学報 83,1997.

²³ 高惠玲, 「李仁任政権に対する一考察」、歴史学報、第91集、1981, 24-25頁.

²⁴ Ibid. 20頁.

一方、遼東のナガチュ(納哈出)も1372年牛家庄を攻撃し、遼東の明軍に大 きな打撃を与えた。雲南にあった北元の残存勢力もそのまま明に対抗しながら 粘っていた。つまり、1374年前後の時期に北元は政治・経済・軍事的に比較的 安定を取り戻した。恭愍王は、元がすぐに滅亡すると判断し、明と事大関係を結 んだ可能性が高いが、実際の状況は推測とは食い違っていた。北元は簡単に滅び る存在ではなく、高麗もこれを実感するようになった。弱小国にとっては、国家 を守る方法は強大国間の勢力均衡を取るより効果的な方法はなかった。しかし、 恭愍王末期の高麗対外政策は強大国の勢力間のバランスが取れない、言い換えれ ば北元を排斥し、明側に傾いた極端なものであった。元をただ排斥するだけでな く、北元領土に対する数回の征伐も断行していた。だからといって、明の高麗に 対する見方はよくなかった。明の遼東征伐に対する奨励は、高麗と元を窮地に追 い込むときに利用する一時的な方法であって、彼らの狙いは完全に違っていた。 遼東の北元勢力が崩れると明の次のターゲットは高麗だった。明は、1371年か ら遼東経営をしながらこうした態度を示しはじめた。国際状況の変化を高麗の執 権者たちは知っていた。特に、北元との関係再開を牽引した李仁任、池奫、崔瑩 などの武将たちは北元と手を結び日々高麗に圧迫を加える抑圧的な明をけん制し ようと方向転換した。彼らは、明の攻撃など、非常事態が起きた場合、北元の軍 事援助を受けて抗争する方法も考慮した。高麗の北元との関係再開は明をけん制 しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった。これは当時の東アジア の勢力均衡を維持しようとする努力の結果であったと言える。こうした状況だっ たので、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強大な反発にも関わらず北 元との関係再開政策を守った。高麗は北元と連合して明をけん制したり、少なく ともこれを通じて明を圧迫して譲歩させようとした。

2. 事大関係再開過程とその終末

1376年7月、1年半前に北元に派遣された「判密直司事・金湑がナガチュ(納 哈出)のところから逃げてきた」という記録から考えたとき、北元が彼を人質に 捕らえた可能性もある。北元の朝廷は、高麗から派遣された吳抄児志(チョル ジ)を通じて高麗情勢に関する詳細な情報を得て、李仁任などの執権者たちの本 意を知った。これは、1376年10月、北元で兵部尚書ボロト・テムル(孛羅帖木 児)を派遣して伝達したココ・テムル(擴廓帖木児)の書信で ²⁵確認される。そ の書信には、当時高麗に対して北元が実施してきた政策、この間両国で行われた こと、北元と明との関係、明の本性が何なのかなど、重要な情報が反映されてい る。つまり、ココ・テムル(擴廓帖木児)は、「禑王の父親である恭愍王と親し くしたこと」に言及し、続けて北元との関係は「義理の父と娘婿との関係から姻 戚間」としており、「恭愍王が死んだ後に彼には子孫がないというので、禑王の 一家の人で代を継ぐようにした」といった。次いで「これに対する詔書を伝えよ

²⁵ 高麗史巻133、列伝46、辛禑2年10月.

うとする使者を派遣したが、高麗で塞がれ、高麗が過誤に気づいて悟ることだけを待ち、やっと高麗が派遣した抄児志を通じて高麗が元を裏切らなかったということを知り、Bayan Temür(伯顔帖木児王:恭愍王)には息子牟尼奴(禑王の幼名)がいて国事をしているという事情を知った」といった。そして、「国の人たちが王者(つまり、禑王)に服従すると言ってもまだ元の朝廷の責命を受けたことがないので、高麗の人たちの動向もその支持と反対がたぶんそれぞれ半々になるだろう」と、当時の高麗の最も重要で敏感な問題に触れた。こうすることで、禑王の冊封問題は迅速に解決しなければならず、これを解く主体は北元だということを悟らせた。

また、「小国が大国に従う時必ず信任をもらわないと国を保存できない」と諭しながら、「高麗が元に再び戻らず朱元璋に仕えるなら、その時に朱元璋は高麗を侵略するであろうし、高麗がいくら大国を敬う礼を尽くすといっても明は高麗の財力を奪い、人民を移させ、社稷まで改めてしまうなど、どこまでやるかわからないだろう」と言った。最後に元は、「国土を回復させる大計を企てている途中であり、高麗は皇帝の命令に従えるならば、すぐ軍事を訓練し、軍馬を肥やして私たちと共に敵を前後にけん制することで、元の復興事業に貢献せよ!」としながら、「書信を受けて一日も早く使者を送れば元は必ずやいい措置を取るだろう」と、説得と威嚇を同時にした。後日、明と高麗との間に起こったことを見たとき、明の本性に対する北元の推測が合っていたことがわかる。

この書信に両国関係に対する「姻戚関係」という再三の言及は、北元はクビライ時代に結ばれた射馬(皇帝の娘婿)関係というモンゴル優位の関係を自ら捨て、奇皇后の母国として高麗を姻戚関係として認める平等な関係に格上げし²⁶、北元は高麗を味方につけるためにこうした計略を使った。

そして、1376年10月ナガチュ(納哈出)も右丞九住を派遣してきて、高麗に行っていた文天式を送り返してきた。文天式は恭愍王17年(1368)10月皇太子の誕生日を祝賀するために元に派遣した使者であった。彼はその8年後に高麗に戻ってきた計算になる。右丞相ココ・テムル(擴廓帖木児)の書信を受けた高麗の朝廷は禑王2年(1376)10月に密直副使孫彦を北元に送り、禑王の王位継承問題と関連した百官連名書を北元の中書省に送った。それは禑王が恭愍王の遺志で即位し、北元皇帝の冊封詔書が下される時を待っていたことを知らせるものだった。同年10月、高麗は開城尹黄淑卿をナガチュ(納哈出)に送り、ナガチュの使者九住の来訪に答礼し、12月ナガチュに書信を送って銀と羊を贈り物としてささげた27。翌年の禑王3年(1377)の正月にナガチュが使者を送ってきて、羊と馬を贈り物として持ってきた。そして、2月北元から翰林承旨ボラド(字刺的)を派遣し、王を冊封する命令と酒と海東青を持ってきた28。

北元の禑王冊封に対して「傾いていく北元としては、脱脱不花を最後まで高麗

²⁶ ユン・ウンスク「アーユシュリーダラ (愛猷識理達臘)」の活動と麗. 蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及び骨科学アカデミー共催韓・蒙関係の昨日と今日・2010 韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウランバトール、2010、237頁.

²⁷ 高麗史巻133、列伝46、辛禑2年10月.

²⁸ 高麗史巻133、列伝46、辛禑3年2月.

王として貫く力がなく、それよりはいっそ高麗の権臣たちの要求通りにすること で、高麗の気を引いた方がいいだろうという策であった29、という解釈がある。 しかし、この時は脱脱不花がすでに死んだ後だったので、事実北元には高麗国王 として立てられる人物もいなかった。

こうして北元は禑王3年(1377)2月に禑王を冊封し、これにより恭愍王18 年以降断絶していた冊封・朝貢関係がまた成立した³⁰。北元が禑王を冊封した時 に尹桓など、6名に平章事という位を与えた。次いでナガチュは、ムンバラブカ を派遣して親善を図り、北元は豆亇達を派遣して恭愍王神位に祭祀をさせた。北 元が高麗にこのような関心を示すと、高麗はついに北元の年号である宣光を使っ た31。同時に「内外の獄事を判決する時にただ至正條格に従え!32 という命を下 した。

1377年3月に高麗は三司左使李子松を北元に派遣し、王の冊封に対する事例 の文を捧げる33と同時に北元の皇帝をはじめとする統治者たちに贈り物を贈っ た。また、礼儀判書の文天式をナガチュに答礼使として送り、多くの贈り物を 与え、親善を強くした。ナガチュに送った文天式が 6月に北元から帰還した後 に、北元に行っていた謝恩使の李子松も戻って来た。この時、「元の朝廷の臣下 たちは李子松が朝服を着て礼をつくす姿を見て、みな泣きながら『わが朝廷が北 に移った後、軍事隊列の中で辛い時期を送っていた時は今日もう一度礼儀を見ら れるとは考えもしなかった』とし、手厚くもてなした34」という。

高麗国王を冊封し、その権臣たちの歓心を買ったと判断した北元は7月に宣徽 院使チェリックテムル(徹里帖木兒)を高麗に派遣して定遼衛を挟み撃ちするこ とを要請した35。これは北元としては復興の意志として強力な提案ではあったが、 高麗は北元と明に対して両面外交を行なっていた時であったので、これを受ける にも反対しようにもいささか難しいジレンマの立場であった。そこで、この提案 を受け入れるよりは、うまく説得して時期を延長するか、その提案自体をうやむ やにしようとした³⁶。禑王は、北元の使者に金の帯と鞍を乗せた馬を与えたが使 者は受け取らなかった。これは高麗が北元の要求を受け入れなかったからであ る。同年8月に高麗は啓稟使晉川君姜仁裕を北元に送り37、姜仁裕は9月に北元 から人を遣ってこれまでの事情を知らせてきた。その情報は、平章の文典成と大 參政の張海馬は、ナガチュと共に軍事を調練し軍馬を肥やし、高麗軍が来ること を待って定遼衛を攻撃する計画を立てているという内容であった³⁸。

これに対して高麗は、軍簿判書・文天式を北元に派遣して寒い冬だということ を理由に軍隊を動員することは難しいと伝えた。つまり、軍隊動員を正式には断

140

²⁹ 盧啓鉉、前述の書籍(1994)、638頁.

³⁰ キム・スンジャ、前述の書籍(2007)、85頁.

³¹ 高麗史巻133、列伝46、辛禑3年2月.

³² 高麗史巻84、志38、刑法1、職制、辛禑3年朝:「中外決獄-遵至正條格」.

³³ 高麗史巻133、列伝46、辛禑3年3月.

³⁴ 高麗史巻133、列伝46、辛禑3年6月.

³⁵ 高麗史巻133、列伝46、辛禑3年7月.

³⁶ 盧啓鉉、前出の書籍(1994),639頁.

³⁷ 高麗史巻133,列伝46, 辛禑3年8月.

³⁸ 高麗史巻133,列伝46, 辛禑3年9月.

れず先延ばし作戦を使ったのだ。そして、高麗は11月に黄淑卿を北元に派遣して冬至を祝賀し 39 、12月には王昇を派遣して新年を祝賀させた 40 。同月にナガチュが使者を高麗に遣わし、羊 160 頭と毛牛 3 頭を贈った 41 。

しかし、定遼衛征伐は北元だけが欲していたわけではない。倭寇が全州に侵入した時に都堂で敵の選択について相談したが、当時執権していた大臣の一人であった池奫は「倭寇はただ辺境をうるさくするだけなのでそれほど憂慮することはない。しかし、もし明の大軍が定遼衛に根拠地を作ってしまうと攻撃するのがとても難しくなるので兵力を回して遼を攻撃するのが上策である⁴²と主張した。倭寇の全州侵略というのは1376年9月倭寇が全州を陥落させたことをいう。これは北元が定遼衛を挟み撃ちにしようと提案する1年前のことである。したがって、池奫のこの言葉は高麗の執権者たちが北元との関係再開を試みながら明の遼東進出もけん制することを考えていた証しであるといえよう。一方、禑王が即位した直後から高麗は北元との関係再開を推進すると同時に、1374年末明に使者殺害事件が起こり、より悪化した明との関係を正常化させ禑王の冊封を受けるために地道に努力してきた。しかし、明はほとんど反応を見せず、高麗を外交的に圧迫する政策を繰り広げた。

さらに1376年8月「定遼衛から秋に高麗を進攻する」という知らせが入った。 この情報をつかんだ高麗は、各道に人を派遣して、軍隊を点検し、もしもの事態 に備えた⁴³。定遼衛が高麗を進攻するということが事実だったのかどうかは明ら かではないが、この知らせは高麗と北元との関係を促進させる役割を果たした。 当時明は、国内問題に汲々としていて高麗を侵略する立場になく、これよりわず か2か月前に送った文書で要求した事項に対する高麗の反応を見ずして、急いで 高麗をやっつけるというのはあまりにも性急なことであった。したがって、これ は噂に過ぎなかった可能性が高い。たぶん、明と高麗との関係を綿密に伺ってい た北元が、当時明と高麗の関係に改善傾向が見られないことを知ってこうした噂 を広めた可能性は排除しにくい。1376年8月以降、高麗と北元との友好関係が 速いスピードで推進するためにもこの事件がある程度作用したものと思われる。 高麗が北元と事大関係を結ぶと明も高麗に対して宥和政策を取り始めた。1377 年12月に明がそれまで抑留していた高麗人の丁彦など、358名を送り返してき た。そうすると、高麗は1378年3月判繕工寺事柳藩を明に送り、皇帝の恩に対 して謝礼し、また礼儀判書・周誼を派遣して恭愍王の諡号と王位継承の責命を要 請する上表文を提出した⁴⁴。そして同年6月に高麗使者(行人)である崔源、全 甫、李之富なども釈放して送り返してきた。一方では、1378年(禑王 4年)7 月に北元の使者が来てトグス・テムル (豆叱仇帖木兒) の即位を報告しようとす ると、禑王は病気を言い訳に迎えに行こうとはしなかったが、使者が強要したの

³⁹ 高麗史巻133,列伝46, 辛禑3年11月.

⁴⁰ 高麗史巻133,列伝46, 辛禑3年 12月.

⁴¹ Ibid.

⁴² 高麗史巻125、列伝38、姦臣1,池奫;高麗史節要巻30、辛禑2年10月.

⁴³ 高麗史巻133、列伝46、辛禑2年8月.

⁴⁴ 高麗史巻133、列伝46, 辛禑4年3月.

で王が行省に出て迎えた45。同年8月に周誼と柳藩が明から帰還したが、彼らは 明の礼部商書・朱夢炎が皇帝の教示を記録して高麗人たちに見せる文書を持って きた。この文書の主な内容は、明は高麗に対して内政干渉も使者の抑留もしない というものだったが、かえって高麗の明に対する姿勢を見守るという意味合いの 強いものであった⁴⁶。

しかし、いくばくもしないで同年9月に高麗は明の洪武年号を再び使い始め た。これは一方では北元の皇帝が没し、新しい皇帝が即位したので、これまで 使ってきた年号をそのまま使いにくく、他方では高麗に対する明の宥和政策と関 連があった。洪武年号を使って親明態度を示すと、明は高麗に対する宥和政策を 以前のような圧迫政策へと変えていった。高麗は、1378年10月に沈徳符を明に 送り、新年を祝賀すると同時に版図判書の金宝生を送って崔源などを送り返した ことについて感謝を表明したが、明の高麗に対する姿勢は中々よくならず、却っ て強硬路線へと旋回した。1379年正月遼東も 指揮使が鎮撫任誠を派遣して洪武 3年11月高麗軍が捕虜にした遼陽地方の官民男女1千余人及び高麗に逃げてき た明の兵士たちを返還せよと要求した⁴⁷。その理由は高麗が兵士を送って北元を 助けてあげるからと言った。これを通じて明の高麗に対する懐疑がまだ解かれて ないということがわかる。

一方、北元はほとんど1年ぶりである1379年6月に僉院甫非を派遣して、郊 祀を行ない、年号を天元に改称すると報告した。また、ナガチュ(納哈出)もム ンバラブカを高麗に送り付けてきた。禑王は、ムンバラブカが帰る際に、「丞相 は、亡くなった父とお互いに兄弟だと称した」といい、苧布と麻布をそれぞれ 150匹(むら)ずつ与え48、彼らに親近感をあらわにした。また、高麗は同年7月 に永寧君王彬を北元に派遣して郊祀を行ない、年号を変えたことを祝賀した。12 月にナガチュが鷹と羊を贈り物として送ってきた。

このように高麗は明の洪武年号を使った後も、北元と続けて外交を結んでい た。明との関係がまだ正常化しておらず、緊張関係が続いていたため高麗として は北元との関係を絶つことを急ぐ必要はなかった。他方では、高麗が明との事大 関係を回復させても北元と関係を維持する両端政策を維持することを決定した可 能性も否めない。

禑王6年(1380)、永寧君王彬が北元の詔書を持って帰還し、同年2月に北元 は、礼部尚書の時刺問、直省舍人の大都閭を派遣して、禑王を太尉に冊封する と、王が百官を従えて郊外にまで出て彼らを迎接した。3月に高麗は、密直部使 である文天式を北元に送り、節日を祝賀し、冊封に対して謝礼した。同年7月に 北元は使者を派遣して、大事を頒布し、ナガチュも使者を派遣してきた。

北元との使者往来は、その後激減した。ナガチュの使者が最後に禑王9年 (1383) 1月に高麗を訪問し、昔のような友好関係を結ぼうと提案した。北元の 朝廷から高麗に派遣した使者は最後に1384年10月に和寧府までやってきた。高

142

⁴⁵ 高麗史巻133、列伝46、辛禑4年7月.

⁴⁶ 盧啓鉉、前述の書籍 (1994)、643頁.

⁴⁷ 高麗史巻134、列伝47、辛禑5年正月.

⁴⁸ 高麗史巻134、列伝47、辛禑5年6月.

麗は、護軍任彦忠を派遣し、この使者を労い説得して帰らせたが、交通が塞がっていて半年も逗留して帰っていった。その後北元と高麗の間には使者の往来が途絶えた。その理由は、1385年の遼東に対する明の攻略の始まりと関連している。明は、ナガチュを攻撃する前の1384年にナガチュと高麗の中間地点に居住していた女真部落を攻撃して、ナガチュと高麗の連絡を遮断させたのである。これにより、ナガチュ直轄領土を経由しなければ高麗に行けなかった北元の中央政府使者にとってもその往来が中断せざるを得なかった。しかし、これは完全に断絶されず必要な場合、いつでも再開可能な潜在的な状況にあったと言える。

結論にかえて

恭愍王を継承した禑王代から高麗と北元関係には大きな変化があった。高麗はただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶した北元とも関係再開を試みた。

高麗が1369年に最後の使者を派遣してから5年ぶりである1374年に北元に告 計使を派遣したことを見ると、両国関係を再開しようとする要請は高麗が先に出 した。早くから高麗との関係再開を試みていた北元はこのようなチャンスをうま く利用した。

高麗の北元との関係再開は、明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性によって始まった、当時の東アジアの勢力均衡を維持しようとする努力の賜物であるといえる。このような状況であったため、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強力な反発にもかかわらず、北元との関係再開政策を守った。その結果、禑王3年(1377)2月に北元が禑王を冊封することにより、恭愍王18年以降断絶していた冊封-朝貢関係がもう一度成立した。北元がこのように高麗の歓心を買うような態度をとるので、高麗はやっと北元の年号である宣光を使った。しかし、高麗は北元の主目的である明に対する共同作戦の提案に関しては回避した。高麗は、北元と明という両大国のうち、一方に偏った政策を取らず、両国と同時に関係を結びながら勢力のバランスを維持して実利を図ったからだ。結局北元との事大関係を利用して、明を圧迫することで、1378年高麗は明から禑王の冊封を受けた。

こうして、明と北元の両国をすべて事大の対象国として認めた関係が持続した。しかし、高麗が事大の主な対象と設定した国は明であった。特に、明との関係が再開した禑王4年以降は、高麗は北元との関係を維持したが、明との関係を基本にしていた。禑王6年までの北元との使者の交換も北元を事大の対象としてみなしたからだけではなかった。両国のどちらにも事大形式を取るのは当時の外交的な問題を解きほぐすためのひとつの方法であった。高麗の北元との関係の目的を、明の過渡な貢物要求をけん制し、新しい王である禑王の冊封問題を解決するためにあった49という見解がある。しかし、高麗の目的はこれだけではな

⁴⁹ キム・スンジャ、前述の書籍 (2007)、87頁.

く、ずっと大きな目的である東アジアの勢力のバランスを維持しようとする意志 であった。つまり、より強固となる明の勢力拡大を北元と手を組むことでけん制 することにあったといえよう。反面、高麗と北元間の友好関係は高麗だけが得す るものではなかった。北側に追いやられ国際的に厳しい状況にあった北元にとっ て、一時期ほとんど断絶していた高麗との関係再開は何よりも重要であった。高 麗との関係が改善されれば高麗と連合して明を挟み撃ちし、少なくとも元帝国に 属していた国家たちが背を向けた状態の当時は、国家の国際的な名誉と権威を回 復するよいチャンスであった。つまり、軍事的と外交的の二つの目的があった。 北元において高麗との友好関係がどれだけ重要だったのかを北元時代に両国間で 交わされた使者の回数の約1/5は北元から高麗に派遣された使者であった事実が 物語っている。

禑王時代の北元と高麗の関係の最大の特徴は、高麗が初めて北元と典型的な冊 封・朝貢関係を結んだという事実である。禑王3年から2年間続いたこの関係は 元の干渉期に比べるとその性格がまるで異なる。それより160余年前のモンゴル と高麗関係が成立する時、高麗が願っていた関係の形であったといえよう。

参考文献

I. 史料鄭麟趾など、『高麗史』、北韓社会科学院民族研究所翻訳、ヌリメディア。

『明史』、北京、中華書局、1997.

『元史』(A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XXII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, The Institute of History, The National Library of Mongolia, Ulaanbaatar, 2003-2004.

II. 著書

1) 韓国語

キムスンジャ、韓国中世韓中関係史、ヘアン、2007.

盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994、

ユンウンスク、モンゴル帝国の満州支配史、ソナム、2010.

2) モンゴル語 Ч.Далай, Монголын түүх (1260-1388), УБ., Эрдэм, 1992.

1) 韓国語: 高惠玲 「李仁任政権に対する 一考察」 歴史学報、第91集、1981.

金塘澤「高麗 禑王 元年 (1375) 元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤 」 震壇学報 83, 1997.

ユンウンスク、「アユシリダラの活動と麗・蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及びモンゴル科 学アカデミー共催韓 - 蒙関係の昨日と今日 2010 韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウーラン バトル、2010. チェックメド・チェレンドルジ、「14世紀後半東アジアの国際情勢と北元と高 麗の関係」、韓国学中央研究院、韓国学大学院博士学位論文、2010

許興植、「 高麗末李成桂の勢力基盤 」、歴史と人間の対応: 高柄翊博士華甲紀念史学論集、ハ ンウル、1984.

2) その他

池内宏、「高麗末における明及び北元との関係 | 史学雑誌、1917.29-1.2.3.4

Ts.Tserendorj, A royal rescript of Emperor Ayushridar of Mongolia to the Koryo king and some issues on the relationship between Northern Yuan and Koryo J, Acta Historica, No10, Mongolian State University of Education, Ulaanbaatar, 2009.

指定討論

「北元と高麗との関係に対する考察—禑王時代の関係を中心に」を受けて

「質問者/張佳、回答者/ツェレンドルジ]

一(張)元・明時代において、高麗は非常に 重要な位置を占めています。明朝にしてもモン ゴルにしても、高麗をいかに籠絡しようかとい う動きが見られます。もちろん、歴史的な謎も たくさん残っています。先ほどツェレンドルジ 先生は、禑王の時代における北元・高麗関係の 発展を詳しく紹介してくださいました。ツェレ ンドルジ先生には二つお聞きしたいことがあり ます。この時期の歴史を読む時からずっと疑問 に思っていた問題でもあります。

一つ目は、高麗末期の恭愍王ですが、元朝末 期の恭愍王の行動からみれば、明に傾いて、元 とは関係を断絶したというのは、ごく自然な選 択だと個人的に思います。なぜなら、恭愍王と いうのは、高麗末期において非常に戦略的思考 に長けた君主だと思います。在位期間中、軍隊 を派遣し元朝とともに張士誠を討伐する高郵の 戦いに参戦しました。結局は、皆様ご存知のよ うに、勝利の一歩手前まできながら敗戦しまし た。この戦いを通じて、恭愍王は元朝の実力は 実際それほど強くはないと気づいたのかもしれ ません。それで、後の一連の反元活動が繰り広 げられました。例えば、高麗半島における元朝 の支配地を攻めるなどが挙げられます。今日、 朝鮮の咸境地域はほとんどその時期恭愍王に よって開拓された土地なのです。また、恭愍王 と元朝とがどうしても和解できないもう一つの 原因は、恭愍王は自分の権力を強めるために、 かつて奇皇后の家族を殺したことがあり、それ が、高麗と北元の間の隠れた痛みとなったわけです。いつ発作が起きるのか分かりません。ですので、明の勢力が拡大してからすぐ明に傾いて、元との関係を絶ちました。私から見れば、それがごく自然であります。しかし、よく理解できないところは、禑王が即位してから、なぜそれまでのやり方を捨ててすぐ元朝へ赴いたのか、根本的な理由が見つかりません。高麗史を読む時に一つ疑問に思ったのがこれです。

二つ目の質問について、高麗末期に高麗国内には文臣、儒臣を中心とする親明派と、武臣を中心とする親明派と、武臣を中心とする親元派があると言われていますが、ツェレンドルジ先生はこれについてどのようにお考えでしょうか。こういう分け方は、我々の共通認識と矛盾するところがあります。高麗の国王がなぜモンゴルと通婚関係を結んだかというか、一つの重要な目的としては義理のお父さんの力、つまりモンゴルの勢力を借りて国内の武士の地位を抑え、武臣専制の状況を打破したためです。そうすると、なぜ武臣たちは後ほど親元派となったのでしょうか。以上二つの質問です。

―― (ツェレンドルジ) 私がよく聞き取れなかった部分があるかもしれませんが、最初の質問は、恭愍王の態度が自然であったということですよね。なぜ、禑王は、それを排斥し、親明政策を取ったのかについてご質問されたのだと思いますが、合ってますでしょうか。

私たちは歴史を解釈する時に、すでに起きて しまったことなので、最初からそうであっただ ろうと解釈する場合があります。当時の状況を 見ると、まったくそうではありません。なぜな ら、大都を離れたトゴン・テムルがモンゴルの 故郷に戻ってきて、それから約20年間は明も 国内的には少し混乱がありましたし、国際的に もかなり混乱を経ている時期でした。この時 に、モンゴルが大都を離れた、捨てたからと いって、急に元と国交を断絶し、明と関係を結 んだのに対し、朝鮮時代の人たちの中には批判 した者もありました。私が批判しているわけで はなく、朝鮮時代にもそれを批判する人がいた ということです。あまりにも性急すぎる措置で あった。なぜなら、勢いがどっちに傾くかわか らない状況でモンゴルを捨て排斥し、明に走っ たということ自体が間違ったことでした。この ように間違ったというより、あまりにも急すぎ たという風に批判する学者たちがいます。だか ら、すでに今の人たちが知っているのは、元は 滅亡し、明は強力になったという事実を知って いるからそんな判断をしているのかもしれませ ん。しかし、当時の状況は五分五分で闘ってい た状態だったので、もう少し見守る必要があっ たのに、あまりにも性急にこんな政策を取った という風に、恭愍王を評価することはできま す。恭愍王はだからといって完全に元との関係 を断ち切ったわけでもありませんでした。その くせ元に使者を送ったり、また元から来る使者 たちも受け入れたりしました。だから両端関係 を結んでいたといえます。しかし、禑王は、な ぜこんな政策を実施したのか、それが知りたい ところです。私が先ほど時間を間違えて計算し てしまって、モンゴル以前の部分は全部言えま せんでした。半分ほど読み上げただけなので、 全部お話することができませんでした。だから 間違って伝わった部分があるかもしれません。 恭愍王の初期の状況が禑王が即位した頃にたく さん変化したのです。恭愍王が推測したよう に「もうすぐ元が滅びるだろう」と予想しまし たが、その何年後かにはまったくそうならない と推測する高麗の執権者・統治者たちもいたで しょう。そして、明もだからといって、明と関 係を結んだからといって、高麗に対する譲歩を したわけでもありませんでした。実は元と内通 していると疑ったからより強硬な政策を実施し ました。

だからこんな風になると、元がまだ存在する 時もこんな政治をする明が、もし元が滅びたり でもすればどんなことをするかわからないの で、高麗の執権者たちも北元を利用して、明を 圧迫し、そのようにしてこの両大国の間に挟 まっている弱小国家として勢力のバランスを取 ろうと努力したので、禑王の時にこんな政策を 取ったのだと私はいいたいです。

2番目の質問も、親元派、親明派といろい ろその当時を説明していますが、私が思うに そんなものがあったと確認しにくいと思いま

す。高麗はいつも自国の利益だけ実利だけを重 視していたので、この両大国がある時には、ど れ一つでも利用して自分たちが生き残ろうとし たのです。しかし、後に歴史学者が見ると、親 元派と親明派がいたように見えるのです。そし て、私が強調したいのは、韓半島に高麗という 王朝があって、後に朝鮮に変わりますよね。そ のように変えるのに北元という存在がとても大 きな役割を果たした、外交的に……、そんな点 を強調したいと思います。色々な意見がありま す、ご存知のように。国内政治勢力の葛藤、支 配層と被支配層との葛藤、しかし、最も大きな 要因は外交だったのです。続けて元と手を組ん だので、明が疑い、その結果、李成桂も政権を 倒す時に正当化したのはそれじゃないですか。 元の側についていたそんな勢力を追い出したの で、自分がしたことを正当化できたのです。こ れが私が一番強調したかった部分です。

元がその当時滅亡したからといって、モンゴルの政治的影響だとか、文化的な影響(高麗に対する)そんなものまで全部なくなるわけではありません。だから禑王の場合は、(親元政策)、最初は明をなだめようとしたのですが、これに失敗すると、完全に方向性を変えて親元政策になってしまったと言えます。以上です。

発表論文 1



モンゴル帝国の飲食文化の 高麗流入と変化

趙阮

漢陽大学

[原文は韓国語、翻訳:金 範洙(東京学芸大学)]

13世紀のモンゴル帝国建国以来、大規模な移動が起こり、その後、各地域 で文化交流が行われた。文化的な接触や刺激、変化は、モンゴル帝国時代の物 質文化の領域の中でも、食文化に大きく反映されている。13世紀、モンゴル がユーラシア大陸を征服後、各地域でモンゴルの皇帝に食事をもてなし、14 世紀には帝国の中心部で食文化の多様化や融合が見られた。食文化の変化は、 帝国の中心部から次第に周辺地域にも広まった。1260年モンゴルと高麗の和 親締結後、高麗に仏教で禁止されていた肉食文化が流入した。

朝鮮時代は、仏教の衰退とともに茶に代わる飲み物が発達した。14世紀『飲 膳正要』に紹介されていた清涼飲料水の舍兒別の調理に関する知識が、17~ 18世紀朝鮮後期の日用生活書である『山林経済』と農書『林園経済志』に渇 水として紹介されている。本発表では、モンゴル帝国の食文化の多様化と高麗 地域への流入の過程を検討し、朝鮮半島で起こったモンゴルの食文化流入の跡 を辿りながら、13世紀のモンゴル帝国が拡大する中で現れたモンゴル帝国の グローバル現象の特徴とその意味を見ていく。

1. 序 論

13世紀におけるモンゴル帝国の建設以来、大規模な人的移動が発生し、それ による各地域の文化間交流が行われた。文化的接触や刺激、また変容の現象は、 モンゴル帝国期における物質文化の領域の中でも飲食文化に色濃く反映されてい る。12世紀から13世紀のモンゴル草原では、肉類や乳製品を主食として摂取し ていたモンゴルの支配領域が定住地域へと拡大し、それに伴って遊牧民の穀類摂 取が増えるようになった。モンゴルが中国全域を征服して以来、中国各地で生産

された野菜や果物もまたモンゴル支配層の食卓に上がるようになった。モンゴルがユーラシア大陸を征服したあと、各地域の飲食文化がモンゴル大カンに進上されたことで、14世紀モンゴル大カンの宮廷では飲食文化の多様化や融合現象が現れるようになった。飲食文化の変化は、単に帝国の中心部に限定して出現したのではなく、漸進的な過程を経て帝国の周辺地域にも出現した。

モンゴル支配は、モンゴル人の食生活に様々な変化をもたらしただけでなく、 漢人の飲食文化にも少なからず影響を与えた。モンゴル西域人の移住により、モンゴル、回回の飲食文化が伝わった。漢人もモンゴル酒であるアイラグ、馬乳酒などを摂取し、またムスリム飲食文化の影響を受けた。この時期にはまた、「一日三餐」の飲食文化も普遍的となった 1 。このような現象は、中国地域に止まらず、韓半島(訳注:朝鮮半島)地域の飲食文化にも現れた。韓半島では、高麗後期になるとモンゴルの影響で肉類の摂取が盛んとなる 2 。

その影響の相関関係については、早い時期から民俗学界から注目されている。モンゴルの肉汁であるショルや韓国のタン(湯)文化、肉のスープにご飯や麺を入れて作る方式、ユピョのような干し肉を作る方式、モンゴルのゲデスや韓国のスンデ(訳注:豚腸詰。血を固めたソンジや餅米、春雨などを入れる)を比較して両国の肉食文化の類似性に注目した研究がある³。一方で、モンゴルが百年余り耽羅を軍事的要衝地にしたことで、済州の言語や習俗、飲食文化には、モンゴルの影響が残っている。その中で済州地域に残るモンゴル飲食文化の影響に注目した研究によると、130年間のモンゴル軍の駐屯により、モンゴル式スンデであるケデス、ユックポ(干し肉)、焼酎、タンの文化が耽羅に伝わったとする。済州の郷土料理であるモムクックは、モンゴルの飲食文化が済州の環境に適応して郷土化した飲食文化の事例とされる。モムクックは、豚肉を茹でたスープ(タン・湯)に海藻類のホンダワラを入れて作ったもので、モンゴル式タンスープが済州の風土に合う形で変容したものと考えられる⁴。

モンゴルは、帝国の建設以降、ある地域の文化を他の地域へ流通させる、文化の媒介者としての役割を果たした。このような様相は飲食文化にも現れ、モンゴル本土の飲食文化だけでなく、モンゴルが征服した地域の飲食文化がモンゴル征服期やそれ以降の時期に他地域で現れることもあった。高麗末の中国において発展した蒸留法は、モンゴルを通じて韓半島に伝わった。モンゴルは、征服地域の蒸留器術を活用して馬乳飲料を蒸留酒化し、それをアラキと名付けたが、このような蒸留文化はモンゴルの支配力が及ぶ地域から他地域へと普及していった。高麗に伝わった蒸留酒は、「焼酒」と呼ばれた⁵。

一方で、モンゴル支配下の中国では、各地域間の文化的交流の中で百科事典的な著作が編纂された。このような類書に出ている料理関連の項目や飲食関連の専

¹ 史衛民『元代社會生活史』(北京、中國社會科學出版社、2005) p105-106。

² 金尚寶『韓国の飲食生活文化史』 (パジュ、クァンムンカク、1997) p 331-332。 最近、国内においても、モンゴル飲食文化の韓半島流入と影響に関する研究が進められている。

³ キムチョンホ「韓蒙間の肉食文化の比較」『モンゴル学』 4、1996。

⁴ 李ジュンス「13世紀における耽羅と元帝国の飲食文化変動分析」『亜細亜研究』59-1、2016、p143-179。

⁵ パクヒョンヒ「燒酒の興起 - モンゴル時期 (1206-1368) 「中国」から韓半島への蒸留技術の伝来 - 」 『中央 亜細亜研究』 21-1、2016、p69-93。

門書籍を通じ、大元帝国の多元的世界を反映した飲食文化を垣間見ることができ る。代表的な日常的知識を盛り込んでいる『居家必用事類全集』や『事林広記』 には、当時の民間で食用された飲食が紹介されており、当時の飲食文化の実態を 把握することができる。それと共に、モンゴル支配層のために調理された料理が 整理・編纂された『飲膳正要』は、大元帝国の飲食文化の豊かさを示す貴重な資 料である。興味深いことに、これらの類書に出ている一部の調理法は、17世紀 から18世紀の朝鮮後期における日用生活書である『山林経済』や農書の『林園 経済志』に収録されており、これらはモンゴル帝国の飲食調理法に関する知識の 流通に関する端緒を提供している。

本稿では、『山林経済』や農書の『林園経済志』に出ている肉類調理法、及び 飲料と関連した記録に基づき、それに残されているモンゴル帝国の飲食文化の高 麗地域への流入現象の推移を検討したい。それにより、13世紀モンゴル帝国の 征服や膨脹が東アジア地域にもたらした文化的影響の一面を把握し、その意味に ついて考察したい。

高麗飲食文化の韓半島流入の背景 -高麗とモンゴル間の人的交流を中心に

1260年モンゴルと和親を結んで交流が再開されてからモンゴルと高麗間の人 的・経済的交流は活発となり、元帝国の飲食文化も自然に韓半島に伝わった⁶。元 帝国の飲食文化の高麗への流入に際して媒介となったのは、人的交流が主な要 因であったととらえることができる。高麗とモンゴルの関係は、1218年「哈真」 と「札刺」が1万のモンゴル軍を率いて契丹族の制圧のために高麗に侵境したこ とから始まった。それから1368年に元帝国が滅亡するまで、軍人やモンゴルの 支配勢力に至るまで、様々な階層が高麗を訪問したり長期間居住したりしたが、 彼らによって他国の文化が韓半島へ流入したものと考えられる。もちろん、それ にはモンゴル人だけでなく、モンゴル帝国の色目人官員、イスラーム商人、漢人 も含まれている。

高麗とモンゴル間の人的交流の様相を簡単にみると、まず、高麗に下嫁した高 麗の皇后らとその陪従であるケリンク(怯怜口)による文化流入が考えられる。 1274年、忠烈王とクビライの娘であるクトゥルク・ケルミシュ(忽都魯掲里迷 失)が婚姻してから、両国の通婚が通例的に定着され、恭愍王代までの80年余 りの期間に全部で7名のモンゴル人の妃が高麗にやってきた。彼女らは、ときに は高麗政治に直接介入して強力な影響力を駆使し、妃らの私属人であるケリンク は自然な形で高麗の新支配層として浮上した⁷。ケリンクは、モンゴルの有力支配

150

⁶ 朝鮮後期の農書で日用書籍である『山林經濟』や『林園經濟志』には、大元帝国時期の『居家必用』で紹 介されている料理法が引用されている。『居家必用』が高麗、或いは朝鮮時代のどの時点で流入したのかは分か らないが、大元帝国の飲食文化と関連した知識が韓半島に流入・受容された事例としてみることができる。関連 研究は、ジュヨンハ編『東アジアの本の文化史と朝鮮時代における飲食の知識体系:『居家必用事類全集』を 中心に』(2017、出版予定)参考。

⁷ コミョンス 「忠烈王代の怯憐口(怯怜口)出身官員」 『史学研究』 118、2015、p235-236。

層の家門に従属された奴隷で、モンゴル人の妃に付き添って高麗にやってきたが、その正確な数の把握は難しい。彼らの他に、王族女性が嫁ぐときに追従する家臣を意味する「滕臣」、つまり「陪臣」もモンゴル人の妃に従って高麗にやってきた。代表的な例として、印侯として知られるモンゴル人コラタイ(忽刺歹)、モスリムのセンゲ(三哥)、タングート人のシトゥール(式篤児)がある。この他にも高麗人の車信がクトゥルク・ケルミシュを補佐した。以上の記録から推察して、モンゴル人の妃が高麗に下嫁したときにモンゴル、色目、漢人、高麗人で構成される多様な種族出身の陪臣5~6人と奴僕が随行したものと思われる。大元帝国の飲食文化は、このようなモンゴル王侯を始めとするモンゴル支配層を通じて高麗に紹介されたと考えられる。

次に、高麗に派遣されたモンゴル人のダルガチ(達魯花赤)が挙げられる。彼 らは、モンゴル帝国初期から占領地を治めるために派遣された監督官である。 1232年に初めて開京や西京、また北界に72人が派遣され、高麗人によって殺害 されることがあった。以降、1260年に高麗とモンゴルの和議がなされ、スルダ イ(東里大)と康和尚がダルガチに任命された。彼らの主な任務は、高麗王室の 出陸を監督し、駐屯するモンゴル軍を統率することであった。任務を終えたあ と彼らは帰国する。その後の元宗10年(1269)、高麗権臣の林衍が元宗を廃位さ せたことをきっかけにダルガチが派遣されるようになり、1270年2月にトクトル (脱朶児) が高麗のダルガチに任命された。以後、1278年まで、7名のダルガチ が高麗に派遣された。モンゴル人出身であるトクトル(脱朶児)と黒的、その他 には、漢人の焦天翼、李益、張国綱、契丹人の石抹天衢が高麗に派遣された。モ ンゴルから派遣された彼ら官員の中には、高麗支配層と通婚関係を結ぶ者もあっ た。その代表的な例は、1270年のダルガチトクトルの要求による高麗大臣の金 錬家門との通婚である8。1283年には高麗に赴任した耽羅ダルガチのタラチが内侍 である鄭孚の娘を妻にしたことがあり。、1289年にはモンゴル使臣のアクタイが高 麗の功臣官僚である洪奎の長女と結婚した10。以上のような支配層を中心とする モンゴルと高麗の通婚の事例から、モンゴルの風習や文化が高麗社会に流入した ものと推察できるのである。

その他にも、元帝国の命により高麗には鷹狩や鷹の飼育に従事する鷹坊が設置された。元が設置した鷹坊の規模は250戸であるとされる。その管理者は、尹秀、朴義などの高麗人であったが、実際には、鷹の管理のため、モンゴル大カンは鷹狩や飼育に長けていた鷹坊子のニャンギアタイ [郎哥歹] 20人を高麗慶尚道の永州などへ送り込んだ¹¹。その事実から、鷹坊の運営のためにモンゴル人が派遣されたと考えられる。

一方で、1266年以来、日本との交渉や南宋征伐に備えて高麗に戦艦の建造と 軍費を負担させ、1269年の林衍の乱を期にモンゴル軍が高麗に駐屯するように なった。当時、高麗に派遣された軍の規模は明確に把握されていないが、林衍の

^{8 『}高麗史』卷26 「元宗世家」

^{9 『}高麗史』卷29 「忠烈王世家」

^{10 『}高麗史』卷106「洪奎傳」

^{11 『}高麗史』卷124「嬖幸傳」

誅伐を目的としたムンケト(蒙哥都)が率いる二千人のモンゴル軍が派遣され¹² 西京に駐屯した。また、頭輦哥の国王が率いる大規模な軍も西京へ移動して元宗 を護送した。1270年12月、元の朝廷は二千の兵力を高麗に増員し、屯田を設置 させた。さらに、ヒンドゥとサチに5千の軍を与えて屯田させ¹³、洪茶丘には高 麗人で構成される領民二千を以って屯田させた。屯田は日本征伐に備えるため で、その他にも、王京、東寧府、黄州、鳳州など、11ケ所の屯田を配置して經 略使をおいた¹⁴。以後 1275年には、南宋軍で構成される蛮子軍 1400人を海州、 塩州、白州に定住させた。1276年、元は楊仲信に幣帛を与え、その中の500人に は妻を求め与えたという記録が残されている¹⁵。1278年、ダルガチが撤収すると きクビライの命によって屯田軍はすべて廃止されたが、一部は残留したと考えら れる 16。 高麗で屯田を耕作したのは、モンゴル人、漢人、南宋人、高麗人など、 人的構成は多様であった。先述したように、高麗に定着している間、高麗人と通 婚する事例もあった。このような状況から考えると、元帝国からやってきた屯田 勢力を通じても、元帝国の飲食文化が高麗に流入した可能性がある。その中で、 焼酎の蒸留技術は高麗地域の屯田のために徴発されたモンゴル人を介して伝わっ た可能性が提起されたことがある17。

一方で、1273年に耽羅へ拠点を移した三別抄勢力を鎮圧するため麗蒙連合軍 が結成されてから帝国末期まで、耽羅は直轄支配地としてモンゴルに統治され た。この時期の耽羅に任官したモンゴルダルガチ、駐屯軍や牧人らは耽羅に居住 し、モンゴル文化の跡をこの地域に残した18。耽羅ダルガチは、屯田兵や住民に 馬と牛の牧場を設置させ飼育するようにした。モンゴルの影響は、済州の肉食文 化や肉スープ、酒のような地域飲食文化の中に色濃く残されている。

高麗を訪問したモンゴル人だけでなく、大元帝国を訪問した高麗人によって元 の飲食文化が紹介された可能性もまた大きい。実際に、忠定王に付き添って大元 帝国を訪れた文人である閔思平の『及菴詩集』には、「飲膳経」、つまり「飲膳正 要」が言及されているが¹⁹、これは 1330年の元文宗、トクテムル期における太医 院の飲膳太医である忽思慧が大カンのために執筆した薬膳書である。そこには豊 富な元帝国の料理が紹介されているが、閔思平の詩にも言及されていることか ら、高麗後半に『飲膳正要』とそれに紹介された元帝国の飲食が高麗に知られた と考えることができる。

^{12 『}高麗史』卷26 「元宗世家」

^{13 『}元高麗紀事』

¹⁴ リケソク 『高麗 - 大元関係の研究』知識産業社、2013、p178。

^{15 『}高麗史』 卷28 「忠烈王世家 |

^{16 『}高麗史』 卷29 「忠烈王世家 |

¹⁷ 李盛雨『韓國食品社會史』教文社、1984、p216。

¹⁸ モンゴルの耽羅支配と耽羅に居住したモンゴル人に関しては、ベスクヒ「元の耽羅統治や移住そしてその跡」 『中国史研究』76、2012を参照。

^{19 「}丹殼吹香風淡淡, 皺皮弄色雨溟溟, 心知此物眞仙味, 故入皇元飮膳經」(関思平、ユホジン訳、『及菴 詩集』, ソウル、韓国古典翻訳院 2013)

3. 韓半島の飲食文化に表れる元帝国の影響²⁰

高麗初期から朝廷は牧畜を勧奨した。馬は戦闘用や運搬に使われ、牛は主に農耕に利用され、相対的に牛馬の食用の比重は低かった。とくに高麗では仏教が隆盛し、何度も屠殺禁止令が出され²¹、成宗期には肉食を禁じる勅令まで下された²²。その影響で肉食文化はあまり発達しなかったと考えられる。『高麗図経』の風俗編には、高麗人の宴会場面が紹介されているが、献立は次のように素朴に描写されている。「今時の高麗人は、平床の上にまた小さい小盤[小俎]を置き、銅器を使用する。干し肉[鱐腊]と魚、野菜が一緒に出されるが豊かでない²³」。徐兢は、高麗人の肉食に関する「雑俗・屠宰」編において次のように記述している。

「高麗の政治は非常に善良で仏を好み殺生を警戒する。そのため、国王や宰相 [相臣]以外は羊や豚を食べることができない。また屠殺を好むこともない。ただ、使臣が訪れることになると、あらかじめ羊・豚を育てる。(その家畜を) 屠畜する際は手足を縛り付け、燃える炎の中に投げ入れ、その息が絶えて毛がなくなると水で洗う。もし生き返ると棒で殴り殺した後、腹を切り開き、腸胃をすべて切り、糞と汚物を洗い落す。そのため、スープや焼き物にしても酷い臭いがなくならず、その下手さはこの通りである²⁴」。

これらの記録を通じて、当時の高麗王室を除いて肉食摂取は難しかったことが 分かる。また、高麗における肉食は、宴会や客をもてなすための特別食だったと 考えられる。肉食が普遍的なものでなかった状況で、高麗人の屠畜技術も相対的 に発達しなかったとみられる。もちろん高麗の北辺地域は、契丹や女真との接触 を通じて狩猟部族の飲食文化にさらされていたと思われる。それに対し、相対的 に高麗内地における肉食文化は普遍的でなかったと考えられる。

ところが、1260年モンゴルと高麗の和親が成立してから、高麗地域における 肉食文化は拡大の様子を呈する。『高麗史』を記した史家は、忠烈王の妃后であ る斉国大長公主が母の計音に接して号泣しながらも、以前と変わらず肉類を摂取 したと記録している。史家の視線では、喪中にも関わらず肉食を禁ずることなく 肉類を摂取したモンゴル人後妃の姿が印象的だったようである。肉食が主食だっ たモンゴル人の妃は、高麗王室にきてからも日常的に肉を摂取したと思われる。 モンゴル人が高麗にやってきて、肉を日常食として摂取できるという認識を与え たかもしれない。

モンゴル大カンは、モンゴルと高麗が和親を結んで以来、高麗王に羊を下賜することもあった。1263年、クビライは元宗に調書や500頭の羊を送り、元宗はそれを諸王や5品以上の官吏に分け与えている²⁵。1297年にも忠烈王の誕生日を迎

²⁰ 本章は、筆者の論文、趙ウォン「『飲膳正要』と大元帝国飲食文化の東アジア伝来」『歴史学報』233、2017の一部内容を修正・補完したものである。

^{21 「}禁屠殺、肉膳亦買市廛以進」(『高麗史』卷2 光宗19년);「自今年限三年、禁中外屠殺」(『高麗史』卷8 文宗20年1月)

^{22 「}禁屠殺、斷肉膳」(『高麗史』卷3成宗8年12月)

²³ 徐兢『高麗圖経』巻22「雜俗·郷飲」

^{24 『}高麗圖経』巻23 「雜俗·屠宰」

^{25 『}高麗史』卷25 「元宗世家」

えて元帝国の太后が羊50頭と白鳥10匹、またモンゴルカン室の酒を下賜してお り²⁶、忠烈王期の王室が開催した宴会では、酒と羊肉を出して宴会を開いたとす る記録がある27。このことから、モンゴルとの和親成立以来、モンゴル人の主食 であり北中国で多く摂取されていた羊が高麗王室を中心とする支配層の食卓に上 がったと考えられる。ところが、高麗の風土は羊飼育には合わず盛んにはならな かった。このように、高麗後期には上流層を中心に祭祀と宴会などで羊肉や豚肉 が使われ、庶民層では、広く飼育されていた鶏や犬が食用されたととらえること ができる²⁸。

一方で、高麗末の肉食の普及と共に、農作業で活用されていた牛を食用として 認識するようになった。モンゴルとの関係が成立する以前の牛肉の食用は、羊肉 や豚肉と比べて相対的に少なく、上流層の一部が牛肉を食用したという記録があ る。モンゴルと高麗の和親以来、モンゴル朝廷は、牛や白鳥を徴発し貢納するよ う命じた。1271年の元宗期は、モンゴルから農牛 6000頭を要求されており、高 麗に来ていた屯田兵にとっても、牛は農作業のためだけでなく食用としても重要 であった。元の農牛徴発の要求により高麗では牧牛が行われたが、それは牛の数 を増加させただけでなく、食肉観が自然な形で高麗社会に定着していく上で重要 な役割を果たしたと考えられる²⁹。

『居家必用』の 庚集には、元代における民間の料理文化が紹介されている。 『居 家必用』に編纂された調理法は、17世紀の朝鮮で編纂された実学書である『山 林経済』にその多くが収録されている。金尚寶は、元末の類書『居家必用』に出 てくる料理は、17世紀朝鮮時代の「治膳」編に 60%以上がそのまま収録されて いるとし、そのことから、高麗後期に元から肉類の料理法が伝わったとした。た だ、元の肉類料理における主材料であった羊肉に代わって、高麗や朝鮮では牛肉 と豚肉を活用したととらえている30。

『居家必用』に紹介された肉類調理法の中で、『山林経済』に引用されている事 例をみると次の通りである。『居家必用』焼肉品のところでは、焼肉、羊膊、羊 肋、羊耳舌、野鶏、鶴鶉、羊胗肪、野鴨が、煮肉品の煮諸般肉法としては、羊 肉、敗肉、煑驢馬、煑肥肉、牛肉、馬肉、獐肉、鹿肉、熊掌が『山林経済』に原 用されている。焼肉は、「肉を焼いて出す方法として、火爐に焼く羊以外、すべ ての肉は串刺しにして油・塩・醤・刻み薬味・酒・酢を付け、のり(糊)を薄く 塗りつけ炭火の上でひっくり返しながら火が通るまで焼き上げ、小麦粉の皮を剥 ぎ取って出す」とする。それには、羊膊、羊肋、羊耳舌など、羊の前足、羊のあ ばら骨、羊の耳や舌の焼き物料理が紹介されている。「煮諸般肉法」には、牛、 羊、ロバ、馬、鹿、ノロ、アナグマ、雁肉、熊掌などの頑丈な肉、脂っぽい肉、

154

²⁶ クビライは高麗に命じた「置郵・籍民・出師・輪糧」の要請を高麗側から実行すると報告された後、1263 年8月に「其れを力を持って行おう」と命じる調書と合わせて羊を下賜したわけである。『高麗史』卷31「忠烈 王世家

^{27 『}高麗史』卷31 「忠烈王世家」

²⁸ 李盛雨 『高麗以前の韓國食生活史研究』 郷文社、1978、p362-363

²⁹ 李盛雨 『高麗以前の韓國食生活史研究』 p364。

³⁰ 金尚寶、前掲書、p331-332。

傷んだ肉など、様々な肉類を茹でて食べる方法を挙げている³¹。高麗後期以降、 韓半島では肉は食したものの干し物や煮物以外の調理法は発達しなかったが、北 宋期から元代までの多様な調理法が盛り込まれている『居家必用』の肉類調理に 関連した豊富な知識は、有効な情報を提供したと考えられる。

モンゴル帝国の形成以来、モンゴルやその支配下にあった各地域の文化が東アジアに流入した。以上の内容を通じて、モンゴルと高麗王室が和親を結んでから、王侯、官僚、商人、軍人などの身分で高麗にやってきた人たちを通じ、高麗社会の上層部のみに消費され仏教文化の影響により制限されていた肉類の摂取は、より普遍化して拡大していく傾向を確認することができる。

肉類の普及と共に、モンゴルの征服以後、生産が増えたのが酪と酥であった。 朝鮮時代の王室では、酪粥を常膳として食したという記録がある。酪粥は駝酪粥とも呼ばれたが、興味深い事に、駝酪はモンゴルで牛乳を発酵させて作ったヨーグルトを意味する。これは朝鮮時代に御貢として王家で摂取しただけでなく、朝鮮上層部でも常食され、外国からの使臣が来たときもこれをもてなした。朝鮮時代に廐牧や牧畜を管轄した司僕寺、内医院などで進封を担当した。朝鮮前期には、駝酪粥のような乳製品を専門的に製造する集団があり、スユチ(酥油赤)と呼ばれた。彼らは、黄海道、平安道にいたモンゴル人らで屠畜業に従事し、朝鮮初期に朝鮮王室へ食事を供給した司饔房に酥油を上納したが、世宗3年(1421)、朝廷はこれを廃止するよう命じた32。このようなスユチの存在は、高麗末期から韓半島北部に居住していたモンゴル人だった可能性が高い。また、朝鮮初期にモンゴル人が乳製品の製造を専門的に担当した事実から、乳製品を主食とするモンゴルの飲食文化が朝鮮王室に残っていたと推察できる。では、このような乳製品は、いつ頃から韓半島で食用されただろうか。

『高麗史』によると、高麗の明宗の在位期間中、翰林学士を歴任した李純佑が八関会で使うために牛乳で煉乳を作ったが、四頭の乳牛が全部動員され、牛と小牛が弱まることを指摘する上疏をした³³。その事実から、高麗時代の上層部では特別な行事に乳製品を製造し使用したことが分かる。高麗末になると、乳製品の生産がさらに専門化する様子を呈する。高麗末の禑王代には乳牛所という御用の乳製品を製造する専門機関を置いた。ここでは、牛酪を作って王に献上し、王はこれを近臣らに保養食として下賜することもあった。

以上の内容から、高麗末に乳製品を製造する専門の機構が置かれ、乳製品を王室に進上する制度が朝鮮にも引き継がれたことが分かる。また高麗末に王室が乳製品を常食する風習は、乳製品を主食とするモンゴルの風習から由来したものであり、高麗に嫁いだモンゴル王侯らや官僚を通じてモンゴル風の飲食文化が伝わったと推定することができる。

肉類や乳製品の摂取の他に本稿で注目したことは、モンゴル帝国で飲用されていた飲料である舎児別の伝来である。朝鮮時代には仏教の衰退と共に、お茶に代

³¹ キムへスク「『居家必用事類全集』の飲食調理法の内容と朝鮮での引用」『東アジアの本の文化史と朝鮮時代における飲食の知識体系』p77-80。

^{32 『}朝鮮王朝實錄』2「世宗實錄」世宗3年。

^{33 『}高麗史』卷99「李純佑傳」

わって飲料が発達することになった。その過程で、モンゴル帝国期に飲用された 飲料が韓半島にも紹介される。朝鮮後期の日用生活書である『山林経済』には、 渇水、つまり清涼飲料として「木瓜渇水」と「五味渇水」が出ている³⁴。また『林 園経済志』には、御方渇水、林檎渇水、木瓜渇水、蒲萄渇水、香糖渇水が紹介さ れているが³⁵、その調理法は、『居家必用』の「渇水番名摄里白」の項目からその まま引用したもので、『飲膳正要』にはモンゴル大カンが飲用した舎児別として 紹介されている。

「渇水番名摄里白」は、番名、つまりペルシア語で摄里白と呼ばれた渇水であ る。その種類として、桂皮、丁香、ゲファなどを入れて作った御方渇水、もぎ立 ての林檎汁を煮て作った林檎渇水、山桃汁を絞って作った楊梅渇水、木瓜を入れ て作った木瓜渇水、五味子汁を蜂蜜と一緒に煮て作った五味渇水、ぶどう汁に蜂 蜜などを入れて食べる蒲萄渇水、鬆糖、藿香の葉、ショウガなどを入れて煮た香 糖渇水、葛粉、鬱金、山梔、甘草などを水と混ぜて作った造清涼飲法などの清涼 飲料が紹介されている。このなかで五味子汁を入れて煮た五味渇水の製法が『飲 膳正要』に出ている五味子舎児別と非常に類似している。

史料	原文
『飮膳正要』	五味子舍兒別:新北五味十斤、去子、水浸、取汁;白沙糖八斤、煉淨. 右件一同熬成煎
『居家必用』	五味渴水:北五味子肉一兩爲率.滾湯浸一宿.取汁同煎.下濃豆汁對當的 顏色恰好.同煉熟蜜對入.酸甜得中.慢火同熬一時許.涼熱任用.
『事林廣記』	五味渴水:北五味子肉一兩爲率.滾湯浸一宿.取汁同煮.下濃黑豆汁對當的顏色恰好. 同煉熟蜜對入。酸甜得所。慢火同熬一時許。涼熱任意用之.
『山林經濟』	五味子滾湯浸一宿.取汁同煮.下濃豆汁對當的顏色恰好.同煉熟蜜對入.酸甜得中.慢火同熬一時許.涼熱任意用之. ³⁶

『飲膳正要』、『居家必用』、『事林広記』、『山林経済』などの五味子渇水は、製法 において、五味子汁を糖分と一緒に煮た後、冷まして飲む点で基本的に類似して いる。また朝鮮後期に編纂された『山林経済』の五味子渇水製法は、『居家必用』 の製法をそのまま引用している点から、『居家必用』の料理法を参照したことが 分かる。ところで、細部の調理過程をみると、食材の使用に多少の相異点を発見 できる。『飲膳正要』では白沙糖が使われたことに対し、『居家必用』、『事林広 記』、『山林経済』では五味子と一緒に豆汁を入れて煮込み、最後に蜂蜜を混ぜて 冷ます方式を取っている。また、『居家必用』、『山林経済』の豆汁を入れるとい う記述に対し、『事林広記』では黒豆汁の特定材料が記されている。五味子渇水 製法において五味子を除いた食材の活用に差が生じたのは、各地域の風土や環境 の違いによるものと考えられる。

『飲膳正要』では、甘味を出す調味料として砂糖と白沙密が様々な料理に活用さ れている。当時、砂糖生産を専担していた砂糖局は杭州に所在し、その他に泉州

³⁴ 洪萬『山林經濟』 (パジュ、景仁文化社、1973).

³⁵ 徐有榘『林園經濟志』(ソウル、保景文化社、1983).

³⁶ 韓国伝統知識ポータルhttp://www.koreantk.com/ktkp2014/kfood/kfood-view.view?foodCd= 109513 (検索日: 2016年8月20日)

の永春地域は白沙糖の主要産地であった。ここでは、ムスリムとユダヤ人が砂糖の製造技術を掌握していた。このような技術は、アラビア半島から泉州地域に定着したこの地域出身の技術者を通じて流入し、そこで製造された白沙糖は大都のモンゴル宮廷に進上されたのである。当時の元の宮廷で飲用された五味子渇水は、西域から伝わった白沙糖技術が加わって貴重な飲料として進上されたのである。その反面、他の日用書に出ている五味子渇水は、当時、容易に手に入れることができた豆汁を活用して製造した庶民的な飲料であった。我が国においては、伝統的に五味渇水に五味子と一緒に緑豆が使われた。これもまた、当時の韓半島における主要生産物であり食材として多く活用されていた緑豆は購入が容易で、朝鮮人の味覚にもなじんだためであろう。

4. 結 論

13世紀におけるモンゴルの大帝国建設以降、モンゴル帝国の影響力は東アジアの政治、社会、制度などの各分野において強い影響を残した。本稿では、モンゴル襲来が東アジア地域に残した痕跡について文化的な側面から考察を試みた。

モンゴル帝国期には、ユーラシア大陸を網羅する広範な規模の交流が展開された。このようなダイナミックさは、帝国の中心部と征服地域文化に変動をもたらし、ときには地域文化の地形を変えることもあった。本稿で考察したように、大元帝国の中心部は各地域の文化が接触し交流する場であった。モンゴルの開放主義政策により、モンゴル、ウイグル、チベット、ペルシア、漢人、高麗人が官僚として登用され、クビライ期の海運体系の整備により物資運輸インフラが確立され、各征服地域の物資が大都に集められるなど、人的・経済的レベルにおいて帝国の中心部には多様な文化が共存した。この時期の文化的多様性や融合の現象を目に見える形で示してくれるのが飲食文化である。大カンは、西アジア、中央アジアから東南沿海や高麗に至るまで、各地域からもたらされる多様な朝貢品により、各地域の山海珍味を味わうことができた。

1260年モンゴルと和親を結び交流が再開されてから人的交流が活発に行われ、帝国の飲食文化も自然な形で韓半島地域へ流入した。高麗に下嫁したモンゴルの王侯らや私属人、ダルガチを始めとするモンゴルの官員、駐屯軍や屯田勢力、元帝国を訪れた高麗人を通じて元帝国の飲食文化が伝えられ、自然に高麗の飲食文化に新しい要素と認識が加わり、変化がもたらされた。飲食文化は文化要素の中でも長期的な接触や交流を通じて受容される分野である。元帝国の飲食文化の一部が高麗と朝鮮に受容されたことは、モンゴルと高麗の長期的、かつ広範にわたる接触が反映されたものである。

モンゴル帝国が崩した後、ユーラシアの各征服地区から民族主義的な政権が誕生したのは周知のことである。明と朝鮮は性理学を基礎として王朝の正統性を再確立していき、政治的にはモンゴルの残滓を消そうとする努力を続けた。しかし、既に社会に溶け込んだ文化的影響を消すことはそう簡単にはできなかった。元帝国という政治実体は消えてしまったが、13~14世紀に進んでいた広範な交

流の遺産は東アジア各地域にその痕跡を残した。興味深いのは、そのような痕跡 は17~18世紀の朝鮮実学者たちの文集の中から確認できるということである。 これは「モンゴル襲来」というのはモンゴル勢力の衰退とともに消えたのではな く、その後でも東アジア地域に巨大な波及力として長期間残っていた事実を反映 している。

指定討論

「モンゴル帝国の飲食文化の高麗流入と変化」を受けて

[質問者/橋本雄、回答者/趙阮]

――(橋本)とても興味深いご報告をありが とうございました。ちょうど日本でも『居家 必要事類 (きょかひつようじるい)』が有名に なったところです。今まで日本人がラーメン、 麺を食べるようになったというのは17世紀、 江戸時代といわれていたんですけれども、実 は15世紀の室町時代だということが明らかに なったばかりなんです。室町時代の僧侶が書い た『蔭涼軒日録』に、『居家必要事類』に出て くる「経帯麺」を振舞ったという記録があるの ですが、これは鹹水を使う麺なので、分類上、 ラーメンなんだということなんですね。それで 日本人が最初にラーメンを食べたのは15世紀 だということになりました。つまり日本にも小 麦粉を使った麺の文化というのが、おそらくこ の『居家必要事類』とともに伝わってきている わけです。そこで考えられるのは、日本は大麦 とかハト麦とかいろいろな麦が今まであったわ けですけれど、たぶんこの頃小麦が普及してい たんだろうと、だからラーメンもできたんだろ うと思うんです。

そこで一つ目の質問なのですが、韓国における麺文化というのは、いつ、いかなる形で始まっているのか、麦粉でも大麦でも何でもいいのですが、もしご存知であれば教えていただきたいと思います。

二つ目の質問は、高麗の宮廷内というのはそれなりに仏教信仰が篤い空間だと思うのですが、こういう肉食文化が入ってくることに対し

て、抵抗感、軋轢、ためらい、というかそうい うものはなかったのでしょうか。おそらくそれ は、『事林広記(じりんこうき)』などの版本の 種類ですね、公的なものか私的なものなのか、 とか、一体だれが持ち込んだのか、という版本 のルートの問題にもかかわってくるだろうと思 われます。私は高麗の仏教信仰の中身を全く知 りませんので、彼らがどういう気持ちでお肉を 食べていたのか、日本人はあまり大きいことは 言えないわけですが、教えていただければと思 います。

最後は小さな質問なんですけれども、クビライから元宗へ羊五百頭を送った際に一緒に送ったという「調書」、これがいかなるものなのか教えていただければと思います。

一(趙) 今回の発表では、高麗の食文化において、モンゴルの食品が東アジアに及ぼした影響を考察しましたが、実は高麗以外の地域に対してもとても好奇心がありました。日本の状況はどうだろうか、ベトナム地域にはどんな影響があっただろうか、知りたかったのですが、資料がないのでみられませんでした。先ほどラーメンのお話をしてくださったのでそんな痕跡が発見されたことがわかり、私自身学ぶ機会になりました。

まず2番目の質問からお答えいたします。高 麗の宮廷では仏教信仰が篤かったと思うのです が、肉食文化についての反応とか、痕跡はあ

るのかというご質問だと思い、お答えします。 『高麗史』には高麗に嫁いできたモンゴルの王 妃のうち、名前はよく思い出せないのですが、 母の喪に服して(『高麗史』に記録されていま す) いるのにも拘わらず、肉食を毎日していた と、『高麗史』にあえて言及されているのを見 ると、それがとても印象深かったのかなと思い ます。日常的で一般的な行為ではなかったの で、高麗人たちの目には物珍しく映ったのでは ないか、と判断しました。そこで、高麗の仏教 信仰と高麗では普遍化しなかった文化がモンゴ ルを通じて浮き彫りになり、それが異質のもの として感じられたのは事実です。しかし、通婚 関係や緊密な接触を重ね、こうしたことがモン ゴルを通じて自然に受け入れられるようになっ たということ、帝国の文化が自然なこととして 受け止められるようになったということ。大都 に質子(人質)としてとらえられていった高麗 王たちや、質子出身の王たちを通じてもこんな 文化が自然なこととなり慣れていった。上層部 からそんな拒絶感がなくなっていったのではな いかという風に推測することができます。

次に3番目のご質問ですが、高麗史に出てく る記録、「羊500頭下賜」は、『高麗史』の公式 的な、つまり国が編纂した史料に記録されてい ます。これ以外にも牛を捧げたり、徴工をした とかそんな記録があります。

最後に最初の質問ですが、麺食文化がいつか ら入って来たのかについては、私は正確にはお 答えできないのですが、小麦粉ではなく、他の 材料で麺類を作っていたことは、すでに三国時 代から確認されています。麺は食べていたけれ ど、小麦粉のものではなかったということで す。すでに韓国ではそんな文化があったけれ ど、小麦粉で作ったものに関しては確認をする 必要がありそうです。

-- (**橋本**) 3番目の質問の「調書」に関して ですが、史料の典拠ではなくて、それがどんな 文書、ドキュメントだったかを教えていただけ ますか。

---(**趙**) 私は『高麗史』に出ている記録だけ を見ていったので、「調書が送られた」という 記述だけで、どんな調書が行き来したのかはわ かりません。その当時の外交文書に出ている記 録のようです。以上です。

161

発表論文 11



「深簷胡帽」考 一蒙元時代における 女真族の帽子の盛衰史

張佳

復旦大学

[原文は中国語、翻訳:丁 莉(北京大学)]

要旨

明太祖の洪武元年に発した「胡服」を改める詔令には、元の時代に流行っていた「深簷胡帽」も対象となっていた。蒙元時代(訳者注:モンゴル時代)の資料を総合的に考察すれば、鮮明な時代的特徴を持つ「深簷胡帽」は即ち「幔笠」のことだと判明する。「幔笠」はそもそも金の女真族の服飾であったが、後にモンゴル人に受け入れられ、さらに蒙古の遠征とともに中国、高麗、中央アジアないしペルシアにまで広がった。君主から大臣官僚、知識人、庶民に至るまで各階層で広く着用されていた。元明交代以後、「深簷胡帽」が漢民族の士大夫たちに、元の時代に中国がいかに胡化されたかの重要な象徴だとされ、たちまち歴史の表舞台から退いた。朝鮮半島においても、高麗から朝鮮王朝への交代の際に似たようなことがあった。

「幔笠」は鮮明な時代的特徴を備えているが、これまでの蒙元服飾研究においては正確に理解されておらず、明の帽子との混同も見られた。「幔笠」に関する研究は、重要な図像資料の生成時代を明らかにすることができる。また、東アジアにおける「幔笠」の流行と消失は、かつて一世を風靡した「蒙古スタイル」の盛衰や、東アジア儒者知識人の「胡漢・華夷」思想の消長の歴史の一側面を物語っているといえよう。

1. 序文―ある史料の校勘から

洪武元年2月の壬子(1368年2月29日)に、即位からわずか38日の明太祖朱 元璋(1328~1398年)はかの有名な「胡服¹」をなくす詔令を出し、「復衣冠如唐

¹ 本文で用いる「胡服」「胡化」「華夷」「夷夏」などの語彙は従来の表現を踏襲したものであり、特定の価値観を表すものではない。

制」、即ち唐代当時の服装への回帰を臣民に呼びかけた。これは、新王朝が文化 的には「中国の伝統」を継承しようとしたことを示している。『明太祖実録』に は、この詔令の内容に関する以下の抜粋がみられる。

詔して衣冠を復すること唐制の如くならしむ。初め元の世組は朔漠より起り て、以て天下を有す。悉く胡俗を以て中国の制を変易す。士庶みな辮髪椎 髷、深襜胡俗、衣服は袴褶窄袖及び辮線腰褶をなし、婦女は窄袖の短衣を 衣、下に裙裳を服し、復た中国衣冠の旧なし。甚しければ其の姓氏を易えて 胡名となし、胡語を習う。俗化既に久しく恬として恠しむを知らず。上久し くこれを厭う。是に至り悉く命じて衣冠を復して唐制の如くならしむ。…… 両截の胡服を服すを得ず、其の辮髪椎髷、胡服、胡語、胡姓は一切禁止し、 斟酌損益すること、みな聖心より断じたり。是において百有余年の胡俗、悉 く中国の旧に復せり矣²。

中国近世の文化史において、これは非常に重要な文献であり、蒙元史と明史の 研究者によってしばしば引用されている。しかし、この詔令に記される具体的な 服飾品についての研究は管見ではまだ行われていない。今日一般的に使われてい る台湾中央研究院歴史言語研究所校印本『明実録』は、明や清の数種の写本を組 み合わせ、校勘を行ったものであるが、誤った記述が多くみられる。この詔令の 表現に見られる相容れない点についても、きちんとした校勘がなされておらず、 整合性があるわけではない。

例えば、「深襜胡俗」の「襜」という字は、『洪武正韵』などの字書によると、 古代服飾品の「蔽膝³」にあたるというが、それでは「深襜胡俗」という語句の意 味が成り立たない。『太祖実録校勘記』では「旧校の『俗』という字を『帽』に 変えた4|が、それでも「深襜胡帽」の意味が分りにくい。幸い、嘉靖以降、明 代における『実録』の諸写本が公になったので、明朝後期の歴史家の間で歴史 書の編纂時に『実録』を引用することが頻繁に行われた。周藩宗正である朱睦 樗(1517~1588年)は、洪武朝の政事記録である『聖典』の中で、『実録』のこ の記事を引用し「深簷胡帽5」とした。嘉靖『宣府镇志』や顧炎武『日知録』の中 でも引用され、同じく「深簷胡帽」となっている⁶。また、この詔令の前後の文脈 から、「辮発椎髻」を元代の髪型、「袴褶窄袖」をその服装、「深簷胡帽」を帽子 の様式とすれば、文の意味も成立する。上記の要素を総合的にみると、通行本 『明太祖実録』に見られる、「胡服」を改める詔令にある「深襜胡俗」という語句 は、「深簷胡帽」としなければならない。「襜」は「簷(異体字は「檐」)」と形の 類似による誤りで、「俗」は前の文にある「胡俗」の語に影響され、「帽」を「俗」

162

^{2 『}明太祖実録』30、台湾中研院史語所校印本、p.525

³ 宋濂等『洪武正韵』巻6。

^{4 『}明太祖実録校勘記』p103。『校勘記』では「胡俗衣服」は一つの語句とされているが、必ずしも妥当では ないと(筆者は)考える。

⁵ 朱睦桿『聖典』巻9「易俗」、『四庫全書存目叢書』史部第25冊p342。

⁶ 嘉靖(1970年) 『宣府镇志』、『中国方志丛书・塞北地方・察哈尔省』に収録、台北成文出版公司、1970 年、巻20、p216。陳垣『日知録校注』巻28、2007年、p1624、安徽大学出版社。

と間違えた。

しかし、「深簷胡帽」とは一体どのような帽子なのか。元朝においてどの程度流行していたのか。元朝から明朝に変遷されたのち、「胡服」禁令によって果たして人々の生活から姿を消してしまったのだろうか。校勘だけでは答えを出すのは困難である。そこで、元朝や明朝の史料、とりわけ社会生活の実態を反映した図像資料を用い、その答えを探ってみたい。

2. 名を正す―元代「瓦楞帽」という名の誤用

「深簷胡帽」は文字通り「深簷(長いひさし)」が特徴である。元朝の図像資料からも分かるように、このいささかユニークな帽子は元朝では頻繁に着用されていた。この帽子は早くから中国の服飾史を研究する学者たちに注目されていた。沈従文氏(1902~1988年)による『中国古代服飾研究』(1981年香港で出版)の中で、元至順(1330~1332年)の刻本『事林広記』に掲載されているすごろくを楽しむ人々の図(図1)を取り上げ、図中の役人がかぶっている「深簷(長いひさし)」、四角、方形の帽子をはじめて「四方瓦楞帽⁷」と名付けた。沈氏の著書は中国の服飾史研究の草分け的な存在であり、大きな影響を持っている。

「瓦楞帽」という名称もその後の服飾史研究において踏襲された。ただ、この種類の帽子は「四楞(もしくは四角)」のものが多く見られるが、「六角」タイプのものも時折みられる。そこで研究者たちによって「四楞瓦楞帽」や「六楞瓦楞帽」などの名称も作られた⁸。

中国古代のものを研究する難しさは、図像資料や出土品にそもそも名前がなく、それらをどう命名するかということである。極めて確かな文献と照らし合わせることができない場合、学者はその物の形から名前を付けるという便宜的な方法を用いることが多い。実際に、「瓦楞帽」という名称は蒙元時代の文献には一切見られず、沈氏の命名は便宜的なものにすぎなかった。幸いにも、明洪武4



図 1

⁷ 沈従文『中国古代服飾研究』146「元代玩双陸図中官僚和僕従」、上海書店出版社、2011年、p535。

⁸ 趙剛『中国服装史』、清華大学出版社、2013年、p117。



図 2

年の『魁本対四言雑字』(現存する最古の図鑑)の復刻版が日本で刊行された。 それには、このような帽子は「幔笠」という名称で表記されている(図2を参 照⁹)。元朝の文献には「縵笠」とも表記されている。この他、形状が四角形で他 の帽子とは異なるため「方笠」という表記もある。さらに、元朝ではこの帽子 のもつ独特な「深簷(長いひさし)」という特徴を吟じる人々も多くいた。例え ば、王和卿がはげ頭の者が幔笠をかぶって頭を隠すという小令『天浄沙・咏禿』 の中で以下のように詠んでいる。

笠のひさしは両肩までのび、頭を覆う布は眉毛の位置まで固定されている。 ゆったりとそれをめくりあげ、そして慌てて「君子よ、顔が見えないではな いか¹⁰」と言った。

曲中の「笠のひさしは両肩までのび」という個所は、いうまでもなく幔笠の 「長いひさし」の特徴を大げさに描写している。

単に「幔笠」(もしくは「方笠」)という歴史上本来の名称に戻すだけであれ ば、これほどの紙幅を費やして論ずるまでもない。

ここで特に指摘しておきたいのは、沈従文が「幔笠」を便宜的に「(四方) 瓦 楞帽」と命名したことが、意外にも明朝の服飾史乃至元・明の社会文化史の研究 を誤った方向へと導いたことである。「瓦楞帽」という名称は元朝のいかなる資 料の中にも確認されていないが、明朝後期の史料には非常に多く見られる。明朝 の「瓦楞帽」はてっぺんが折り返された形状になっており、瓦にその形が似てい ることからこのように命名された。これは、明朝末期の人物が登場する図像資料 にはよく見られる (図3を参照。曽鯨(1568~1650年)による張卿子像)。沈氏 の『中国古代服飾研究』という一冊が大きな影響力を持つようになる以前に、名 物事典の中での「瓦楞帽」の解説には誤りはなかった。例えば、華夫氏が中心と なって編纂した『中国古代名物大典』(済南出版社、1993年)では以下のように 書かれている。

瓦楞帽、略称を「瓦楞」と呼び、てっぺんを折り返した瓦のような帽子である。 明代の庶民は皆これをかぶっていた11。

^{9 『}魁本対相四言雑字』、『和刻本中国古逸書叢刊』15、鳳凰出版社、2012年、p344。

¹⁰ 楊朝英編纂 (1958) 『朝野新声太平楽府』 3、p110、中華書局、

¹¹ 華夫等編集『中国古代名物大典』、済南出版社、1993年、p529。

しかし、沈氏の著作よりもあとに出版され た服飾史著作や最近の名物事典などの多く は、明朝の「瓦楞帽」を元朝の「幔笠」だ と間違えている。例えば、『中国文物大辞典』 (中国文物学会専家委員会編、2008年)の 「瓦楞帽」の項目には「金・元の時代にはす でに存在し、明朝では庶民のみが着用した とある。つまり、きちんとした根拠や調査に 基づくことなく、「瓦楞帽」に関する従来の 解釈を沈氏の研究と無理やりくっつけてし まったのである(筆者の固陋ゆえ、金朝や元 朝の文献の中では、明朝のような「瓦楞帽」 は発見できていない)。『中国設計全集・服飾 類編』(張秋平等編集、2012年)の「元代瓦 楞帽」の箇所を見ると、さらに様々な研究を 取り入れており、「北方の遊牧民の間で流行 した帽子で、明朝で踏襲された……瓦楞帽は



図 3

明朝の庶民がかぶっていた。」とあり、多くの文献を引用して、この帽子が当時の流行であることを証明しようとしている 12 。このような例は他にもあるが、紙幅の関係でここでは逐一列挙しない。

「瓦楞帽」という名称の誤用は、元明社会文化史の研究をも誤った方向に導いた。蒙元時代(モンゴル時代)の歴史的な位置づけへの困惑から、明朝に対する蒙元の影響は非常に注目されるテーマである。研究者の中で、明朝後期に流行した「瓦楞帽」は、文化面において蒙元の影響を受け、「胡風」が流行した典型的な例だとする¹³。上記の考察から分かるように、これは元朝の「幔笠」と明朝の「瓦楞帽」が混同された故に生れた誤解である。

3. 起源と広がり 一幔笠の起源とアジアにおける広がり

洪武元年の禁止令により、「深簷胡帽」はモンゴルというレッテルを貼られてしまう。「幔笠」というのは確かに元朝で流行したが、そもそもの起源はモンゴル民族の服飾ではない。考古学の資料を見ると、この類の帽子は、金の時代にはすでに中原地区に存在していた。今日発見された中で最も古く、確実な幔笠に関する図像資料は、山西省高平県李門村で発見された、金正隆2年(1157年)の石刻女真人楽舞図(図4を参照)である。

¹² 張秋平等編『中国設計全集・服飾類編』、商務印書館、2012年、p55。 黄能馥等編『中国服飾史』、中国旅游出版社、1995年、p.297。 董進(擷芳主人)『大明衣冠図志』 は管見ではこれまでの明代服飾研究における最高の専門書だが、残念ながらこの誤りはそのまま踏襲されている。(北京大学出版社 2016 年、p316)

¹³ 罗玮『汉世胡风:明代社会中的蒙元服饰遗存研究』,首都师范大学修士学位論文,2012年,pp. 24-26。

この資料は女真族の雰囲気を色濃く表しており、登場人物が辮髪をし、先が 尖った靴を履き、蹀躞帯を着け、また笛や太鼓などを演奏に使うなど、これらは すべて、北宋と南宋の文献に描かれている女真族の風俗と合致する¹⁴。この帽子 が元朝で多く見られる帽子と若干異なるのはその先端である。ここのは先端がと がっているが、元朝で多いのは四角で、金大安2年(1210年)山西省の候馬董 **玘墓にあるレリーフに見られる**(図5を参照、上部に飾りがある)。

現在発見された資料から推定すると、女真族の帽子に端を発したこの「幔笠」 は、およそ金朝末期から中原地区の漢民族の中で流行しはじめたものである。元 朝初期の北方地域の古墳からはこの帽子の図像や実物が多く出土している。山西 省大同市にある馮道真(1265年)の墓からは籐製の幔笠が出土された。その後、 王青(1297年)の墓でも籐製と草製の幔笠が出土している¹⁵(図6を参照)。陝西 省の蒲城洞耳村壁画墓(1296年)には、モンゴル帝国時期における北方地域の漢 民族、女真族、そしてモンゴル族の三つの文化の融合が見られる(図7を参照)。 氏名や戸籍で見ると、墓に埋葬された男女は共に漢民族であるが、モンゴル名も あった。壁画の人物は総じて女真族(前合せが左前、幔笠)とモンゴル族(腰線 襖、罟罟冠) のスタイルを融合した服装をしている。つまり、早くも元朝初期に は、幔笠が北方民族の間で日常的に着用するものになっていたことが分かる。



図 4



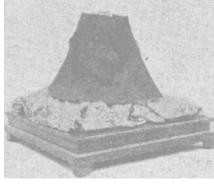




図 5

図 6

図 7

¹⁴ この図の紹介は、景李虎『金代楽舞劇石刻的新発現』、『文物』1991.12のpp34-37を参照。やはり沈 従文の影響を受けて図の中の方笠を「瓦楞帽」と表記している。女真族が漢民族の文化を大きく取り入れる以 前は、楽器は比較的単純なつくりをしていた。『三朝北盟匯編』では「其の楽器は即ち唯鼓、笛、其の歌は即 ち鷓鴣の曲なり。」という記述がある。

^{15 『}山西省大同市元馮道真、王青墓清理簡報』、『文物』1962.10。

167

一方、中国の南方地域の状況は北方地域とは異なる。長く続いた宋と金の軍事的対立のもとで、儒学でいう「華夷の弁」の考え方は、南宋朝廷が人心を掌握し、戦いに備える精神的支柱であった。これは、南宋の思想や文化に影響しただけでなく(例えば、南宋の人々の教科書となった胡安国(1074~1138年)の『春秋伝』は「攘夷」を主な特徴とした¹⁶)、日常生活にも影響を及ぼした。南宋の朝廷や士大夫たちは、異民族の風俗や風習が浸透することを極度に警戒した。紹興年間政局が安定すると、宋高宗は「かつての我々の領土はまだ取り戻していないため、漢民族の文化で夷(未開の異民族)を感化しよう」とし、庶民が胡楽、胡舞に倣い、長跪して献酒するなどの女真族の娯楽に興じることを禁じた¹⁷。金朝より南宋領内に逃れてきた「帰正人」は、南宋政府より居場所を与えられるとともに、胡服を着用しないことも要求された¹⁸。宋孝宗が在位していた乾道四年(1168年)には、臨安の庶民が「胡俗」に倣うことに対しても注意喚起がなされた。以下は南宋社会の日常での「夷夏の弁」の意識を表した興味深い文献である。

臣僚言「臨安府風俗、自十数年、<u>服飾乱常、習為胡装</u>、声音乱雅、好為胡樂。如插棹篦、不問男女、如吹鷓鴣、如撥胡琴、如作胡舞、所在而然。此皆小人喜新、初則効学以供戲笑、久習之為非、甚則上之人亦将楽之、與之俱化矣。臣窃傷悼、中原士民沦於左衽、延首企踵、欲自致于衣冠之化者、三四十年却不可得、而东南礼儀之民、乃反堕于胡虏之習而不自知、甚可痛也。……伏望戒敕守臣、检坐紹興三十一年指揮、厳行禁止、犯者断罪、令衆自然知惧矣。"诏従之¹⁹。

この史料からみると、金朝の服飾が南宋に一定の影響を与えたことは確かである。しかし、その影響を過大視し、南宋の服飾が「北方民族と混ざり合い、同一化した²⁰」と見るべきではない。中国の南北の服飾文化が「混ざり合い同一化した」という状態は、元朝が江南を統一し、地理的あるいは心理的な華夷の境界線が徐々に消滅した後に発生したものである。少なくとも、南宋の使節が残した大量の文献を見ると、服飾品における大きな差異は宋と金の人々の最も直観的差異である。例えば、乾道6年(1170年)に範成大が金に派遣された際に、開封を通り、以下のことに気が付いている:

民亦久習胡俗、態度嗜好與之倶化。男子髡顶頂、月辄三四髡,不然亦間養余髮、作椎髻於頂上、包以羅巾、号曰"蹋鸱"、可支数月或几年。村落間多不復巾、蓬辫如鬼、反以为便。<u>最甚者衣装之類、其制尽為胡矣。自過淮已北皆然、而京師尤甚。</u>惟婦女之服不甚改、而戴冠者絶少、多绾髻²¹。

¹⁶ 牟潤孫『両宋春秋学之主流』、『注史斋叢稿』、中華書局、2009年、p69-87。

¹⁷ 馬端臨『文献通考』巻310、浙江古籍出版社、2000年、p2436。

¹⁸ 李之亮点校『宋史全文』巻24上、黒竜江人民出版社、2000年、下冊、p1640。

^{19 『}咸淳臨安志』47巻、(1990年) 『宋元方志叢刊』第4冊中華書局p3775-3776。

²⁰ 劉復生『宋代「衣服変古」乃其時代特徴—兼論「服妖」現象的社会意義』、『中国史研究』、1998·2、

pp. 88-89。宋代の服装が北方民族の影響を受けた内容は、この論文で最も詳細に取扱っている。

²¹ 範成大(2002年)『攬轡録』、孔丹礼点校『範成大筆録六種』中華書局、2002年、p12。

淳熙丙申(1176年)に周煇は金に派遣され、金の統治が及ぶ睢陽地区に入り、 以下のように述べている。

入境、男子衣皆小窄、婦女衣衫皆極寬大……無貴賎、皆著尖頭靴、所頂之 巾、謂之蹋鸱22。

この時南北分裂から半世紀しか経過していないが、北方民族の服装や髪型に は、既に南方と大きな違いが生まれていた。範成大や周煇が目にしたのは、明ら かに南宋で見慣れた服装や髪型ではない。政治的な境界線、更には「夷夏之防」 という心理的な境界線によって、北方民族の服飾が南方に伝わることが阻まれた のである。この状況に変化が生じたのは、元朝以降であった。

「幔笠」は南宋末期に金やモンゴル族が支配していた淮北地区において流行した が、南宋治下の地域ではそれほど大きな影響はなかった。南宋が滅亡する直前の 徳祐2年(1276年)2月に、左相の呉堅一行が祈請使としてモンゴルに派遣さ れ、河を渡りかつて金朝の地であった邳州に到着した際、「これより先、人々は みな笠をかぶっており、服装も我々と異なっている」ことに気付いたという²³。 モンゴル民族による南宋の征服がすすむにつれ、元々異国、異民族のものという 色彩を帯びていた幔笠は、瞬く間に南方へと伝わり流行した。宋濂は、南宋の遺 民で撫州士人であった李士華(1266~1352年)のために作成した墓誌の中で次 のように記している。

会宋亡為元、更易方笠、窄袖衫、処士独深衣幅巾、翱翔自如、人競以為迂。 処士笑曰「我故国之人也、義當然尓²⁴。

故国の服装を断じて変えないのは、李十華のようなごく少数の遺民たちだけで あった。出世の機会を狙い、多くの士人は笠をかぶり、北方民族の格好をするこ とを、モンゴル族の征服に対して従順である証拠とした。江南平定当初、文人の 胡長孺(1249~1323年)は都に呼ばれたときに笠をかぶっていったと言われて いる。『農田余話』に興味深い記述がある。

趙文敏孟頫、胡石塘長孺、至元中有以名聞于上、被召入。見問文敏「会甚 麼?」奏曰「做得文章、暁得琴棋書画」。次問石塘、奏曰「臣暁得那正心、 修身、斉家、治国、平天下本事」。時胡所戴笠相偏攲、上曰「頭上一個笠児 尚不端正、何以治国平天下!」竟不録用²⁵。

野史の中の話は必ずしも事実であるとは限らない。しかし、笠をかぶるのは 元朝の江南地域では確かに流行していた。至順年間に刊行された日用類書であ

168

²² 周煇『北轅録』、顧宏義点校『宋代日記叢編』、上海書店出版社、2013年、p1134。

²³ 厳光大『祈請使行程記』、王瑞来『銭塘遺事校箋考原』、中華書局、2016年、p331。

²⁴ 宋濂『北麓処士李府君墓碣』、黄霊庚点校『宋濂全集』巻69、人民文学出版社、2014年、p1647。

²⁵ 長谷真逸『農田余話』巻2、『四庫全書存目叢書』子部第239冊、pp. 333-334。







図8 図9 図10

る『事林広記』には「笠とは、<u>古くは外国のものだったが、今では庶民は皆それをかぶっている</u>26」とある。図像資料からみると、幔笠を着用する人は必ずしも特定の家柄や社会階層に限ったということではないようだ。元朝文学者である虞集(1272~1348年)の後世に伝わった画像(図8を参照)では、頭に黒い笠をかぶっていることがわかる。元朝末期に張士誠を「幕府文人」と風刺した散曲の中で、「皂羅辮兒緊紮捎、頭戴方檐帽²⁷」とあり、辮髪で幔笠をかぶったような文士像が描かれている。また、福建将楽楊氏家族の壁画墓に描かれる車夫や召使いも同様の笠をかぶっている(図9を参照)。

幔笠の流行は、元朝末期まで衰えることはなく、皇帝もその流行に乗るほどであった。現存する元の帝王の肖像画を見ると、鈸笠以外に幔笠を着用する者もあった。元朝周朗『天馬図』を模写した明の作品には元の順帝も幔笠を着用している(図10を参照)。幔笠が流行した地域も中国に止まらず、モンゴル族の征服と共にアジア各地域にも広がった。

10世紀以降、高麗は遼と金の両国と国境を接していた。武力で迫られ、高麗はこの二つの北方民族政権に対して臣服するしかなかった。しかし、文化政策で言えば、高麗がとったのはむしろ後の朝鮮による「小中華主義」と類似する態度であった。即ち、中原地区の文明を受け入れ、できる限り遊牧民族の風習が浸透するのを回避した、という態度である。初代高麗王である王建(877~943年)は、著名な「訓要十条」でこのように述べている:

我東方旧慕唐風、文物礼楽、悉尊其制……契丹是禽獸之国、風俗不同、言語 亦異、衣冠制度、慎勿效焉²⁸。

^{26 『}事林広記』後集巻10、『続修四庫全書』第1218冊、p373。

²⁷ 瞿佑『帰田詩話』下巻、喬光輝『瞿佑全集校注』、浙江古籍出版社、2010年、p.473。

^{28 (2012}年)『高麗史』2巻、『太祖二』第1冊p26、台北文史哲出版社。

学者たちの間で『高麗史』の記載の真偽に関する意見が分かれているが、記述 の中に高麗の文化人が中華に憧れ、中華を慕う「慕華意識」が現れているのはい うまでもない。高麗末の政治家である趙浚(1346~1405年)は高麗の服装の変 化を「祖宗衣冠礼楽、悉遵唐制;迨至元朝、圧於時王之制、変華従戎(祖先の服 装や礼楽は悉く唐制に従ったが、元朝に至ると、時の王に抑えつけられ、漢民族 のものから異民族のものに変えてしまった)²⁹」と述べている。『高麗史』で記載 されている輿服制度は、唐と宋の制度がかなり混ざり合ったものである。北宋末 期の使節である徐兢は高麗で見たものを記録し、以下のように述べている:

(高麗) 唐初稍服五采……逮我中朝、歳同信使、屡赐袭衣、則渐渍華風、被 服宠休、翕然丕変、一遵我宋之制度焉、非徒解辫削衽而已也³⁰。

しかし、このような儒教文化の影響から生まれた「夷夏」意識や服装のしきた りにおける「慕華」政策は、蒙元時代に入ると一変したのである。

モンゴルの9回にもわたる高麗侵攻(1231~1273年)への抵抗に失敗した 後、高麗はモンゴルの世界体系に組み込まれることになった。クビライは高麗に 対して服装を変えないことを許可したが、クビライの駙馬(娘婿)になった高 麗の忠烈王(1274~1308年在位)は服従の態度を示すために、自ら「辮髪胡服」 にしただけでなく、1278年に全国の人々にモンゴル服の着用を命じた。

令境内皆服上国衣冠、開剃。蒙古俗、剃頂至額、方其形、留髮其中、謂之開 剃31。

この命令が出されると、「宰相から官僚まで、頭を剃らぬ人はいない」ことに なり、儒者でさえ免れることができなかった。高麗におけるこのような徹底的な モンゴル化にはクビライも驚きを隠せなかった。

(世祖) 因問(高麗人) 康守衡曰「高麗服色何如」。対曰「服鞑靼衣帽。至 迎詔賀節等時、以高麗服将事。一帝曰「人謂朕禁高麗服、岂其然乎!汝国之 礼、何遽废哉! 32]

忠烈王16年(1289年)には、高麗の儒臣である鄭可臣は辮髪に笠という姿で クビライに謁見した。騎馬民族風の格好は儒者の身分に合わないため、クビライ は「笠を外す」ことを命じ、「秀才は辮髪をしてはいけない、頭巾をかぶる方が よろしい」と諭した³³。

170

²⁹ 趙浚『松堂集』3巻、『韓国文集叢刊』大6冊p425。

³⁰ 徐兢『宣和奉使高麗図経』巻七「冠服」。

^{31 『}高麗史』巻72 「舆服」第二冊、p476。

^{32 『}高麗史』巻28 「忠烈王一」。

^{33 『}高麗史』巻105「鄭可臣伝」。





図 11 図 12

しかし、高麗における笠の流行はその後も続き、高麗末期の恭愍王や禑王の時期には、むしろ幔笠(方笠)は役人(代言班主以上は黒草の方笠)や各司胥吏 (白い方笠)が公式の場で着用するものとなった³⁴。

モンゴルの支配者たちは、幔笠を東アジアに限らず、中央アジアや西アジアにも持ち込んだ。高昌故城で出土した回鶻文刻本の仏本生譚の挿絵には、インド人もみな幔笠をかぶっている(図11を参照)。14世紀イルハン朝の歴史家ラシードゥッディーンが編纂した歴史分野の大著『集史』のなかでも頭に幔笠をかぶったモンゴル族の君主が登場する(図12を参照)。元々女真族の服飾であった幔笠は、モンゴル族によって受け入れられたのち、彼らの支配がアジア各地に及ぶにつれ、アジア地域に広がったのである。モンゴルの征服が政治、民族、そして文化の垣根を超えた象徴の一つとして見ることができる。

4. 再び垣根を作る―幔笠の消失と東アジア「夷夏」意識の消長

14世紀後半に元が滅亡し、異なる民族の文化が自由に融合する歴史は短くも幕を閉じた。モンゴル帝国の廃墟と化した地に、政権同士の地理的な境界線や民族間の心理的な界線が再び明確になった。新しくできた明帝国は北元の軍事圧力と、内部の社会秩序の問題を同時に対処しなければならず、その解決方法のひとつとして、儒教の「華夷の弁」の思想を改めて打ち出し、文化の上で「用夏変夷(夏を用て夷を変ず)」「復我中国先王之旧(我が中国先王の旧を復す」を宣言することと、脱モンゴル化運動を行うことで自らの政権の正当性を造り出すことである35。この政治および文化方面での大きな変化は東アジアの世界にも急速に影響をもたらした。

洪武元年の胡服禁令がまさに示すように、明朝が新しく作った服飾制度の目的 は唐の時代の制度に戻すことである。服装を改めることは、「陋胡人旄頭之制、

^{34 『}高麗史』巻72 「與服一」。

³⁵ 関連内容は拙著を参照。『新天下之化:明初礼俗改革研究』、复旦大学出版社、2014年。





図 13

図 14

草場簡便之風(胡人の旄頭の制、草場簡便の風を陋とす)」、「特慕唐朝尊重之俗 (唐朝尊重の俗を特に慕う」ためであり、政府はこれを機に風習を改め、「共成復 古之盛(共に復古の盛を成す)」ことを目的とした36。「胡元」の騎馬民族として の風習、「豪侈粗戾(豪奢かつ無骨」な風習の一部として、幔笠とその他の金・ 元など北方民族の服装や髪型が禁止、あるいは特殊な場合のみ着用可能という制 限を受けることになった。その後、幔笠は明朝の図像資料から姿を消してしまっ たのである。特筆すべきは、一部では「明朝の」幔笠の写真が引用されている が、それは引用物の年代が間違えられたり、(例:『宝寧寺明代水陸画』図13を 参照)、もしくは明代に改めて刊行された元朝の資料(例:万暦重刊本李孝美の 『墨譜』図14を参照)であったりする。

これらの資料は、必ずしも明朝の社会生活の実態を反映したものではなく、研 究者が陥りやすい「図像資料で歴史を証明する際のワナ」なのである³⁷。

以下の物語は、胡服が禁じられてから100年が経過した後に、明朝の人々 にとって幔笠が既に見たこともない物になったことを示している。弘治元年 (1488)、朝鮮の役人であった崔溥は、風で浙江省にまで漂流し、自らが喪中だっ たこともあり、頭には「深笠(幔笠に同じ、朝鮮では後に喪服のひとつになっ た、以下詳細アリ)」をかぶっていた。この奇抜な格好がすぐに中国人の注目を 集めた。

(陳華) と役人が私のもとを訪れ、私の笠を指さし「これはどんな帽子か」 と尋ねた。私は「喪笠なり。国のしきたりで、3年間墓守をすることになっ ているが、不幸にも私のように漂流してしまった者、やむを得ずふるさとか ら離れた者は、天に顔向けできず、血の涙を流すほどの悲しい気持ちをしっ かりさせるため、この笠をかぶっている³⁸

³⁶ 劉夏『劉尚賓文読集』巻 4、『続修四庫全書』第1325冊、p155。

³⁷ 歴史研究における図像資料の使い方について、纏哲「以図証史的陷阱」、『読書』2005・2を参照。

³⁸ 崔溥 『漂海録』、葛振家点校本、線装書局、2002年、p62。

このような長いひさしが日差しを遮る笠子は明の人々にとって甚だ奇妙なもので、崔溥は笠子の説明に多言を費やさなければならなかった。しかし、わずか100年ほど前には笠は江南地区で流行し、上は知識人や士大夫、下は車夫や召使まで、幅広く受け入れられていた。この例が示すように、元から明に移り変わるにつれて、幔笠は明の人々の生活から姿を消してしまったのである。

モンゴル帝国崩壊後、朝鮮半島における幔笠の命運は中国大陸のそれと類似している。高麗末期の国家独立意識もあり、さらには明朝の影響も受け、高麗末期から李氏朝鮮の初期には「胡服」を排除する運動が起こった。復古を呼びかけた明の服飾改革は、高麗末期の儒臣によって「華夏」文明復興の象徴だとみなされた。明朝と高麗が宗藩関係を結ぶにあたり、高麗は度々使節を派遣しては「大明衣冠」の使用許可を懇願し、明朝に対して「慕華向化」(中華文化への憧れや帰順、服従)の意を示した。さらに、元朝の服飾を排除し、明朝の服装を受け入れることは、高麗国内において「祖先の古き良きものの復興」という特別な意義が付与された39。

高麗恭愍王の在位中に、幔笠はひとたび「代言班主」以上の高官が着用する公式な服飾品になった。しかし、明朝を模倣している李氏朝鮮の服飾の中で、幔笠は「郷吏」階級の平服に指定された40。李氏朝鮮初期には学識の高い人々を「郷吏」に任命できない規定が設けられた。官僚の中では、「郷吏」が前朝の服装を守り、当世の服装を着用できないのは言うまでもなく軽蔑されるという意味を含んでいた。明の初期にはモンゴル風「一塔頭」という髪型を宦官に命じ、「皂隶」(下級役人)には羽のついた小さな帽子をかぶるように命じたのと同じことである。朝鮮成宗3年(1472)に礼曹は平安道の「郷吏」に他所と同じように『経国大典』に照らし「黒竹方笠」をかぶることを要求したが、激しく反対された。

平安道江西县吏康翰等上言啓「本道诸邑乡吏、<u>率以良民假属、故并着草笠、</u> 其来已久、不可依他道例著方笠、请仍旧」従之⁴¹。

「良民」出身の郷吏でさえ、卑しい地位を示すことになる幔笠の着用をしたくはなかった。士大夫であればなおさらのことである。前文で崔溥の言葉にあったように、忌中期間中の外出は喪服を着るのがきまりが悪いため、長いひさしのある幔笠をかぶることで、「不敢仰見天日、以堅泣血之心」を示している。幔笠は朝鮮半島において外出する際に一時的に用いられる喪服に変化していた。李氏朝鮮の国王孝宗の在位時には、文臣の許積は君主と冠服制度についての議論を行い、「前王朝(高麗)の士大夫がかぶっていた四角い笠は、即ち現在忌中の人がかぶる方笠のこと⁴²」と述べた。

高官の服飾から便宜上の喪服にまで成り下がってしまったため、幔笠の地位

³⁹ 高麗が明朝の服装のしきたりを取り入れ、「胡服」を改革する過程は拙論を参照。「衣冠与認同:明初朝 鮮半島襲用「大明衣冠」歴程初深」、『史林』2017.1。

^{40 『}経国大典』巻3の「礼典・儀章」、朝鮮総督府中枢院印刷、1934年、p231。

^{41 『}成宗大王実録』21巻、成宗三年八月丁丑、『朝鮮王朝実録』、第8巻p680韓国国史編纂委員会印刷、成宗四年正月壬寅26巻、『朝鮮王朝実録』第9冊p2。

^{42 『}孝宗大王実録』18巻、孝宗八年正月壬辰、『朝鮮王朝実録』第36冊p74

は急激に下がってしまった。しかし、朝鮮知識人の「小中華」意識の向上につ れ、幔笠は喪服としてでさえその資格が問われることになった。丁卯・丙子胡乱 の後、学者たちは幔笠の起源に疑問を抱くようになり、忌中期間中の外出時に身 に着けるものとしてふさわしいか否かについて議論がなされた。例えば、鄭経世 (1563~1633年)は、「平涼笠」をもって「胡金之制」の方笠に取って代わるべき かどうかという質問に対して、「忌中期間中の外出は喪服を着用しなければなら ず、簡略化してはならない⁴³ | と回答している。李光庭(1674~1756年)の意見は 比較的曖昧で、「方笠は『胡金之制』だったとはいえ、古代の儒学者が喪中の時 『深衣方笠』をよく着用していた」のは「喪服で外を歩いてはならない」という 習慣があったことから、方笠をかぶることはやむを得なかった⁴としている。そ れに対して、李徳懋(1741~1793年)の考え方は非常にはっきりとしている。

方笠是金人之服、丽末宰相戴之、我朝中叶胥吏戴之、今則為喪人所著。其制 尤为怪骇。東国喪服粗具礼制、而头著虏笠、不可不改正者也45。

「胡金」に端を発する幔笠は庶民の暮らしから徐々に姿を消しただけでなく、根 強い夷夏論のもとで、便宜的な喪服としてでさえ疑いの目を向けられ、排斥され た。蒙元時代の皇帝から庶民の間で人気を博した状況と比べると雲泥の差であ る。幔笠の中国と朝鮮半島における栄枯盛衰は、ある意味知識人階級の夷夏意識 の消長を図る物差しになっていた。

5. むすび―小さな帽子と大きな歴史

以上の考察により、長らく「瓦楞帽」だと誤解され、更には典型的なモンゴル の服飾品だと見られてきた幔笠は、実は女真族に起源を有する帽子だと分かっ た。一見小さな笠に過ぎないが、その盛衰の歴史は、12世紀から14世紀にかけ ての東アジアの民族や政局の変遷、更には東アジアの儒教文化圏における華夷思 想、胡漢観念の消長を直観的に反映するものである。

北方民族の要素が色濃い幔笠は、金朝後期に中原地区で流行した。宋朝の王室 が中原地区から南に渡ったのち、知識人の間では中原地区は文化的な異国とな り、服装や風俗における「華夷の弁」によって幔笠の南部への伝達が困難であっ た。高麗の国土は、遼や金と隣接していたが、文化における「慕華意識」から彼 らの心には遊牧民族の服装に対するわだかまりがあった。13世紀モンゴル人の 侵攻により、東アジア大陸の各政権の地理的な境界線、さらには民族間の文化的 な垣根がなくなった。幔笠はこの時期のモンゴル族の動きに沿ってアジア各地に 伝えられた。夷夏意識が希薄になり、時代の流れや利益が見え隠れする中、北方

174

⁴³ 鄭経世『愚伏集』11巻「答金伯昷問目(戊午)」、『韓国文集叢刊』第68冊p209。

⁴⁴ 李光庭『訥隠集』巻5、「答辛与則(帰錫) 問目」、『韓国文集叢刊』第187冊、p223。

⁴⁵ 李徳懋『青庄館全書』巻61の「論諸笠」、『韓国文集叢刊』第259冊、p94。

175

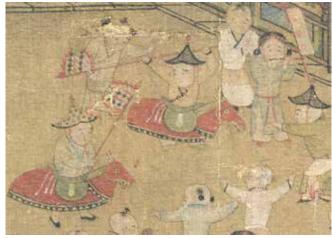




図 15

民族の服装は江南地域で一世を風靡した。高麗はトップダウンで「胡化」を促すやりかたで「鞑靼衣帽(モンゴルの服飾)」を受け入れた。このような政治と思想の背景の中で、幔笠は東アジアの人々に広く受け入れられた。しかし、モンゴル帝国の崩壊は、各民族が融合する時代に終止符が打たれた象徴である。蒙元の古い基盤のもとで興った王朝は新たな政権及び文化の境界線を策定し始めた。日ごとに勢いを増す夷夏意識の影響のもと、幔笠は人々の生活で影を潜め、過去の歴史となってしまった。今日、それは図像資料を用いて時代を区分する際の物差しとなっている(図15、16を参照)。小さな幔笠は、モンゴル帝国前後の政治や文化が変遷した縮図なのである。

〈図像資料の説明〉

図1:『打双陸』、元至順刊『事林広記』続集6巻、『続修四庫全書』第1218冊。

図2:日本覆明洪武4年刊行『魁本対相四言雑字』、『和刻本中国古逸書叢刊』第15冊。

図3: 曽鯨絵『張卿子像』。

図4:『女真楽図』、『金代楽舞雑劇石刻的新発現』、『文物』1991年第12期。

図5:大安2年侯馬董玘磚彫、『平陽金墓磚彫』。

図6:『酔帰楽舞図』、陝西蒲城洞耳村元墓壁画(至元6年)、『中国出土壁画全集』第7冊。

図7:王青墓出土藤幔笠,『山西省大同市元代馮道真、王青墓清理簡報告』、『文物』1962年

第10期。

図8:虞集像、元佚名『名賢四像』、『元画全集』第4卷第5冊。

図9:『人物轎輿図』(一部)、福建将楽元代墓室壁画、『中国出土壁画全集』第10冊。

図10:周朗『天馬図』明模写本、『故宮藏品大系・绘画編』第5冊。

図 11: 蒙元回鶻文刻本仏本生譚挿絵残片。

図 12: 『史集』 挿絵の中の蒙古君主。

図 13: 『誤死針医横遭毒薬厳寒衆』(一部)、『宝寧寺明代水陸画』より。

図 14:『和制』、万歴重刊本李孝美『墨譜』挿絵。

図 15:旧題『宋佚名百子図』、『宋画全集』第6巻第2冊。

図 16: 旧题『道子墨宝・地獄変相図』(一部)、『宋画全集』第6巻第2冊。

指定討論

「『深簷胡帽』 考―蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史 | を受けて

「質問者/向正樹、回答者/張佳]

――(向)大変楽しい発表で、しかもレベルも 高く、大変参考になる内容だったと思います。 とくに物を扱う研究ということになりますと、 物の実物がある場合もありますが、なかなか見 つかりにくい。図像資料を使う研究や文献と合 せていかないといけない面があります。今回の 張佳先生のご発表には、これまでの研究の誤解 をただす、あるいは刷新する、新しい内容が含 まれていて、どのようにしてこういった研究に 取り組むべきか、非常に参考になりました。

いくつか質問を考えたのですが、例えば「服 装が受け入れられる」とはどういうことか。受 け入れられたり、受け入れられなかったり、抵 抗があったり、なかったりするわけですが、北 方、中国の北のほうでは、モンゴルの帽子が受 け入れられたというお話でした。そこで、なぜ それが受け入れられたのかということを考えた ときに、一つはモンゴルが権力者であったか ら。権力を持っている者にへつらうといいます か、合せていく、そういう面はあると思うんで すね。あるいは、力を持っているということ は、文化的にも力を持っているということで、 ファッションとして自然に受け入れられたのか もしれない。そういった面で服装の受容をどう 捉えたらいいのかという質問です。

というのも、中国で見られるモンゴル時代の 服は、帽子もそうですけれど、それが女性の服 でも腰のところをちょっと絞ってみたりしてい ます。もともとはたぶん、モンゴルの服という

のは馬に乗るために、袖とかウエストとか絞っ て運動しやすい形になっていることが多いと思 うんですけれども、女性の服も男性の服もそん なに変わらず受け入れられたのでしょうか。論 文を拝見していると、女性のモンゴル人の帽子 も受け入れられていることが壁画でわかるとい うことが書かれてあったりします。こういう捉 え方は単純かもしれませんが、男性がモンゴル の服を受容するというのは、かなり政治的な意 味合いがもしかしたらあるかもしれないと思い ます。でも、女性がモンゴルの服装を受け入れ るというのは、あまり権力というのは関係ない かもしれない。そういったことで興味をもちま した。以上です。

--- (**張**) 向先生、ありがとうございました。 私がちゃんと理解できたかどうか分かりません が、理解したところでお答えします。まず、笠 というものはなぜ北方地域で流行したか、その 理由は二つあります。一つは女真族が華北を占 領した時、清の時代と同じように剃髪し服を変 える政策を取りました。当時、明確な規定があ ります。つまり、金代前期、支配地の漢民族の 人は全員女真族の髪型をしなければならない、 女真族の服を着なければならない、さもないと 殺されるという。それがいわゆる強制的な文化 政策、上から下への政策であります。それに対 して、もう一つは柔軟性のある民族融合です。 金の後期になって、多くの女真人が中原に定住

するようになり、民族融合はまさに色々な風俗が混ざり合った結果です。ですから、中原地域の元代の服飾文化を見てみると、その中には漢民族の伝統的なものもあれば、女真族もあれば、モンゴル族もあり、それよりも異文化的なものもあります。非常に興味深い現象だと思います。

北方民族の服飾が元で流行した理由はもう一つあります。ファッション的な意味合いもあります。ファッション、潮流に従うのも理由の一つでしょう。また、その現象は一種の政治的な投機資本として捉えられます。つまり早期において、南地方や江南地方の漢民族の人がモンゴル民族の服を着ることによって、モンゴルの支配に服従するという意味合いを示しているわけです。かつて、モンゴルの髪型や服飾を強制的に普及させようとする政策もあったのですが、その政策は後に撤廃されました。南宋を征服した時、庶民がモンゴル人と一緒にならなければならないという規定はなくなりました。

以上から、モンゴルの服飾文化を受け止めた のは、早期においては政治的投機のためであ り、後期においてはファッションに従うためだ と考えられます。

そして女性に関しましては、私の知るところによりますと、女性が蔓笠をかぶるという記載はありません。ただ、元の漢民族の女性の服装もある程度モンゴルに影響されました。残された資料から、元代漢民族の女性が姑姑冠という

ちょっと変わった形の帽子をかぶることが分かります。今ではモンゴル族の女性もこのような帽子をかぶったりします。伝統的な漢民族の人から見れば少し不思議に思いますが、恐らく当時のファッションかもしれませんし、あるいはその女性の夫の地位と関連するのかもしれません。

お答えになっているのでしょうか。ありがと うございました。

全体討議セッション

司会/まとめ:劉傑(早稲田大学) 論点整理/趙珖(韓国国史編纂委員会) 総括/三谷博(跡見学園女子大学)



本日司会を務めさせていただく早稲田大学の劉 傑です。昨日は一日かけて合計11の発表がござい ました。今日はまず最初に、趙珖先生からこれらの 発表について論点整理をしていただき、それを踏ま えて全体討論に入りたいと思います。なお、この フォーラムは「国史たちの対話」ですので、そのよ うな視点からの議論もできればと思います。



論点整理―四つのセッションを受けて

趙珖

韓国国史編纂委員会の趙珖です。この会議の公式名称は、「第2回 日本・中 国・韓国における国史たちの対話の可能性」です。「国史と国史の対話」という 大きなテーマの下に行われた会議であり、「モンゴル襲来と13世紀モンゴル帝国 のグローバル化」というテーマがまさに私たちが2日間にかけて集中的に検討し た内容でした。この「モンゴルの襲来」という表現、そして「グローバル化」と

179

いう表現、この二つがここにキーワードとして提示されています。実際、人類の歴史を振り返ってみますと、モンゴル帝国はたぶん最初のグローバリゼーションに成功した世界帝国であったのです。まさにそのような観点から中国と韓国、モンゴル、そして、日本がそれぞれどんな歴史を展開していったのかを調べ、その中でこのグローバリゼーションが展



開されていく過程をもっと明確に理解できるテーマだったと思われます。

元々グローバリゼーションというのは、単純に世界化だけを指すものではありません。グローバリゼーションとローカリゼーションを合わせてグローカリゼージョンという言葉が流行ったりもしました。このグローカリゼーションは、ローカリゼーションを一部で刺激し、ドライブをかける側面があるからです。もちろん、グローバリゼーションにより世界化が一様に進み、自分自身を失ってしまうことに対する警戒がローカリゼーションの追求の一因のように思われますが、しかし同時にグローカリゼーションという時は、ローカリゼーションとグローバリゼーションの相互関係を論ずることになるでしょう。

私たちはグローバリゼーションで話を進めてきましたが、ある部分ではグローカリゼーションの問題に関して議論してきたのではないかという気がします。今回展開された発表は、合計11人の先生方が発表し、四つのセッションに分かれました。

最初のセッションは、モンゴル・インパクトが持っている歴史的意味を、各国の立場から、そしてまた世界史的な観点から見た時、このモンゴル・インパクトをどのように規定することができるのかという点を研究したように思われます。

2番目のセッションでは、モンゴル・インパクトそれ自体について、単純な政治的、軍事的な侵略に留まらず、文化的・技術的影響が必ず後からついてくるという点を明かそうとする試みのセッションであったと思います。

3番目のセッションの場合は、長い時間この抵抗と支配ということが繰り返される中で、それぞれの地域で展開されたモンゴル支配の実情がどんなものであったのかという点を具体的に明かすための努力であったと考えられます。

また、4番目のセッションは、食文化とそしてまた衣服文化と関連した発表をしてくださいました。元々外来文化がacculturalization、つまり「土着化」していく時は、一般の民間生活文化につながっていかなければなりません。モンゴル・インパクトがパックス・モンゴリカ(モンゴルの平和)として展開されていく中で、生活文化にどのような変化が生まれたのかという問題について、中国社会においてモンゴルの衣服の一種である帽子がどのように変貌をとげていったのかという点、そして高麗においてモンゴルの食文化がどのように継受されたのかという点をお話してくださったと思われます。

大体このように四つのセッションにかけて発表が行われましたが、以下ではそれぞれ個別の発表について、その主な内容を簡単にご説明いたします。

まず、四日市先生の場合は、モンゴル・インパクトを強調し、モンゴル・インパクトの結果でパックス・モンゴリカがどのように展開されていくのかについて

お話しされました。そして、このモンゴルの文化的、経済的影響や政治的インパ クトなどがどれだけ長期に持続して展開されていったのかを少しマクロ的に書い てくださった論文と考えられます。東南アジアなど、現地調査を経てこのような 論文を書いてくださったのはとても印象的でありました。

次は、2番目にチョグト先生が発表した「アミール・アルグンと彼がホラー サーンなどの地域において行った2回の人口調査について」という論文でした。 チョグト先生の場合は、モンゴル式の西アジア地域を総括する職務に任命され影 響力を発揮したアルグンと、彼が行った支配政策として最も基礎的だった人口調 査の問題を議論しています。このアルグンに対する研究は、新しく掘り下げた論 文だと思われます。租税を賦課し、支配を貫徹していく過程において、他の地域 との比較研究に何か端緒を与えることができる論文だと判断しました。

その次に第1セッションの最後の論文は、橋本先生が発表された「蒙古襲来絵 詞を読みとく―二つの奥書の検討を中心に」でした。元々(歴史学では)絵を史 料として活用することは、それほど多くありません。伝統的な方法ではありませ んが、少なくとも20世紀中ごろ以降、アナル学派の影響の下で史料の範囲が極 度に拡大していき、その過程で絵も歴史解釈に重要な史料であったと判断されて きましたが、このモンゴル襲来絵詞の地理だとか、文字だとか、でなければ絵の 画風などを分析して、徹底した史料批判を基に、この絵が13世紀、14世紀を経 て19世紀にいたる間、どんな過程を経て形成されたのかを明かしてくれました。 この徹底した史料批判が正確な歴史理解を引き出してくれたのですが、史料批判 または絵に対する科学的な分析がとても印象的な論文であったと思います。

次に、第2セッションでは、モンゴル帝国時代、モンゴル人たちの命名習慣に 関する考察について、エルデニバートル先生が発表されました。韓国、日本、中 国などの一般の歴史家たちにとってモンゴル語はとても慣れない言語です。しか し、エルデニバートル先生はネイティブなので、まさにこのモンゴルの命名方法 がどのように展開されたのかをとても親切に提示してくださいました。そして、 このような命名方法に対する証明を通じて、モンゴルと他民族がどのように融合 していったのかという点もご指摘くださいました。

次の5番目の発表は、向先生が発表された「モンゴル帝国と火薬兵器」です。 大衆メディアと文化財などでモンゴルをどのように把握していたのかという点に 注目させてくださいました。最近はやっている研究方法をモンゴル史の研究にも 適用させたのだと思われます。それで、段々とモンゴルのイメージが侵略者から 他民族へと客観化していき、互いの文化交流の可能性というのも、イメージ上で は開放的に開かれるようになったという点を明らかにしてくださった論文だった と思います。メディアやイメージに対する新しい分析方法で分析をしてください ましたが、研究方法がとても独特で興味深いものでした。

次は、孫衛国先生が発表された「朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日 本侵攻に関する叙述」でした。東アジア理解の方向をまずお話ししてくださいま したね。自国史、他国史を左右において補完的に理解しなければならず、一国史 の観点で自国の歴史を見つめる時は誤謬の可能性が大きくなるため、自国の歴史 をみる場合も東アジア的な観点から歴史を眺望しなければならないといってくだ

さいました。とてもいい論文だと思います。

次の第3セッションになりますと、金甫桃先生が「日本遠征をめぐる高麗忠烈 王の政治的意図」を発表してくださいました。金先生は、忠烈王の政治的意図が どこにあるのかという点に着目され、第2次遠征の時はモンゴルの侵略意図を積 極的に活用し、自身の王権を確保強化することにあったという点を明らかにして くださいました。戦争や外交または、すべての国際関係が単純に一方の要求に よって行われるのではなく、相互間の協議や相互間の調整を通じてなされるとい う点を明らかにしてくれた論文だと思います。

8番目の論文では、李命美先生が「対蒙戦争・講和の過程と高麗の政権をめぐる環境の変化」について検討してくださいました。李命美先生は、モンゴルの講和条件としての国王の「親朝」とか人質に対する問題などを深く掘り下げて発表してくださいました。そして、人質が蒙古社会でどのような人的関係を形成し、逆に高麗の政治にそのような人的ネットワークがどう作用したのかを明らかにしたいい論文であったと思われます。

次のツェレンドルジ先生は「北元と高麗との関係に対する考察」を発表してくださいました。禑王時代の関係、とくに北元という20余年間の国際情勢を背景に、高麗と中国の関係、そして朝鮮王国の建設の背景まで、幅広くそして深くとても徹底して分析してくださったいい論文だったと思います。元来、国際関係の分析はとても多層的で複合的な要素に対するアプローチにならなければなりません。ツェレンドルジ先生はこのようなアプローチを試みてくださったと判断されます。

第4セッションになりますと、韓国からいらした趙阮先生が「モンゴル帝国の 飲食文化の高麗流入と変化」という点を取りあげて、とくに仏教国家だった高麗 の伝統から肉食文化がどのように展開されていったのか、定着できたのかという 点と、飲料文化がモンゴルを通じて高麗にどのような刺激を与えたのかという点 を説明してくださいました。朝鮮時代まで、あるいは今も引き継がれる私たち の慣習を証明してくださったと考えられます。皆さんが韓国にいらっしゃれば、 「ソルロンタン」を召し上がると思います。「ソルロンタン」の由来には諸説あ り、よくいわれるのは「先農壇」で、(始祖の) 国王がこれを作って分け与えた 料理が起源だという説です。しかし、これは明らかに遊牧民の食べ物です。私は このソルロンタンもモンゴルフードである「シュレン」から由来したという感じ がします。なぜなら、韓国料理で味付けをする時は醤油でするのですが、ソルロ ンタンだけは塩で味付けします。これは、遊牧民たちの慣行なのです。そして、 「ソルロン」も「シュレン」も、どちらも似ています。だから、たぶんこのよう なモンゴルフードの痕跡が今日まで残っているのを見ると、一つの文化の影響が 短期間で終わるのではなく、とても長期的に影響が続いているという点を明らか にしてくれた論文だと思います。

張佳先生の「『深簷胡帽』 考一蒙元時代における女真族の帽子の盛衰史」では、幔笠という帽子を取り上げて、モンゴル文化が元の時代に定着し、中国の後代にどのようにリンクしていったのかという点を明かしてくださいました。この幔笠というのは、朝鮮時代の屈巾祭服の様式とも無関係ではないようです。結局

は朝鮮までも影響を及ぼすことになった衣服文化について発表してくださったと 思います。

このような四つのセッションはすべて「モンゴル・インパクト」と「パック ス・モンゴリカ」という二つの状況からみた政治統治様式、そして相互間の交流 と文化などを幅広く明かしてくれたものでした。まさに、それぞれの国史を論じ ながらも、グローバリゼーションの観点から、一国史的な切り口ではなく、東ア ジア的な切り口から見ると、どれだけ豊富な解釈を成し遂げられるかという実例 を示してくれた学術会議だったと思われます。

この会議ですばらしい発表をしてくださいましたたくさんの研究者たちに、そ して討論に参加してくださいました皆様、そしてこの会議を主催してくださいま した主催者側にも深く感謝申し上げます。

2.三つの問題提起

劉

趙珖先生、ありがとうございました。昨日の先生方のご報告について大変きれ いにまとめていただきました。それでは、これから全体討議に入りたいのです が、討議をどう進めていくか、司会として少々悩んでいるところです。実は昨夜 の夕食会のときに、趙先生がとてもよい言葉をお示しくださいました。「求同存 異 (チュウトンソンイ)」という言葉です。通訳を通して伺ったので、本当に趙 先生がおっしゃったのか、通訳の方が訳す際に付け加えられたのかの確認はでき ていないのですが、この歴史対話は「求同存異」の精神で進められたというふう に先生が評価されていると伺いました。「求同存異」とは、「同意できることをと もに求め、意見を異にする点はそのまま残しておく」という意味で、非常にいい 言葉であると思います。

今日は全体討論ですので、「求同存異」の言葉を一字だけ変えまして、「チュウ トンフォアイ」に変えたいと思います。フォアの文字には二つあります。一つ は、今回は「国史たちの対話」ですので、対話の話で「話」の字ですね。「求同 話異」です。もう一つのフォアは溶ける・溶かすという意味で「化」の字です ね。異なることをなくしていこう、溶かしていこうということです。そういう意 味のフォアであります。「求同話異」「求同化異」ということで今日の全体討論を 進めていきたいと考えております。

意見の異なるところをそのままずっと存在させる・存続させる・棚に上げると いうことは、一時的に相互理解を促進するのに役立つこともあると思いますが、 一種のしこりとしてずっと残しておくのは決していいことではないと思います。 時間を見て話し合うことも大事ではないかという考え方です。これがいわゆる歴 史、「国史たちの対話」の最も重要なポイントではないかと思います。

先ほど趙珖先生もおっしゃいましたように、今回の議論はモンゴル帝国 のインパクトをどのように見たらよいのかということで、政治、社会、文 化、さまざまな側面から検討されてきました。モンゴル帝国のインパク トを、我々がそれぞれ冷静にそれぞれの国史の立場から議論できるよう

183

になっているのは、果たして単に時間が経ったことで、遠いモンゴル時代の出来事を本当の意味で歴史として扱うことができるようになったのか、それが最大の理由なのかどうかということも含めて、これから議論していかなければならないと思います。逆に言いますと、今回の対象ではありませんが、近現代の歴史の中で行われたさまざまなことについて、私たちはいつになったらこのように冷静に対話することができるのかということも念頭に置いておく必要があるのではないかと考えています。

本来は歴史家たちの対話、国史たちの対話というのは、時代を超えて近現代の 歴史も含めて、このような姿勢で議論することができるはずです。これは歴史家 のあるべき姿ではないかと思います。そのような議論がいずれは近い将来にでき ると、私は固く信じております。

さて、これから昨日の議論を踏まえて、討議を始めたいと思います。昨日は発表者の報告に対しての質問が中心でしたが、今日は他の参加者の皆様のご意見も含めて、ぜひ自由に述べていただけたらと思います。ただ、これだけの話題がありますので、自由に述べるとなると若干冗長になるかもしれませんので、いくつかの大きなテーマの中で少し議論できればなと思います。

一つ目は「モンゴル帝国の影響、インパクトをどのように評価したらいいのか」です。例えば「中国化」、あるいは「モンゴル化」などの問題もそうです。モンゴル帝国の影響、インパクトといいますと、モンゴル帝国以降も交易のネットワークが形成され、その後東アジアをはじめこの地域に非常に大きな影響を及ぼしたという議論がありましたけれども、それを中国化の一環として議論をしていくのか。いわゆる朝貢システムであるとか、冊封体制の問題であるとか、そのこととも関係してきますけれども、例えば唐と宋以降の中国の影響というものと、元以降の影響というものを、どういうふうに考えたらいいのかということですね。唐宋の影響の上に新たに元の影響が付け加えられたのか、それとも完全に刷新されたのかですね。そういうことも含めて、唐宋以降、あるいはそのネットワークの上に形成された影響について、元以降はどう評価したらいいのかという問題が一つあるのではないかと思います。

それから、昨日はあまり大きく議論される対象にならなかったのですが、冊封体制あるいは朝貢に対する評価の問題ですね。元の時代において、明の時代の冊封体制のリセットといいますか、再開、そういうものと元の時代の体制とどう関係したらいいのかということも含めて、議論を深めていただけたらと思います。

それと、これは非常に難しい問題かもしれませんけれども、モンゴル帝国の支配の歴史を、「モンゴル史の一部としての中国やあるいはその地域に対する統治」としてとらえるのか、それとも「中国史の一部としてのモンゴルによる統治」なのか、です。これはそれぞれの国史の立場から議論が行われていると思います。モンゴルの立場から見たモンゴル帝国と、中国の立場から見たモンゴル帝国とはどう対話したらいいのかというのが見えてこなかったのですが、この辺りのことも少しお話できればなというふうに思います。以上、大きくいうといわゆるモンゴルのインパクトの問題です。

二つ目は、「朝鮮半島のおかれた立場についてどう考えたらいいか」です。高

麗・朝鮮の立場の問題です。近代以降、今も、外から見た朝鮮半島の問題には常 に「二つの大国の間にいる小国」という見方、問題があります。モンゴルの時代 は、「元と明の間に立っている朝鮮」、近代になってからは、「中国と日本の間に 立つ朝鮮」。常にそういう受け身の立場にいる朝鮮半島についての議論がなされ ています。そのような朝鮮半島の位置づけは、果たしてそれでいいのかどうかと いう問題ですね。韓半島の立場から見たときに、こういう議論に対してどのよう な反論なり、あるいは議論があり得るのかということを、ぜひ議論していただけ ればと思います。

それから三つ目は「資料の問題」です。今回の報告の中にはいくつか資料につ いてのお話がありました。例えば橋本先生の絵巻の話もそうですが、資料の信憑 性についてどのように検証していくのかという問題です。資料の読み方、信憑性 に対する徹底的な読み方と、資料を活用・応用する歴史家としての想像力の間 に、どのようなバランスが必要なのかという話でありますけれども、高麗史に基 づく歴史の記述の仕方には、それだけを根拠にして議論してもいいのかと、そう いう議論もなされました。

とくに孫先生からは、他国の資料を活用することの意味を指摘されましたし、 あるいは、資料に対する謙虚な姿勢、歴史研究の中でどのように活用していくの かという、それぞれの国史の立場から、相手の国の資料をどのように扱ったらい いのか。あるいは蒙古襲来の時代についていいますと、どのような史料の可能性 があるのか、あるいはどのような史料の用い方が求められているのかというよう な話も議論していただければと思います。

以上、皆さんのご報告やご質問を拝聴して、自分なりの問題関心からまとめさ せていただきました。これらのことを問題としながら議論をしていただければと いう提案です。もちろんこれにかかわらず、先生方が発表を聞かれた感想も含め て、自由に発言していただければと思います。

どなたか口火を切っていただければと思いますが、それでは、昨日も朝貢・冊 封体制について少し話がありましたので、そのあたりからお願いします。

朝貢・冊封体制をどう捉えるか

山内

神戸女子大学の山内晋次です。私は冊封体制というのは否定しておりまして、 あれはモデルとして駄目だと思っております。もう30年ぐらい前から、東アジ ア史とそれを支える冊封体制という議論は、西嶋定生という有名な先生が提唱さ れましたが、西嶋さんの東アジア理解とそれを支える冊封体制論というのは、た ぶん間違いであろうと思っています。この説を前提にいつまで議論をする必要が あるのかと考えています。私は論文で、批判するときを除いて、冊封体制という 言葉は一切使ったことがありません。

なぜ間違いかというと、私の論文もしくはこれまでの過去の日本の学界 での西嶋批判を読んでいただければわかりますが、そもそも冊封というの が、中華王朝の周辺の地域に対する対応として、それがすべてであるか

のように誤解をされているということです。これは重要な点です。周辺の民族・国家に対する中華王朝の対応の、かなり広いバリエーションの中の、要するにスペクトルの中の一つの色なんですね。私はこのように理解しています。あれですべてのいわゆる東アジアなり、あるいは私が対象としている東部ユーラシアの国際的な状況というのが決まるとは思えません。そもそも西嶋定生さんが東アジア世界論あるいはその基盤である冊封体制論というのを提唱された実証的な裏付けというのが、南北朝のごく一時期、倭国、朝鮮半島諸国、中華王朝との間の、正史、とくに中国の正史に基づく理解、それが何か中国二千年すべてに適応できるという誤ったイメージが、とくに日本史家、さらには東洋史の研究者の間でも一部、何かそういう誤解がある。冊封という事実は、歴代の王朝を通じてありますけれども、それを一つのシステムなどと考えるのは一度やめてはどうかという、ちゃぶ台返しのようですけれども、私の意見です。これにはもちろん異論はあります。国内の学界から批判も受けていますけれど、現時点では、私はそう考えております。

四日市

昭和女子大学の四日市康博です。確かに山内先生がおっしゃるように、冊封体制だけですべてを語るというのはもちろん間違いというか、見誤ることになると思います。けれども、一部としてそのような理念は存在したと思っています。強固なシステムというのではなくて、もっと単純化して君主と臣下という関係、君臣関係というのが冊封体制の核なんですが、それはもともと国外ではなくて、国内の君臣支配の体制に適応されるもので、それが国外に延長して適応されるものです。私や山内さんのように、交易や国際関係などから世界を考える場合は、それに基づくとどうも見誤るというのがあるんですけれども、外交の場合は建前が重要です。そのような君臣関係という建前を無視して実際的な関係を結ぶというのは、外交においてはない。まず建前から入って、そのあとに実際的な関係というのが現われるので、外交上、冊封的な理念が存在したというのは否定できない事実だと思います。

ただしそれは、各王朝ごとに違いますし、王朝のなかでも君主ごとに違います。君主の中でも明の光武帝などは前期と後半で姿勢が違いますので、常に一定の固定されたモデルとして理解することはできません。ただし、そのような理念として、そのような関係が形式的に利用されたという側面はやはり否定できないと思います。もちろん、それをもってすべて世界のモデルというふうにするのはよくないと思います。モンゴル襲来の場合も、外交がまずあった。いきなり攻めてきたわけじゃない。外交があって、受け入れる国もあれば、決裂して戦争になる国もあるわけで、そういった場合に、冊封ですべてを説明することはできませんが、一つの要素として冊封と朝貢というのを見るのは間違いじゃないと思います。ただ、今までは日本の東洋史というか、日本史では、あまりにも冊封の部分だけを強調しすぎているので、いびつなモデルとして捉えられてきたという経緯があるのだと思います。

山内 そうすると、冊封という言葉で表す必要はないわけですよね。中国の正史を見

ていると、熟語としての冊封が出てくるのは明代くらいです。それ以前の隋唐時 代には冊封というのは出て来ない。二字の熟語としてほぼ出て来ません。先ほど 四日市さんもおっしゃったように、時代ですとか、王朝の主体ですとか、それに よる君臣関係をどういう言葉で表現をしているかということですね。たとえば、 隋唐代と明代とはどのような点で違っているのかというように比較しながら研究 を進めていくと、必ずしも冊封と言う言葉で表現しなくてもいい。新しい何か用 語をもう少し探ってもいいような気がします。

四日市

私も冊封に対して詳しく見たわけではないのですけれども、「冊 | と「封 | と 二つの言葉で構成される言葉ですが、どちらも歴史的な概念として、理解できる ものなんですね。確かに冊封ですべてを表すことはできないという意見はわかり ますけれども、共通理念は何かの言葉で表さざるを得ないので、とくに冊封じゃ ない言葉を使えばよいという問題ではなくてですね、ちょっとそれはアレルギー が強すぎるんじゃないかと。確かにそれまで日本は冊封だけに固執してきた部分 があるのは事実なんですけれども、そういう理念が存在したというのも否定でき ないことなので、そこまで全部否定しなくてもよいかとは思います。山内さんも 含めて、他の方の意見も伺いたいと思います。

- ここまでのところ、日本人研究者同士の国史の対話になっていますが、それも 劉 重要だと思いますけれども、少し中国の先生方のご意見もぜひここでお聞きでき ればと思います。この場合は葛先生が一番かと思うんですが、ご発言いただけま すか。
- 復旦大学の葛兆光です。朝貢あるいは冊封体制に関しまして、まず、確実に存 在したことは間違いありません。その中身を見てみると、三つの内容が含まれて います。

一つ目は、中国の各周辺国の政権の合法性というものは、中国の皇帝から印綬 をもらい、冊封を受けるということによって実現することです。二つ目は、中国 の立法、中国の年号を使用することです。そして三つ目は、数年ごとに貢物を捧 げるという制度に従うことです。ただ一つ認めなければならないのは、冊封体制 にしても朝貢体制にしても、歴史的に変化しつつあるものです。朝貢というシス テムに置かれている全ての国が朝貢体制に属するとは限りません。実は、一部の 国は冊封を受け入れていたのですが、本当の意味で中華の制度を心から守り、尊 重していたとは言えません。また、時代によって冊封の国の数も変化します。例 えば、清の時代になると、実際に冊封・朝貢制度を受け入れる国はわずか六つし かありません。ところで、古代から清の時代まで、日本はその中に含まれていま せん。日本は足利義満・義持・義教の時代だけ朝貢したことがありますが、わず か3回でした。

まとめてみると、朝貢・冊封体制は、まず確実に存在しました。一方では、変 遷を経てきました。ただそれは、多くの国を含む膨大なシステムではありませ ん。もし歴史事実を尊重するならば、このような状況になっていると思います。

南開大学の孫衛国です。私は葛先生に同感です。少しだけ補足させていただきます。アメリカの学者ジョン・キング・フェアバンク(中国名:費正清)は中国の『天下之行』という論文集において、中国の冊封制度についてこのように述べています。天下の秩序、あるいは天下の体制、つまり中国を中心とした中華世界秩序を三つのレベルに分けています。レベル1は「Sinic Zone」、つまり「華化地区」です。主に朝鮮半島や琉球、安南で構成されていて、日本は時期によってレベル1に入ったことがあります。レベル2は「内亜地区(Inner Asian Zone)」、つまりアジア内陸地区、例えば北方の遊牧民族や東北の少数民族など、中国とは軍事的関係を持っていたかもしれませんが、文化交流はそんなに盛んではありませんでした。一方、名義上ではやはり冊封体制に従います。レベル3は「外圏地区(Outer Zone)」です。東南アジアやヨーロッパなどが含まれています。これらの国は名義上でも事実上でも中国と冊封関係を持たない国です。

そのため、現在我々は「冊封」と言っても、主にレベル1の地域を指しています。 葛先生のおっしゃったように、いくつかの典型的な国に過ぎないと考えられます。

四日市 今、孫先生がおっしゃったのは、明代以降の冊封体制と理解してよろしいです よね。恐らく山内さんは一時代の冊封体制を通時的にみるのがおかしい、弊害が あると指摘されているのだと思います。

孫 そうですね、やはり中国の冊封体制、あるいは天下の秩序は、まさにおっしゃったとおり「内と外」の世界があります。最初は西周の時代に始まり、西周には「分封制」という体制があり、分封の順序としては内藩から外藩へ、つまり「内と外」の関係があります。そのため、中国の冊封体制は西周から明・清時代にかけて存在しました。

中国と朝鮮半島の関係を例として、ここで陳寅恪の論点を借りてみると、中国と朝鮮半島の関係について、中国は唐の時代以前に、朝鮮半島を郡県化し、つまり中国の支配下に置くという望みを抱えていました。それで、紀元前107年、108年あたり、漢の武帝が朝鮮半島に「四郡」を設置して以来戦争が続き、隋・唐に至っても、朝鮮半島を自国の支配下に置こうとしていました。しかし唐の時代以降、「新羅」が出現してから、当時の朝鮮半島と中国の間には冊封体制が立ち上げられました。それ以来、モンゴルが朝鮮半島を征服し、清が朝鮮半島を征服し、それにもかかわらず、朝鮮半島を郡県化する望みはなくなり、藩部としての地位を保ってきました。以上からみると、冊封体制に関して、朝鮮半島はある意味で非常に典型的な例だと思います。この問題について、確かに時代を分けてみなければなりません。

| 劉 山内先生、どうですか?

孫

山内 実は冊封体制という、あのような理論が適応できるのは、ほぼ時代を通じてお そらく朝鮮半島と中国の間だけではないか、というのが自分の感覚なんです。こ

れは異論もあるでしょうけれども。ですから、確かに朝鮮半島諸国と中国王朝の 関係を説明するには、ある程度有効性があるのかもしれませんが、私はそれを他 のところにも適応するというのが納得できないのです。もちろん冊封・朝貢とい う事実はあります。それは無視できないのですが、それをシステムとか、全体の 天下秩序のところまで広げていくというのがちょっと納得できないなあというと ころです。

四日市

やはり山内さんには、誤解があるというか、逆に冊封を強固なものというか、 固定したものと考えているからそうなると思うんです。冊封は基本的に、領土と 書面と王号と印綬を与えるというものです。僕はモンゴル時代のイラン、イルハ ン朝の古文書をイランの博物館で調査していますが、中に漢字の朱印が押された 文書がいくつか残されています。中国の元朝からイルハン朝に対して、王印と官 印が授与されているんです。それは一応元朝から、体制に基づいて、王の四角い 朱印と官の印(とくに宰相に関する印)なんですけれども、それが授与されてい ます。もちろん王号も授与されているんですね。ですから、形式的には冊封は ちゃんとイランにも行われているわけです。実情はどうかというと、実は全く違 うんですけれども、先ほども申しましたように理念的なことですので、形式的に は冊封は一応行われているんです。山内さんはたぶん実効的な関係としての冊封 関係は、朝鮮半島以外適応できないとおっしゃっていると思うんですけれども、 形の上では一応支配というか、関係を結んだ国とは、儀礼的な部分でちゃんと 粛々と行われているはずだと思います。

よろしいですか。では、徐先生お願いします。 劉

復日大学の徐静波です。冊封や朝貢体制に関して、基本的に私は門外漢ですけ れども、先ほどの葛先生のご意見には非常に賛同しております。ただ、一つ付け 加えておきたいことがあります。

> 先ほど葛先生は室町時代の一時期だけ「日本国王」という称号があった、そ の他はほとんど日本は朝貢体制や冊封体制に入っていないとおっしゃいまし た。実は事実はたぶんそうではないと思うんです。日本列島がだいたい統一され る前、つまり大和政権が成立する前に、すでに日本の一部は中国の王朝に対して 朝貢をしていたというのは確かなことです。例えば、中国の「後漢書」の中に記 載があります。もちろんまだ日本という国名はなかった時代ですが、中国の後漢 時代、57年の漢の光武帝のとき、倭から中国に使者が派遣され、何らかの朝貢、 行動があり、そのとき金印を授与しています。「漢の倭の奴の国王」、「漢」の範 囲の中の「倭の国王」という金印を授与していたんです。この金印は1784年に、 福岡の近くの志賀島で発掘されています。そのほかに、南北朝時代、南朝の宋の 時代、日本の文献においては、「倭の五王」という言い方がありますが、そのと きすでに何回も宋に朝貢していて、宋から「××征夷大将軍」というそういう 冊封を受けたということも確かに事実でありました。だいたい5世紀ぐらいまで 続きましたが、607年の聖徳太子のときに、中国の隋という王朝に使者・遣隋使

を派遣しまして、そのときから対等的な関係ができた。つまり冊封体制、朝貢体制から外れたということを物語っていると思います。

劉 ありがとうございました。では、三谷先生お願いします。

三谷 跡見学園女子大学の三谷博です。少し場所や時代が広がっているので、話を高麗に戻したいのですが、李命美先生のご発表に対して孫先生は非常に重要な質問をなさったと思います。それは今の議論にも関係の深い、華夷観念についてです。

一体、朝鮮王朝の人々は皇帝として君臨している清朝の皇帝について、一種「夷」とも見ていた。華夷の夷ですね。では、高麗の時代はどうであったか。高麗の人々が中国の王朝に対して、夷として振舞ったのか、華として振舞ったのか。そういう問題を出されたと思います。この点について、とくに高麗史ご専門の先生方に少し議論をお願いしたいのです。

劉 では、ここまでは日本の立場から、あるいは中国の研究者からご指摘がありましたけれども、今度は韓国の先生方に、三谷先生の話を踏まえて、何かコメントがあればお願いしたいと思います。ではまず、張先生からお願いします。

張佳 復旦大学の張佳です。浅学ながら見解を述べさせていただきます。高麗は前期において、文化的な政策やその理想としては、やはり中華の王朝に学びたいのです。私は論文で太祖王建の「訓要十条」を引用したことがあります。もちろん、「訓要十条」が太祖の残したものではないと、その信憑性を疑う学者もいるのですが、高麗史に記録されたものである以上、ある程度当時高麗の上層部の文化的態度や理想を表していると考えられます。つまり、高麗は中華の儒教思想を深く受容していたことが分かります。

文化的にはいわゆる「華夷の弁」という思想がありましたが、しかしその思想はモンゴルのインパクトによって崩壊しました。モンゴルの上下秩序の中で、高麗人は「漢人」と同列でした。中国北方の漢民族や他の移民民族などと同じレベルに入っていました。しかし面白いことに、元の後期あたりでしょうか、非常に重要な文献がありまして、次のように書かれています。当時元と高麗が通婚関係を持ち、そこで、ある高麗の大臣が元の皇帝に、我々高麗人の身分を第三等の「漢人」から「色目人」へとワンランク上にしてもらえないかと上書したことがあります。この例から、当時の高麗人は「漢人」という身分に誇りを持つわけではなく、ワンランク上の「色目人」になろうとしていたことが分かります。

その後、高麗の「華夷観念」が再び蘇るのは明の時代でした。文化保守主義の明は、いわゆる「用夏変夷(夏を用て夷を変ず)」を錦の御旗とし、モンゴル文化を大いに排除しました。高麗も政局の変化によって、明の真似をしはじめました。李氏朝鮮は建国した後、その自身の合法性を維持するため、明の出した錦の御旗に応じました。李氏朝鮮初期を検討してみると、社会文化領域において、明に学び、明と非常に似ようとした面白いことがたくさんあったことが分かると思

います。朝鮮史・高麗史の専門家のご意見もぜひ伺いたいと思います。

劉 李命美先生いかがですか。

ソウル大学の李命美です。今のお二人の質問と関連して、まずは、高麗人が中 李 国の漢人と同じ等級、あるいは漢人と色目人との間の等級であり、より高い地位 を要求していたという話について申し上げます。

元の干渉期、モンゴル帝国期に人民をモンゴル人・色目人・漢人・南人に区分 し、これらを差別したという、いわゆる「四階級論」が話されてきました。しか し、近年に入ってからは、この区分は「差別」のためのものというよりは、それ ぞれが持っている文化の違いを反映したものと理解されています。もちろん支配 種族としてのモンゴル人に対する優遇は明らかに存在しますが、このような「区 分」は、種族間の差別のために設計された「序列的性格」を持つものであったと いうよりは、法と慣習を異にする集団を区別し、それぞれの固有の法慣習に基づ いて規律を設けるためのものでした。したがって、モンゴル帝国内における高麗 人の処遇問題も、これらの文化の違いという観点から理解する必要があります。

そうした中で、高麗人は漢人や色目人のような等級であったというよりは、実 はちょっと曖昧な部分がありまして、文化的な類似性や地理的な近さから漢人と 一緒に分類される場合もあり、流刑地の設定の問題では、刑罰なので居住地とは ずっと遠い地域に追放するのが原則なので、色目人と一緒に分類される場合も あったのです。

元干渉期後半、有名な奇皇后が登場した後に、高麗側から高麗人を「色目人」 のように扱ってほしいという要求をしています。これは、従来の「四階級論」の 理解に従ってモンゴル帝国内の「高麗人」の地位を上昇させてほしいという要求 だと解釈されることがあります。しかし、四つの種族の区分を文化法制的な違い という次元で眺める近年の理解に従えば、これは特に地位上昇の要求というより は、特定の事案について(それが何であるかは、現在確認するのは難しいのです が)「漢法」の適用を受けない色目人と同様に「高麗」を扱ってくれることを要 求したものと見ることができるでしょう。

次に、韓半島の国が中国王朝と結んだ冊封・朝貢関係の内容、あるいは高麗が 中国との関係で自らをどのように規定していたのかに関する問題ですが、これは モンゴルとの関係を起点に大きな変化を示すことになると思います。外交的な空 間で、高麗はモンゴル以前も基本的には「夷」としての立場がありました。それ にも関わらず高麗の国家制度は、その格式面で「夷」の制度というにはそぐわな い点が多く見られます。これを高麗時代史研究者は、モンゴルとの関係以前の高 麗の制度を「皇帝国の制度」と話したりもします。元は中国の制度を導入しまし たが、当然のことながら「皇帝国の制度」である唐と宋の制度を受け入れる過程 では、高麗人は私たちは「夷」に違いないから「夷」の制度に変えて使わなけれ ばならないとか、そうした認識はあまり見られませんでした。

つまり、高麗前期の「皇帝国制度」は、高麗人が自らを「夷」と認識していな かった時期に、中国の制度を受け入れる過程で作られたものと思われます。とこ

るで、このような状況は、モンゴルとの関係の後に大きな変化を見せます。モンゴルとの関係を通じて、高麗の制度は確かに「諸侯国制度」に変化するようになり、加えて高麗人たちが自らを明らかに「夷」と認識するようになる変化が生じました。極めて中国的な華夷観念の強化は極めてモンゴル的な要素を背景にした側面があります。言い換えると、中国的な観念で始まった冊封や朝貢というものが原型に近い形で適用されたのは、かえってモンゴル的な関係によるものが多かったと思うのです。

なぜなら、高麗に限らず、モンゴル帝国以前の中国の王朝は表面的には冊封を したり、朝貢を受けたりしてきましたが、それらの国々の内政についてはあまり 介入しませんでした。「力が弱くて」介入できない側面もありましたが、「知らな くて」介入しない、「知ろうとしない」部分もありました。

しかし、モンゴル帝国が登場した後、高麗とモンゴルの関係は以前とは非常に 異なる様相を見せます。モンゴルとの関係ではとても個人的で直接的な関係があり、王室間の通婚が継続的に行われたこともそうですし、趙阮先生が研究された タルガチの派遣もその一環ですが、人的交流が国レベルまたは個人レベルで頻繁 に行なわれました。そのため、モンゴルの官僚や個人が長期間高麗に滞在するこ とになる(あるいは逆に高麗が長期間、モンゴルに滞在することになる)状況が 発生し、元が高麗内部の事情についてよく知りうる状況・環境が整いました。そ の一方で、モンゴルは世祖クビライ以降に漢法を導入して自分たちの制度を改編 しています。これらの要因が、元が高麗の「皇帝国の制度」を「諸侯制度」に改 編することを要求した背景にもなったと考えられます。

これは漠然と私が考えたことですが、既存の漢文化や中国の制度に慣れていた人たちが制度を再構成するのと、まったくそれに慣れてないモンゴル人がそれを導入しようとするのとでは、どうしても違いが出るしかなかったと思うのです。なぜなら、中国の制度に慣れていた人たちがそれを導入しようとする時は、従来の慣行をある程度踏襲しますが、モンゴルのようにまったく慣れていない場合は、中国の制度や冊封・朝貢など他国との関係を適用させるに際して、それこそ完璧な形で導入しようとしたのではないかと思えるからです。このように、高麗とモンゴルとの関係において、中国の伝来の華夷意識と冊封・朝貢というものがモンゴル以前より実質的に適用されたという変化があったのですが、それには通婚などの人的交流やモンゴル的な関係がより強く作用した面があります。単純に冊封・朝貢関係の面から考えるのには無理があるのではないかと思います。

三谷 もう一度質問させてください。聞きたいのはモンゴル以前の高麗についてです。つまり、中国が二つだったときに、どちらに朝貢したのかとか、どちらを「華」と見、どちらを「夷」と見たのかということなど、事実関係を知りたいのですが。

洪 早稲田大学の洪性珉です。私の専門は10世紀から12世紀の国際関係なので、 三谷先生に対して私が知っている限りでお答えできると思います。三谷先生はな ぜ朝鮮が清に対して抵抗をしたように、高麗の儒学者たちが華夷思想に抵抗しな

かったのか? という話をされましたが、最も重要なのは朝鮮時代は性理学的な 名分論がとても強い時代でした。高麗は儒学を受け入れてはいましたが、朱子学 的な観念の儒学ではないので、これを区分する必要があると思います。そして、 高麗時代の天下観は、大体三つの天下観に分かれます。一つは中国中心の天下 観、もう一つは海東天下観、そしてもう一つは形勢論的な天下観です。

中国中心の天下観は、唐や宋を中心において高麗を周辺に置く認識です。そし て、海東天下観は、中国以外の海の東側に高麗を中心とする天下があるという天 下観です。三つ目の形勢論的な天下観は、中国であれ、北方民族であれ関係なく いつも強い国に従うという動きが形勢論的天下観です。

高麗前期には官僚たちの間で互いに立場が異なる官僚たちが入り混じっていた ので、実質的な政治外交的懸案によって様々な対応が現れたのが実質的な現象 で、歴史的な現象と言えます。以上です。

葛 朝貢体制に関しまして、最初に注意すべきことは、朝貢体制・朝貢観念の多重 性と多様性を認めなければなりません。例えば、先ほど議論しました高麗につい て、実は高麗は建国して以来、長い間契丹・遼に対して朝貢し、契丹・遼が宗主 国であることを認めていました。しかし紀元1100年あたりになると、高麗は同 時に契丹・遼と北宋の両方に朝貢しはじめました。また、琉球も同様、日本に対 して朝貢すると同時に、中国にも朝貢していました。したがって、朝貢は多重的 なメカニズムで、そして変化しつつあるものです。これが1点目です。

2点目は、朝貢にも虚と実があるということです。経済的ニーズや戦略的考慮 など、様々な要素が含まれています。例えば、ベトナムの南の方にあるチャンパ 王国、中国に対する朝貢は安南に対する戦略と関わっています。朝貢したのは、 中国が直接的に安南を脅かし、チャンパ王国を助けることを望んでいたからで す。また、日本の足利義満時代、なぜ中国の朝貢システムに入ろうとしたかとい うと、経済的ニーズと関わっていて、貿易展開の願いがあったからです。

したがって、朝貢体制を研究する場合、やはり一元的にみるのではなく、まず は、その多重性を重視すること、そして虚と実両方のことを考えなければなりま せん。経済や戦略、また別の要素もあります。もう一つ例を挙げましょう。ジャ ワ島とスールー王国 (現在のフィリピン) はなぜ朝貢システムに入ったかという と、合法性を認めてもらいたいというわけではなく、やはり貿易においてメリッ トを得ることを目指したからです。ですから、「朝貢体系」という言葉を単純的 に政治的なもの、あるいは濱下武志先生のおっしゃった貿易だけのものとみてい ると、やはり一方的、片面的なところがあると思います。

趙阮 漢陽大学の趙阮です。朝貢・冊封と関連して私も少しお話ししたいです。四日 市先生のお話の通り史料に出ており、モンゴルでもそうした用語を使っていたと いうのは事実です。だからそれが混乱を与えるようですが、モンゴル帝国が朝 貢・冊封システムを実際使っていたかどうかは別問題のようです。モンゴルの大 汗とか支配層が朝貢や冊封をどのように認識していたのかというのもまた別問題 だと思います。そうした面でこのような中華的な用語を使ったのは事実です。事

実ですが、それにどんな含意があるのかとか、葛先生のおっしゃるようにそんな 解釈が必要です。

たとえば、元の時代にクビライが宰相制度、宰相とか中書省のような用語は使いましたが、実際そうした宰相は Bitsechi(必闍赤)に過ぎないということです。ビチェチ、つまり中華王朝でのそれとは相当違いました。文臣たちに対する認識だとか処遇は、文書行政を重視しなかった背景のもとでは、実務を処理する官僚にすぎない存在であったという点からみても、「朝貢」・「冊封」という用語を使いはしましたが、彼らがそれを一つのシステムとして運用していたのかどうかというのは再考すべきだと思います。そうした面で四日市先生の発表を昨日拝聴して、朝貢という用語、また冊封という用語は任意で使っていたという点が却って現れているという点で、これをモンゴル人たちが一つのシステムとして使ったというよりは、必要の手段として、実は貿易のために行っていたに過ぎないという点を露わにしたと思いました。

劉 ありがとうございました。では孫先生お願いします。

孫

先ほどの葛先生のお話には大変賛同しております。また葛先生の観点の一つをお借りしたいと思います。歴史問題を研究する時には歴史、政治、文化という三つの面から入り、最終的に同一性を考えることとなります。朝貢体制を考える時にも同様です。朝鮮王朝は明の時代、清の時代において政治的にも外交的にも全く同じなのですが、フェアバンクもそれを同じような典型的な朝貢体制とみています。しかし、アイデンティティ・同一性のことになると、大きく分かれています。朝鮮半島は政治、思想、文化の各方面から明を認めていましたが、一方、清には完全的に否定的な態度を取り、朝貢を誇りではなく恥に思っていました。なぜそう考えるかというと、朝鮮の国王がなくなると、必ず中国皇帝に贈られた廟号を宗廟の中にある碑に刻みます。明の時代には刻んであったそれが、清では全然なかったからです。ですから、ある意味では、先ほど三谷先生のおっしゃった「華夷観」とも密接に関わるものではないかと思います。

それから、高麗のアイデンティティと華夷観について、先ほど李命美先生、張 佳先生の話にもあったのですが、高麗人は第三等の「漢人」から第二等の「色目 人」にランクアップすることを望んでいました。それは、政治的なアイデンティ ティです。文化的なアイデンティティでいうと、高麗王朝は宋朝だけを認めるの です。高麗は同時的に遼、金、宋に朝貢していたのですが、文化的に認めていた のは宋のみです。一つ例を挙げると、ある高麗の国王が夢を見て、夢の中では汴 京へ行き、宋の人になりたいという話もありました。もう一つ典型的な例は、檀 君神話の出現です。『三国遺事』に初めて登場する伝説で、独立・自主の意味合 いを持っています。元朝の藩になった時期に当たるので、文化的には分離性が高 く、同一性がないわけです。

劉 ここまで、冊封体制や朝貢体制についていろいろお話をしていただきましたけれども、モンゴルの立場からのご意見もぜひ伺いたいと思います。何か補足があ

れば、簡単に、ひと言でもいいのですけれども、何かおっしゃっていただけたら と思います。

4. 「モンゴル帝国」と「元朝」

ツェレンドルジ

モンゴル国科学院のツェレンドルジです。私はその朝貢・冊封制度については 申し上げません。ただ、司会者の方がおっしゃったように、モンゴルの歴史学者 たちの立場をご紹介いたします。波風を立てるかもしれませんが、モンゴルの学 者たちがどのように考えているのか、見ているのかを聞いてみる必要はあると思 います。事実、元の歴史というのは、とても複雑で難しい問題です。ジレンマの ジレンマと言えます。モンゴル帝国や元がモンゴルの歴史なのか、それとも中国 の歴史なのか、これも難しい問題です。しかし、モンゴルの歴史学会の立場はこ うです。

元という王朝は、国はモンゴルであり、モンゴルの歴史に属する。もちろん元 という国は世界帝国だったので、他の国の歴史と重なる部分があります。しか し、だからといって他の国が元を自分の国、自分たちの祖先が建てた国だとして はいけないと思います。例えば、中国史の立場で元をどのように見るべきかとい う問題ですが、実は元の時代は、中国はモンゴルの統治下にありました。モンゴ ルの支配を受けました。だから、それをモンゴルの支配期、支配時期と説明すれ ば理に適うと思います。もちろん元の国家制度には、中国的な要素が少なからず あります。しかし、それはその当時その伝統時代に、隣国がお互いに交流し、お 互いにその要素を受け入れたように、国家制度の一部を単に導入したとみなすの が理に適うことだと思います。従って、元代を先ほど中国だとか、漢族だとか おっしゃっていましたが、この時代はモンゴルの支配期とみるのが歴史的事実に 符合します。これは、モンゴルの歴史学会の元史に対する立場であり、また私の 立場でもあります。それでこうした意見があるということをまずはご紹介し、そ れで他の先生たちはどんなご意見をお持ちなのかを聞いてみたいと思います。

ありがとうございました。これは私が問題提起のときに少しお話をしました 「モンゴル帝国の歴史は、モンゴル史の一部としての中国に対する統治の歴史と 捉えるのか」、「中国史の一部としてモンゴルの統治による時代と捉えるのか」、 そういう話だろうと思うのですが、おそらく中国から来られた研究者の皆さんか らは違う意見があるかもしれません。そのご意見を伺う前に、まず、第三者の立 場、日本の研究者の皆さんから、今の議論をどう捉えたらいいかということをお 聞きしたいと思います。

同志社大学の向正樹です。今の問題についてはずっとこの会議で考えていま す。今私が考えているのは「元をどう呼ぶか」という問題です。従来日本では元 朝という、中国王朝の何朝、何朝とあるなかの元朝という呼び方がかなり長い間 定着してきています。しかし、それはモンゴル帝国という全体の中の、クビライ

とその子孫が支配する、中国および中央アジアの一部とその辺を中心とする領域を指しているんですね。最近は「大元ウルス」という言葉を、杉山正明先生たちが使い始めて、たいぶ流布しています。ところが、大元というのはクビライの意図、あるいは当時の認識としては、モンゴル帝国全体の名前が大元であったのであって、中国を中心とする大元、クビライが支配する領域を指しているわけではなかったんです。そこに少々誤解があります。

そういう点で私自身も「元朝」を使うときは、中国王朝の一部であるという面が強くなってしまっています。私はどちらかというとモンゴル統治者が何を考えていて、どういう政策を実行していったのかという点にもう少しこだわっていきたいと思っている立場ですので、「元朝」という言葉を使うと、少し違うんですね。ではどうしたらいいのかということを、今回ずっと考えています。昨日の会議では、実は元朝は大汗ウルスであるという話を伺って、それは一つ面白い呼び方ではあるかなと思いました。

また、趙阮さんの論文では、大元帝国という言葉を使っていて、それは韓国ではあまり聞いたことがないのか、あまり使われない言葉なのか、その辺りを少し伺ってみたいと思っています。

趙阮

今、向先生がお話しされた通り、韓国でもそんな問題認識が共有されています。だから、その大元ウルス、大元をクビライが「イエケ・モンゴ・ウルス」というモンゴル帝国の意味として使っていたということに関する韓国の学者の論文が発表されました。それで、まだ元朝という表現、大元に対する混乱はありますが、その論文が発表されてからは、元朝という表現はできるだけ使わず、大汗ウルスとか、クビライが治める地域、この中原地域を大汗ウルスというとか、ある学者が「大元」という言葉を使ったとしても、本人はそれを既存の元朝の代わりに中国地域、大汗ウルスの意味として使うとあらかじめ言明しておくとか、まだ一致したものはないけれど、そんな問題認識が共有され、お話された通り、今やモンゴル人たちの目線で、統治集団たちがどのように帝国を認識していたのかという切り口から帝国の研究をしようとするそんな傾向が最近著しくなっています。

エルデニバートル

内蒙古大学のエルデニバートルです。朝貢体制というのは非常に大きな課題です。いろいろな面から研究することができます。私の専門であるモンゴル帝国の歴史について申し上げますと、チンギスカンが建国して以来、その子孫、後継者とともに、50年間にもわたる征服戦争を起こしました。勅令の中では天下を征服せよというのがありました。チンギスカンは、全ての国や民族に対して、自分の支配下に入らない限り平和条約を締結しない、徹底的に征服されていない限り戦争し続けるという外交政策をとりました。例えば、チンギスカンの時代から、高麗に対して30年間に及ぶ征服戦争を展開しました。30年間ですよ。戦争をやめる条件は何かというと、六つあります。その一つは「高麗の皇帝あるいは皇帝の息子が自らモンゴル帝国の皇帝のところに謁見に行かなければならない」ということです。当時、『元史』の記載によりますと、チンギスカンは金や西夏、南

張

宋、大理、チベットなど40あまりの国を征服したという、そのようなモンゴル 帝国に対して、朝貢するかどうかは高麗という国の存亡死活と密接に関わるきわ めて重要な政治的選択です。高麗は非常に複雑な国際関係にありました。30年 間我慢した末に朝貢体制に入り、名義上は通婚関係を持つ国家で、独立性がかな り脅かされるように見えますが、実際には、モンゴル帝国によって国際的地位が 上がり、世界各国との交流を展開しました。モンゴル・元の時代は高麗後世百年 の文学や芸術、特に漢文学と哲学の発展に多大な影響を与えた時代といえます。

もう一つモンゴル帝国に関する話ですが、元朝の支配が終わり、16世紀に、 もう1人のチンギスカンの後継者、アルタンハンという人は現在の内モンゴルの 西の地方をコントロールし、そして明朝と朝貢関係を結びました。明朝の政治理 念が実現され、モンゴル地域に平和を築きました。しかし、アルタンハンはどの ような人物かというと、クビライの化身とも言われ、他のモンゴルの皇帝を眼中 に置かない人です。当時、現在のチベットや青海省、新疆などの地域に戦争を起 こし、征服しました。明朝側は、アルタンハンは我々の1人の国王、1人の臣下 と見ていました。それに対し、モンゴル側は戦争し続けており、アルタンハンも そうですが、千年に及ぶ戦争の歴史を受け継いでいました。ただ、北方民族は全 員戦争好きで乱暴だというわけではなく、戦争を起こした原因は主に経済と気候 の面にあります。モンゴルは南の方へ、もちろん西へも戦争を起こしたことがあ りますが、主に南方への進入を目指していました。やはり南方は気候的に暮らし やすいので、それが一つの原因となっています。そしてモンゴルにとって経済利 益、経済交流も非常に重要な要素です。朝鮮の場合も同様、朝貢体制のシステム においては、平和を守ると同時に、経済交流も展開しています。

朝貢体制は一種の国際的なシステムだという風に理解していただきたいです。 どちらかというと、勝者か敗者か、英雄か弱者かを定めるシステムではないと思 います。

二つの意見を申し上げたいと思います。一つはちょっとストレートになります が、個人的に、元の歴史が中国の歴史であるかどうかを議論するのはあまり意味 がないと思います。なぜかというと、この議論をする前に、中国とは何か、漢民 族のみ中国なのか、中国の歴史とは何か、その支配者が漢民族でなければそれは 中国の歴史でないのかなど、いろいろと境界線を引かなければならないからで す。簡単な例を挙げると、清の支配者は漢民族ではないから、清の時代の歴史は 中国の歴史とみてはいけないのではないでしょうか。また、朝鮮半島をあげてみ ると、日本統治時代の朝鮮、その50年近くの歴史は韓国の歴史ではないのでしょ うか。それについてまず明確にしなければならないと思います。中国の学者も、 モンゴルの学者も、もちろん今は二つの異なる国ですけれども、モンゴル・元の 時代の歴史を両国共同の歴史とみても良いのではないかと思います。中国の歴史 なのかモンゴルの歴史なのか争うことはないと思います。実はあまり学術的な意 味を持たない議論だと思います。

もう一つの意見について、今の中国の領土は元の時代において、大モンゴルウ ルスの一部だということは間違いありません。中国の学者もこの歴史事実を認

めています。しかし、「大モンゴルウルス」という言葉には時効があると思いま す。その言葉の適用する時代の範囲はいつからいつまでかというと、モンゴル4 代目のハンの時代、クビライハンまで、いわゆる大モンゴルウルスという概念が 成立するのは確実です。アジアから西アジア、さらなる遠い地域までこの概念に 当てはまります。これは広く認められている政治的実体です。しかし、クビライ ハン以降、恐らく状況が変わりました。明らかな事実として、中央アジアの諸国 の国王、チャガタイハンやオゴデイハンの後継者達は絶えず紛争を起こし、内部 の紛争だけではなく、クビライに反対する勢力も出てきました。ですから、クビ ライハン以降、大モンゴルウルスは果たして政治的な実体なのか、それとも概念 的な象徴に過ぎないか、議論する価値があると思います。それから、元朝を研究 する時に、元の重要な貢献として、ユーラシア大陸の交通を開通させたというこ とが出てきますが、しかしクビライハン以降、ユーラシア大陸の交通は果たして 想像のように通じていたのか、歴史事実を挙げることは難しいです。元以降、中 国とユーラシア大陸との交流活動はどれだけ陸上の通路を使っていたのでしょう か、私は事実を挙げることができません。ですから、この概念、また「パック ス・モンゴリカーという概念の背後には、歴史の曲折や矛盾が多く含まれている と思います。以上です。

今日はなぜこれを議論していただいているかというと、それなりの意味があると思っています。この会議は「国史たちの対話」です。国史のあり方は、例えば一つにそれぞれの国の教科書があります。これは国史教育の大変重要な部分ですが、この教科書の中で、おそらく中国の教科書、日本の教科書、それらはそれぞれ違った立場から書かれていると思います。それを前提に考えたときに、この国史たちの対話というこの議論は学術的に無意味ではないと思うんです。それぞれの国の教科書にそう書かれている以上、それぞれの国の歴史を担っている人々がどう考えているのか、お互いに理解し合うことに一つの意味があるのではないかと思って、あえてこの議論をしていただいています。

それを踏まえて、それでは元の影響、モンゴル帝国の影響について、その広がりはどこまで評価するのか、というところをむしろ問題にしたほうがいいと思います。例えば元が中国を統治するまでの、唐と宋の影響というのが、アジアに、あるいは世界にどういうふうな影響を与えていたのかということと、その後の明の時代にどのように影響を与えていたのか。両方の影響を踏まえて、元の影響の広がりをどこまで理解したらいいのか、というふうに、その歴史の文脈の中で議論することが有意義ではないかと思います。次はその点、その立場からお話しできればと思いますが、いかがでしょうか。

エルデニバートル

先ほどの張佳先生のお話にも、元朝はモンゴル帝国であるかどうかという問題が出てきましたが、まず、クビライという人物はチンギスカンの孫にあたり、元朝を作ってから、その国の称号を何にしたかというと、碑にはモンゴル語で「大元の大モンゴルウルス」と刻んであり、「大元のモンゴル帝国」と名付けたのです。次に、先ほど四日市先生もおっしゃったのですが、当時、イルハン国も名義

上は元を宗主国とし、元を大モンゴルウルスと見ています。元の皇帝クビライに ついて、史書の記録によりますと、チンギスカンの在世中、クビライはおじいさ んが好きで、二人の顔形もよく似ていたということです。もちろんクビライは孫 ですからそれは本当のことかもしれませんが、その史書はクビライ一族により編 纂されたものなので、クビライの子孫だけがそう思っている可能性もあります。 またもう一つ申し上げると、元の皇帝がなくなった後、必ず現在の北京から現在 のモンゴルへ、そこにあるチンギスカンのお墓の周辺に埋葬しなければなりませ ん。そうしないと国の裏切り者になってしまうのです。

以上は私の意見ですが、そして張先生のおっしゃった、いくつかの論争には格 別な意味がないという点について私は同感です。例えば、元の歴史を中国の歴史 と見てはいけないのか。清支配下のモンゴルの歴史をモンゴルの歴史と見てはい けないのか。現在の視点から歴史を振り返ってみるとやはり異なる解釈がたくさ ん出てきます。中国の著名な作家魯迅に次のような見解があります。「小さい頃 に教科書を読んで、チンギスカンは我々中国の皇帝だという認識がつきました。 大人になって本を読みはじめ、ロシアがモンゴルに支配された歴史の方がずっと 長いということが分かりました。そうするとロシア人はチンギスカンはロシアの 皇帝だったと言うべきでしょう」。魯迅は真実を語らなければならないと主張し ています。現在、ロシアにも中国にもモンゴル人・モンゴル族の人がたくさんい ますし、国という概念も昔と異なるので、これについての論争は無意味なのでは ないかと、私は張先生と同じ意見を持っております。

四日市

私は張先生の意見に全面的に賛同しますけれども、エルデニバートルさんの意 見にも賛成するところがあります。それはどういうことかというと、理念的に は「元朝が大元ウルス」というのが全体に敷衍されるということはあり得るんで すけれど、実際は、ペルシア語やアラビア語などの他の資料では、元朝ができて 以降は四つのウルスができたというふうに捉えられています。モンゴル帝国が四 つの国に分かれたと。しかも張先生がおっしゃったように、中国というのはさま ざまな民族がいろんな政権をもっていましたし、支配者だけをもってその民族の 国だということはできませんので、そういう柔軟な考え方はとても重要だと思い ます。一方で元朝はハーンとか、カーンとかいう皇帝が治めた国であって、他の 三国、三ウルスはみんなハン、王にあたる人が治めていたので、形式上は元朝が 宗主国ということになっています。ただ、それはあくまでも理念上、建前上の話 で、実際は四つの国があったということだと思います。

この会議の、先ほど劉先生がおっしゃった問題に引き付けますと、モンゴル・ インパクトという言葉を私は使いましたけれども、それはモンゴルだけのインパ クトという意味だけではなくて、モンゴル帝国の覇権をきっかけとして、さま ざまな要素をもってインパクトが起こったという意味で使っています。パック ス・モンゴリカと呼ばれる安定性があった反面、その表裏一体の裏で、イスラム だとか中国だとかモンゴルだとかトルコだとか、さまざまな文化的経済的な要 素が移動して、インパクトを与えていたということです。ですから、中国かモ ンゴルかという二者択一ではなくて、もちろん両方の要素があるんですが、だ

から逆に、これは南宋の文化だとか、これはモンゴルの文化だとかいうように 完全に分けてしまうことのほうが危険なことだと思います。ですので、今まで 議論したなかで、これはたとえば朱子学だから南宋の文化だなどと言ってしま うのはどうかと思います。実は元の時代に高麗に入ってきたり、禅宗も元の時 代に日本に入ってきたりということがあるからです。たとえば南宋起源であっ たとしても、モンゴルのインパクトとか覇権、パックス・モンゴリカがあって 入ってきているわけですので、そういう部分を議論していただければと思いま す。

- 大変いい提案だと思います。その今の提案を念頭に踏まえて葛先生にご意見を 伺いたいと思います。
- 葛 この会議は「国史たちの対話」というのですが、国史たちの対話をなぜ開催するかというと、二つの重要な目的があります。一つは自国の立場あるいは自分の所在地域の立場を超越すること、二つ目は王朝や時代の限界を超越することです。みなさんの話を聞いて、この二つの超越を達成するのはなかなか困難なことだとしみじみ感じました。

まず、元の時代の歴史は中国の歴史なのかモンゴルの歴史なのか、ここにはや はり「立場」の問題が存在します。自国の立場を守るために、これは中国の歴 史、あるいはこれはモンゴルの歴史と言ってしまうのです。もしそうなると、こ の会議を開催する意味がなくなってしまいます。私は最近歴史の教科書をたくさ ん集めましたが、例えばベトナムの歴史教科書には「ベトナムはベト族であるた め、中国長江以南の国土は昔からベトナムの領域である」という内容が書いてあ ります。同様に、韓国の歴史教科書にも「金の初代皇帝阿骨打は高麗人」と書い てあり、阿骨打は女真族を率いて中国北部を平定したので、中国北方地域は昔か ら韓国の領土だという内容があります。したがって、国家の立場を超えるには、 我々はやはり互いに受け入れられる歴史叙述の方法を見つけなければなりませ ん。その方法は何かというと、国の立場を超越したグローバル史、あるいは広域 史を念頭に置かなければなりません。中国において、一部の歴史学者がこの現状 を打破するため、一つの提案をしました。一つの国には二重の歴史があるという ことを認めてもいいのではないかということです。元の歴史を研究する中国の著 名な歴史学者蕭啓慶はまさに、元は中国史であると同時に、モンゴル史でもある というふうに捉えています。

次に、時代を超越することです。先生達のお話にも正確さや合理性の足りないところがいくつかあるかもしれません。例えば、昨日四日市先生がおっしゃった「高麗の中国化」という言葉について、実は元の時代において「高麗の中国化」というより「高麗のモンゴル化」と言った方が正確なのではないかと思います。高麗の中国化とは、漢・唐の時代から儒教思想や漢字文化の影響を受けてきたことを指していますが、元の時代、モンゴル帝国時代において具体的にみれば、やはりモンゴルからの影響の方が大きいです。もう一つ典型的な例として、「雲南の中国化」という言い方を13、14世紀において使うと、それは間違いです。な

ぜかというと、13世紀以前、雲南は中国ではなく大理南詔国であり、四つの文 化で構成されていたのです。「吐蕃文化(つまり現在のチベットの文化)」、東南 アジアの「シャム文化(つまりタイ族の文化)」、「安南文化」、そして地元の「西 南文化」です。もちろん漢民族の文化も同時に融合していました。しかし、元の 時代において、雲南に最も大きな影響を与えたのは、やはりモンゴルが雲南を中 国の版図に組み入れることによって、雲南をモンゴル化させたことでしょう。こ こで認めなければならないのが、当時の中国は現在の中華人民共和国ではありま せん。中国は変わりつつあるので、当時の中国を漢民族の中国と認識すれば、当 然その漢民族中国を現在の中華人民共和国と同一視してはいけません。したがっ て、我々は時代を超越して、昔の時代へタイムスリップし、当時の中国とは何 か、当時のモンゴルとは何かと見直しをしなければなりません。そうして初め て、その国の文化的影響や政治的影響を弁別することができます。

この会議の最も重要な目的は国家の立場の超越、そして時代の超越です。我々 は歴史を顧みる時、歴史を尊重し、現代人の先入観や自国の固定観念を取り除く べきです。それについて、中国にも今このような議論がたくさんあります。なぜ 我々は中華人民共和国960万平米の国土という概念の枠内で歴史を現代から遡っ てみなければならないのでしょうか。その方法で、高句麗を単純に中国の少数民 族として、高麗を単純に外国として捉えてしまいます。そのような認識の仕方 は、歴史を研究する正しい姿勢ではないと私は考えております。ですから、この 会議において、我々は自国の固定的な立場を強調してはいけない、また現代人の 先入観を用いて歴史を遡って見てはいけないと考えております。この2日間の会 議を聞いてきて、やはりこれが一番大きな感想だと思います。この会議を開催す るのは難しい。会議の目的を達成するにもなかなか難しいです。前回は3ヶ国、 今回は4ヶ国の学者が一堂に会するのですが、ぜひ壁を乗り越え、共通認識を作 りましょう。

四日市

一つだけ補足させてください。私が中国化という言葉を使ったのには二つ意味 があって、一つは伝統的な漢文化を取り入れたこと。もう一つは中国化というの は、漢化でもなくモンゴル化でもなく、もちろん中華人民共和国としての中国で もなくて、いわゆる先ほど洪先生がおっしゃった三つの天下観というのがあるん ですけれども、事大主義ですよね。大に仕えながらも自らを中心とする天下を持 つ国。要するに中国の皇帝に仕えながらも、自らの国にももう一人皇帝を持つと いう意味で、中国化という言葉を使いました。それは高麗だけではなくて、日本 でもベトナムでもチャンパでもあった現象です。日本も一応中国に、宋、元には 朝貢していないんですが、明代には朝貢しつつも、皇帝を国内に持っています し、ベトナムも国内では皇帝を称しながらも安南王として中国に仕えているの で、そういうふうに二つの天下を持っている、要するに自分の国を中心とする 国、中国という意味で中国化という言葉を使いました。以上です。

5. 歴史資料の扱い

劉

葛先生から大変力強いお言葉をいただきました。確かにこの会議の目的は、国境や時代を超えて我々の共通するところをたくさん見つけていきたいというのが狙いでありまして、これは私が冒頭で申し上げました「求同話異」あるいは「求同化異」ですね。その言葉に尽きると思います。それぞれの国の国史の描き方があるわけですが、歴史研究者もいるわけですから、まずはお互いの国史の中ではどう語られているかを知り合うということがとても大事だと思います。その上での対話ということであります。

それでは、あまり時間もないので、ここからは最初に問題提起として出しました三つ目の「資料」のことについてお話しできればと思います。資料についてはいろいろご発言もありました。これは絵巻のお話しも含めまして、歴史の資料を扱うときに、とくに蒙古襲来のこの時代の資料の状況と、資料の扱い方に関して、それぞれの国の状況はどういうものなのか、相手の資料、あるいは他国の資料を使うときにどのような限界があって、今はどういう問題に直面しているのかなど、それぞれの先生方の研究の中で気づいた点がございましたら、少し話をしていただいて、意見交換ができればなと思います。

三谷 すみません、ひと言言わせてください。これは日本で行われている会議なのに、モンゴル・インパクトについて日本で何があったのか、まだ一切語られていません。日本から参加された学者の皆さんが皆黙っている。これは困った。日本の学者の皆さんは資料研究は得意だと思いますので、ぜひ発言してもらいたいと思います。

佐藤 立教大学の佐藤雄基です。では、少しお話させていただきます。史料の成り立 ちがずいぶん違うと、以前から関心を持っていました。

高麗の場合、モンゴル・元と密接な関係を結んでいて、元の衰退とともに高麗 側の政情も非常に不安定になったというお話を昨日詳しく伺いました。朝鮮王朝 に交替した後、対モンゴル従属路線をとった高麗の歴史をどう描くかということ をめぐって議論がおこり、3回、4回繰り返し国史が編纂をされたというお話が 大変印象的でした。

一方、日本の場合はどうか。近世や近代になってから、自国中心主義、ナショナリズムと結びつく形で、モンゴルの記憶、神風が吹いたといった類の話が非常に盛り上がっていきます。それでは同時代、鎌倉時代の日本はどうかといいますと、これは橋本さんのお話の中にもありましたように、九州の神社が自分たちの祈祷のおかげで風が吹いたんだと主張します。鎌倉幕府もそれを認めるかたちで、現地で実際に奮戦した御家人にあまり恩賞を与えずに、神社を非常に保護するという政策をとっていくわけです。このときの寺社側の言説がもとになって神風の言説が生まれていきます。では、日本の中心部、鎌倉幕府や京都の朝廷がモンゴルのインパクトをどう受けとめたかというと、これが意外と難しい問題です。近代になってから国難を打ち払ったと喧伝されるほど、同時代的には

痕跡がはっきり残っていないといわざるを得ません。鎌倉幕府は鎌倉末期、モ ンゴル襲来後に『吾妻鏡』という歴史書を作りますが、一回目のモンゴル襲来 (1274年の文永の役) に先立つ1266年で記述が終わっていて、その後の鎌倉幕府 の歴史は未解明の部分が大きいのです。

南北朝時代になってから、いろいろな歴史書が生まれます。有名なものだと所 謂「軍記」として『太平記』、これ以外にもいくつか、南北朝期に歴史物語が生 まれます。ただ、私もまだきちんと確認してきてはいないのですが、モンゴルの 襲来が日本の政治・社会に与えた影響を伺わせるような記述はすぐに思い浮かび ません。日本史の学会では、モンゴル襲来のインパクトで社会が変わったという 議論が、ここ20~30年間で多くなされてきましたが、同時代の史料という点で はかなり偏っている点には注意が必要です。つまり、武士が「モンゴルを撃退す るために頑張ったから恩賞をください」という古文書であったり、九州の神社が 「自分の祈祷のおかげで神風が吹いたんだ」というような記述はあるんですが、 国家の歴史の中で必ずしも重視されてこなかったのではないか、少なくともその 後の14世紀、南北朝期に振りかえられることが乏しかったのではないかという 気がします。むしろ江戸期、そして近代になって、一種のナショナリズムとかか わりつつ再発見されていく面が大きいと考えています。

同じくモンゴルのインパクトといっても、高麗と日本、あるいは元を退けて成 立する明王朝の時代における歴史像がずいぶん違うのではないか。モンゴルのも つ意味について、国史同士の対話を行うときに、それぞれの国に伝来するモンゴ ルの記憶のあり方の違い、それを如何なる性格の史料がどのようにして残ってい るのか、という次元から考えていきたいと思います。いろいろ意見を伺えればと 思っています。

史料に関しまして、私の提出した論文は高麗史にみえる元の東征に関する叙述 についてですが、実は元の日本東征の歴史そのものに詳しいわけではなく、史学 史専門なので、長年朝鮮と中国史料の比較研究を行ってきて、これは非常に重要 な課題だと感じました。みなさんご存知のように、古代の史料について、中国や 朝鮮、日本など東アジアの国において、王朝を中心とした官修史書(正史)とい うシステムが作り上げられています。史料を作る時に、いかにして王朝の正統 性、現在の言葉でいえば「ポリコレ (political correctness)」を維持するかとい うのが重要視されています。したがって、今これらの一次史料を利用する時に は、葛先生のおっしゃったように、王朝と時代の限界を突破しなければなりませ

私は元の時代の歴史についてそれほど詳しくありませんが、明清時代の史料に ついて感慨深いところがあります。万暦朝鮮の役(文禄・慶長の役)、つまり壬 辰倭乱の史料に関しまして、中国における叙述は非常に大きな問題点がありま す。ですから現在に至っても、中国において明朝歴史を研究する学者が多くいる 中で、万暦朝鮮の役についてまともな研究の著作は、私からみればまだありませ ん。史料の記載によりますと、『明実録』から、清王朝の編纂した明史まで問題 点が存在し続けています。なぜかというと、清は戦争に対して否定的な態度を

取っていたからです。現在の研究者にとって、この戦役を研究する場合、もし中国の史料のみ利用すると、やはり偏見を持ってしまい、研究すればするほど退屈になってしまう可能性があります。しかし、みなさんご存知のように、この戦役は東アジアの歴史における重要な出来事なので、韓国にも日本にも豊富な史料があります。ですから、ここ数年間私は韓国の史料と中国の史料の比較研究をやって参りました。

王朝・国を超越する角度から、日・中・韓三国の史料を用いて、まさに中国の歴史学者陳寅恪の言ったように「異国の史書をとり、自国の史書と互いに補う」、そのように比較研究を行うと、叙述の真偽やそう記載する原因、またその背後に隠す目的など色々と見えてきます。つまり、東アジアの目線、或は国・王朝を超越する目線で歴史問題をみることがきわめて大事です。特に、我々三国は東アジアという地理的背景を共有し、共通の歴史も持っていてこそ、やはり三国の史料を見比べなければなりません。日本には、「史料批判」という研究のアプローチがありますが、三国共通の歴史に関わる史料の研究において非常に役立つ方法だと思っています。

ナヒヤ 内蒙古大学から参りましたナヒヤです。史料に関しまして、先ほど孫先生のおっしゃったように、比較研究が非常に大事です。孫先生は韓国語と中国語の史料を用いて研究なさっていると思いますが、元の時代において、ペルシア語で書かれた史料も多く存在します。チョグト先生とエルデニバートル先生がペルシア語の資料調査を行っていらっしゃるので、お二方にぜひ資料について紹介していただきたいです。

「チョグト 内蒙古大学のチョグトです。史料は歴史研究においてきわめて重要な役割を果たしています。日本史、高麗史についてはあまり詳しくありませんので、専門分野のモンゴル史の研究について個人的な意見を述べさせていただきます。

モンゴル史の史料は主に三つの言語のものがあります。一つはモンゴル語、代表的なのは『モンゴル秘史』です。そして中国語、代表的なのは『元史』です。もう一つはペルシア語の史料です。三つとも元の歴史について述べる著作ですが、強調するところや記述方法、観点などはさまざまです。ですから、元のモンゴル史を研究する場合、どの史料に重きを置くのか、研究者として重要視しなければなりません。元の歴史の研究について、現在各国の学者たちがペルシア語の史料を重視し始めました。ペルシア語の史料は実際たくさんありますが、以前から知られたものは僅かに過ぎません。四日市先生も何度もイランへいらっしゃって、研究調査をなさっているそうですが、多くの史料が残っていると思います。今後、我々はペルシア語のみならず、アラビア語、トルコ語、ラテン語など、多言語の史料を用いてモンゴル時代の歴史を研究すべきだと考えられます。

それから、先ほど、モンゴルの日本東征という話が出てきましたが、実は同じ時期において、モンゴルは西へも進出し、東ヨーロッパに到達しました。東ヨーロッパにもラテン語など他の言語で記録された文献がありますが、それはあまり研究されていない分野です。したがって、今後、モンゴル帝国の研究に際し、

我々は世界範囲で歴史資料を収集し、マクロ的な視点でみなければなりません。 元の時代の歴史は世界史の起源とも言えるでしょう。イルハン朝の宰相、ラシー ドゥッディーンが編纂した『集史』という歴史書は、まさに世界史の角度から記 述する著作です。まとめると、モンゴル時代は本当の意味での世界史の始まりで す。モンゴル史を研究する場合、やはり世界史の角度から入ったほうが良いと思 います。以上が1点目です。

2点目について申し上げましょう。後世の人々は歴史書を編纂する時には、や はりある程度は当時の政治的傾向を持ちながら書いていたわけです。また、後世 の人々の史料に対する理解・見解もさまざまで、自分なりのトレンド、自分のア イデンティティとも関わりがあります。同じく元の歴史と言っても、モンゴル語 史料と中国語史料の記録にはかなり相違があります。そのため、どの角度から 入っていくのか、歴史学者にとっては考えなければならない問題です。現在、中 国で元の歴史を研究する学者は、やはり中国語の史料を用いることが多いです。 モンゴル語の史料もありますし、内モンゴルの学者は中国語、モンゴル語の両方 を利用することができますが、内地(中国本土)にはモンゴル語史料を知らな い、あるいは利用しない、否定的な態度を持つ学者もいると思うので、同じ国に いても、やはり内モンゴルと漢民族の学者の間にも異なる意見、あるいは食い違 いが生じます。その壁も超越しなければならないと思います。研究方法としては やはり、史料の多様性を重視し、多重の視点を持つことでしょう。先ほどからの 先生達のご意見に同感です。

それでは皆さん、とくに若い方々は専門の分野や時代は違うかもしれません が、ご自分の研究分野からの立場からでも結構です。何かありましたらどうぞ。

貴田 静岡大学の貴田潔と申します。私の研究は地域経済や社会経済などをテーマに しているんですけれども、佐藤さんがおっしゃるように、やはり日本の側の資料 には副次的なものしか残っていないというのはある意味当然のことのような気が しています。直接的な支配を受けた高麗の歴史資料のあり方・残り方、あるいは 中国の資料の残り方と、一時的な侵攻を受けた日本側のインパクトとでは、やは り残り方が違うのは当然だと思うのです。

それから、最初にグローカリゼーションの話が出ましたけれども、一方で元の 時代にはそうしたグローカリゼーションが長くあって、地域経済のような部分で それぞれがどういうふうに連関していったのかというのを勉強させていただける と、私としてはもう少し議論に入りやすいのですが。例えば金先生のご発表で、 忠烈王の時代に軍事的に傾倒していったというお話があったのですけれども、そ ういう場合に経済で何か、大きな部分が圧迫を受けたといった資料があれば教え ていただきたいなと思います。いかがでしょうか。

嘉泉大学の金甫桄です。まず、貴田先生の疑問点というのでしょうか、そうい う部分と関連してお答えしますと、言及はされているものの、詳細な内容を把握 するのは難しいということです。この時期の史料、つまり韓国の高麗時代または

高麗後期とこのような時期を知ることができる史料は、それほど多くはありません。ただ、『高麗史』という史料には、この時期に関する言及としてこんな話がよく出ています。私の論文にも書きましたが、「戦争を準備するためにたくさんの木材や軍糧などが必要なのだが、それらを調達するのが難しい。大変だ」という表現。または、「税金徴収があまり円滑に行われていない」という現実。もっと後代になりますと、「高麗の国王たちがモンゴルに滞在するその滞在費用調達の厳しさ」、こんな表現はあるのですが、だからと言ってこれを全体的な規模、いわゆる「数字」で表すのは困難な状況です。ですから、現実的には今いったような問題があります。

次に「モンゴル・インパクト」と関連して申し上げますと、モンゴルが高麗に大きな衝撃を与えたというのはいうまでもありませんが、その中でも特に高麗人たちにモンゴルが与えた衝撃があります。もっとも高麗を震撼させた衝撃というのは、「重祚」という事件ではないかと思います。重ねて繰り返すという意味の「重」に、即位するという「祚」で「重祚」です。国王が二度即位する現象が、忠烈王の時から始まり、「忠烈王」、「忠宣王」、「忠粛王」、「忠恵王」という4代の高麗国王たちに起きました。彼らは全員親子関係にあり、この4人の高麗の国王たちが二度ずつ即位します。つまり、一度廃位され、再び即位するということです。たとえば、「忠烈王」が即位して、息子に王位を譲った後、再び父が国王となり、「忠烈王」が死ぬと、もう一度「忠宣王」が即位する。この二度ずつ即位することになる現象が起きることを「重祚現象」といいます。

この「重祚現象」が起きたきっかけ、またはそう仕向けた張本人が誰かというと「モンゴル」だったのです。つまり、モンゴルが高麗の国王の資質問題や政治的状況を理由に退位させたり、即位させたりする現象が起きたのです。それまではいかなる政治的状況であっても、もちろん政変とかクーデターによって国王が追放されたり、政変によって国王が変わることはあっても、国王が退いた後、また国王に返り咲くようなケースは、それまで一度もなかったのです。まさにこのような部分が高麗人たちが、特に高麗後期の人たちが、モンゴルから受けた(私が思うには)最も大きな衝撃だったといえます。そして、それを可能にした要因がなんと「冊封」という中国的、漢文用語で、「冊封」という、一種の国王任命権が行使された状況です。モンゴルは自分たちが高麗の国王を任命するとし、それが文字通り「冊封」をしたから、つまり自分たちが高麗王を冊封したので、廃位させることもできる、また、退かせることもできると考えるわけです。

高麗としては、いわゆる朝貢・冊封というのは、少なくとも高麗前期の場合、 宋とそういう関係を結んだ時、または契丹、金、遼と関係を結んで冊封を受けた 時、それはあくまでもその国と外交関係を結んでいるという一つの形式に過ぎ なかった要素だったので、モンゴルと関係を結んだ時も(基本的に高麗人たち は、元も中国だと理解していました)、中原を占領している中国であり、中国だ から、朝貢・冊封関係を自然に受け入れました。(それなのに)これが国王の存 立、廃位とか即位の過程に実質的な政治力または強制力を行使することができ る、または行使されるという現実はとても衝撃的だったと思えます。このような 現象がその後高麗末とか、または朝鮮時代になっても、朝貢と冊封によって国王

の正当性や王権が左右されうるという歴史的経験を、それ以降の韓国の歴史で、 歴史的経験として強く作用し、高麗や朝鮮初期の支配層は、まさにこのような部 分にとても敏感に反応をしたと思います。

まさにこの点が高麗末、特にその過程で流入した性理学という思想的傾向がそ のような現象を学問的に、または思想的に正当化させる論理として作用したので はないかと考えます。

貴田

お話を伺って、歴史認識といいますか、この時代をどう語るかを考えたとき に、少しギャップがあるのかなと思いました。不勉強なのですけれども、例えば 日本の側の学会、対外関係史のご専門の先生方のお話を聞いていると、日本の学 会の中では、戦争の時代はあったけれども、その間に平和の交流の時代があった というのが、朝貢なのかなと思っています。日本の側ですと、ある意味で、貨幣 経済のようなものも地域に浸透していくというときに、すごくこの時代の社会そ のものがある意味で明るく描かれる傾向があるような気がしています。ところが 朝鮮、韓国側のお話を聞くと、すごく圧迫を受けたというイメージがあって、こ の東アジアの社会をどのように語るかといったときに、かなり日本と高麗の間で ギャップがあるように感じました。一方、第2セッションの中で、肉食のことな どの文化的な面でモンゴルの影響を受けたという話があったわけですが、その時 代の高麗あるいは社会そのものをどのように理解したらいいのか、私の中では少 しつかめなかったので、このような質問をさせていただきました。

劉 今のご質問に対してどうですか?

> 貴田さんがおっしゃった事実について、確かに関係にはギャップがあると思い ます。金先生からお話しのあった「重祚」問題などもありますし、政治的な部分 では確かに高麗のそれを必ず明るく描きだすのには無理があると思われます。し かし、モンゴルのインパクトとその後の安定的な関係での部分をもう少し見ま しょう。

> 高麗時代後期の支配層も同様ですが、代表的な文人といえる李穀(イ・コク) とその息子の李穑(イ・セク)を例に、面白い事例を一つ簡単に申し上げます。 二人はとても賢い学者たちであり、彼らは元の諸科に合格して、元で官職につい ていた官僚だったのですが、だからといって私たちがよく否定的な意味を込めて 表現する「附元勢力」ではありません。高麗という国家を否定して元に付く附元 勢力ではなく、ただとても健全な官僚たちだったのですが、彼らの場合、とくに イ・コクの場合、元にいながら高麗にいる息子に宛ててどんな手紙を送ったかと いうと、「男子なら当然『大都』に来て生活しなければならない。ここでの生活 を経験すべきだ」という詩を作って、送ったりもします。イ・セクもやはり後に 諸科に合格して元で活動することになります。

> 私たちがよく恭愍王5年の反元改革と呼ぶ「奇氏一家を誅殺する事件」を契機 として高麗はモンゴルの支配から離脱しました。それまでモンゴルつまり元に対 する反感をずっと募らせていましたが、モンゴルが弱体化した時に時流に乗じて

反撃を加え、モンゴルの支配から離脱したのです。だから国家間の関係は事実上、このときに断絶されたと見るような、とても重要な時期ですが、私が見た金石文資料などで研究してみますと、そのすぐ直後に、イ・セクという人物が媒介になって「墓誌銘」がやりとりされているのです。高麗人には死んだ後、墓にその人の一代記のようなものを書いて埋める墓誌銘があるのですが、それらは主に親しい人、書が上手な人、文筆の大家に頼むことになります。高麗時代のこのような墓誌銘や僧侶の碑文のようなものは、とくに、元干渉期になると元の名高い文人たちの書をもらって、または、文章をもらって墓誌銘を立てる例が多く見られますが、この反元改革が発生した、つまり表面的には国同士での外交関係が事実上断絶してしまったともいえるそんな時期の直後でも、個人レベルでは依然としてそのような人的交流がとても活発に行われていました。つまり、彼らの認識上では元という国は単純に圧迫してくるだけの対象ではなく、交流の対象であったり、文化を持った国家としても認知されていた面が持続していくという様相を確認できる面も確かに存在しているといえます。

ツェレンドルジ

一つのアプローチ、歴史としてのモンゴル史、モンゴル帝国史へのアプローチというのでしょうか。それを一つだけ簡単に申し上げたいと思います。ところでその何よりもモンゴル帝国が遊牧民国家だったという点をちょっと念頭におかなければなりません。それはどういう意味かといえば、ある国家制度や何かを説明する際、一定の枠組みの中で、枠をこのように設定して、それに合わせて説明するには合わない部分があります。それはなぜかというと、遊牧民たちは比較的定着民より自由です。それで元の歴史もそういう部分が少しあります。だから、そういったことを知らないために、特に、定着民国家の歴史学者らはすべてをこのように形式に合わせようとするために、そういった過ちをしてしまって、成功しない場合もあります。

たとえば、その当時のモンゴルの執権者たちは、すべてを自分たちの勝手にし ました。そんな権利を永遠の天から与えられたため、すべてを自分たちの勝手に しました。しかし、あるものは、その被支配国家、その被支配地域の人民が望ん だことに合わせていった場合もあります。たとえば、クビライまでは中原の領地 の一部を占領はしましたが、その統治については、それほど成功していませんで した。クビライは中原をすべて征服した後にその地域の住民たちが欲しているこ とを知ったのです。それで、以前のモンゴル人たちがしたように、そのまま無理 強いしようとするよりは、形式的にでも彼らに合わせて、例えば、年号などを 使ったりしました。ある意味彼らが欲していることに合わせたように見えたり、 モンゴルが実施してきたものに徹底して従わせたり、二重的な方法を選択し、実 施したとみればいいと思います。高麗も同じです。クビライまではそれもうまく いきませんでした。なぜなら、高麗が欲したその朝貢・冊封関係というのはモン ゴル人らが実施したのとは違っていたのです。完全に違っていてまったく一致し ていなかったのです。その一方で、クビライが即位してから彼らが望んでいるこ とは何かを知ったのです。それで形式的にはいろいろと合わせてみたのですが、 実はモンゴル人たちが知って理解していたことと、その被支配地域民たちが知っ

ていたものが互いに一致しなかったのです。だからモンゴル人たちは、モンゴル 大陸を自分たちの思い通りに理解し、高麗や中国などの人たちも自分たちが知っ ているように理解をしたんです。それで二重的なこのようなことが起きたので、 後に何か問題が起きた場合は、互いに衝突するしかない現象がたまに起きていた といえます。

村 三井文庫の村和明です。これまでの議論と少し違うお話をします。私が今申し 上げたいのは、資料の残り方の問題と、歴史の認識の関係の問題です。これにつ いては日本側の研究者から少しご発言がありました。佐藤雄基さんが指摘されま した日本における資料の残り方という問題と、三谷先生が指摘されました日本に おけるモンゴル・インパクトの受け止め方という問題です。

日本におけるモンゴル来襲の時代の資料の残り方について少し考えてみます と、本来は実際に戦闘に従事した武士の書き残したものが最も多かったはずで す。しかし、中世の武士の資料が後々の時代までどれほど伝わったかといいます と、元寇関係に限りませんが、実はそれほど比率としては多くない。比率として はお寺や神社、宗教施設ですね。仏教や神道の施設に残ったものが総体的な割合 としては多い。中央政府によって編纂されて残っているものはほぼ皆無だと思い ます。そのことが、のちの時代の日本におけるモンゴルの記憶にどういう影響を もたらしたかということを問題にしてみたいのです。

佐藤雄基さんのほうから先ほど、あまり日本側に残された記録は多くないとい うご指摘がありました。基本的にはそのとおりだと思います。そのわずかな記録 を基にして、その後の日本の歴史の中でモンゴルのインパクトというものが意識 的に振り返られたのはどのような時期かといいますと、国際的な動乱の時期であ ります。一つは豊臣秀吉や徳川家康の時代です。朝鮮半島に侵入していく時代、 あるいはポルトガルやスペインが侵入してくる時代ですね。もう一つは、近代の 入口、19世紀に、武士の時代が終わって、天皇中心の近代国家が成立する時代。 この二つであります。

私の専門ではないので、今考えてみた仮説に過ぎませんが、宗教施設に残った 記録を基にしたために、この時期振り返られた過去の像は、おそらく必然的に、 神話的なものになるんですね。技術的な、現実的な、人間社会の記録というより は、神々も登場する神話に近い物語として回顧される。それによって日本は神の 国だという意識が、日本が動乱を迎える時期になると蘇ってくる。あるいはその たびに少し形を変えて再構築されてくる、という経過をたどっているように思い ます。

このことを少し拡げて、抽象的な課題として申し上げます。資料というのは現 在の我々が、過去の時代と向かい合うためのものです。その資料を作った人間と 向かい合う、その資料が作られた時代と向かい合う。しかし、一方で、その資料 は時間を飛び越えてきたわけではありません。伝わってきたものです。その資料 が現代にいたるまでの歴史の過程で、どのように共有されてきたのか、あるいは 隠されてきたのか。誰に読まれてきたのか、それを読む集団はどのように変化し てきたのか。あるいはある時代まで残っていた記録がいつなくなったのか。その

ために、資料を踏まえた記憶の形は、どのように変化し、現在に至っているのか。こうした問題は、今回のシンポジウムのように比較的長い期間に帝国の形成とその影響を考える、またそれを、葛先生がおっしゃったように、現在の我々を縛っている、国家、民族、言語の枠を相対化して乗り越えていこうと考えるときに、基礎的な問題として重要になってくると思います。単に過去の記録と現在の我々が向きあうということではなくて、その記録を誰が読んできたのか、誰が読まなかったのか、その関係がどのような変化を遂げてきたのか。こうした問題を丁寧に考えてみることが、極めて難しいグローバルな帝国に対する問題意識を、現代の国民国家に分断された我々が共有していく上で、ひとつの有効な方法ではないかと考える次第です。

山内 最初に話題になりました冊封・朝貢の話題と関わるんですけれども、今までい ろいろな方が発言されたこと、史料を書いた人の立場、あるいは場所、時代です ね。そのようなさまざまな違いをベースにして史料はできるんですが、もっと根 本的な問題として、東アジア地域の歴史を論じる場合、前近代は漢文史料が中心 になります。つまりその段階で、漢文、漢語というバイアスが相当かかってくる んです。先ほどの冊封や朝貢もそうですが、漢語ではそうとしか表せないという 問題があります。その漢語と内実の違いをどう見分けていくか。日本、朝鮮半 島、中国の漢文史料に、同じ朝貢とか冊封とかの言葉が並んでいるわけです。そ の違い、その実態はどうかというのをどう見分けたらいいのかというのが、自分 の関心事です。それを乗り越えていくにはいろいろやり方はあると思うんです が、私がすごく期待しているのは、第4セッションでお話をされたお二方の衣食 住というような、いわゆる社会の基層を構成するようなところですね。権力者た ち同士のつながりとしての世界ではなく、より基層に近いモノのつながりです。 それを見ることによってそのバイアスというのが少しは緩和するのではないかと いう期待を持っております。

榎本 国際日本文化研究センターの榎本渉です。今回のフォーラムの全体的な印象を少しお話しさせていただきます。今回は全部で11本の大変充実した報告が並びました。その中で私が感じたことを申し上げます。今回の大きな柱はグローバル化だと思うんですが、ほとんどの報告では、モンゴルという空前の大帝国が出来上がって外に広がっていく過程や、そのインパクトを受けた側がどうやって対応するかという生き残り戦略などに関して実証されていたかと思います。言ってしまえば、それは国家であり、支配層の問題を扱ったものが中心だったと私は感じております。しかし、いわばホワイトハウスや霞ヶ関の人々の交流が緊密になっていって、似たような制度が行われるようになれば、それがグローバル化なのでしょうか。僕は、そうではなくて、情報とか文化とか流通とかの密接化があって、グローバル化といえると思います。つまりきっかけは上の方の交流の結果でもいいのですが、グローバル化の一つの重要な指標は、従来と違った範囲で、国を超えるレベルで物や情報が動くようになることだと思うんですね。それまでの政治的な交渉というものは、いうならば、その前提の話だと思います。今回、そ

の前提の話はすごく充実していたんですが、その結果、どのようなグローバルな 世界が生まれたのかということが、ほとんどわからなかったというのが私の印象 です。それを全面的に扱ったのが、おそらく第4セッションのお二人であったと 私は考えています。今後またこのような企画をしてくださるのであれば、今回の コンセプトをもっと突き詰めて、「その結果生まれた交流」というものを取り上 げていただければと思います。それこそ、貴田さんがやっておられるような貨幣 の問題も一つ、重要なポイントになると思いますし、そういった文化の問題です

それから、先ほど資料の問題が話題になりましたが、私が少し思ったのは14 世紀になると日本も高麗も、似たようなものを作るようになる傾向があると思う んです。例えば詩文集ですとか、語録というものは、日本でも高麗でも13世紀 以前からもちろんありましたけれども、14世紀以降にすごく増えるんです。こ れは何か関係あるのかもしれないと思います。あるいは当時元、モンゴルで行わ れていた、モンゴル語直訳体の奇妙な漢文がありますが、あれは高麗にも導入さ れます。これは多分そのあとにも影響があるのでしょうから、そういうところも 問題として取り上げられるかもしれない。そういうことなどもいろいろと思った 次第です。

高麗大学の韓承勲です。私は韓国近代史が専門なので、先生方の発表や討論が 韓 まるで宇宙語のように感じられるほど難しかったです。それでも発表をお聞きし ていて、この「国史たちの対話」が後に朝鮮出兵(文禄・慶長の役)、19世紀、 20世紀へと進展していくということでしたが、果たして私の時代になると、ど んな風に展開するだろうかとさまざまにシミュレーションしてみました。それ と関連して今回の発表でとても印象的だった部分は、政治的対立はあったけれど も、平和・安定・寛容・柔軟性、人々の暮らしを豊かにしたという面でとても興 味を覚えました。これを近現代史の部分に適用したらどうかという希望を交えて 考えてみました。

しかし、実はこの近代史では難しい面がたくさん存在するのも事実です。それ は政治的葛藤というインパクトがとても大きいためというのもそうですし、先ほ ど史料のお話をされましたが、実は政治的葛藤、対立と関連して作られた史料が 平和安定と関連した史料より非常に多いため、そのような面が存在するようで す。それは多分、私はよく分からないのですが、13、14世紀の史料もそうでは ないかと思っています。こんな考えが浮かびました。さっきインパクトという単 語が出ましたが、社会経済的面でインパクトについての説明は印象的でしたが、 それにもかかわらず、政治的インパクトという部分は無視できないのではないか と思いました。少し他の話になりますが、ウエスタン・インパクト、つまり西欧 が東アジアを侵略して、彼らが東アジアを理解する方式のうちの一つが歴史でし たが、西欧が理解する東アジアの歴史は平和と安定というよりは、彼らがどのよ うに葛藤して対立したのかというものに集中したようです。それでなぜ朝鮮と日 本が仲が悪いかを考える時、文禄・慶長の役の話をしていたようです。

それから、向先生の発表の最後の部分がとても印象的だったのですが、政治的

葛藤という部分で話をすれば、実際の史料もあるけれど、内部でそれを助長して作った面もあると思います。その部分を私達が史料と関連してどう考えるかはみなさんの答えであるかも知れませんし、近現代史の部分でもすごく重要な解答になるようです。私の専門とは違いますが、とても有益な学びの時間になったと思います。ありがとうございました。

これについて私は、説得力のある研究だとみています。なぜなら、契丹と高麗が戦争してから、「徐熙(ソヒ:高麗の外交官)の外交談判」という歴史的事実があります。そこで契丹の将軍が「高麗は新羅から由来した国なのに、なぜ北に領土を拡張しようとしているのか」という表現をすると、高麗はそれとは反対に高麗自体が高句麗から高麗という形でつながっているので、「我々が北に領土を拡張するのは、そういったことからだ」という返事をしています。その中で蕭遜寧(ソ・ソンミョン)という人は、契丹人ですから、契丹人は高麗という王朝の名称をおそらくシュルクルと理解していたようです。そのような面でシュルクルが後にモンゴル語もしくは満州語に影響を与えた単語ではないかと思います。以上、補足説明をさせていただきました。ありがとうございます

お話を拝聴しながら思うところがあって発言させていただきます。私は「ダルガチ」を研究しながら様々な史料を見ましたが、ダルガチ(占領地を治めるための監督官)が登場すると、高麗史においては脅威的な「征服者」、または「侵略者」と同じイメージで描かれます。史料によりますと、普通72人のダルガチが派遣され、彼らが一度に殺害された、このように対立したなど、葛藤を誘発する者として数多く描写されています。ですが、元後期に江南地域・中国地域に派遣されたダルガチに関する資料を見ますと、元中期以後の墓誌銘に出ている記録では、ダルガチらのイメージがとても友好的に描かれています。

それで現地、つまり中国の漢人たちには善政を施し、良い統治をし、慰労を し、地域社会の問題点を解決してくれるとても友好的な存在として、墓誌銘には 書かれています。どのような史料を、どの時期に書かれたのか、墓誌銘か、国家 の公式資料なのかなどによって、ダルガチーつを取ってみてもそうですが、元帝 国のイメージがそれぞれ異なります。

こうした元代の様々な史料があっても、いろいろな問題がある。元帝国のイメージや歴史上の事実がそれぞれ断片的に存在しているので、限界があるのは事 実ですが、先ほどチョグト先生もおっしゃった通り、さまざまな言語を通じた歴

© 2018 SGRA 211

趙阮

史上の復元も必要です。例えば、「元史」一つをみても、たったの3年でやっつ け編纂されているので限界があるのも確かです。ですが、各史料がどのような背 景で編纂されたのか、どんな時期に編纂されたのかといった脈絡を把握すれば、 その史料も、十分に活用価値があると思います。共に、総合的に見ることがモン ゴル帝国史研究で必要だと思います。

劉 ありがとうございました。たくさんの貴重なご発言をいただくことができまし た。では、今手を挙げておられる方、このお二人で最後にしたいと思います。

荒木 国立歴史民俗博物館の荒木和憲です。私の専門は15~16世紀の東アジアの交 流史ですので、ほとんど感想めいた発言になってしまいますが、やはり資料に関 してです。今回の印象としては正史、高麗史ですとか、元史ですとか、そういっ た正史で語らなければいけないという難しさがあるんだなという思いがしまし た。15~16世紀ですと、日本にはそういうものはありませんので、いわゆる生 の文書ですとか、記録ですとか、そういった一次資料を使いつつ、あるいは朝鮮 では、朝鮮王朝実録があったり、明には明実録があったり、正史よりも信頼でき る同時代性の高い資料がありますので、そういうものを組み合わせることで、割 合に交流史というのが紡ぎやすいわけですが、今回あつかわれた時代は、正史を 比べていかないといけないという難しさがあるんだなあという思いがしました。 朝鮮王朝実録ですと、ひとつの意思決定をするにあたって、さまざまな意見が事 細かに書かれていますので、いろいろな可能性があるなかで、どれが最終的な意 思として決定されていくのか、そのプロセスが比較的よく見えてきます。しか し、おそらく正史では結果しか書かれなかったり、あるいは最終的に採用された 意見だけが書かれたり、そういうことになってくるのだと思いますので、いろい ろな可能性があるなかで、あるひとつの決定がなされたんだということを意識し て正史を読まないといけないんだろうなという感想を持ちました。

もう一つだけ言わせていただきますと、私が所属している国立歴史民俗博物館 では歴史というのは、文字資料だけではなくて、先ほど山内さんがおっしゃった ようなモノ、残っているさまざまなモノ資料ですね。そこからわかる像を一緒に 合せていかないと、本当の歴史は見えない。そういった立場で研究をしているわ けです。そういうことでいきますと、考古学の成果ですとか、遺跡などから出て くる遺物。文字資料から比べれば寡黙な資料ですけれども、寡黙であるがゆえ に、余計なこともいいませんので、そういった考古遺物から見えてくる、あるい は考古学の成果から見えてくるイメージ、そういうものも意識していけば、国史 が国史の呪縛から少しは解き放たれるかなと思った次第です。

大阪市立大学の彭浩です。たくさん伺いたいことがあるのですが、時間も迫っ ていますので簡潔に一つだけ質問させてください。先ほどの荒木さんの質問と関 わってくる資料についてです。私たちは近世18世紀を調べるのによく一次資料 を使っています。ですが、みなさんのお話を聞いていると、モンゴル帝国の時期 は一次資料がすごく少ないと、そういう印象を持ちました。しかし、さきほど

チョグト先生のお話を伺いますと、モンゴル語の資料もあるのに、あまり使われていない。あまり重要視されていないと言われました。あったのにあまり使われていないというのはなぜだろう。そこが私はちょっと気になっています。とくに今回は外交交渉とか政治支配とかそういうキーワードがありまして、そういうことに関するモンゴル語の資料は本当にあるのか、どのくらいあったのか。もしたくさんあるなら、なぜ使われていないのか。少し疑問を持っています。

劉 ありがとうございました。では以上をもって総合討論を終わりにしたいと思いますが、最後に三谷先生に全体の総括をお願いしたいと思います。

三谷 一日半以上にわたって、充実した発表と討論を繰り返してくださいまして、本 当にありがとうございました。昨日の発表が予想以上に充実していたので、今日 はもう話題が残っているのかと思っていたら、次から次へ話が出てきて、あっと いう間に時間が足りなくなった。このフォーラムを企画したものの一員として、 大変うれしく思っています。

私自身も今日の討論の内容に、もう一つ疑問を加えたかったんですが、それは榎本さんがおっしゃったように、インパクトとか、国際交流とかをもっと深いレベルで見るべきだということです。まったく同感しました。例えば私は、モンゴルのお姫様が高麗に嫁いだ。そこで子どもが生まれる。その子どもは一体、父方と母方のどちらの家で育てたのだろうか。私の存じ上げている限りでは、韓半島ではずっと母親の家で育てるというのが普通だったと聞いています。それがモンゴルから嫁いだ娘さんにとって、どういうインパクトを与えたんだろうと、そういうふうに疑問に思いました。家族の構造は変化しにくいものなので、その変化がもし見えるんだったらとても面白い研究になるんじゃないかと思いました。

私がまず申し上げたいのは、なんといっても、このシンポジウムに参加してくださった皆さんに対する感謝です。そして、和気藹々と学問的議論を、意見の相違があっても、相手の話もよく聞いた上でちゃんと反論するということを皆さんやってくださった。このシンポジウムの一番重要なことが果たされたと思っています。本当にありがとうございました。このあとのエクスカーションも大事な機会ですので、個別に話題をどんどん作って、今後の研究上のつながりを作っていただければと思います。

それと忘れてならないのは同時通訳の皆さんへの感謝です。私は似たようなシンポジウムを開催したことがありますが、これほどはっきりわかる通訳で会議ができたことはめったにありません。我々は同時通訳の方に感謝すべきです。ぜひ盛大な拍手を送ってください(拍手の音)。

それから最後になってしまったんですけれども、この場を組織してくださいました渥美財団の皆さまに感謝を申し上げます。全く見事なものでした。これもまた、盛大な拍手をお願いします(拍手の音)。

あとがきにかえて

その1

第2回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 『蒙古襲来と 13 世紀のモンゴル帝国のグローバル化』円卓会議報告

金キョンテ 高麗大学

第57回SGRAフォーラムは「第2回日本・中国・韓国における国史たちの対 話の可能性―蒙古襲来と13世紀のモンゴル帝国のグローバル化 | というテーマ で開催された。昨年秋に開催された第1回会議がプロローグとしてこれからの対 話の可能性を開く場だったとしたら、第2回は学界で最も活発に活動している若 手中堅の研究者が集まって、本格的な「対話」をしようとする場であった。

2017年8月7日から3日間、北九州国際会議場で予定されていた会議には開 催危機の瞬間があった。観測史上2番目に進度の遅い台風10号が、当日九州の 北部を通るという予報だったからである。幸いなことに、開催地である北九州の 航空と列車運行には大きな影響はなかった。ただし、航空会社が事前に着陸時間 を調整したために、韓国からの参加者の一部は(筆者本人を含め)開始時間に少 し遅れて到着した。

初日には開会式と基調講演が行われた。今西淳子SGRA代表の開会挨拶に続 き、三谷博先生(跡見学園女子大学)から趣旨説明があった。これまでの東アジ アの歴史を背景に行われた様々な歴史に関する議論は、主に20世紀前半の日本 の侵略をどのように捉えるかにあったこと、ある面では成功したが、いくつかの 面では失敗したこと、また明らかなことは、国家が介入すると失敗したというこ と、そして、個人が構成する会議としてお互いを理解する努力があれば成功させ ることができると指摘した。また、全5回シリーズとして予定されるこの会議 は、前近代と近代以後のすべての時代を網羅的に論ずるという趣旨で、1~3回 を前近代に配置したこと、最も重要なのは、お互いの発表をよく聞いてレスポン スをする作業であることを強調した。

葛兆光先生(復旦大学)は、基調講演「『ポストモンゴル時代』?―14~15世 紀の東アジア史を見直す」で、モンゴル帝国の衰退後、新しい王朝が成立し、お 互いに(朝貢システムに限らない)多様な関係を結びはじめた14世紀末~15世 紀初めに至る時期を、東アジアのその後の関係を示唆するものとして参考にする ことができると提案した。関連する歴史研究者としても重要な指摘を含む提案 だったと思う。

8月8日は、本格的な論文発表であった。四つのセッションに分けて11篇の 論文が発表された。最初のセッションは、四日市康博先生(昭和女子大学)、 チョグト先生(内蒙古大学)、橋本雄先生(北海道大学)の発表で、「モンゴルイ ンパクト」の歴史的意味と各国の立場から、さらに世界史の視点からどのように 見るべきかを提案した。 2 番目のセッションは、エルデニバートル先生(内蒙古 大学)、向正樹先生(同志社大学)、孫衛国先生(南開大学)の発表で、モンゴル 侵略による文化的・技術的影響に様々な史料を通じてアプローチした発表であっ た。3番目のセッションは金甫桄先生(嘉泉大学)、李命美先生(ソウル大学)、 ツェレンドルジ先生(モンゴル国科学院)の発表で、モンゴルの主要侵略対象と

され、長い間抵抗した国である高麗を例に挙げ、モンゴルの支配実像の多角的な分析を示した。最後のセッションは趙阮先生(漢陽大学)、張佳先生(復旦大学)の発表で、食事と帽子という物質的、文化的要素にみられる長期的かつ系列的なモンゴルの影響を調べた。各セッションの発表者は、他のセッションの討論者として参加した。

8月9日の午前中は、昨日の各研究報告を踏まえての全体討論の時間だった。日本での一般的な学術大会とは少し異なる構成であったが、一日熟成した質問やコメントはそれぞれ本会議の趣旨に沿ったものであり、大変効果があったと思う。この日は、趙珖先生(韓国国史編纂委員会)の論点整理が先行した。「モンゴル襲来」と「グローバル化」をキーワードにして、集中的な発表と討論が行われたこと、モンゴルは最初にグローバル化に成功した「帝国」であり、その中で、韓国・日本・中国がそれぞれどのような歴史を展開したのかを検討することによって、グローバル化を明確に理解することができること、グローバリゼーションは、単純なグローバル化だけではなく、グローカリゼーションとの相互関係を見なければならないと指摘した。また、四つのセッションの全ての発表によって政治と統治様式、文化交流が幅広く調べられており、各国の国史を扱いながら一国の視点からのみではなく東アジア全体から見ると、どのように幅が広がるかを示した良い実例だったと結んだ。

総合討論の司会を務めた劉傑先生(早稲田大学)は五つの議論主題を提案した。まず、モンゴル帝国の影響をどのように評価するのか。第2に、冊封体制と朝貢について。第3に、モンゴル帝国はモンゴル史か中国史なのか、そしてどのように対話したら良いのか。第4に、高麗から朝鮮につながる韓国の歴史における中国の立場は何だったのか。そして最後に、史料批判の問題であった。続いて自由討論が行われた。上記テーマのうち、冊封体制、モンゴル史、史料批判の問題について、参加者全員が発言する活発な議論が繰り広げられた。

最後に三谷博先生の全体総括があった。非常に充実した3日間の会議であり、 実行委員の一人として感謝すること、さらにもっと深いレベルの「グローバル 化」の分析があったらよかったという所感を述べた。そして今後も対話を続けて 欲しいという総評だった。

午後は見学会であった。モンゴルが襲来した九州北部の重要な場所を踏査した。元寇記念館と筥崎宮は歴史をどのように記憶して使用するかの問題を提起する史料館で、また史跡として印象が深かった。雨の中を訪ねた生の松原元寇防塁跡では、約800年前にこの海から上陸を試みていたモンゴル連合軍と、これを眺めていた日本の鎌倉武士たちはどんな気持ちだったのだろうという考えに浸った。

期間中、各国の研究者が自分の最新の研究成果や研究の過程での悩みを提示し、議論やアドバイスが行き来した。当時存在していた国ないし王朝の勢力範囲は、そのまま現在の国境や国家概念と必ずしも合致しない。そのような面で、モンゴルの研究者の参加は大事であった。国際会議での最大の難関は、言語の問題である。交差通訳をする場合、時間がかかる。したがって質問や反論があっても飛ばす場合が多い。今回は3日にわたって同時通訳が提供されて、各国の研究者

は率直に話をすることができた。渥美財団と同時通訳者の労苦に感謝する。

今回の大会においての感想は皆違うと思うが、多くの成果と課題を残したとい う点は同意するだろう。東アジアという空間、時間における朝貢関係の具体性、 固定化された各国史の視座をどのように超えるのか等、基本的な問題提起を介し て得られたことが多いと思う。連続した「国史の対話」は、5回まで予定されて いる。これまでの成果さえ失ってしまい、後戻りしてはいけない。成果を踏まえ て、次のステップに進まなければならない。来年夏に開催する第3回会議は、近 世に東アジアを揺さぶった戦乱と平和の世紀への移行を扱う予定である。多くの 方々に関心を持って参加していただき、発展的な新しい歴史学の時代が来ること を期待している。

(SGRA かわらばん:金キョンテ「第2回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 『蒙古襲来と13世紀のモンゴル帝国のグローバル化』円卓会議報告」より転載)

あとがきにかえて

東アジアにおける歴史対話の再開―北九州での「蒙古襲来」会議

三谷博 跡見学園女子大学

「国史たちの対話」が始まった。第2回目だが、昨年は準備会だったので実質的には第1回である。東アジアには、国ごとに「国史」があり、その間には一見越えがたいほどの溝がある。これを架橋し、さらには何かを共有できるまで持って行けないか。これが「国史たちの対話」の意味である。渥美財団の元締め、今西淳子さんが命名してくださった。

今年から4回、東アジアの国際関係をめぐる歴史的事件を取り上げて、関係国の歴史家たちを招き、議論してゆく。今年のテーマはいわゆる元冦で、ここから次第に時代を下ってゆく計画である。

東アジアの各国すべてに関係する事件を取り上げるので、集まるのは主に国際関係の専門家である。しかし、我々はここに国内史の専門家も日本と韓国から招いた。普段は国際関係史やその背後の政治的意味に無関心な人々が、このワークショップの中でどう反応するか。こうした会議に意味を認めてくれるか否か。今回の「国史たちの対話」では、こうした点も大事な課題として設定した。そのためもあって、同時通訳を日 - 中、日 - 韓、さらに中 - 韓の間で用意した。遠い過去に関する専門用語が飛び交う通訳は大変だったはずであるが、概ねよく分かる通訳をしてくださった。深く感謝したい。

「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマは、東アジアの諸国民をとにかく対話のテーブルに着かせるために設定された。今世紀の初頭には数々の歴史共同研究が試みられたが、当時のように近代の問題を取り上げると、日本人が自動的に被告席に着くことになる。対等な対話が不可能になるだけでなく、領土問題が先鋭化している現在、テーブルに着こうとする日本人はほとんどいなくなっている。

これに対し、蒙古襲来という遠い過去は現在から心理的な距離をとりやすい。 とくに東アジア3国の国民は、いま流行の表現をすればみな被害者である。高麗 は厳しい統治下に置かれ、中国にはモンゴル王朝が生れ、日本は征服を免れたも のの、防御にかなりの犠牲を払った。被害者同士だから対等な立場で冷静に議論 ができる。ただし、この会議にはモンゴル人の歴史家を3人お招きした。しか し、彼らは加害者の子孫として扱われたわけではない。日本人はモンゴル人の横 網を当然のように受け入れていて、彼らと元冦を結びつけることはないし、今回 の会議では韓国の研究者も何ら非難がましい言葉を語らなかった。

だからといって、この歴史対話が政治的磁場の外にあったわけではない。元朝は果たして大モンゴル・ウルスの一つなのか、中国王朝の一つなのか。モンゴル人民共和国と中国の内蒙古自治区から来たモンゴル民族、および漢民族、三つの出自を持つ歴史家たちの間で議論が行われたようである。筆者は十分に聞き取れなかったが、葛兆光さんは中国の専門家の中には二つの解釈が同時に成立すると考える人がいると指摘した。世界の歴史学界では、現在の国家的枠組みをそのま

そのう

ま過去に持ち込むアナクロニズム(時代の取違え)は厳しく批判されるが、東ア ジアの政府や世論は当然のようにそう行動することが多い。世界からの嘲りを自 ら誘うのは賢明なことだろうか。

発表と議論の中には筆者にとって特に印象的なものが二、三あった。一つは四 日市康博さんの指摘で、クビライが日本に3度目の侵攻を準備しており、彼の死 がその実行を妨げたこと、およびベトナムやジャワ(そんなに遠くまで!)が防 戦に成功した後、直ちに元朝に朝貢を始めた事実である。モンゴルを撃退した後 の日本は、交易は再開したが、外交的な配慮はしなかった。国際関係への不慣れ とその背後にある日本の孤立性が思われたことであった。

他方、モンゴルに服属させられた後の高麗の姿も印象的であった。仮に日本も 攻略されたとして、何が起きただろうか。天皇家が断絶した可能性もあるが、そ の一部が元朝に従属し、李命美さんが高麗について紹介したように、元朝の王女 を妃に迎えるということもありえたかもしれない。この思考実験は日本史上の難 問の一つである天皇制の理解にかなり寄与してくれるのではないかと感じた。

高麗については、趙阮さんの取上げた食文化の変化も興味深かった。高麗王朝 の奉じていた仏教は肉食を禁じていたが、モンゴルの支配下でそれが定着したと いう。政治的支配が終っても、一旦変化した生活文化は持続する。歴史を長期的 に見る場合、政治史以上に生活文化史は重要となると感じた。家族の構造や男女 間の関係も社会構造の柱の一つであるが、これも征服を通じて変わることがある のだろうか。朝鮮王朝の場合、19世紀初頭に至るまで子供は母の家で育てられ た。では、モンゴルからの公女が産んだ子はどこで育てられたのだろうか。宮中 か、外か、そもそもモンゴルでは夫と妻のどちらの家で子供を育てたのだろう か。こんな問いが次々に浮んできたことであった。

このように、この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関 係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示してくれた。会場 に招いた日本と韓国の国内史の専門家はどう感じ取っただろうか。注意深く耳を 傾けてくださったのは間違いないが、さらに進み、機を見て遠慮なく質問をして くれたら、会議はもっとエクサイティングになったのではないかと思う。筆者は 総括討論の最後になって、「国際会議に出て質問せえへんかったら、罰金やでー| というある先生の言葉を引用し、発言を促した。会議冒頭の挨拶の中で用意して いたのだが、うっかり言及を忘れてしまったのが悔やまれてならない。招待者 は、一旦口を開くとみな的確で興味深い指摘をした。次回からは、ぜひ最初から 発言してほしいものである。

会議は全体で3日。2日目は朝から夕方までびっしりと発表が続き、筆者は 総括討論の朝はかなりへばっていた。しかし、司会の劉傑さんは見事な交通整理 の枠組を提示し、とりわけ韓国側の責任者趙珖先生は発表の一つ一つについて簡 潔かつ的確にまとめ、討論の出発点を提供してくださった。お忙しい公務の時間 を割いて駆けつけてくださってのことである。次回のソウルでの会議は、きっと もっと楽しく、有意義なものになるに違いない。そう確信した。

(SGRA かわらばん:エッセイ 547:三谷博「東アジアにおける歴史対話の再開—北九州での 『蒙古襲来』会議」より転載)

218

あとがきにかえて

歴史家の立脚点

孫 軍悦 東京大学

「国史たちの対話の可能性―蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」と題するフォーラムが3日目を迎えると、議論も一段と熱が入った。専門的な応酬が飛び交うなか、本来、日、中、韓、モンゴルから一堂に会した歴史家たちの自由闊達な討論に喜ぶはずであったが、素人の私はなぜかある不安に駆られた。果たして、先生方が、このフォーラムが専門的な歴史学の国際シンポジウムとどこで、どのように違うとお考えなのか、そして「歴史家は歴史和解にどのような貢献ができるか」というフォーラムの趣旨と、ご自身の専門的な研究が、いかに内在的に結びついていると思われるのか、この二つの疑問を歴史家たち、とりわけ日本の研究者たちにぶつけたいと、率直に思った。

不安の理由は二つある。一つは、他国の史料を自由に駆使する歴史家たちの終始和やかな交流を、そのまま「国史的立場」の超越として捉えてよいのか、それとも単に現在についての歴史認識の問われない700年も前の出来事が話題の中心であったからか、という私の疑念が消えていないこと。もう一つは、蒙古襲来に関して全く無知であった私でさえも、2日間の会議でその大体の輪郭をつかむことができたぐらい、研究者たちの論文が実に素晴らしいものであっただけ、その優れた歴史研究に、くいま・ここ>に生きる歴史家自身の歴史性があまり感じられないことに、困惑を覚えたことである。

むろん、口頭での発表と討論にはさまざまな制限があり、発表者は必ずしも自らの考え方を語り尽くすことができない。論文を仔細に読むと、歴史と現実との関連性がまったく触れられていないわけではない。例えば、ある論文は、日清戦争後に起こった元寇記念碑建設運動の背景について、次のように指摘している。「その背景には、日露戦争を控え、欧米列強に対抗しつつ国家の生存戦略を立てなくてはならなかった明治の日本が置かれた状況が色濃く反映されている。これはまた今日われわれが置かれている状況ともどこか似かよう」。また、2015年に刊行された元寇を題材としたマンガに描かれた火薬兵器について、「およそ730年ぶりに先進的な軍事大国として海上に台頭する隣国への畏怖のシンボルなのであり、人々の不安な心理を代弁している、というのは考えすぎだろうか」という。これらの言葉から、論者の現在に対する認識と、過去と現在との関連性を捉える角度を、ある程度窺うことができよう。一方、同じく明治時代と今日、再び元寇の歴史に焦点を当てることの意味に触れるが、元寇資料館を案内してくれたNPO法人志賀島歴史研究会の岡本顕実さんの解説は、もう一つの視点を提示していると言える。

岡本さんは、明治37年に建てられた元寇記念館を、日清戦争から敗戦までまっしぐらに突き進んだ日本軍国主義の起点に位置づけ、長崎原爆の被害者をこの記念館の犠牲者だと言い切った上で、改めてこの史料館の建てられた当初における役割と今日における歴史的意義の差異に注意を喚起する。明治37年の元寇記念

そのる

館と戦後の元寇史料館だけでなく、8月9日にこの話をする自らの言説行為の歴 史性をもはっきりと自覚しておられるその歴史的感覚の鋭敏さに、私は驚かざる を得なかった。

おそらく、歴史家は、国家の角度から歴史を把握する習慣が身につき歴史事実 や史料としての展示品自体の真偽により関心を持つのだが、それに対し、一般市 民の歴史に対する持続的な関心は、往々にして現在における強い問題意識によっ て支えられていて、国家の運命よりも個人の運命により注目し、歴史を語る際、 なぜ、いま、ここで、このように、ほかでもなくこの歴史を選んで語るのかとい う理由を、まず自間せねばならないのだろう。

むろん、歴史家が自己の現在における政治的立場や価値判断の基準を歴史研究 に持ち込んではならないことはもはや常識である。ただ、それと、歴史を語る際 に歴史家が自らの主体性乃至個性を没却すべきか否かとは、おのずと別問題だと 私は思う。

丸山真男が思想史を書く難しさについて、このように述べている。「思想史を 書く場合にはどんなに肌の合わない立場なり考え方でも、超越的に一刀両断する というわけに行かず、一度はその思想の内側に身を置いてそこからの展望をでき るだけ忠実に観察し体得しなければならない。……その上思想史の叙述で大事な ことは、さまざまの思想を内在的に把えながらしかもそこにおのずから自己の立 脚点が浸透していなければならない事で、そうでないとすべてを「理解」しっぱ なしの相対主義に陥って、本当の歴史的な位置づけが出来なくなってしまう」。 「自己の立脚点」がなくても歴史研究ができるのは、おそらく、学問の自律性と 独立性をとりわけ強調しなければならない日本の近代史のなかで形成された、堅

実な実証主義的学風を尊ぶ近代史学の一つの特質かもしれない。しかし、史学史 における優れた研究業績が現実の歴史において案外みじめな役割しか果たせない こと、また、学問の世界に大きな足跡を残した歴史家の現実についての把握が意 外に貧弱であることも、また歴史の教えるところであった。だからこそ、戦後、 中世史家の石母田正が史料批判の実証的技術のレベルに留まるいわゆる「実証主 義歴史学」の無目的、無思想、無性格を厳しく批判し、日清、日露戦争の時代に 成立した東洋史学の西欧を凌駕する業績と、「その古代文化には同情と尊敬を、 現在と将来にたいしては軽蔑と絶望を。この老大国の骨と肉をさまざまに刻み、 解剖してみせた客観的で冷厳な『学問的』態度」との矛盾を鋭く衝いたのであ る。

いうまでもなく、丸山が主張しているのは、一旦自らの立場や考え方を棚上げ して歴史の内部に沈潜し、徹底した実証的な研究によって甦らせた歴史像に、改 めて自らの立場なり考え方にしたがって歴史的に位置付ける、ということではな い。もし、歴史家の「立脚点」がその外部にあって、歴史を把握する際に棚上げ できるものならば、その歴史叙述に意識的に反映させることができても、「おの ずと浸透する」ことはないのではないか。私は、やはり、歴史家の確固たる「立 脚点」は、歴史家の自ら生きる現実において、その人間の内部に形成されるもの ではないかと思う。専門的な学術的訓練のみならず、現在という歴史的な場にお いて日々練磨していく、あらゆる事象をその内側に寄り添って歴史的に把握する

S G R A 82 REPORT

方法と能力と感覚こそ、確固たる立脚点として、歴史家の個性と化して、過去の 歴史への把握におのずと浸透していくのではないだろうか。

素人の考えではあるが、過去の出来事に埋没することなく、現実との緊張感のなかでしかと生きる歴史家だけが、ただ単に、苦労の多い学問的営為で獲得した歴史的知識を我々に手渡すのでなく、過去と現在との内在的連関の見える歴史の脈動をも伝えてくれるのではないか。ほとぼりの冷めた過去をあくまでも一つの研究対象として冷徹に解剖するよりも、なお現実の体温が感じられる、歴史への主体的認識のほうが、少なくとも、私には、はるかに信用できるのである。

1997年に「新しい歴史教科書をつくる会」が登場してから7年後の2004年に、かつてすべての中学の歴史教科書にあった「慰安婦」問題をめぐる記述が、ものの見事にすべての教科書から消えてしまった。それが2016年に「極左反日」教育のレッテルを張られ、批判の嵐に晒されながら、再び教科書に現れるまで、実に12年の歳月を要した。関東大震災における朝鮮人虐殺でさえも、政治家に「いろいろな歴史の書の中で述べられている」「さまざまな見方」の一つとされてしまう時代、もはや、歴史的事実を事実として認めさせるだけでも多大なエネルギーを費やさなければならなくなっている。歴史家は、一人の専門家として、日々過去と格闘しなければならないだけでなく、またくいま・ここ>に生きる、未来に責任を負う一人の市民として、この厳しい現実に直面しなければならない。だからこそ、自らの専門的な研究と、現実における政府の政策動向と、民衆の歴史意識との間における緊張、また、歴史認識と歴史叙述、現実と未来との複雑な関連性に対して、どれほど自覚を持っているか、非常に重要だと、私は思う。なぜならば、くいま・ここ>に生きる歴史家の歴史叙述から、未来の歴史がすでに始まっているからである。

(SGRA かわらばん:エッセイ 548:孫軍悦「歴史家の立脚点」(改訂版) より転載)

あとがきにかえて

国史たちの対話の可能性

ナヒヤ/娜荷芽 内蒙古大学

近年になって、民族主義的歴史観とそれによる歴史教育の弊害についての議論 が激しくなっており、その代案として、地域史研究の視点からその歴史的流れを 把握することが強調されつつある。言い換えれば、ネーションと民族単位ではな く、共通の文化的同質性をもつ一定の地域を一つの単位としてまとめることに よって、これまで意識されてこなかった新たな歴史像があるのではないかと期待 されている。

ここで浮かび上がる主要カテゴリーの一つが東アジアである。これに該当する 地域はモンゴルを含む、中国、朝鮮半島の韓国・北朝鮮、日本などである。モン ゴルを除けば、該当する国々は伝統的には海路を通じて結びついている地域であ り、漢字文化圏という呼称が示すように、数千年にわたって文化的交流が活発で あり、文化的同質性を帯びている地域である。また、これらの地域の多くは13 世紀から14世紀後半にかけて、モンゴルによって政治的に統合されたことがあ る。この期間の東アジア文化圏の文化的交流と融合は最も盛んで、その文化的影 響は現在も引き続き残っていると考えるべきだろう。

高麗とモンゴルの出会いは、13世紀の初めころ、高麗側がモンゴルに貢物を 献上することを約束したため、モンゴルからの使者が高麗を頻繁に訪れ、極め て横柄に法外な量の貢物を要求するようになった。そのような使者の代表格が、 1221年から毎年のように貢物を受け取っては持ち帰る著古與という者であった。 その著古與が1231年に貢物を受け取った帰路、鴨緑江を超えたところで死んで しまった。当時モンゴルでは、チンギス・カーンの後を継いだウゲデイが即位し ていたが、ウゲデイ・カーンはこの著古與の死の責任を高麗に問うて6回に亘っ て軍を送り込み、1259年、高麗はモンゴルに全面降伏する。

その後、済州(チェジュ)がモンゴルと出会う。済州は古くは耽羅国が成立し ていたが、高麗により合併。朝鮮半島と中国大陸や日本列島などをつなぐ中間的 地点であり、好むと好まざるとにかかわらず、周辺地域との交流が盛んになる地 政学的位置にある。一方、国際情勢が揺れ動く時には激しい変化を経験すること もあった。

これまで、済州とモンゴルの最初の交流については、対立と葛藤の関係と見 て、それが済州社会に与えた影響は無視するか、極小化しようとする立場を取っ てきたと言える。これには、民族主義的立場を揚げる歴史観と共に、モンゴル帝 国没落以後の長い歳月の間、漢族を中国支配の正統と見なし、他の種族は夷であ ると見る華夷論が広く深く受け継がれてきた影響が大きく作用している。しか し、最近になって、「翻って、国家と民族単位ではなく、済州の対外関係と済州 の人々の生活と文化という観点から眺めてみた時、済州とモンゴルの最初の交流 は済州地域のアイデンティティ形成に大きな影響を与えたのであり、これは今日 でも見いだすことができる」という提案もある。例えば、済州にモンゴルから馬

が持ち込まれて国営牧場が営まれていた。現在、韓国が国を挙げて保護に努めている「済州馬」は、済州島の在来種「果下馬」と北方から招来された外来種「胡馬」との混血種であり、モンゴル支配時代にモンゴル馬や西域馬とさらに混血し 多品種化して残ったものだといわれている。

1265年、モンゴルのクビライ・カーンは、ある高麗人に、日本がかつては中国に使者を送って通好していたことを告げられ、翌1266年に高麗の元宗の所に使者を遣わした。その使者は2通の書簡を携えていた。1通は「日本国王」に通好を呼びかけるもの、もう1通はその使者を日本まで送り届けるよう元宗に命じるものであった。これに始まるクビライの数度の呼びかけに日本側が一切応じず、結果として日本遠征、日本で言うところの元寇あるいは蒙古襲来を引き起こすことになった。

2017年8月7日~9日に、東アジアにおける「歴史和解」に歴史家はどのような貢献ができるのかという趣旨で、「第2回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性—蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」円卓会議が北九州市で開催された。東アジア全体の視野で、モンゴルの高麗・日本侵略は、文化的には各国の自我認識を喚起し、政治的には中国中心の華夷秩序の変調を象徴するため、立場によってさまざまな歴史があることと、「国史」と東アジア国際関係史の接点に今まで意識されてこなかった新たな歴史像の確認が期待され、4か国の学者による議論も一段と熱が入った。

翌日、「蒙古襲来」遺跡見学コースで元寇資料館、筥崎宮、松原元寇防塁跡などを見学したが、ここで得られたものも大きかった。NPO法人志賀島歴史研究会の岡本顕実さんや筥崎宮宮司田村克喜さんの歴史的感覚の豊かさに驚かざるを得ない。筥崎宮の楼門には、元寇の折亀山上皇が書かれた「敵国降伏」の額が掲げられている。この4文字は、一般的には日本に攻め寄せてくる敵国を降伏させようというお祈りのように考えられる。ところが、「敵国降伏」というのは、敵国が我が国のすぐれた徳の力によって、おのずから靡き、統一されるという「徳による王者の業なり」という。

自国史と他国史との関係をより構造的に理解するために、さまざまな歴史があることをまず確認する必要があろう。しかし、それではいつまでもばらばらであるから、その上で、異なる立場の研究者同士が対話を進めて共有できるものを模索する知的な空間の創造が求められている。

(SGRA かわらばん:エッセイ 549:ナヒヤ「国史たちの対話の可能性」より転載)

あとがきにかえて | その

東アジア「公共知」への接近

彭 浩 大阪市立大学

8月上旬、渥美国際交流財団の主催で、「国史たちの対話の可能性」というシ リーズの第2回として、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」を テーマとしたフォーラムが北九州市で開かれた。日・中・韓、モンゴル4ヶ国の 歴史家が集まり、さまざまな側面から、モンゴル帝国史とりわけ東アジアへのイ ンパクトについて広く議論した。私は、ひとりの歴史研究者でありながら、本プ ロジェクトの企画にも携わったので、所感も多くそして多岐にわたる。この感想 文の執筆を機会に、簡単に整理したい。

まず、この会議は、単なる「蒙古襲来」というキーワードの国際研究集会では なく、一つの話題、または1素材の検討を通じて、国民国家の歴史叙述と異なる 視角から人類の歴史を描き、それを通じて国民国家史観の影響で硬直化されつつ ある歴史認識の間違いを訂正し、政治手段化した歴史認識の問題によって阻害さ れている国家間の関係、および国民間の関係を改善していく、という大きな問題 意識を抱えていることを再び強調したい。

会議中何人かの参加者が言及した通り、実は、日中韓3者、またはその中の2 者間の歴史をめぐる「対話」が近年さまざまな形で展開されている。なかには、 よく知られている政府主導型のものもあれば、個別の歴史テーマ・研究手法、ま たは史料の利用方法などをめぐる専門性の高いものもある。それぞれの方向性と 目的は、必ずしも一致しているとは限らない。また、三谷博先生が指摘された通 り、参加者の間で、仲良くなったかそれとも悪くなったかという点を考えると、 民間レベルの「対話」の方が進みやすいと言わざるを得ない。

一方、民間レベルの研究集会は、個別のテーマの議論や専門的知識の深まりと いう点では成果が出やすい反面、人文研究者の「癖」、または「惰性」でもある ためか、興味のあるテーマの話に夢中になり、その話の社会的意義をあまりよく 考えず、専門的な議論がどのように共通の歴史認識の促進に活かせるかという大 事な点を、結果的に疎かにする傾向がある。また、資金面の問題もあり、研究補 助金を得ながら共同研究を長く継続することが困難で、中途半端の形で終わって しまった「対話」も少なくない。

この問題点と関わってくるのが、劉傑先生が起草されたフォーラムの趣旨 文の「知の共有空間」「知のプラットフォーム」というキーワードである。こ の「知」の意味は広くて、少なくとも「知恵」「知識」両者の意味を包摂して いる。専門的な研究を通じて信頼性の高い歴史「知識」を創出し、それを広 く理解してもらうことで、国民国家の限界や歴史認識の問題を解決する「知 恵」をめぐらすという真意がある。これについては、具体的な研究レベルの議論 を進めていく際に、やはり忘れがちなので、ここで敢えて加筆した。

次に、会議中のいくつかの論点を踏まえて所感を述べる。一つは「モンゴル・ インパクト」の評価についてであるが、1本目の四日市康博氏の報告では、モン

224

ゴル帝国の東アジア進出の全体像が分かりやすく描かれていた。ほかの報告者の 具体的な議論にも現れたように、そのインパクトには、モンゴル的要素が中国を 含む東アジア世界に広がっていく面もあれば、中国を支配して周辺へ勢力を拡大 することで、一部の地域に中国化をもたらした面もあった。「モンゴル・インパ クト」が立体的に描かれていたことを、非常に面白く感じた。

最近、「新清史」の議論のなかでも、清の支配者は、中華の皇帝であると同時に、多様な顔を持ち、地域と民族に対しては異なる支配の仕組みと論理を築いていたという歴史像が提示されている。清史と比べると、モンゴル帝国史の場合、モンゴル語の史料が限られているなか、東アジアに関わる側面は、主に漢文の史料で記録されていて、また現存されている史料は漢文で書かれたものが圧倒的に多い。それで、ひとつの中華王朝である「元朝」のイメージが定着しやすいが、モンゴル人の主体性、またはモンゴル帝国の多元性は表に出にくくなる。近年、杉山正明先生たちの仕事で、豊かなモンゴル帝国史の歴史像が浮き彫りになり、今回の発表者の報告を聞いて、ますます感銘を持つようになった。

これとの関係で、劉先生が全体議論の時にまとめた諸論点の一つでもあるが、今回のテーマにあたる時代は、中国史におけるモンゴル人の支配と、モンゴル帝国の一部である中国への支配との二重性があり、これを「公共知」として語る時、どう扱うべきかという課題がある。さまざまな意見があるなか、従来のように、中国史の一時代として「元史」を取り上げる一方、それを超えて東アジアの文脈、またはユーラシアの文脈でどう見るべきかに関しても加筆する、という重層的な叙述手法が、葛兆光先生の発言で提示された。国民国家がさまざまな問題を抱えているにもかかわらず、すぐ解消する気配もないため、国民国家の史観を完全に廃棄するのは現実的とはいえない。むしろ、こうした重層的な歴史叙述を通じて、いままで見えてこなかった多次元の歴史像を教科書に組み込むことが、長い目でみれば、「公共知」の構築に役立つと思われる。

また、一次史料が乏しい状況に対して、モンゴル帝国史の研究者はどのように 過去と対話して史実を探求してきたかという関心もあった。各報告から、編纂物 の史料批判、非文字史料からの接近、人類社会の「常識」と歴史背景を踏まえた 推論などの創意工夫が講じられてきたことがよく分かった。扱う時代や地域の異 なる歴史家の対話を通じて、方法論について互いに刺激しあうこともあり、それ はまた別の意味で「公共知」へのアプローチに繋がるのであろう。

(SGRA かわらばん:エッセイ 550:彭浩「東アジア『公共知』への接近」より転載」

著者略歴

■ 葛 兆光 / GE Zhaoguang

1950年上海生まれ。1984年北京大学大学院文献学修士課程 修了。1992年より清華大学歴史学部教授。2006~2013年復 旦大学文史研究院長、教授。現在同研究院及び復旦大学歴 史学部特別招聘教授。京都大学、ベルギー・ルモン大学、台 湾大学、アメリカ・プリンストン大学などの客員教授を歴任。 2009年第一回プリンストングローバル学者に当選された。 専門分野は中国思想史、東アジア交流史。

主な著作:『中国思想史』、『宅茲中国』、『中国再考』(第26 回アジア太平洋賞大賞) など。

■四日市 康博 / YOKKAICHI Yasuhiro

1995年早稲田大学(第一文学部)卒業。2004年早稲田大学 文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007年学位(博士 (文学)) 取得。2005年~2008年九州大学人文科学研究院専 任講師(任期付)。2009年~駒澤大学文学部非常勤講師。 2012年~早稲田大学総合研究機構中央ユーラシア歴史文化 研究所招聘研究員。2014年~昭和女子大学国際文化研究所 客員研究員。専門分野はモンゴル帝国期における東西ユー ラシア交流史、海域アジア交流史。

主な著作:『モノから見た海域アジア史―モンゴル~宋元 時代のアジアと日本の交流―』(福岡:九州大学出版会、 2008)

■ チョグト (朝克图) / BORJIGEN Chogt

1963年内モンゴル自治区シリンゴル生まれ。1984年内モ ンゴル大学蒙古言語文学学部卒業後、同学蒙古言語文学学 部の助手として勤務。北京大学東方言語学部でペルシヤ語 を学び、内モンゴル大学蒙古歴史研究所の修士課程で女真 語を専攻。富山大学の人文学部に外国人研究者として滞在 (1997年~1998年) した後、早稲田大学大学院文学研究科で 訪問学者として研究を進め(1998年~2000年)、早稲田大学 大学院文学研究科に博士課程に入り東洋史を専攻した(2000 年~2006年)。2006年に内モンゴル大学蒙古学学院に就職 し、2007年に副教授、2012年に教授に就任。

主な著作:『チンギス・ハンの法』(山川出版社、2010年)。 このほか1990年代から今までモンゴル帝国、元朝歴史に関 する学術研究論文を三十篇以上発表。

■ 橋本 雄/ HASHIMOTO Yu

1972年東京生まれ。1995年東京大学文学部卒業。2000年同 大学院博士課程単位取得退学。2004年博士(文学)学位取 得。日本学術振興会特別研究員、九州国立博物館設立準備 室、同学芸部研究員等を経て、現在、北海道大学大学院文 学研究科准教授。専門分野は、中世日本の国際交流史・文 化史。

主な著作:『中世日本の国際関係』(吉川弘文館、2005)、『中 華幻想』(勉誠出版、2011)、『偽りの外交使節』(歴史文化 ライブラリー、吉川弘文館、2012)、『"日本国王"と勘合貿 易 なぜ、足利将軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか』(さ かのぼり日本史:外交篇[7]室町、NHK出版、2013)な ど。

■エルデニバートル (额尔敦巴特尔) / Eerdunbateer

1967年モンゴル生まれ。1991年内モンゴル大学モンゴル言 語文学学部卒業 (文学学士号取得)、1995年同学モンゴル歴 史研究所修士課程卒業 (歴史学修士号取得)。1995年より、 内モンゴル大学モンゴル学学院モンゴル歴史学部副研究員 として勤務するかたわら、韩国江原国立大学歴史学科博士 課程修了(2001年)、同学の訪問学者として博士論文を提 出、博士号を取得する (2006年)。2013年~2014年アメリ カインディアナ大学訪問学者。専門は元朝時代の元と高麗 の関係史、韓国史、契丹と女真の言語文字研究。

主な著作:「契丹と女眞文字の比較研究」(『内蒙古大学学報』 3、1996)、『大蒙古国と高麗』(韓国慧眼出版社、2009)、 「高麗王室及び元晋王一族の関係について」(韓国『蒙古学』 第35号、2013) など。

■ 向 正樹 / MUKAI Masaki

1974年福岡県北九州市生まれ。1998年大阪大学文学部史学 科 (東洋史学専攻) 卒業。2003年~2005年中国・北京大学 歷史学系留学。2007年大阪大学大学院文学研究科(文化形 態論専攻)博士後期課程修了。2007年~2012年大阪大学大 学院文学研究科特任研究員。2013年~現在、同志社大学グ ローバル地域文化学部准教授。

主な著作:「二章 モンゴル・シーパワーの構造と変遷」(『グ ローバルヒストリーと帝国』 秋田茂・桃木至朗編 eds.大阪 大学出版会 April-2013,pp.71-106.)、「元代"朝貢"与南海信 息」(『元史論叢』10中国元史研究会, July-2005, pp.389-406.) など。

■ 孫 衛国/ SUN Weiguo

1966年生まれ。湖南省衡東出身。武漢大学・南開大学・香港科技大学で学び、南開大学で歴史学の博士学位を取得(1998年)、香港科技大学で哲学の博士学位を取得(2001年)。現在は南開大学歴史学院の教授。かつて韓国の高麗大学、アメリカのハーバード大学のハーバード燕京研究所、台湾大学などで訪問学者を務めていた。主な研究分野は、韓国史、中韓関係史、中国史学の歴史、明清時代の中国史。主な著作:『王世貞史学研究』(人民文学出版社、2006)、『大明旗印と小中華意識:朝鮮王朝尊周思明問題に関する研究1637-1800』(商務印書館、2007)、『明清時代、中国史学の朝鮮に対する影響』(上海辞書出版社、2008)。

■ 金 甫桄 / KIM Bokwang

高麗大学韓國史研究所の研究教授(2012年~2014年)、高麗大学BK21PLUS韓国史事業団の研究教授(2014年~2016年)を経て、現在は嘉泉(カチョン、Gachon)大学 Liberal Arts College 助教授(2017年~)。高麗の政治制度、権力構造などに関心を持っている。

主な著作:「高麗成宗、懸鐘台太祖配享功臣の選定過程と意味」(2014)、「高麗前期、魚袋の概念と運営方式に対する検討」(2015)、「高麗、モンゴル関係の展開とダルガチの置廃過程」(2015)、「高麗の対蒙対応論理と『大国イメージ』一1231、1232年の外交文書を中心に一」(2015)、「高麗前期、公服制の整備過程に対する研究」(2016)、「高麗内のダルガチの存在様相と影響一ダルガチを通じたモンゴル支配方式の経験―』(2016)。

■李 命美/ LEE Myungmi

ソウル大学の国史学科で学士、修士、博士学位を取得。ソウル大学歴史研究所、奎章閣韓国学研究院などを経て、現在は人文学研究院の研究員として活動中。国家間関係(東アジア的関係形成方式)と個人間-家門間の関係(モンゴル的関係形成方式)が高麗-モンゴル間の関係のなかで影響し合う様子やそれによる高麗末の政治-社会変動に関心を持って研究している。

主な著作:修士学位論文「高麗-元の王室通婚の展開と特徴」、博士学位論文「高麗-モンゴルの関係と高麗国王の地位の変化」(『13~14世紀における高麗-モンゴルの関係研究—征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合的地位に関する探究』へアン、2016)。

■ ツェックメッド・ツェレンドルジ/ TSEGMED Tserendorj

1999年モンゴル国立ウランバートル大学卒業。2010年大韓 民国韓国学中央研究院博士課程卒業。文学博士(歴史学)。 専攻は中世韓 - 蒙関係史である。

主な著作: Chinggis khan (encyclopedia), co-author,

Ulaanbaatar, (2006)、Encyclopedia of history and culture of the Mongols /co-author/, Ulaanbaatar, (2004,2006)、History of the Yuan dynasty /元史/ (A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, Ulaanbaatar, (2003)、Samguk yusa (三国遺事)" (translation from Korean into Mongolian with J.Gantulga), Ulaanbaatar, (2009)、Khubilai Khan and his succesors, Ulaanbaatar, (2015)、「東西文化交流とアルタイ」(『アジア学術研究叢書 7』 アルタイ学シリーズ3: 共著、亦楽、2016)など。

■趙阮/CHO Won

漢陽大学史学科卒業。中国の中央民族大学で16世紀モンゴル研究をテーマに修士学位を取得。北京大学歴史学科に進学し、「蒙元帝国期におけるダルガチ制度の研究」で博士学位を取る。ソウル大学歴史研究所で博士後研究課程(Postdoc)の研究「17~20世紀蒙元史研究に表れる清の知識人のモンゴル帝国認識」を進めた。漢陽大学比較歴史文化研究所のHK研究教授を歴任。現在、漢陽大学や世宗大学で講義している。専攻分野は蒙元史。モンゴル帝国期の統治制度や周辺地域との文化交流、清代の史書に反映されたモンゴル帝国に関する認識などについて研究中。

主な著作:「明人の目線からみた16世紀漠南モンゴル社会の変化」(『モンゴル学』、2014)、「17-20世紀蒙元史研究に表れた清知識人の『モンゴル帝国』認識―『元史類編』、『元史新編』、『新元史』を中心に―」(『中国学報』、2015)など。

■張佳/ZHANG Jia

1981年山東省高密生まれ。北京大学中文系古典文献学学士 (2004年)、清華大学歴史系歴史文献学修士 (2007年)、復旦 大学歴史系専門史博士 (2011年)。現在は復旦大学文史研究 院副研究員。専門分野は元明の社会文化史。

主な著作:『新天下之化:明初礼俗改革研究』(復旦大学出版社、2014)。論文は「元済寧路景教世家考論」、「再叙彝伦: 洪武時期的婚喪礼俗改革」、「別華夷與正名分:明初的日常雑礼規範」、「衣冠與認同:麗末鮮初朝鮮半島襲用「大明衣冠」の程初探」、「明初的漢族元遗民」等十数編。

第2回 国史たちの対話の可能性―蒙古襲来と13世紀のモンゴルのグローバル化 円卓会議参加者リスト

			\		
マと士	氏名(ローマ字)	氏名(日本語)	氏名(中国語)	氏名(韓国語)	所属
発表		+d> 1/-	+477-	7 0]	*#70 24
1	Cho Won	趙阮	赵阮	조원	漢陽大学
2	Chogt, Borjigen	チョグト エルデニバートル	朝克图	최그트 에르디니바토르	内蒙古大学
3	Eerdunbateer		额尔敦巴特尔		内蒙古大学
4	Hashimoto Yu	橋本雄	桥本雄	하시모토 유	北海道大学
5	Kim Bokwang	金甫桄	金甫桄	김보광 이명미	嘉泉大学
6	Lee Myungmi	李命美	李命美	무카이 마사키	ソウル大学
7	Mukai Masaki	向 正樹	向正树		同志社大学
8	Sun Weiguo	孫衛国	孙卫国 ************************************	손위국	南開大学
9	Tserendorj, Tsegmed Yokkaichi Yasuhiro	ツェレンドルジ	其林道尔吉	체렝도르지	モンゴル国科学院歴史研究所
10		四日市康博	四日市康博	욧카이치 야스히로	昭和女子大学
11 Zhang Jia 張佳 张佳 장가 復旦大学 発表者 / 実行委員					
		+da Talv	+7.17/		华 园园中短篇系是 人
12	Cho Kwang	趙珖	赵珖	조광	韓国国史編纂委員会
13	Ge Zhaoguang	葛 兆光	葛兆光	갈조광 0.7	復旦大学
14	Liu Jie	劉傑	刘杰	유걸	早稲田大学
15 +77/s±	Mitani Hiroshi 研究者(討論者)	三谷 博	三谷博	미타니 히로시	跡見学園女子大学
		走上近n \$e	本土和 於	아라키 카즈노리	园大田中口公林师 给
16	Araki Kazunori	荒木和憲	荒木和宪		国立歴史民俗博物館
17	Choi Youngchang	崔永昌	崔永昌	최영창 에노모토 와타루	国立晋州博物館 国際日本文化研究センター
18	Enomoto Ayumu Han Seunghoon	榎本 渉	榎本涉	에도로도 	国際日本文化研究センター 高麗大学
19	8	韓承勲	韩承勋	키다 키요시	
20	Kida Kiyoshi	貴田潔	贵田洁		静岡大学
21	Mura Kazuaki Sato Yuuki	村 和明 佐藤 雄基	村和明 佐藤雄基	무라 카즈아키 사토 유키	三井文庫
23	Yamauchi Shinji	山内 晋次		야마우치 신지	
24	Yao Keisuke	八百 啓介	山内晋次	야오 케이스케	神戸女子大学
同時		八日 咨介	八百启介	야오 케이스케	北九州市立大学
		安ヨンヒ	安暎姫	안영희	ソウル外国語大学院大学
25	Ahn Younghee Ding Li	丁莉	丁莉	정리	北京大学
27	Lee Hyeri		李恵利	이혜리	韓国外国語大学
28	Lee Jinhua	李 金花	李金花	이금화	通訳翻訳者
29	Piao Xian	朴 賢	朴贤	박현	通訳翻訳者
30	Song Gang	宋剛	宋刚	송강	北京外国語大学
	翻訳サポート	不啊	/ NIII	0.0	10.宋外国品入于
31	Hong Sung-min	洪 性珉	洪性珉	홍성민	早稲田大学
32	Jeon Sangryul	全相律	全相律	김상율	東京大学
33	Song Han	宋晗	宋晗	송함	東京大学
34	Sun Junyue	孫軍悦	孙军悦	· 연구열	東京大学
35	Zhu Lin	朱 琳	朱琳	주림	東北大学
実行		\(\sigma_{1}\) \(\sigma_{1}\)	>1coll.	, п	N/1U//\J
36	Kim Bumsu	金 範洙	金范洙	김범수	東京学芸大学
37	Kim Kyongtae	金 キョンテ (圀泰)	金冏泰	김경태	高麗大学
38	Li Enmin	李恩民	李恩民	이은민	
39	Naheya	ナヒヤ	娜荷芽	나히야	内蒙古大学
40	Peng Hao	彭浩	彭浩	팽호	大阪市立大学
41	Xu Jingbo	徐静波	许静波	서정파	復旦大学
オブザーバー					
42	Tao Weishuo	陶 韡爍	陶 韡烁	도위삭	復旦大学
	一ト編集者				
43	Nagai Ayumi	長井亜弓	长井亚弓	나가이 아유미	編集者
スタ		200,000			
44	Imanishi Junko	今西淳子	今西淳子	이마니시 준코	
45	Tsunoda Eiichi	角田英一	角田英一	츠노다 에이이치	渥美国際交流財団
46	Ishii Keiko	石井慶子	石井庆子	이시이 케이코	渥美国際交流財団
47	Honda Yasuko	本多康子	本多康子	혼다 야스코	渥美国際交流財団

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」 今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄煕、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15発行
- SGRA レポート04 第1 回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2 回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」 平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30発行
- SGRA レポート07 第3 回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える: ライフスタイルからの工夫」 木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10発行
- SGRA レポート08 第4 回フォーラム講演録 「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」 臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蒋 恵玲、楊 接期、 李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20発行
- SGRA レポート09 第5 回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」 ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28発行
- SGRA レポート10 第6 回フォーラム講演録 「日本とイスラーム: 文明間の対話のために」 S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8発行
- SGRA レポート12 第7 回フォーラム講演録 「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」 建石隆太郎、B. ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区:フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12発行
- SGRA レポート14 第8 回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜一元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション 平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
 - 韓国語版 2003. 3. 31 発行、中国語版 2003. 5. 30 発行、英語版 2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9 回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30発行
- SGRA レポート17 第10 回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」 白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11 回フォーラム講演録 「地球市民研究:国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003.8.30発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本 幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬 2003.12.4発行__
- SGRA レポート20 第12 回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力: COP3の目標は実現可能か」 外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6.30発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争 どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20発行
- SGRA レポート23 第13 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」 宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14 回フォーラム講演録 「国境を越える E-Learning」 斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15 回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫?」 中上英俊、高 偉俊 2005.1.24 発行
- SGRA レポート 27 第16 回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」 竹田いさみ、R. エルドリッヂ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」 宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校煕、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18 回フォーラム・第4 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流:東アジア地域協力における ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20発行
- SGRA レポート30 第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考 自由と市民社会をキーワードに 」 宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20発行
- SGRA レポート31 第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」 平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト 2006. 2. 20 発行

- SGRA レポート32 第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか 留学生 」 横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、 角田英一 2006. 4. 10発行
- SGRA レポート33 第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教:宗教って何なの?」 島薗 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、 セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環~私が分別したごみはどこへ行くの?~」 鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20発行
- SGRA レポート36 第25 回フォーラム講演録 「IT は教育を強化できるか」 高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20発行
- SGRA レポート37 第1 回チャイナ・フォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」 池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日:多様化する韓国の対日観」 金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史~私たちの出会いと将来~」 黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30発行
- SGRA レポート40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題~ひとの生活との関わりを考える~」 多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」 島薗進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ 2008. 3. 15発行
- SGRA レポート42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3.1発行
- SGRA レポート44 第29 回フォーラム講演録 「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか~ 日本、中国、シンガポール~」佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20発行
- SGRA レポート46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ:日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」 東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10発行
- SGRA レポート47 第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」 清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8.8発行
- SGRA レポート48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く一 アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」 東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30発行
- SGRA レポート50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」 平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25発行
- SGRA レポート51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」 大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15発行
- SGRA レポート52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」 宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、 劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること~ TABLE FOR TWO ~」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか: 東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム チュン キャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10発行
- SGRA レポート55 第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life 〜東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル〜」木村建一、高 偉俊、
 Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
 葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 栄珠、王 剣宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート56 第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」 第一部(北京):「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部(フフホト):「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10発行

- SGRA レポート57 第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、 ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島薗 進、陳 継東 2011. 12. 30発行
- SGRA レポート58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15発行
- SGRA レポート59 第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」 朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート60 第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」 田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム チャン キャット、F・マキト 2011, 11, 30発行
- SGRA レポート61 第41 回 SGRA フォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川惠市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18発行
- SGRA レポート62 第6 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
 「Sound Economy ~私がミナマタから学んだこと~」 柳田耕一
 「内モンゴル草原の生態系:鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」 郭 偉 2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート64 第43 回フォーラム講演録 in 蓼科「東アジア軍事同盟の課題と展望」 朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012.11.20発行
- SGRA レポート65 第44 回フォーラム講演録 in 蓼科「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」 赤堀侃司、影戸誠、曺圭福、シム・チュン・キャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解(1994-1998 年)」(日本語・英語・中国語)沼田貞昭 2013. 10. 20発行
- SGRA レポート67 第12 回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」 平川 均、加茂具樹、金 雄煕、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート68 第7回 SGRA チャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」 (日本語・中国語・英語) 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート69 第45 回 SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へ 東アジア海洋秩序の現状と展望 」 村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 栄濬 2014. 10. 20発行
- SGRA レポート70 第46 回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育:子どもの多様なニーズにどう応えるか」 荒川 智、上原芳枝、ヴィラーグ ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20発行
- SGRA レポート71 第47 回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会 ー福島第一原発事故から考える科学技術と倫理 – 」 崔 勝媛、島薗 進、平川秀幸 2015. 5. 25発行
- SGRA レポート72 第8 回チャイナ・フォーラム 「近代日本美術史と近代中国」 佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20発行
- SGRAレボート73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回 SGRAフォーラム 「アジア経済のダイナミズムー物流を中心に」 李 鎮奎、金 雄熙、榊原英資、安 秉民、ド マン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10発行
- SGRA レボート74 第49回 SGRA フォーラム講演録: 円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」 劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20発行
- SGRAレボート75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらし―環境と女性と未来に向けて」 神﨑智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27発行
- SGRAレボート76 第9回 SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中二百年—文化史からの再検討」 劉 建輝 発行予定
- SGRA レポート77 第15回日韓アジア未来フォーラム「これからの日韓の国際開発協力―共進化アーキテキチャの模索」 孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10発行
- SGRA レボート78 第51回 SGRA フォーラム「今、再び平和について―平和のための東アジア知識人連帯を考える―」 南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均営、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27発行
- SGRA レポート79 第52回 SGRA フォーラム「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 (1)」 劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ 2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート80 第16回日韓アジア未来フォーラム「日中韓の国際開発協力―新たなアジア型モデルの模索―」 金雄煕、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16発行
- SGRA レポート81 第56回 SGRA フォーラム「人を幸せにするロボット―人とロボットの共生社会をめざして第2回―」 稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20発行
- レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel: 03-3943-7612 Email: sgra-office@aisf.or.jp) へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0082

第57回SGRAフォーラム

第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 一蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関ログローバル研究会 (SGRA) 〒 112-0014 東京都文京区関口3-5-8 Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512 SGRA ホームページ: http://www.aisf.or.jp/sgra/ 電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日 2018年5月10日 発行責任者 今西淳子

印刷 (株)平河工業社

ⓒ関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。